

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別授承認雑誌第3203号 昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏表第3巻第13号 昭和33年10月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓



怪異復讐譚特集号

10月号

裏窓

怪異復讐譚特集号

10

昭和三十一年九月十七日日本国有鉄道特別授承認雑誌第3203号
昭和三十一年二月三日第3種郵便物認可・裏表第3巻第13号
昭和三十三年十月一日発行(毎月一回一日発行)

定価 120円
IBM 1807



小説奇艶

定価二二〇円
(送料一二円)

10月号 9月上旬発売!!

月刊2号—いよいよ快調。
(お買い得のないよう書店にご予約下さい)

なまめかしい依頼者・N・J・コウ
貝弓子・訳

受けるならば殺してね・ホンキイ・トンク
黒羽新・訳

ドマン通……耶止説夫

よけいな女体……矢野徹

名作紹介 有尾人……小栗虫太郎
口 秋吉樹・画

スリラー ツイにアタマへきた 伊達圭次
マンガ

映画 死刑台のエレベーター
物語

グラフィック ニンフはヌードで待っている

★グラマア・ミステリイ特集★

妖女は……の下に……島本春雄
宮門灯直・挿

悶える肌は誰のもの……岡田純彦

女の決闘……今官一

月には罪あり……都筑 女のスラを刺せ……飯田
見誤った肉体……特久 情事の罠……原
未亡人の寝台……宇治川 夜光夫人……三
光 葉田

この他、多数満載!!

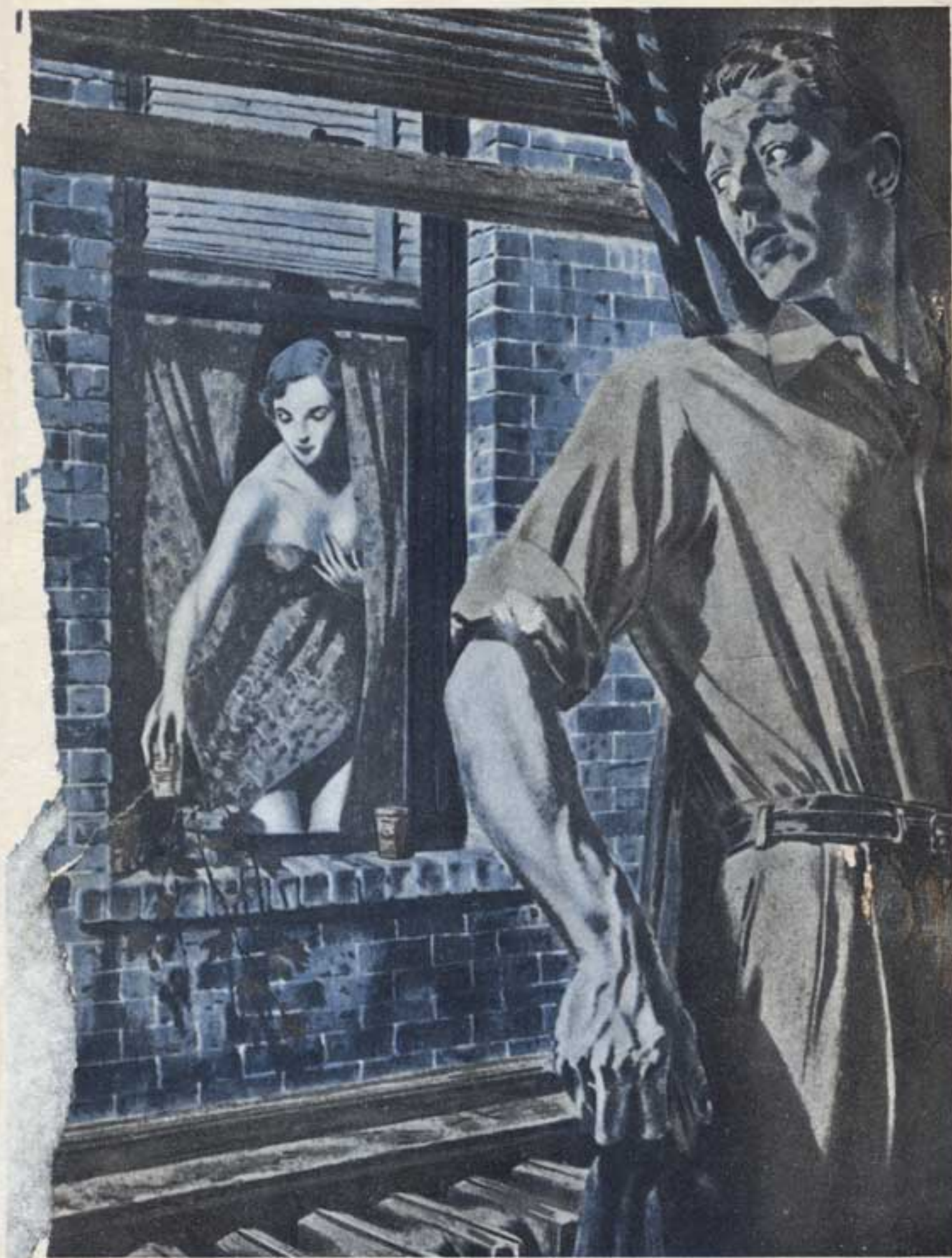
《月刊誌》

全篇に……るエロとサスペンス!! ミミ

イ雑誌はこれだ

久保書店 発行

東京都中野区江古田1丁目 振替 東京 10756



裏窓から覗く男

(外誌より)

義足の中に仕込まれた老婆の財産!! 彼女は何も知らずにそれを身につけて日本に帰って来た。身辺につきまとう奇怪なせむし男は一体誰なのか? (本文66頁)



足にひそむ悪魔

溝呂木 寂子

表紙……………秋吉 巒 ◎目次裏口絵……………竹中 二郎

口絵 **女水芸師** 文・櫛笥重三郎 画・古正英生 (11)

ピラ **光と肌と** 撮影・藤沢 修 (19)

純肌呪文…高木竜二 (50)

旗本閨房譜…橋爪彦七 (78)

ストック・ホテルの怪…竹谷十三 (90)

お島仇討旅…矢桐重八 (102)

膚塚美女因果…葉田 光 (128)

変化若衆…三国沢隆 (152)

妖異死神旗本…小田切 爽 (176)

もうじき命日…宇治川 竜 (230)

あぶちつく **蝙蝠座の秘密** 文・夏本圭之助 画・山田彬弘 (27)

恋慕双紙 **地獄舟** 画と文・中島喜美 (248)

エロチック **温泉宿殺人事件** ……川野京輔 (271)

女体男を傲れる女達…股野 元 (243)

怪物語異 **鬼火河岸** ……歌川大雅 (163)

逢魔の日 **妖気を誘う家** ……猿若屯平 (142)

死神セー **死を売り歩く男** ……尾島 新 (203)

江戸秘録 **怪異変幻抄** ……鈴木和夫 (216)

悦代相 **愁風枯梗ヶ原** ……大門正人 (256)

連載妖異 **地獄の乳房** ……飯田豊吉 (36)

義足の足にひそむ悪魔…溝呂木寂子 (66)

嗜虐の罟 **毒蝶の宿** ……松井頼子 (114)

筍探偵記 **水中消滅** ……藤井譲二 (190)

秘密覚書 **死棺小町** ……島本春雄 (278)



隱密覺書
第十九話

死棺小町

島本春雄
画・山田彬弘

將軍の寵姫の寢所に、見るもおぞましい蛆虫！惨
忍死棺流の忍法を使う黒衣の女！！御存知！隠密覺
書第十九話を御覧下さい！（本文二七八頁）



師芸水女

乳房急執



櫛笥重三郎
画・古正英生

①南蛮手妻、水芸、娘手踊り、足芸、女義太夫大一座……こんな絵看板がずらりとならび、その横に、紫太夫さん江……小梅太夫さん江——菊春太夫さん江——雨ざらしのノボリが十本ちかく目にとまる。

これは両国広小路の小屋掛け一座で、諸国を歩く女ばかりの旅芸人が、年に何度めかの江戸興行であった。——水芸の太夫、小梅の美貌が客を呼んでいる。

②「見
たかよ、水芸の小梅太夫」「見たとも、色っぽい
つたらねえな……」「へっ。
おいらはこれで、もう六べん
も足を運んでいるが、あんな
に見飽きのしねえ別嬪は、当
今珍らしい」

「なにが当今だ。けっ／＼てめえ
芸を見に行くのか、顔を見に行く
のか」「うふッ言うにや及ぶ……
顔にきまつてらアな」——両国裏勇床
のバカばなしであり、髭をあたらせていた十
年浪人の隼人正が、隅の方でクスリと笑った。



★黒い影が暗夜に躍れば、かならず豊満な乳房をも★
★った小町娘が殺される！女水芸師の恐るべき執念★

③「はて……？」 隼人正は、小首をかしげて立止った。月も星もない雨もよいの闇であり、しかし、隼人正の闇に馴れた眼には、たしかに黒々とした人影が感じられる。その人影は動かない。まるで化石したように柳の下に立って、こちらの一挙一動を睨みすえているかのようであった。

「ううむ？」——と、隼人正が唸る。

こんな経験はマレであった。その人影には、殺気……それも尋常一様の殺気ではなく、一流にすぐれた者のみを感じとれる、邪悪な、妄執めいた、一種いうにいわれぬ粘っこい殺気があった。(……下手に動いたら危いぞ……)

隼人正も木像のように動かなかったのである。



④「やッ!?」……声もなく動きもない暗夜の対立寸刻……不意に人影が動き出したのだ。音もなくフワリ……と、それはまこと影のような移動であった。——柳の下を離れ、かたわらの土橋を渡って、竹藪のうしろに消えて行く……。「ホーッ」隼人正は太い吐息をついた。その人影が消えると同時に、あのおぞましい殺気も消えて、あとには黒々とつづく闇があるばかり……

「けっ、イヤな晩だ！」——吐きすてて、一步、二歩、柳の下に近寄る。——と、今度は別の異様な刺激が、隼人正の張りつめた神経をカキ乱した。……血だ! 血の匂いである。——いけねえ。死人がいるな……!?」

見たッ! その死人は女であった。死人は美しく、しかし苦悶に歪んだその美貌がいたましかった。「ううむ……」

隼人正が、思わず唸ったのは、この死美人の胸に左の乳房が無い為だ!



⑤「おい、妙なものがハヤるじゃねえか」「夜歩きは禁もつた。初手が、仲見世のお弓小町、二番手が、両国の矢場で評判のお綾……三番手が夜鷹のお組で、昨夜は、小唄師匠の文字春だぜ」「瓦版の文句じゃねえが、考えて見ると四人とも、なるほど、小町番付東西の横綱大関だな」

ガヤガヤうるさいのは、両国裏の浮世風呂である。

集人正は、湯舟の隅っこで、聞き耳を立てていた……。

「小町娘をえらんで殺すのは、江戸開府以来、例のないことじゃねえが、何だって一人残らず、乳房までえぐり取って行きががるんだろ？」——それだ。これアどう考えたって、ただの辻斬りだア思えねえ。一体、女の乳を斬ってどんな徳があると言うんだい？」

「それが分りや苦労はねえよ。御府内の岡っ引は、みんなそのことでネをあげているん

じゃねえか」……集人正も独り領づいた。



⑥女風呂でも負けずに騒いでいた……。「変な辻斬りだよ、だいいち、女ばかり狙うなんて、助平ったらしいじゃないか」

男に縁のなさそうな五十婆さんである。

「ほんとにねっ」「お静ちゃんなんか気をつけた方がいいよ。何しろ、この裏通りじゃ評判の小町娘なんだから……。ふふ、せっかくのオッパイが、斬られてなくなったりなんかしたら、新の字が泣くよっ」

「イヤな小母さん！ 知らないッ！」



⑦集人正は、ブラブラ夜道を歩いていた。乳斬り辻斬りのうわさがたたって、このところ商売あがったりである。

「今夜こそ一稼ぎしなくては、酒も呑めんぞ……」呟やいて、土堤の下に出た。——商売……つまり追剥ぎである。——「来たな……」

見ると、掛取り戻りらしい番頭風の男が、急ぎ足でやってくる。

「——ぼつぼつ始めるか……」ずいッと前に出た。そして……さて「そつじながら……」と、四角張ってはじめてたのである。

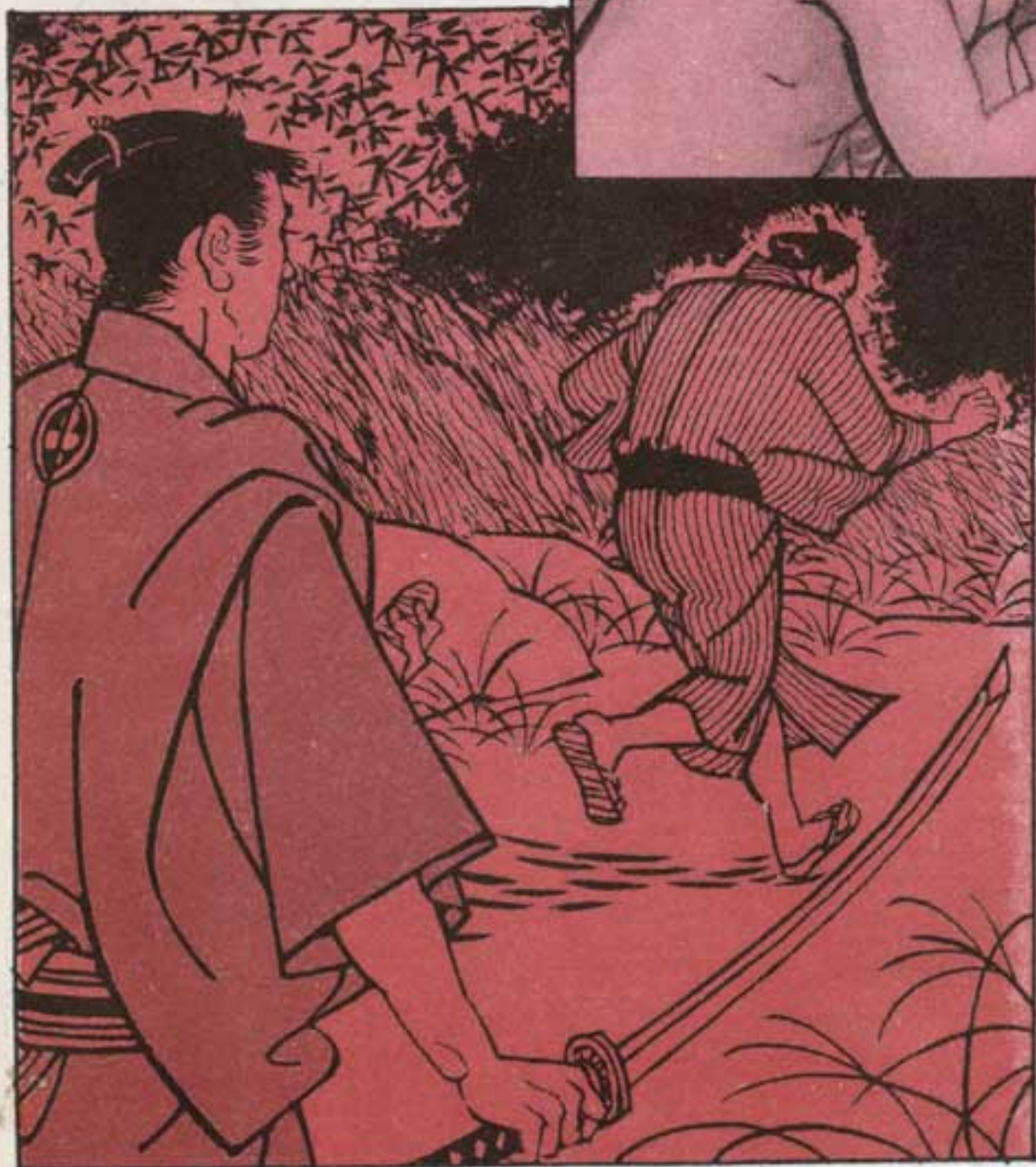
「お見受けしたところ、相当金子をご所持のようであるな。しかるに拙者は一文も所持致しておらぬ。……で、こういうことに致そう」——いきなり、ヤヤッと一伝流の居合斬り、

男の髪の毛を一本……正確に一本だけ斬ったのである。

「これは、滅多に見せぬ一伝流髪斬りの極意……。見料として一両いただきたい」

ぬけぬけと言った。いつもこの調子である。

「へエ」——青くなつて番頭ツラは、懐の一面を、ほうり出すなり走り出していた。



⑧「さて、これで酒手は出来たが……」つぶやいて、夜道を、両国裏まで戻って来た——、前方に影……それも二つの人影を認めた。「アレーッ」人影の一つが、いきなり絹を裂くような悲鳴を發した。「ううむ、乳辻斬か!?」隼人正は、直感で、それが先夜の影……殺気のある影……つまり乳辻斬だとさとした。「今夜こそ、動くなッ」宙を蹴って走りながら、——エイッエイッ……一伝流の手裏剣を放った。が——、影の一つは、飛鳥のように姿を消したのである。



⑨「うーむ……」と隼人正が唸っている。乳辻斬は取り逃したが、不幸中の幸——というのであろう。女は、斬られずに失神したのみだったのである。——倒れている。大柄の浴衣姿で、倒れるはずみか、それとも、辻斬りともみあった時にそうなったのか、胸のあたりが、至極開放的……に乱れている。——左の乳房が、白く、くつきりと見えた。隼人正が唸ったのはその乳房が、異常に成熟して余りに豊満でありすぎたからである。——隼人正は知らず……しかし、この女は、裏通り小町のお静であった。

⑩「——妙なことになるもんだ。辻斬りを追いかけるこの俺が追剝侍と来てやがる……」

隼人正は苦笑して、（……しかし、わしは人を斬らぬ。まして可弱い女子など……）

倒れて、失神しているお静小町のかたわらに片膝ついた。ぐいっとなおき起して、背カツを入れる。「エイッ！」

「ううむ……」唸ってお静は正気に返った。——見ると、眼の前に月代ののびた不精髭の浪人者が笑っている。「あッ！」と、また悲鳴をあげた。「——これ、驚くでない。わしは、その方を救った男だ。……ふふ、人相はよくないが

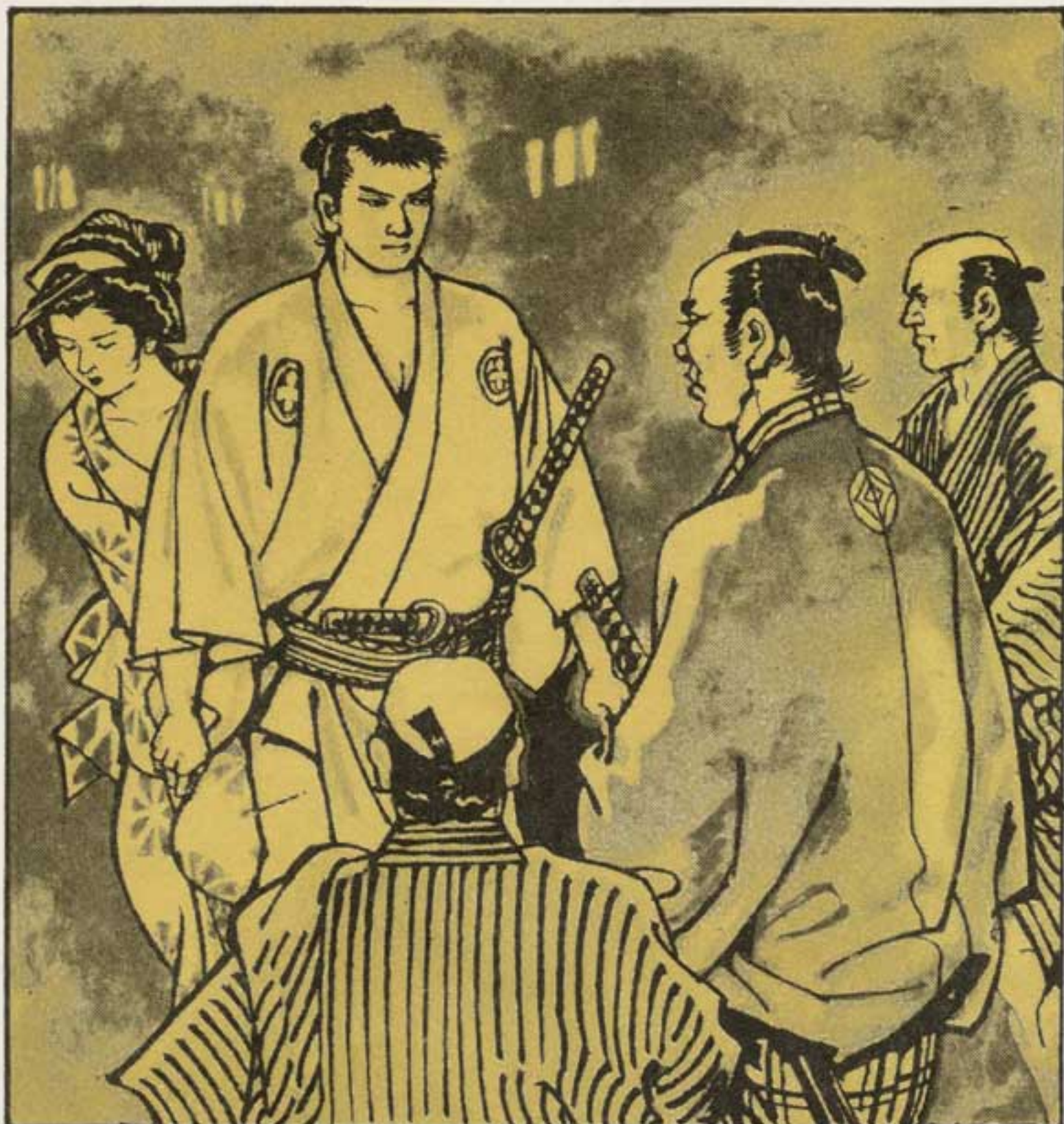


女子の乳を斬ったりはせぬから安心するがよいぞ」「はい……」お静は、一瞬の驚きが過ぎ去ると、わが身のはずかしい姿に気付いて、慌てて襟元を直している。この時、提灯の灯が、近づいて来た。



⑪チャラリ……と雪駄の音が鳴った。これ
で分る。夜廻りの町方同心である。供の手
先が三人……ギラリ、十手を光らせて走り
寄って来た。……「どうしなすった？」ぐ
るり——三者が三方に立って、うさんくさ
そうに隼人正を睨んだ。
「乳辻斬が出たのよ」——と、隼人正は
平然たるものである。「まことか？」手先
十手のあとから、ゆっくりやって来た巻羽
織が云った。「は、……はい」お静は、消
え入りたげな可細い声で答えている。

「ううむ。して、ご貴殿は？」「拙者
は無禄の十年浪人、ふらりふらりやっ
て来ると、闇の向うで女の悲鳴……て
つきり乳辻斬なり——と直感したな。
それで一伝流の手裏剣を投げた」
「なるほど。……兇賊の人相など、し
て見れば確かめる余裕もなかった訳で
あろうな」「残念ながら……」夜廻り
同心は、隼人正の顔を見ず、お静小町
の眼を睨んでいた。お静の眼が、隼人
正の言葉を肯定しているのであった。



⑫「よろしい。とも
あれその女は、唯一
の生証人だ。取調べ
の筋もあり、番所ま
で同行願う」
町廻り同心の権力
は絶大であった。お
静小町は、同心山形平
十郎と、その手先の岡っ
引共に挟まれて、近くの番
所に入った。「乳辻斬りに襲わ
れたとあれば、その人相ぐらいは
見ておろう……申して見よ」吟味を
はじめた平十郎同心の眼が、お静の胸元
を見つめている。人目を引かずにはおらぬ
大きな胸乳であり、見つめられてお静は羞恥に
ふるえた。——声も出ない娘心である……

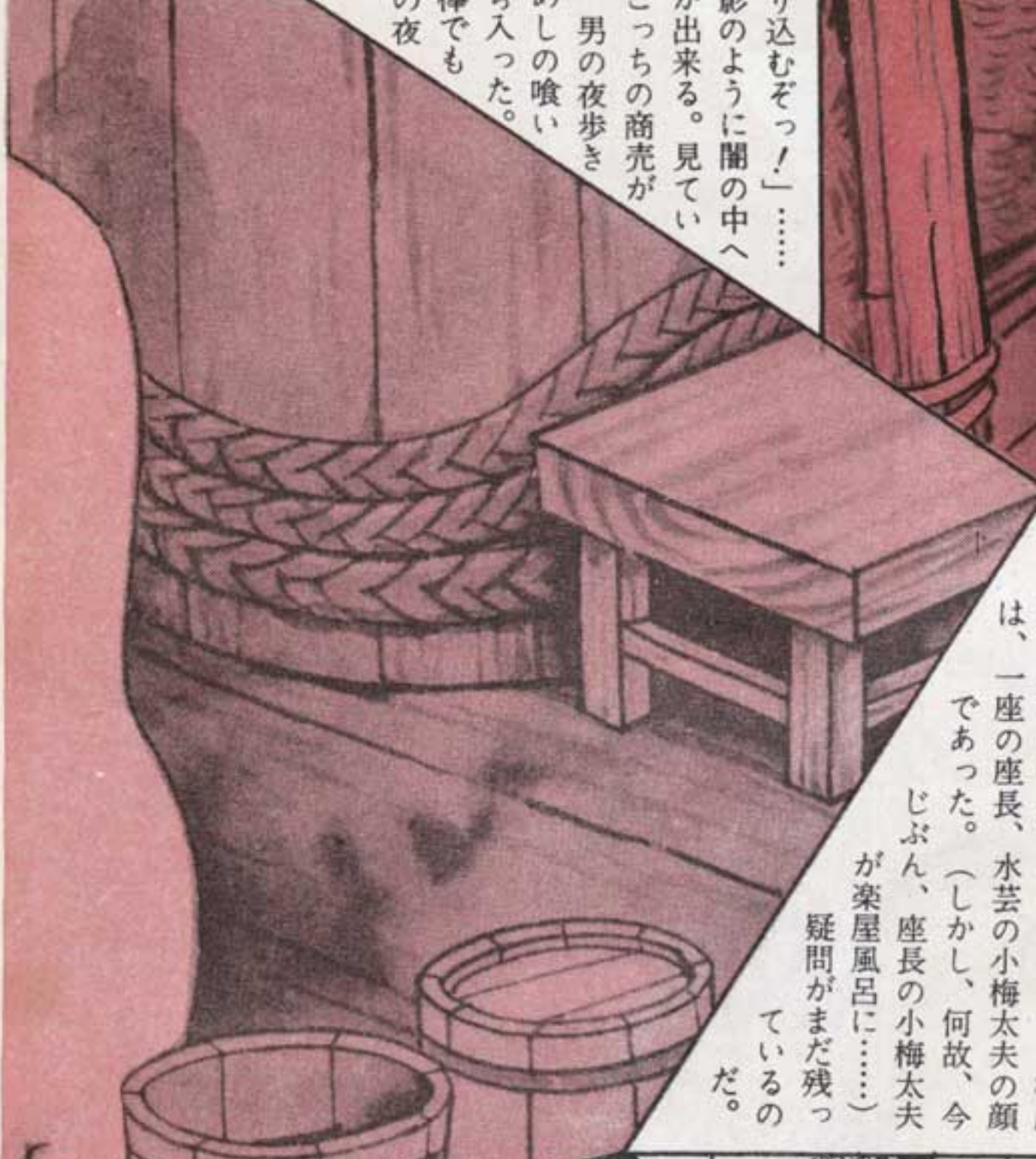


⑬何となく気がかりで、隼人正は番所の表に
立っていた。(——あの十手侍め、どうも、
眼つきが気に入らん……) 上役人にしては
濁った眼であり、濁った声であった。……
「いかに闇夜とはいえ、眼前に迫った辻斬り
の人相が、まるで分らなかつたとは解せぬぞ
つ。おぬし、何か隠しているなっ！」
平十郎同心のどなる声が聞えて来た。(は
じまつたわい……)と、隼人正が頷く。
「ええい、隠し立てすれば、裸にむいても問
いただしてみせるが、どうじゃっ!?」





⑭「妙な吟味をすると、目安箱に事情をしたためて抛り込むぞっ!」……番所の表から、大声にどなっておいて、隼人正は、影のように闇の中へ消えた。(——とにかく、あんなヘナチヨコ同心に何が出来る。見ていろ、乳辻斬りは、このわしが捕えてやる。でないと、こっちの商売があがったりだ……) 乳辻斬りをおそれて、女ばかりか、男の夜歩きも、びったり途絶えてしまったのだ。追剥ぎ隼人正、めしの喰いあげ……いや、酒も呑めん。——のっそり、と裏口から入った。娘芸人大一座の裏口であり、隼人正は、ここの用心棒でもあったのだ。——「はて?」首をかしげたのは、この夜中に、楽屋風呂で湯音がしたからである。……



⑮「妙だな……今じぶん何者が……?」首をかしげて隼人正は、楽屋風呂に近づいていった。足音を忍ばせ、息を殺して、音もなく進んだのは、風呂場を覗く腹であり、しかし、もしそれが一座の女であつたら、見咎められては一大事……用心棒の職を棒にふることになる。そうなつては、追剥ぎを本職にしなければならぬ破目になってしまう。そっと覗いた。「うーむ一風呂の中の女は一人であり、背を向けて洗い場に坐つていた抜けるような白い肌……凝脂が湯水をはじいて、男心をそる光景であつた。——分つたぞ! 隼人正が胸の中で領いたのは、その女が横を向いたときであり、美しい横顔は、一座の座長、水芸の小梅太夫の顔であつた。(しかし、何故、今じぶん、座長の小梅太夫が楽屋風呂に……) 疑問がまだ残っているのだ。」





①⑥「うっ!?」楽屋風呂を覗く
準人正の肩を、そッと叩いた奴がある。振り返ると雑用の甚平が、眼で笑っていた。——何だ?

何の用だ?」と、準人正も眼で訊ねた。(こちらへ)と、甚平の眼が誘っている。よしッ……領づいて従って行った。「へへへへ」と甚平が笑って、準人正の耳に口をつけた。そして何やら囁やいた。



①⑦ 舞台で

は水芸がはじまっていた。翌日のことであり、太夫は評判の小梅太夫である。——瀧車……八方乱れ……夕立……小車……百花……つぎつぎと涼しい秘術である。見物人は太夫の美貌に酔い、芸に酔い、割れるような拍手を送っていた。片隅で、準人正が、小梅太夫を見つめている。見馴れた顔を、違った新しい興味の眼で見ている準人正であった。



①⑧ 水芸が終ると、南蛮手妻がはじまった。小姓姿の紫太夫と、腰元姿の桜太夫が立っている。「とさ、東西、マカフカシギの娘手妻……一口上奴が滑らかな舌を急廻転させて口上をのべていた。——水芸を終った座長の小梅太夫が、南蛮服を着て、再度登場した。小姓姿の紫太夫が、黒い箱に入った。腰元姿の桜太夫が、赤い箱に入った。両人の姿が消えると、南蛮服の小梅太夫が、「ハイッ」と鋭い気合をかけた。



①⑨ 人身入替の手妻である。

黒い箱から長襦袢一枚の桜太夫が、紅い箱からは、下着一枚の紫太夫が、一瞬に入れ替って、なまめかしく現われたのである。また見物の拍手であった。「もう一枚脱げっ!」「ようよう!」下司な奴が叫んでいる。準人正は、ニヤリと笑って、楽屋口の方に歩きだしていた。小梅太夫の出場は終わったのだ。

②① 隼人正は、小梅太夫の芸を見ていたのではなかった。その顔を見ていた訳でもなかったのである。その胸を……太夫の動きにつれて、前後左右に視角の変る、小梅太夫の胸を見ていたのだ。楽屋に戻ると、甚平が待っていた。

「旦那、調べて来ましたぜ。へっへへへ、殺されの、乳斬られの……あれな小町娘は、そろいもそろって町内評判の乳小町、おっぱいのデッカい娘たちばかりでさア……」

「うむ、さもあるう……妙な話だがそれで万事呑みこめたよ」

隼人正は、何故か苦い顔で、ゆううつそうに答えるのであった。やがて大江戸に夜が来て、魔を呼ぶ、あのドス黒い闇が、音もなく忍び寄ったのである。……



②① 隼人正は裏口にひそんでいた。一刻……そして、更に四半刻……。と、人の動く気配がして、娘大一座の楽屋口から、滑るように黒頭巾の影が現れた。歩きはじめた。——隼人正は、足音を殺して、そのあとを尾行しはじめた。

向うに、小町稲荷の祠が見えはじめた。頭巾の影は、ツと横手の蔭に身をひそめようである。隼人正も足をとめた。

「米次郎さん、もう帰らなくっちゃ、あなたのお母さんに叱られる」——女の声が聞こえた。

「うん、送って行くよ、そこまでね」

「——けっ。あんな所で、ちくちくる奴がいるから危ねえんだ。アホウめが——！」

隼人正は、胸のうちで、苦々しく毒づいた。——この時である。



②② 「待てッ！」頭巾の影が、逢引の男女の前に躍り出た。「前々から眼をつけていたんだよ。ふっ、お前は稲荷小町のお袖、大きな、ふっくらしたその乳房、今夜こそ、斬り落してやる！」ギラリと小太刀を抜き放った。

（はじまったな。ぼつぼつ出るか……）

「小梅太夫！」声をかけて、久木隼人正が飛び出して行った。「現場をおさえたぜッ」

「あっ、お前は隼人正？」「そうだ、その隼人正だ。可哀相に、天性の美貌を持ちながら火傷の為か、病いの為か、赤くただれた、醜い、小さな、汚ない乳房の持主……小梅太夫……それで、乳房小町を憎むのか？ その気持は分らぬでもないが、人殺しはいけねえぜ」

醜い乳房ゆえに、豊かな乳房を呪う執念の鬼と化した小梅太夫……入湯姿をのぞき見て隼人正は一切をさとしたのであった。

光 と 肌 と



カメラ・藤 沢 修











秘窓

夏本圭之助
画・山田彬弘

① 人か魔か

東京午前二時。霧雨が煙っている。六階建のパレスホテルの煉瓦壁を、黒い影がよじ登って行く。直角の壁を軽々と、まるで吸盤のあるいもりのように――。

どの部屋の窓も煙雨に叩かれて、灯が消えているが、最上階の六階の一部屋だけ、青白い螢光灯が点っている。その影はゆっくりとその窓に吸いついた。

人か魔か――。だが、窓の灯に照し出されたその姿。硝子戸につけた二つの眼がニタツと笑う。尖った顎。分厚な唇から針のような牙が白く光る。畸型の小人だ。

豪華な部屋のWベットのの上に、白い裸身を横たえている若い女。一糸纏っていない。寝乱れて、なまめかしい桃色の曲線を余すところなく押しひろげている。

「う、う、う……」

小人の眼が女の乳房を凝視して、呻いた。

座敷の





② 麻醉のハンカチ

女は今売り出し中の新星映画のグラマー、雲井英利子。年齢は二十二の女盛りだ。もとG Iのオンリーだったというだけに、外人好みの豊かな裸とねっとり白く練り上った肌理の細やかさである。全裸で寝るのもアチラ仕込みなのであろう。英利子は窓に吸いついた妖しい小人の姿に気がつかずに美しい寝顔だった。

キ、キ、キ、——ッ。窓硝子がきしんだ。小人が硝子切で切ったのだ。破れ目からヌツと忍び込んだ。Wベットの近附いた小人の背のなんと低いこと!! ベットの高さに頭がある。小人はポケットからハンカチを取り出すと、英利子の白い乳房の上へのしかかりながら、そのハンカチを彼女の鼻に押しつけた。

「あッ!!」

一瞬、目覚めた英利子は、裸身の上にいる異様な小人に、驚愕の声を挙げたが、すぐ、ぐったりしてしまった。クロロホルムのハンカチなのだ。ニツとまた小人が薄ら笑った。吊り上った小人の眼が、英利子の白い肌を舐め廻していたが、手足を縛りはじめた……。



③ グラマー誘拐

「グラマー女優、雲井英利子、全裸のま、誘拐さる!!」——翌日の夕刊のトップ記事だ。特種新報の社会部記者、大里章吉の探偵欲が勃然と湧き上った。彼にとって、久方振りの犯人捜しの情熱なのだ。

「新星映画の宣伝じゃあないかな、近頃の映画会社の宣伝は悪趣味だからなあ。かつがれちゃあつまんねえぜ」社会部長が章吉に言ったが、「絶対に事件ですよ……部長、今に面白い記事をスクープしますよ」「ほう、嫌に意欲的なんだな、彼女のファンなのかい?」「まあそんなところですよ」さりげなく章吉は答えた。

英利子は章吉の死んだ妻に生き写しだったのだ。顔は勿論その肢体までそっくりだ。彼は彼女の主演映画を観て幾度も溜息をついていた。スクリーンにクローズアップされる彼女の豊満な裸身を観た時、彼は亡妻との夜の甘美な拘擁と愛撫を思い出す。

浅草奥山の小屋掛け。蝙蝠座——。毒々しい絵看板。若い全裸の女が高手小手に縛られ奇妙な小人が皮鞭を振っている。章吉はふと興味を惹かれて木戸をくぐった。

「ひーいッ」突然舞台から女の悲鳴。絵看板通りの折檻芝居が演じられていた。土間で立見の客がゲラゲラ笑っている。それは、舞台上で鞭を振っている小人の仕草がおかしかったのだ。丸い豊かな乳房をむき出した女の悲鳴は芝居ではない、と彼は直感した。小人は本気で鞭を振っている。女の柔肌に痛々しいみ、ず服れが見えたのだ。





④ 奇妙な芝居

庭張りの楽屋。章吉は名刺を通じて座長と面会した。座長は四十年配の瘦せこけた男。「ありやあ、酷いな。芝居にしちあ、女が本気で苦しんでるじゃありませんか?」「そりゃあ、時には熱が入っちゃってね。あれで結構女は喜んでまさあね、へへへッ」

⑤ 追跡

章吉が蝙蝠座に興味を感じたのには理由がある。誘拐された雲井英利子の主演映画全部が、彼女が全裸に剥がれて折檻されるストーリーなのだ。彼女に被虐的な性格があることを、彼女の演技以上の迫真的な顔や肢体の苦痛の恍惚な表情が如実に物語っていた。

それはそれとして、章吉は、新聞記者としてのヒューマニズムが、この蝙蝠座の女優の虐待を許すわけにはゆかなかった。深夜が来た。彼は蝙蝠座の周辺を見守って

いた。黒い影が二つ出て来た。章吉は煙草の火を消した。

片方の影は子供のようだ。あの皮鞭を振っていた小人と判る。一人は正しく座長である。小人はその倭軀にも似ぬ大力と見えて、丸く膨んだ麻袋を背負っている。章吉は尾行した。電車通りに一台の外車が待っていた。二人は乗込んだ。章吉は通りかけたタクシーを拾った。

「あの車を追ってくれ」運転手に叫んだ時、「余計なおせっかいはする奴はこうだぜ」運転手が叫んだ。——一瞬、異様な臭が鼻腔を刺戟して、章吉は気が遠くなった。





「しかし……人権問題だからな、女優さんに会わして下さい。直接き、たいんだ」

「余計なおせっかいは止して貰いてえな。警察じゃあるめえし、新聞記者のくせに、変なき、こみをする、たゞじゃあ済みませんぜ」

座長の眼が鋭く光った。

「それに、うちの座じゃあ、あれが売り物なんでね、さあ、とっとと帰ってくん」

座長は傍の鎖をチラッと見て怒鳴った。



⑥ 白い芋虫

何時間経ったか。章吉はペンキの臭いで息を吹きかえた。彼は船倉を直感した。ギイツと鉄扉が開いた。入って来たのは座長である。

「こ、は何処だ？」

「お見かけ通りの船底さ。しかも香港廻りの外国船さ。喚いたってどうにもならねえぜ。船は明日朝出航、お前は支那海の下真ん中でドン、鯨の餌になるって寸法よ。冥土の土産に、い、見世物を拝ませてやるぜ。ついて来な」

ふらっと立ち上った章吉の足に重い鎖が纏いついている。足鎖をジャラつかせながら、来たのは、広い船中のサロンだった。大勢の外国船員たちが、中央のうごめく白いものを見詰めていた。

その白いものは、まぎれもなく、誘拐された雲井英利子の全裸だ。しかも、彼女は手足を縛られて、芋虫のようにくねり、その傍に、あの小人が薄笑いをうかべて皮鞭を振っている。

⑦ 蝙蝠座の秘密

「どうだ、驚いたか。あのグラマーを誘拐したのは俺の仕業さ。あの小人はもとサーカス団にいた軽業師さ。パレスホテルの壁をよじ登るなんて雑作のねえことなんだ、それに十人力だしさ。とにかく、蝙蝠座にやあスターが欲しかったんだ、て云うのも、日本をおさらばして、外国興業をするんだ。そろそろ、警察の方からも狙われて来たし、三国人の俺にやあ、日本は永住の地でもねえしな。行きがけの駄賃に、今売り出しのグラマーを頂戴したってわけさ。これで、蝙蝠座も当分大儲けが出来ようってわけだ。ほれみな、あのグラマーの凄え裸のうねりようは：ゾクツとするぜ」

「くそッ！」

「そうくやしがるなよ。今夜は、わが蝙蝠座の看板スター、雲井英利子嬢の初舞台

なんだ、とつくり觀賞してやるがい、ぜ。ほら、あのたまらねえ姿はどうだね。いきのい、ことつたら、まるで、とれたての人魚だ」

章吉は座長の粘っこい顔へ、ペツと唾を吐きかけた。

（しかし、偶然とはい、ながら、折角、雲井英利子誘拐の目星を探り当てながら、このま、逃してしまふとは……）

章吉はこの恐るべき秘密劇団の真相をなんとかして報導したい記者魂が湧き上った。

小人の皮鞭が鳴った。観客の下卑た嘆声が挙った。口笛が鳴った。

「しかし、お前が浅草の小屋で、女優の折檻芝居が変だって文句をつけに来た時は、ひゃつとしたぜ……誘拐事件を嗅ぎつけられたかと思つたね」

章吉は、唇を噛みしめながら、亡妻に似た雲井英利子の裸身を見詰めた。





⑧ 被虐の陶醉

小人の振る皮鞭が、蛇のように、英利子の首や腰や手足に巻きついては離れる。そのたびに彼女の紅い唇から悲鳴がぶんざき、柔らかな肢体が、くねった。乳房の谷間にリンリと脂汗が光っている。だが、不思議なことに、その顔は苦痛ではない。寧ろ、甘美な陶醉に喘ぐように、つぶらな双眸はキラキラ輝いてさえている。

彼女の出演映画で写し出される、被虐シーンと同様の華麗な妖しい雰囲気醸し出されている。彼女の悲鳴には、普通の苦痛を訴える響よりも、快感の叫びがあった。

「初舞台そうそう、ご熱演だな……こりゃあ儲けものだ……ねえ、記者君、同感だろう」

座長が、粘っこい眼で云う。

「けだもの奴!!」

「そうよ、俺はけだものさ。一つ、そのけだものの本領を見せてやろうか」

彼はやにわに、サロンの中央に出ると、小人から、皮鞭を引ったくり、びしりと英利子の豊かな腰を打った。英利子の白い裸身がくの字にねじれた。章吉はやがて、恰も、亡妻が折檻されているような錯覚に落ちたが、ふと、サロンの扉が開いているのを見ると、眼が光った……。

(ウム 今だッ!)



⑨ 亡妻慕情

章吉は突っ走った。扉の外に出ると、必死

に甲板へ出た。横浜の街の灯がすぐ目の前だった。ちょうど、港内の巡視船が、船腹を通りすぎようとしていた。彼は飛んだ。運よく

巡視船の日除けのテントの上に落ちた。

「事件だ、事件なんだ!!」

彼は大声で叫んだ――。

外国船は直ちに調査され、章吉の証言で、蝙蝠座の一件と雲井英利子誘拐事件は明るみに出された。もちろん、章吉のスクープ記事は、万都の読者を湧かせたのは言うまでもない。

大磯近くにある精神病院の一室――。白衣の医者が章吉に言った。

「英利子は極度の露出症と被虐症ですよ。当分はここから出せませんな。ほら、御覧なさい。ああして、全裸になって、何かぶつぶつ言っているでしょう。いくら着物を着せても、すぐ脱いじやうんです……しかし、いい体じやありませんか、まるで彫刻ですな……患者とはい、ながら、目に毒ですよ」

章吉は鉄柵の中で、奔放な踊りを続けている英利子を見詰めながら、深い溜息をついた。「惜しいな、若し彼女が正常な神経の持主なら、妻にしてもいいのだが……なおるまで待つか……馬鹿な、そんな感傷なんか捨てちまえ……しかし、全くよく似てる……」

章吉は、英利子が見て微笑したのにまたぞろ、亡妻を思い出して、暗い気持になった。なおるまで待つてもいい、な……。

裏

窓

十月号

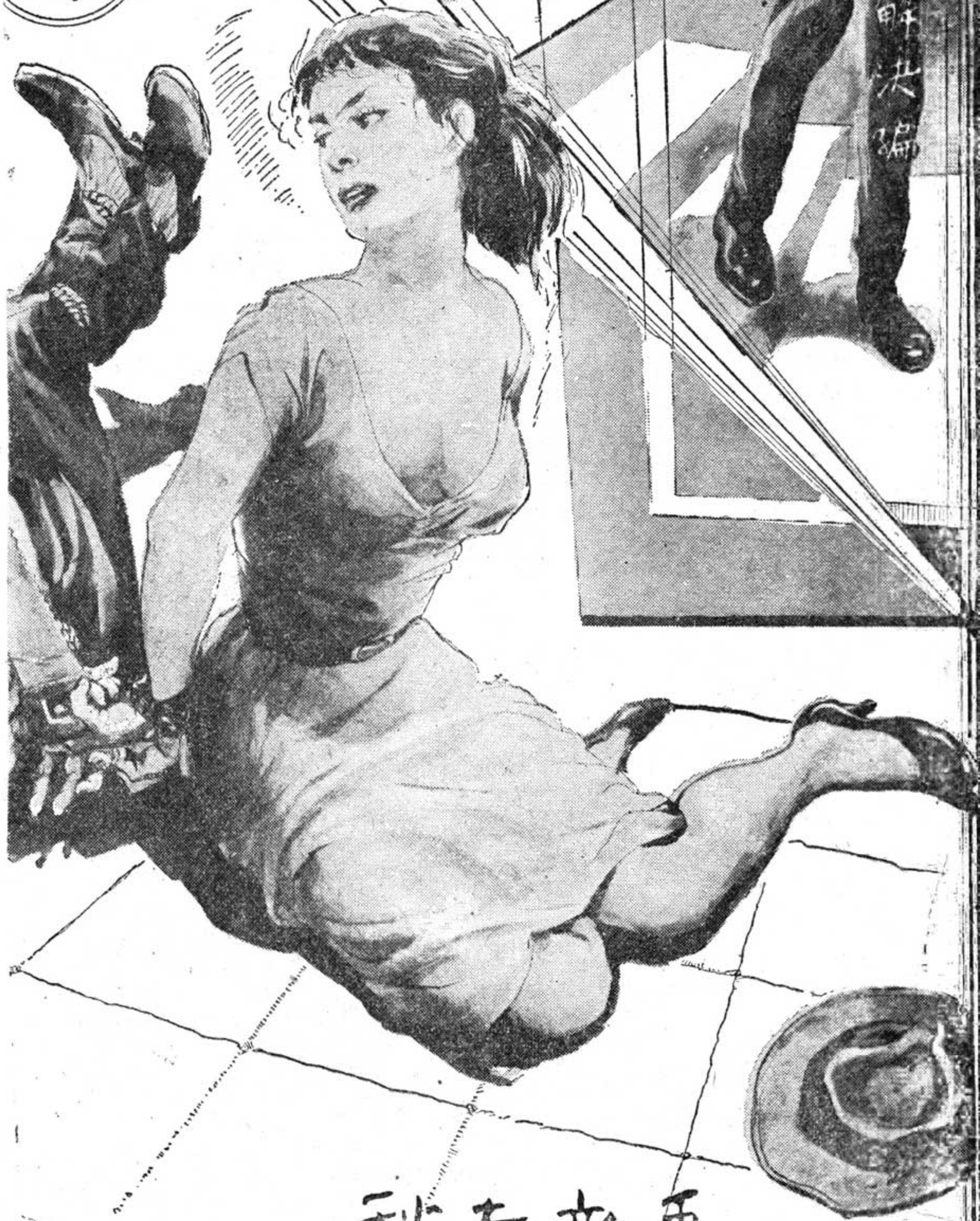
怪異復讐譚特集



第三卷・第十三号

最終解決編

戸方



秋吉恋画

乳の試地獄

吉 豊 田 飯

★悩乱の花絵、危機迫る千治、夢子！トランクは誰に帰する？、白熱のサスペンス完結篇！



香港の麻薬ボスから、大量の麻薬を盗みだし、さらにボスの情婦、花絵まで奪って東京へ逃げこんだ鳴海条吉。この事件は、その麻薬を秘めたトランクをめぐる複雑な展開をする。

まず、ズベ公の風美が、鳴海の隙をうかがい、そのトランクをかつぱらったのである。風美を追った鳴海は、自動車の中から拳銃を发射するが、弾丸はそれて、舗道に坐る乞食を射殺してしまった。

これを偶然目撃したのが、東京読物新聞の探訪記者、藤木千治であった。事件はそのトランクをめぐる、さらに殺人、死闘、私刑を呼ぶ。それにとびこんでいく千治と、その部下の女記者京極夢子。

銀座暗黒街のボス、黒須金次郎は、部下のキャバレー支配人前田に命じて、トランクのゆくえを探させる。前田はさらに手下の鬼松や紺野を使って風美のアパートを襲わせたが失敗して風美の姉雅美を殺してしまう。風美はトランクを抱えたまま、いち早く逃走してしまったのである。

た。(前号まで)

六郎惨殺

「ぐうッ！」

咽喉が、蛙のような声で鳴った。すごい力だ。

(殺される！)

六郎は力をふりしぼって、のしかかる相手の腹を蹴った。だが、鳴海はビクともしない。

深夜の江戸川べり。土堤のかげに停る車のそばで、鳴海条吉は六郎を組み伏せている。

「さ、どこにある。云え！」

充血した顔が、鬼のように六郎の鼻さきに噛みつく。

「し、し、知らねえ……」

咽喉の手に、ぐいと力がこもる。

「ううっ」

草の中で、六郎の顔がくしゃくしゃにゆがむ。

「あと五つ数える。数え終わったら、お前をしめ殺す」

鳴海の両手に新しい力がこめられ、がっしりと六郎の咽喉にくいこむ。

「——一、二、三、四……」

鳴海の額に、ふとい青筋がくねった。

「——五！」

六郎の眼が、白く吊りあがった。

「いう！　いうから放してくれ！　殺さないでくれ！」

一方、中国人の殺し屋、王は、香港のボスからの直接命令を受けて裏切者の鳴海条吉を処刑するために東京へ現われた。手はじめに花絵を捕えて鳴海をおびき寄せようとしたが、鳴海は応じない。王は、同じ麻薬業者で江戸川べりにトルコ風呂を営する陳雲漢のもとに花絵と共に身をひそませ、鳴海を狙っている。

偽のトランクを使つての風美の計略、それに踊らされた千治と鳴海鬼松たち。その隙に風美は巧みに逃走を続ける。

鳴海は箱根のホテルで、ついに風美を捕えるが、しぶとい風美は白状しない。監禁されている風美を、風美の若い情夫、六郎が助けた。

花絵はブナの千治を電話で呼びだし、自分が死んだら、それは殺されたのだから、仇をとってくれと頼む。

江戸川べりのトルコ風呂「夢幻楽温泉」が女子従業員の募集広告をだした。婦人記者の夢子は応募してうまくもぐりこむが、その時風美もまた応募にきていた。

風美は、花絵や王たちに発見されて捕えられる。風美を追ってきた鳴海も、屋上のビアガーデンで睡眠薬入りビールをのまされ、王の一派に監禁された。危機一発のところを、花絵の助けで前田を射殺し、逃げだす。

藤木千治は、夢子の手びきで夢幻楽温泉に忍びこむ。ギャング共の実体をさぐるため、深入りして捕まり、風美、花絵と共に一室に閉じこめられる。花絵と風美に残酷なリンチが加えられ、風美はついにトランクのありかを白状する。

しかし、トランクは六郎の機転で、車の坐席の下から、夢幻楽のクロークに移動していた。風美が白状したその頃、鳴海条吉もまた夜の江戸川べりに六郎を追いつめ、トランクの場所を知ろうとあせつてい

かすれ声で叫んだ。

「どこにある！」

「お、おれのズボンの、ポケットの中——」

「なに？」

「まるい券だ。夢幻楽のクロークに預けてある……」

鳴海は、すぐその意味をさとる。六郎を膝に敷いたまま、ズボンのポケットに手をさしこむ。プラスチックの小さなまるい券。

「これだな」

弱々しく六郎はうなずいた。

「負けたよ、兄貴、おりてくれ、苦しい」

この香港帰りの男の腕つぶしには、とてもかなわない。六郎は完全に手を上げた。

「よし……」

鳴海は膝の力をゆるめた。背広の内ポケットに手をやった。

六郎の眼が、恐怖でまるくなった。鳴海の手が拳銃が握られている。

銃口が、ぎゅうっと六郎の腹の中にのめりこんだ。

「ゆ、ゆるしてくれ！ 殺さないでくれ！」

哀願と同時に、ブスッと腹が鳴った。消音拳銃である。力をこめてはねおきた六郎の頭が、再び草の中へ沈んだ。手足が最後の苦悶にふるえた。やがて、ぐったりとした。

鳴海は、ゆっくりと立ちあがった。あたりを見まわす。草は高く生い茂り、夜の闇は濃い。草むらで鳴く虫の音が、急にはげしくなった。すでに死体となった六郎の襟ぐびに手をかけると、川のほうへずるとひきずった。

川の中へ静かにおろす。音もなく沈みながら、六郎は下流へ消えて

いった。

（だが、まずいな……）

まるい小さな券を指先にもてあそびながら、鳴海は眉を寄せた。

トランクは夢幻楽のクローク——敵陣である。敵の真ッ只中である、ウカツに取りに行けない。

勝ちみのない戦いはしたくない——

自分の車に戻り、鳴海は煙草をくわえ、しばらく考えた。

（そうだ、おれのかわりに、あいつをやろう。あいつなら、敵に顔を知られていない）

鳴海の頭にうかんだのは、海老沢である。雲海荘ホテルの支配人。

鳴海が日本で心をゆるせる、ただ一人の弟分である。

（あいつなら大丈夫だ。うまくやる）

鳴海の頬に微笑がうまれた。

女の最大のピンチ

十一時半に、夢子は夢幻楽に出勤した。

いつもより、一時間以上も早い。もっと早く来たかったのだが、それでは怪しまれる。

開店は一時である。点呼はその十五分前。従業員たちが出てくるのは十二時半である。

まだ誰も来ていない。夜の遅いこの歓楽ビルは、まだ眠りからさめず、静まりかえっている。

夢子は、まっすぐに二階のトイレへ駆けあがった。一番奥のドアの

中。そこに、一夜の冒険を終えた千治が入っているはずなのだ。

ノックする。返事がない。あける。いない。出かけたきり、帰ってこないのだ。

夢子の心臓が、急にドキドキと鳴りはじめた。

(なにか事故があった……)

だからそんな無茶なことはやめなさいって云ったのに……

念のために、並んでいるドアを片端しからあけた。いない。

どこへ行ってしまったのか。まだ探訪を続けているのか。それとも

――捕まったのか。

ますます、いやな予感がする。

夢子はトイレから出て、二階をひと廻りした。三階、四階、五階……

……人気のない静かなビルの中を、千治の姿を探して歩いた。やはり、

いない。

不安に胸をおののかせながら、一階を探し地下におりた。一般従業員はおりにいけないことになっている地下二階へ足をのぼした。

廊下を曲ると人影があった。千治ではない。夢子はドキリとした。こちらへ向って歩いてくる。

(まずい。見とがめられる!)

逃げては、なおまずい。夢子は腹をすえてまっすぐ歩いた。

近づく。すれ違う。

夢子は小さくなって、うつむいたまま頭をさげた。

「お早うございます」

その男が、あいさつを返した。

「お早う、バカに早いな」

すれ違いざま、男はふいに腕をのぼし、夢子の肩をつかんだ。

「何するんです」

夢子はひき戻され、男の顔を見た。

(あッ!)

息がとまった。唇が白くなった。

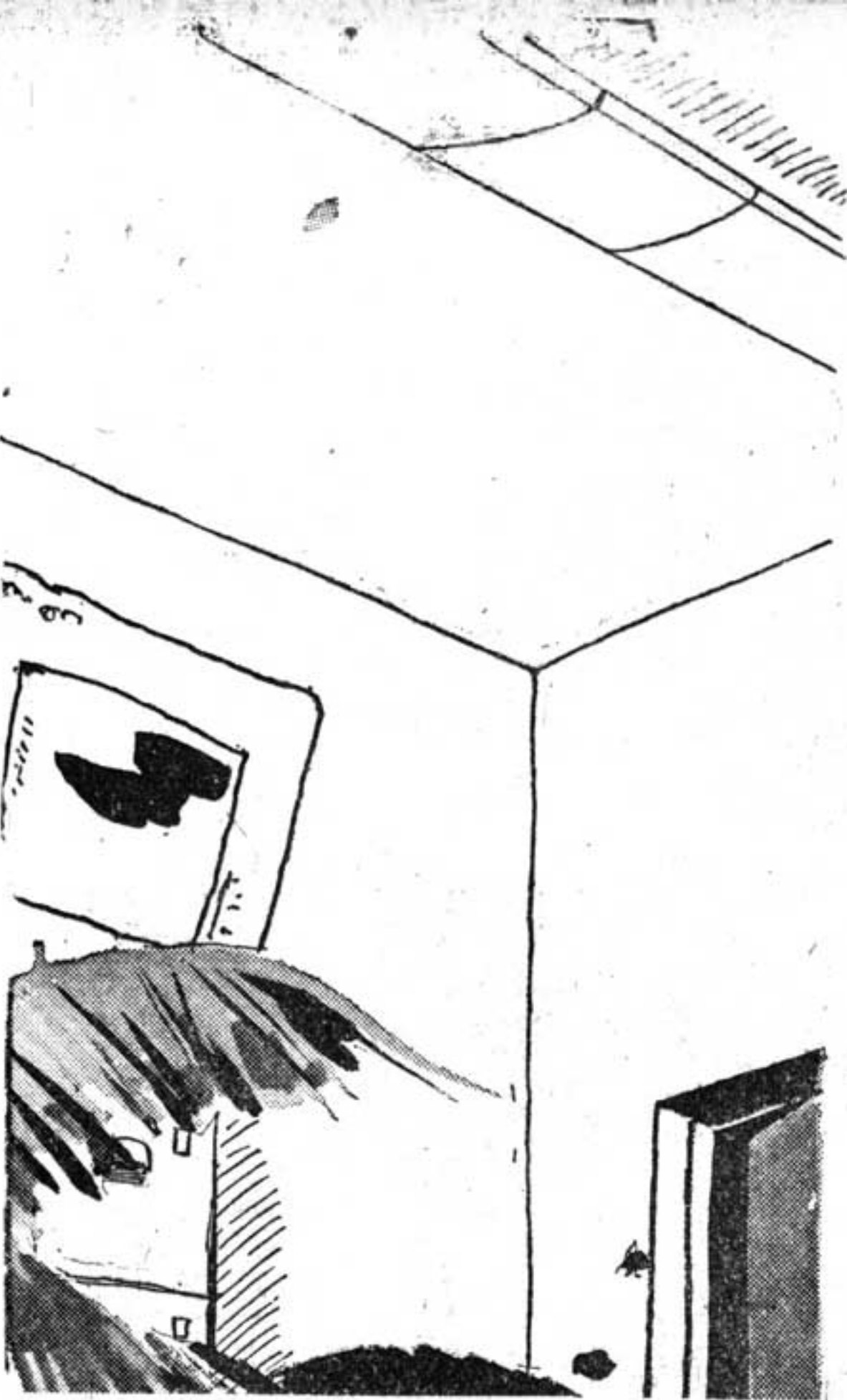
「ふふふ……また逢ったねエ、ねえちゃん。一度目は銀座の街角、二度目が浅草の隅田公園、三度目が江戸川のトルコ風呂……インネンだなあ……」

キツネの紺野である。ほそい眼、突きでた唇、とがった頬骨。

肩にかかった手はずし、夢子は逃げようとした。

「駄目だよ。逃げられるワケはねえじゃねえか。ここはおれたちのアジトだぜ」

夢子の腕をつかみ、力まかせに抱き寄せる。





(ああ！)

絶望感。ウカツだった。いままで見つからなかったのは、夢幻楽温泉の女子従業員三百人の中にまぎれていたからだ。

しかし夢子は抵抗した。身をひねり、肩をふり、腕をあげ、紺野の足を蹴つとばした。

「やめなよ。ねえちゃん、無駄だよ」

紺野は夢子をひきずった。

一室のドアをあける。そこへ荒々しく投げこむと、うしろ手でドアをしめた。

「相かわらずきれいだね、ねえちゃん。ブンヤのほうはやめたわけじゃねえんだろ」

「せ、千治さんは？」

床に這いながら、夢子はきかずにはいられなかった。

「せんじ？ ああ、あのブンヤか。そうか、あいつはねえちゃんの仲間か。ひでえ奴だ。住居不法侵入罪で、いまおとなしくあっちでネンネしてるよ」

夢子は眼の前が真っ暗になった。やっぱり彼も捕っているのだ。

「さ、ねえちゃんもおとなしくネンネだよ。なにしろ、ゆンベは一晚中、六郎の奴を探してヘトヘトだ。おれにつきあって一緒に寝てくん」

紺野は夢子を抱きあげた。この部屋の片隅には大きなダブル・ベッドがある。ここも密室であった。秘密の売春なのである。

クッションのよいベッドの上で、夢子の身体が大きくはずんだ。

「ふふふ……このベッドの上では、ついさっきまで、おひげをはやしたおえら方が、自分の孫みたいな娘を抱いて、イチャついていやがったんだ。このベッドから直通で御出勤さ。そういうありがたいベッドで、こんどはキツネのおにいさんが、ブンヤのお嬢さんを抱くというわけだ」

紺野の膝がベッドに這いあがる。

夢子は猛烈に反抗した。寝たまま、あばれる。足で蹴る。手でひっかく。

「くそ、イキのいい女だ」

もてあました紺野は、背広を脱ぎ、ネクタイをはずした。

「動けなくしてやる！」

そのネクタイを持って、夢子に躍りかかった。手首をつかんで、背中へねじりあげる。

「痛ッ」

女の身体をひっくり返し、俯伏せにして両腕を背中にまわす。手首を一つにつかんで、ネクタイでぎりぎり縛った。

「どうだ。これでもあばれるか。足は縛らないぞ、ふふふ。こうしてお前がくたびれて、あきらめるのを待つ……」

「卑怯だわ！ 悪党！」

「ま、こんなことする奴に、善人なんかいねえな」

夢子は血走った眼で紺野を睨んだ。背中に縛られた手首が、ちぎれそうに痛い。ネクタイが喰いこんでいる。無駄とは知りつつもがく。ブラウスの襟がはだける。咽喉があえぎ乳房がゆらぐ。スカートがまくれる。白いふと腿。

縛られてくねくねと悶える女体を、紺野は嬉しそうに眺めている。長い舌をだして、ペロペロと唇をなめている。得意の絶頂だ。

夢子の力が尽きた。

「もうあきらめたのか、早いな」

紺野は夢子の足の裏を指先でくすぐった。
「ひッ」

と、うめき、足を縮め、またもがきはじめる夢子。

身をよじってむなしい抵抗。疲れる。また紺野がくすぐる。悶える
疲れる。足をつかんでまたくすぐる。猫がねずみをなぶるに似た、残
忍な悪戯。

夢子はもう動けない。全身にじつとりと汗が流れ、乳房が大きく息
づく。疲れ果てた。

紺野の手が、がっしりと夢子の両脚をつかんだ。力が入った。夢子
は眼をつぶった。女の最大のピンチ。

(千治さん、ごめんなさい！)

彼女は心の中で叫んだ。

千治さんのモノを！……こんな奴に！……

紺野の顔が、もう陶酔をうかべて、ぬうっと前にきた。

花絵の告白

と、その時、紺野の腰が激しく蹴つとばされて、彼はベッドから転
落した。

「ちくしょう！ 何しやがるンだ！」

ぶざまにころがってわめく紺野。現われたのは鬼松だ。

「あつ、兄貴」

「昼間っからハデ過ぎるぜ、コン。こんなところを黒須の社長に見つ
かってみる。タダじゃすまねえ」

「ゆンベは全然寝てねえから、ひと眠りしようと思ってね」

紺野は口をとがらせて不服づらだ。

「——風美が白状したのはいいが、六郎が見つからねえ。奴のボロ車

だけは土堤に置いてあったが、かんじんのモノはどこを探してもねえ。
一休みしたら、また出掛けるンだ。女の子の相手になっている場合じ
やねえぞ」

鬼松はにがい顔だ。いま黒須から、さんさんしほられてきたのだ。

(あッ、腐れ金齒の鬼松だ。——風美が白状して、六郎がトランクを
？……)

最悪の事態を一時逃れ、夢子の職業意識は敏速に回転する。

「すみません」

やくざにとって兄貴分の命令は、敗戦前の天皇陛下の命令と同じで
ある。紺野はせっかく脱いだズボンを、しぶしぶはいた。

「誰だ、この女は？ おや、いつかのブンの女じゃねえか」

「もぐりこんでいやがったンで」

「性コリもねえ。しかし、ここに置いとちや、まずいな。むこうの
部屋へ奴らと一緒に押しこめておけ」

「へい」

紺野は夢子の腕をつかむと、乱暴にひき起した。

(くそ！ こんなことならいたずらなンかしていねえで、さっさとや
りゃよかった)

くやしがつたが、もう遅い。鬼松の眼を盗んで、すばやく太腿のあ
たりを一触する。

「ひゃっ」

ど、夢子が声をあげた。鬼松が睨む。

「さア、歩け」

「手をほどいてよ。痛いわ」

貞操の危機がひとまず去って、夢子に少し元気がでた。

「うしろむけ。ほどこいてやる」

紺野が結び目に手をかけると、

「縛ったまま連れていけ。そのほうがいい」

鬼松が云った。

「チェッ、おれのネクタイがふいだ」

紺野は夢子の背を突きとばした。

廊下に出て、背中を押されながら二つ三つ曲り、一室の前でとまる。

どんづまりの部屋だ。ドアをあける。灰色の天井。固い壁の不気味な部屋である。

「ここでおとなしくしてろ！」

夢子の胸をまた一撫でして紺野は出ていく。室内を見渡して夢子は棒立ちになった。

椅子に縛られ、その椅子ごと床に倒れて千治がいる。

片脚を天井に吊られて、逆さになっている花絵がいる。身体は床におろされているが、足はまだ上に吊られ、息も絶えだえである。

両足首から血を流した風美が、これもうしろ手に縛られ、ぐったりと眼を閉じている。そのそばには、ノコギリ。

凄惨なりんちのあとである。

風美に泥を吐かせて、王や黒須達の姿は見えない。。トランクを追うことに夢中になっているのだ。

「千治さん！」

叫んで、夢子は駆け寄った。

「おッ、お夢！」

千治は血だらけの顔をあげた。唇がふつきれている。眼のまわりは青黒いアザだ。その胸に夢子はすがりついた。両手は背中に縛られた

ままだ。胸と胸とをすり寄せる。

「どうしたっていうのよ。こんなひどい目にあって……」

夢子は泣き声になった。

「お前こそどうしたんだ」

「ごらんのとおりよ。あなたのおかげよ」

「すまねえ。でも、いろんなことがわかったぜ。——雅美を殺したのは鬼松と紺野。命令したのは背後にいるやくざのボスだ。名前は黒須——」

「やっぱり……」

その時、花絵が眼をあげ、けんめいに身体をねじって千治をみた。

「——千治さん。それから私、私の父を殺した男を知っている……」

「えッ。あの殿様乞食を殺した犯人を、あんた知ってんのか！」

椅子を背におぶった不自由な姿で、千治も花絵ににじり寄る。

「——鳴海条吉という男……。風美を射と

うとして車で追い、舗道に坐っていた

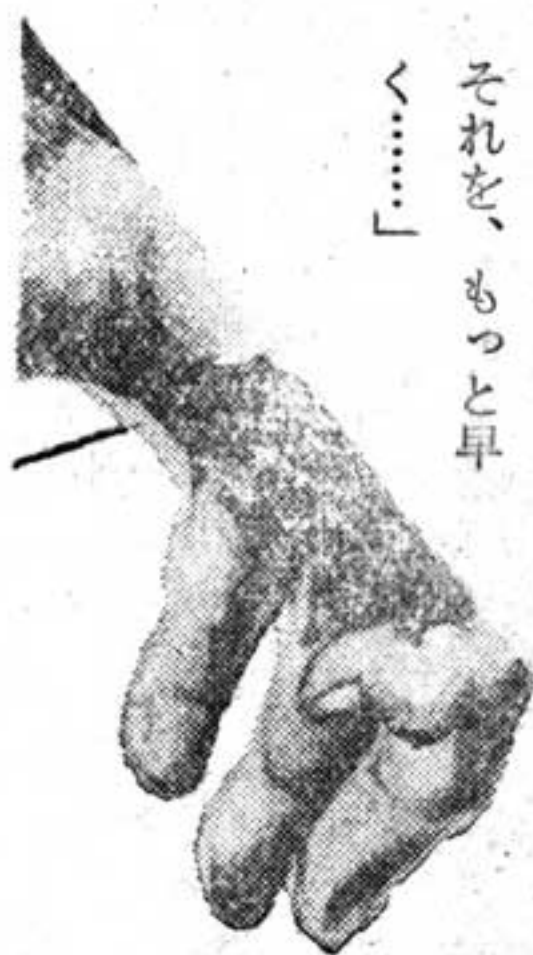
父を射ち殺した……。その車には、

私も乗っていたのよ……」

「そ、そんなら、なぜ

それを、もっと早

く……」





千治は齒を鳴らしてくやしがる。

「——条吉は、私が香港で愛した男……私が香港の魔窟に縛られて苦しんでいたのを、条吉は助けてくれた……」

花絵は、あえぎながら語る。

「トランクの中身は？」

「麻薬よ。一キロ五百万円するのが六キロ。それから——」

花絵の咽喉がぜいぜい鳴った。

「それから？」

「日本の麻薬密売ルートをくわしく書いたノートが入っているの。香港のボスのところから盗んできたの。密売業者たちの名前が、全部書いてあるわ。だから、売るところへ売れば、ペイよりもっと高く売れる……」

「わかったわ！ だから奴ら、必死になって追っかけまわしているのね！」

夢子が眼を輝やかせた。

「お夢。そのドアに鍵が掛っているか」

「かけないで出ていったわ。どうして？」

「きまつてるさ。逃げるんだ。警察に知らせるんだ。おれたちのデシヤバリもここらがひけどきだ」

「でも、縛られてるわ、みんな。こんなにきつく。逃げられない」

夢子が肩をうごかす。絶望の眼で千治を見る。

「切るのさ。今のうちに逃げなけりゃ、おれたちの命はそう長くはなさそうだぜ」

「ナイフなんかないわ。齒で噛みきれる縄じゃない。身体に喰いこんでいる」

「風美の足のそばをしろ！」

夢子はふり返った。青い顔でぐったりと死んだようになってる風美。その足もとに、ノコギリがあつた。風美の両足を切断しようとしたノコギリだ。

「すてき！」夢子はうしろ手で、それを器用に拾いあげた。

ヨチヨチと膝で歩いて、千治の背後にまわった。不自由な姿勢で、ノコギリの刃を千治の縄目にあてた。

拳銃乱射戦

午後一時十五分すぎ。

開店早々の夢幻楽温泉に、一人の客があつた。

クロークへ来て、この間預けた、黄色いトランクを出してくれという。

「黄色いトランク、でございますか？」

係の女の子は首をひねった。

引換券には間違いはない。しかし預ったトランクは黄色ではない。真ッ黒なエナメル塗りである。そして、この記憶力のよいクローク嬢は、あのトランクを預けていった客がチンピラふうの若い男だということ覚えていた。こんな顔の長い、鼻のまがった中年紳士ではなかった。

「あの……黄色いトランクでしよるか？」

首を傾げて、またきいた。

「そうだよ。このとおり、ちゃんと券があるじゃないか。僕が預けたんだ。早くだしたまえ」

海老沢は焦った。玄関の外には、鳴海条吉が黒眼鏡をかけて待っている。

「あのウ、お預かりしたのは、黄色いトランクでなく……」

クロック嬢が説明しはじめた時、奥から出てきたでっぴりした男が耳をたてた。客にむかって、ていねいに頭をさげ、

「黄色いトランクが、どうかしましたか？」

クロック嬢にきいた。陳雲漢である。

「あ、会長さん——」

りこうな女の子は、物蔭で陳雲漢にひそひそと話した。うなずく陳雲漢の眼鏡が、妖しく光った。

（まずい！）待たされた海老沢は、ますます焦った。

「そのトランク、見せなさい」陳雲漢が小声で命じた。

女が棚からおろした黒いトランクを、陳雲漢は、じっと見つめた。

指の爪をたてて、うわべの黒エナメルをひっかいた。一筋、二筋……

下から現われる黄色い塗り……

陳雲漢の分厚い唇が、思わずニヤリと笑った。と——

「手をあげろ。それをこっちに渡せ！」

陳雲漢の背中に固い物が押しつけられた。海老沢が迫っている。拳銃である。陳雲漢は手をあげた。トランクは海老沢の手に渡った。拳銃を擬した海老沢が、二三歩うしろへさがった時、

「うっ！」

背中をまるめて、彼はくずれ落ちた。耳のうしろにナイフが深々と突き刺さっている。

投げたのは鬼松である。二階へ上る階段の途中からだ。

「キャアッ！」

事態を知った女子従業員たちが、悲鳴をあげて逃げだす。

「静かに！ なんでもないよ！」陳雲漢が制する。

その時、黒眼鏡の男が玄関に姿を現わした。異変を知った鳴海条吉である。

ブスン！ 消音拳銃が、いきなり火を吐く。

鬼松が階段から、真ッ逆様にころげ落ちる。紺野がでてくる。王がでてくる。黒須がでてくる。

トランクをつかんだ鳴海の周囲を、油断なく取り巻く。紺野が早くも玄関をふさぐ。拳銃の先が、いっせいに鳴海を狙った。

「いけない！ いけない！ ここで大きな音いけない！」

陳雲漢が大きく手をふって叫んだ。だが、この緊迫の空気は破れない。命と金と復讐を賭けたトランクは、いま眼の前にある！

ダダーン！

王の拳銃が鳴った。鳴海は柱のかげだ。柱の角が、びしっと削れる。ブスン！

鳴海の鋭い応酬。王、黒須、紺野の拳銃が三方から鳴海を射つ。

ダダーン！ ダダーン！

鳴海はトランクを足もとにおき、左右の手に拳銃を握った。乱射乱撃である。火花、硝煙。壁がくずれ、ガラスが散る。

「いてッ。おい、肉まで切るな」千治は顔をしかめる。

「がまんしなさい。普通の時とは違うのよ」

夢子はびっしりと汗だ。うしろ手のノコギリを操って、千治の縄を切る。

「もう少しよ。もっと腕をのばして」

「うまく逃げられたら、うんとキスしてやるぜ」

「キスだけじゃいや」

「抱いてやるぜ」

「抱くだけじゃいや」

「いいかげんにしろ。この部屋は二人だけじゃねえんだぞ」

「動いちゃ駄目。もう少し」

「いてッ、おい、気をつけろ！」

「よいしょ。ほら、切れたわ」

「ありがてえ！」

千治は縄から抜けた。こんどは夢子の手首を解く。

「ああ、痛かった」

「次は花絵さんと風美だ、早く！」

部屋をでると、上のほうで激しい銃声が聞える。

千治は廊下の隅の電話にかじりついた。

——一〇番！ まわす指が、ぶるぶるとふるえている。

「——条吉。拳銃を捨てろ！ 昔からのよしみで、命だけは助けてやる！」

黒須が怒鳴った。黒須の二挺拳銃をしても戦いは不利である。じりじりと後退する。と、地下の階段を這い上った花絵が、苦戦の鳴海の背後に、よろよろと近づいていった。

「花絵さん、あぶない！ でるな！ 戻れ！」

千治が叫んだ。階段の下に身をかくしている。背には風美を負っている。腕には夢子ががついている。

花絵は鳴海のそばへ寄っていく。唇をキッと噛み、鬼気せまる蒼白な顔である。

「あなた！ 私よ、花絵よ、しっかりして頂戴！」

ふりかえる鳴海の顔も、追いつめられてすさまじい。

「おお、花絵か！」

「私も射つわ、ピストル貸して」

花絵は鳴海の手から、無理に拳銃をもぎとる。

「よせ、お前に射てるか！」

「射てるわ——鳴海！」

花絵は、ひき吊った眼で条吉を睨んだ。その銃口を彼の胸にあてたひきがねをひいた。

「お父さんの仇！」

轟然とぶちこむ。

「うっ！」鳴海の胸が裂けた。血がふきでる。大きくのけぞる。

王も黒須も紺野も、この突然の変化に、呆然と立ちすくんだ。

「花絵さん！」

千治が絶叫した。その声でハッと我にかえった三人の男は、黒いトランクを目がけて、どっと駈け寄った。

その時、サイレンの音を響かせて到着した警官隊が、いっせいにビルの中へ突入してきた。

「助かった！」

千治は風美を背負ったまま、階段の途中でヘタヘタとくずれ折れた。ふわっと気が遠くなる。

「しっかり！ ほら、見なさい。王も黒須も紺野も、みんな手錠をかけられている！」

千治を抱き起すのは、夢子であった。

手くせ

ミッキイ・スビレーン

9月号
発売中!

アレを見に行こうや

ガイ・クロスビー

アベック襲い

ジョン・D・マクドナルド

4時間—女を殺すまで

F・J・スミス

色きちがい

アーノルド・マアマー

うそつきの金髪

エヴァン・ハンター

だって女はその時...

リチャード・デミング

乳房と腕つぶし

ヘンリー・ケーン

あたしはそれが欲しかった

ジャック・Q・リン

妻のおつとめ

ブライス・ウォルトン

版權独占
全篇初訳

どっこいチョイ待ち

ジャック・リッチイ

手に負えない娘

タルメツヂ・パウエル

アメリカの
裏窓誌

スリル・スピード・セックスの奔流……!

定価 100円
〒8円

久保書店・刊

統肌呪文

高木竜二
中島喜美・画

★淫風に憑かれた柔肌に呪いの予告を記すは誰ぞ？

★見えぬ妖手に操られて首吊り屋敷は鳴動する！

一 乳肌呪文

屋敷町の夜は、暗く、不気味に更けていた……。

木の香も新しい門札に、——酒井肥前守……

……と、筆太の字があった。

異変が起ったのは、この屋敷である。

腰元部屋だ——

裾紅ほかしの枕行灯があり、その灯の下に梨子地折鶴銀散らしの女枕があった。——そして、この枕は、豊かな黒髪の、形のよい頭をささえている。

眠っていた。

若くて、健康で、はちきれそうな肢体と、

下ぶくれで

男好きのず

る美貌の持

主である。——

ニツと笑った。

それは夢のせい

であり、夢の中の

この女は男の荒々し

い愛撫に身をゆだねて

いる。

夢の中の男は、濡羽色の

黒髪を前髪にした大振袖の

美小姓であり、そのくせ、

女には手の早い男でもあつ



怪異復讐譚特集

た。女も、負けず劣らず無節操にできているのであろう。

「猫っ被りの新之丞……お屋敷の女中たちを総なめにする気かえ？」

「——ふふ、そういう小萩様も、大殿の御寵愛を受ける身でありながら、いささか御乱行が過ぎまする」

「憎い口じゃ」

「う……痛い」

「ふふ……ふ」

夢——。女がニツと笑ったのは、

このときであった。

寝所の襖が音もなく開いたのもこの時である。

現れたのは、ひたいの抜け上った六十年配の大男で、てかてかとあぶらぎっているのは酒気のせいばかりではないのだろう。

——これが旗本七千石、御書院御番頭をつとめて、江戸城菊の間に詰める酒井肥前守であった。

当屋敷のあるじでもある。

「ふむ」

寝込んでいる女——寵愛腰元小萩……の顔を見て、不快そうに唇

を歪めた。

今夜は夜伽の夜であった。

いつもなら、美しく床化粧して、神妙に大殿のお成りを待っているはずであり、こんな失態は、かつてないことである。

「不埒な……」

つぶやいて枕元に荒々しく坐った。それでも小萩は眼をさまさず、また、かすかに笑ったようである。

（——憎いこの手……ふふふ……）

夢の中の伏木新之丞が、巧みな愛撫の手を柔かくさしのべたのだ。

肥前守の眼が光った。

それは、七千石の家格も、御書院番頭の肩書も振りすてた老境の男の情念に燃える眼であった。

「こやつ」

腕が、ぐッと小萩の胸にのびた。——寝間着の……それは、肥前守の好みで、屋敷女中には珍らしい緋の長繻絆であったが……その寝間着の胸が、豊かに盛り上っている。

「起きぬかつ」

衾もとを、手荒く左右に掻きひろげた。



「うっ」

とたんに、肥前守の眼が吊りあがったのはそこに、期待したものと、全く予期しなかったものを見たからである。

期待したものは、もう見馴れてはいるが、白い双珠のような、みごとに成熟した小萩の乳房であり、予期しなかったものは、その乳房の谷間にある毒々しい墨文字であった。

酒井屋敷は呪われてあれ
そは首吊屋敷なればなり

「なにやつ？」

胸文字を読んで、肥前守は見えざる敵に備える形となった。

静まりかえっている。
人の気配はなかった。

しかし、小萩の続肌につづられた墨文字は
たんなる悪戯ではないのであろう。——肥前

守は、ドス黒い執念を感じたのだ。

（——首吊屋敷……ばかなっ——）

「起きんかっ」

小萩の右頬に激しい平手打ちをくらわした……が、この女は顔をしかめることもなく眠り続けている。

「はて？」

背筋を冷たいものが走った。

（噂に聞く眠り薬か……）

このころみに、左の頬にも平手打ちをくれてみた。しかし、結果は同じことであった。

「典医の宗悦を……」

と、立ち上って寢所を出る。奥廊下を急ぎながら、大声で叫んだ。

「新之丞！」

奥錠口に詰めているのは、小姓侍の新之丞であり、夜中の大声に驚いて、とまどったように、これも叫ぶような声を返して来た。

小萩の寢所を離れたのは、ほんの寸刻である。

が……

その寸刻は、異変の寸刻であった。

「宗悦を呼べ。——小萩の寢所じゃ」

新之丞に下知を与えて、さて、問題の寢所に戻ってみると、梨子地折鶴銀散らしの女枕

は、すでにそのあるじを失なっていた。

夜具の中は藻抜けのからである。

小萩の姿が、忽然と消えたのだ。

二 首吊寵女

（——消えた……）

肥前守は、おのれの眼を疑がって、あわただしく四方に視線を配した。

夜具を撥ねのけた。

枕屏風の蔭ものぞいたし、とまどったときには誰しもこんなふうになるのであろうけれど、ごていねいに、敷布団までめくっている……。

小萩の姿はどこにもなかった。

「ううむ？」

唸って、棒立ちになって、さて、顔の色が変わって来ている。

奥廊下には、肥前守自身が立っていた。

縁廊下に出たとすれば、一方は夜詰女中共の溜りであり、一方は厠で、これは行きどまりになっている。

（——厠か……それとも……）

肥前守は、たしかめるために寢所を出た。

——いや、出ようとしたときである。

偶然……と言つてよいのであろう。彼の右

足が、小萩の枕を蹴っ転がしたのであつた。

ボン！

——と軽い音がして、梨子地銀折鶴散らしのその女枕は、一尺近く飛んだ。

腹を見せた。

「むっ？」

眼が、女枕の腹に吸い寄せられて、キラリと光った。

ペタリ——と白紙が貼りついている。

尻軽女は萩の間より消えるべし
首吊女は肥前守寢所に現われん

その白紙には、毒々しい墨文字が、これ見よがしに並んでいた。

「奇っ怪！」

女枕をひろいあげて、右の手に持ったままおのれの寢所に急いだ。

「ついて参れっ」

奥詰の家臣二人をしたがえて、寢所の前に立った。

（——首吊女は肥前守寢所に現われん……）

怪異復讐譚特集

女枕の墨文字を、もう一度たしかめて、さて、目の前の襖に手がのびた。

が——その手はすぐに引っこんで、かたわらの家臣を見る。

「源三郎」

「はっ？」

「そのほうは襖を開けい。中に刺客がひそみおるやもしれず、その心づもりで手早く開けるのじゃ」

「心得ました」

と、口では言ったが、いささか腑に落ちかねる面持ちの矢代源三郎である。

「勢十郎」

「はア？」

「そのほうは抜刀して曲者に備えるのじゃ」

「心得ました」

荒木勢十郎も、口先だけは一応心得た——が、さて、この男もいっこうにはつきりしない顔である。

（——女枕を抱いて、この夜中……大殿は気が変になったのではあるまいか——）

二人の胸中をのぞけば、まずこんなところであつたろう。

「よし——」

肥前守がうなずいた。

源三郎の手が襖の引手——剣酢漿草の家紋を浮かせ、緋房を垂れた引手金具にのびると荒木勢十郎は、袴の股立ちとって一刀を構えた。

腹の中では苦笑している。

「それっ」

サツと手荒に襖を開いた。

「やっ？」

同時に、三人の口から奇妙な単音が飛び出したのは、考えてみると無理からぬことであつた。

三人は見たのである。

目の前に、だらんとぶら下った重量感のある紅いもの……それは、燃えるような長編緋の緋の色であり、小萩の、あの豊満な女体を包んでいたのだ。

首吊屋敷！

酒井肥前守は、そのあぶらぎった五体に、そくそくと迫る鬼気を感じて、しばらくは動けなかった。

（——何者であろう？）

乳肌文字。

女枕文字。

そのいずれもが、どす黒い現実となつて、つぎつぎと目の前に現れている。

「源三郎！」

「はっ」

「小萩の姿を見かけたか？」

「はア……？」

（——いよいよ妙だ。見かけるもなにも、現にいま、寝所の鴨居からぶら下っている……）

「ええい」

と肥前守はいらだった。

「そのほうが奥詰の座についてから、小萩の姿を見かけたか——と聞いておるのじゃ」

「いえ、いっこうに」

「勢十郎、そちはどうじゃ？」

「手前も誰一人目にとめてはおりませぬ」

「むむ……」

肥前守の眼に恐怖の蔭がチラと走った。

（——奇っ怪な……）

女どもの部屋から、肥前守の寝所に至る道は一つしかなく、その御錠口には奥詰の夜番士が控えている。この二人の目にふれずして通り抜けることは不可能であつた。

「解せぬ」

つぶやいて肥前守の眼は、吸い寄せられるように首吊小萩の胸を見る。

むき出しの白い胸……

かつて、幾夜となく、老境の情念を掻き立

てた柔肌……ふくよかな隆起……激しく息づいたそのふくらみも、いまはもう凝固したように動かなかった。

しだいに冷えているのであろう。——あの妖しい墨文字を、ドス黒く抱いたまま……。

酒井屋敷は呪われてあれ

そは首吊屋敷なればなり

源三郎と勢十郎の視線も、この胸文字に注がれて動かなかった。

三 破戒小姓

「——もそつと近う……」

と言ったのは、酒井肥前守の嫡男左京光勝の御内室である。

名をお類という。

二十七才の女盛りで、その麗色に魂を奪われた左京が、肥前守を口説き落して強引に迎えた嫁であり、しかし素姓はよくなかった。

踊りの師匠寿美千代の娘である。

しかも、両国の水茶屋「花柳」につとめて赤前垂れの看板娘であった。

男出入りも多かったろう。

こちらは、將軍家出城の際に、前後の警衛に当り、上意をうけて遠近の使者となるし、儀式には、將軍給仕の大役を勤める御書院番

の番頭——従五位下七千石の大旗本の嫡男である。

あまりにも、その身分に開きがありすぎた仮親を立てて嫁に迎えたのが五年前、お類が二十二才、左京光勝二十五才の春である。

一時は溺愛した。

舐めるように執拗な夜の左京であり、それも、しかし、一年たらずの間であった。

暴君の愛である。

隅から隅まで、お類の肉体を知りつくしてしまふと、もう見向きもしなくなり、そして四年の歳月が過ぎている。

お類は、うれきったその女体をもてあました。

「——フン、馬鹿にしてるじゃないか。自分の亭主に好き勝手な真似をされて黙って引っこんでるお類さんじゃないよ……」

鉄火な育ちである。

「——向うが向うなら、こっちもこっちさ」七千石の屋敷には、小姓侍の数も多い。——お類小町は、その中の一人に眼をつけた。

伏木新之丞である。

「もそつと近う……」

と言って、女のような白魚の指を、ぐいっ

敷随一の美小姓伏木新之丞であった。今夜がはじめてではないのだろう。「何をぐずぐずしてるのさ」「はい」「はい——じゃないよ。いくら猫を被ったって、お前がどんな凄腕だか、天地見通しのあたしなんだから……」

「いえ、そのような……」

「お黙りっ。小萩、小雪、小末……ふっ、お前がたらしこんで、生きるの死ぬのと、散々痴話狂った女中たちの名前を、一人一人並べて見せようか」

「——なるほど」

新之丞とお類の眼がピタリと合った。

「ふふふ」

「ほほほ」

そして、同時に笑いだしたのである。

「水茶屋の看板娘だったと聞いていた。さすがに眼のつけどころが違ってるねえ。猫っ被りはもうやめだ」

「お互いにねっ」

大変な奴らである。

「今夜で……」

とお類が指を折る。

「……そう、五度目さね。今までのように、

袴を着た不義密通なんざ
とんと面白くない」

「地金をだして、こうし
たらどうだ」

いきなり新之丞が、お
類の首を抱いた。

「うっ」

唇がびたりと重なって
この爛熟した女体の持主
と、前髪の美小姓ながら
先天的に、女たらしにで
きている奴が、不義の美
酒をくみはじめた。

きたない奴らである。

いや——この二人だけ
を責めるのは酷であろう
屋敷そのものは新築でも
中に住む人間の一人一人
が、どことなく狂ってい
たし、それは当主である
肥前守の、異常な漁色の
せいでもあった。

底に暗いものがある。

濁ったなにかがある。

「あ？」



ギクリとしたように声を発して、い
きなり二人の唇が離れた。

物音……

かすかな物音が、同時に二人の耳
をつらぬいたのである。

（——床の間？）

たしかにその物音は、床の間のあた
りから聞えたのだ。

見たっ！

何もない……いや、あるっ！ 白い
物……一枚の白紙が、床の間の上に

忽然と現われたのである。

二人の眼が、その紙片を凝視し
た。

「新之丞！」

「はい」

起上って、床の間に近づいて、

伏木新之丞は顔色を変えた。――

唸った。

破戒小姓は柳の間より消えるべし
首吊小姓は肥前守寢所に現われん

あの毒々しい墨文字が、まだ紙
面に黒々と濡れていたのだ。

柳の間——は、内室お類の寝所であった。
（——ここで、わたしが消える？……そんな馬鹿な……しかし……）

小萩の一件——あの怪異を耳にしている。
「うっ」

背筋を、冷たいものがゾクリと走った。

四、袴と内室

酒井左京は夢を見ていた。

夢の中に現われた女はお類であり、それも五年前の、女体の神秘を、みずみずしく押し包んだ二十二才のお類であった。

笑った。

夢の中のお類の笑顔は、新鮮そのものであったし、男の魂を吸い込むような、妖しい瞳の色である。

「うむ……」

唸って左京は夢からさめた。

侍女小百合の寝所であった。

「ふん」

疲れて、熟睡している小百合の顔は、ところどころ寝化粧が剥けていたし、口を開けて痴女のように締りがなかった。

「お類だ……」

呟やいて起きあがった。夢——が左京を刺

激し、寝覚めの男心をそそったのである。

（——久しくお類の肌に触れておらぬ……）
ニヤリと笑った。

下劣な顔である。

寝乱れた寝衣もそのままに、ふらりと奥廊下に出た。

柳の間……引手金具に手をかける。

「やっ？」

襖を開いて、左京がはじめに見たものは枕屏風の下で悶絶しているお類の姿であった。

引っくり返っている。

裾を乱し、白い脛をあらわに見せて、くの字にまげた左の手には、明らかに小姓袴と知れる物を握っていた。

（——新之丞めの袴だ！）

ピンと来た。

踏込んで見廻す眼が、床の間の紙片をとらえた。

「またしても……！」

ギョッとなって、荒々しく奥廊下に出る。

「加七郎……新八！」

奥詰夜番士の二人を呼びだした。この夜の不寝番士は、内藤加七郎、村山新八の兩人であり、酒井屋敷の龍虎でもあった。

「はっ」

と応じて、滑るように走って来た。

「出たぞ！」

「え？」

「小萩が、父上の寝所で首を吊った。今度は伏木新之丞だ」

加七郎と新八は顔を見合せた。

「新之丞が……？」

「うむ。袴がある。——類の手に握られていて、床の間には、れいの墨文字じゃ」

「ほう」

「これを何と見る？」

「はっ……」

（——えらい事になったもんだ……）

「不義じゃっ！ 新之丞め、不義の最中に消えおった。——しかし、新之丞が、類の寝所に参るには、奥錠口を通らねばならぬはず……」

……通れば、そのほうの眼にとまる」

「不可解！」

と、加七郎が即座に言った。

「新之丞の姿は見ておりませぬ」

と、新八も負けずに言った。

しかし、二人の腋の下には、冷汗がジクリと出たし、思わず苦い顔になったのは、こやつらにも一片の良心があったからであろう。二人は知っている。

伏木新之丞は、二人の眼の前をニヤニヤ笑いながら通ったのであり、その行先も、お類の居所だとわかっていた。

乱脈な酒井屋敷だ。

内室お類の方の女体を抱いたのは、新之丞一人ではなく、加七郎も新八も、そしてまた、源三郎——勢十郎の兩人も、同じ一つ穴のむじなであった。

お互いに默契ができています。

(——新之丞め、ヘマをやりおって!)

「類っ!」

いきなり左京がお類の肩先を蹴った。

「む——う……」

「奸婦!」

と、更にもう一蹴りする。

「あっ」

正気に返って、お類はさすがにあわてた。

「新之丞はどこへ行った?」

「——し、しりませぬ」

「言うな。これは何じゃ」

と、小姓袴を蹴つとばしてみせる。

「知りませぬ」

知らぬ——で通すより法がないのであろう

(こ内室、頼むぞ!)

左京の背後に立つ加七郎と新八も気が気で

はなかった。

お類が崩れてしまえば、一切の非行が明るみに出るだろう。

手討……

切腹……

(嫌なこった。まだまだ死にたくはないぞ)

二人の眼が、お類の顔を凝視する。

「事情を申せ」

左京がどなった。

「はい。夜中、のどのかわきを覚えて、臥処を出ると、枕元に小姓袴が……はて、いぶかしや……薄気味が悪く、侍女を呼ぶつもりで立ち上ったところ、いきなり棒のようなもので頭を……」

半実半嘘の弁である。

新之丞と二人、床の間の紙片に瞳を吸われていると、背後にかすかな物音がかり、振りかえろうとしたとたん、ガンとやられた。

ぐたりと——悶絶した。

これは事実であり、しかし、新之丞のことは、おくびにも出さなかった。——お類もいのちは惜しかったのである。

「うむ。ぬけぬけと……後刻、きつと糺明してくれる」

左京は惨忍な眼で言った。

「加七郎! 父上の居所じゃ」

「はっ」

ドタドタと走りだした。——加七郎は一刀流の達者であり、走る足も滑るようだが、左京は遠慮なく屋簷を立てた。

「——むむ……」

肥前守が眠りを破られ、不快な顔で半身を起したのも、この屋簷のためである。

「何事じゃ?」

眼が、足音の方角を睨み、そして、そこに異様なものを見た。

鴨居からぶら下っている。

「げっ?」

それは、美小姓伏木新之丞の首吊り死体であった。

眼を剥いている。

舌を出している。

胸——お類の、小萩の、小雪の、

小末の……乳房を抱いたその胸——

女のように白いその胸肌、ドス黒い墨文字がある。

酒井屋敷は呪われてあれ

そは首吊屋敷なればなり

怪異復讐譚特集



五 腐れ屋敷

「打てッ！」

肥前守の右
頬が、かすか
に痙攣した。
「父上！」

叫んで左京が飛
び込んで来たのは
このときである。

大盃をかたむけながら怒声を発したのは、
酒井肥前守である。

ビシリ

お類の背の上で青竹が鳴った。

ビシリ

青竹を握っているのは嫡男の左京である。

「申せッ！ 当家になんの恨みがある？」

眼が血走っていた。

額に青筋が見える。

家臣の者を遠ざけて、肥前守……左京父子
が、お類の方を責めているのだ。

「不義者ッ」

青竹が、今度は腰の肉を打った。

「ひッ」

こんなやつらの青竹ぐらいでネをあげてた
まるものか……

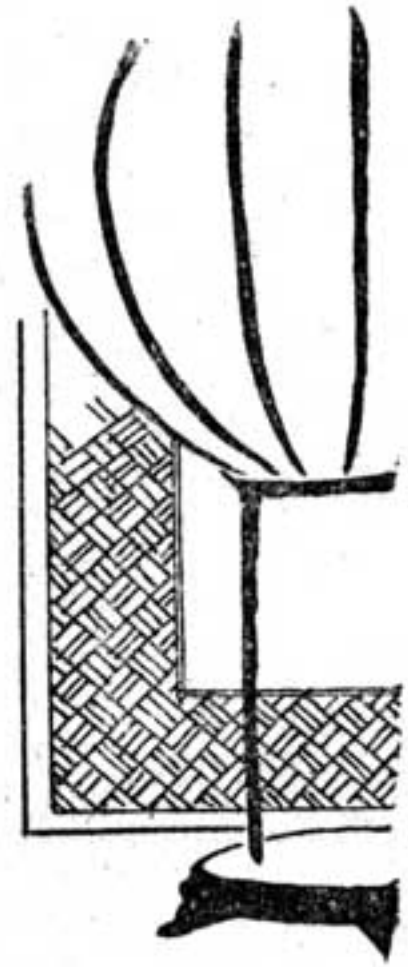
胸のうちに齒がみしながら、しかし、所詮
は女であった。その意志とはうらはらに、思
わず紅い悲鳴が口を洩れる。

「鬼ッ！」

口惜しさが罵声となった。

「こやつ」

と、また青竹が唸る。はじめは、首吊り詮
議の折檻であった。小萩の一件は別としても
新之丞の消失は明らかにお類の寝所であり、



不義の快樂に酔っていたのだ——と、見抜いている。

（——その一人が消えて、醜い首吊り死体となった。一緒にいた女が知らぬという法はない。頭を打たれて悶絶……フン、芝居だ。下手なごまかしだ……）

素姓が素姓である。

不義の憎しみが重なって、首吊騒動の元兇だと思ひこまれてしまった。

「申せ。何の恨みだ？ 仲間？ その方一人の細工ではなからう……」

左京は執拗であった。

その愛撫も、今から思えば異常だったし、それに輪をかけて、この男の憎悪はさらに汚なく妖異ですらであった。

「手ぬるいぞ、左京！」

酒をくらいながら眺めていた肥前守が、およそ七千石の当主とは思えぬダミ声で、けしけるように声をかけた。

この親にしてこの子である。

槍一筋に命をかけて、戦場を駆けめぐった先祖の血は、武士道——の三字を失なつて、いまドロドロに汚れている。

「ううむ」

唸つて、左京がふたたび青竹を振りあげた。

——と、この時である。

「殿っ」

襖の外で声があった。

「何じゃ？」

「内藤加七郎——村山新八……両名の者逐電つかまつりました」

「なに、逐電？」

「はっ」

「ううむ」

不可解であった。泰平の世であり、主家退散は浪人を意味する。

「ふっ」

お類が鼻先で笑った。

「それだけか？」

そんなお類には気づかず、青竹を構えたままの左京がたずねた。

「はっ……それが……」

と、答えた襖外の家臣の声に、躊躇の響が読みとれる。

「それがどうしたのじゃ？」

「はっ。大殿の手文庫の金子を……」

「なんと？」

「両名共謀にて持ち逃げ致したものと思われます」

「むっ、不埒なっ」

肥前守は、手にしていた大盃を、叩きつけた。

「ほほほほ……」

お類が、大声に笑いだしたのはこの時である。

「——ほほほほ」

「黙れっ！」

左京が肩先を蹴った。蹴られて転がりながらも、なお笑い続けている。

「ほほほほ……」

（——狂ったか？）

いや、狂ったのではなかった。すでに死は覚悟していたし、これは、やけっぱちの嘲笑であつたろう。

肥前守——左京父子が、ひどく間抜けに見える。

（——へん、馬鹿っちゃないね。あの二人はさ、あたしが不義の相手を、べらべらみんなしゃべっちゃうと思つて、先手を打ったんじゃない）

やないか……ふふ、主人が主人なら、家来も家来……みんな腐ってる。……」

不義の相手は、ほかにまだ二人いる。

矢代源三郎——荒木勢十郎……がこの二人であり、こやつらも逐電の準備をしているのであろう。

腐れ屋敷だ！

屋敷そのものは、木の香も新しい新築であり、しかし、中の住人は、一人残らず腐っていた。

やがては崩潰の時が来るはずである。

六 未通女は消える

七千石の旗本屋敷は広大であった。

しかし、家臣や腰元の数、眼に見えて減って来ている。

小萩が首吊死体となった。

新之丞も鴨居からぶら下ったし、腕の立つ

四人の近習が、前後して逐電している。

屋敷は暗かった。

不気味であった。

「妙なお屋敷もあるもんだな。なんとなく首が吊りたくなる……へっ、首吊屋敷たアよく言っただぜ」

噂——が、すでに流れはじめていた。

こんな時に、また一つの怪異が突発したのである。

それは、腰元部屋であった……

「もう、こんな、おそろしい、いやらしいお屋敷には、一日だっていられませぬ」

「ほんに……あたくしも……」

「でも、お暇を願ひ出れば、お手討になります」

「——どうしたら……」

四人の末女中たちである。

甲州路にある肥前守の知行地から御奉公に上った百姓娘たちで、お国訛りは抜けたものの、出世の望みはまったくない台所女中どもだったし、望郷の念に駆られていた。

お浜——十九才。

お清——二十才。

お栄——十八才。

お継——十九才。

若さと、力仕事に馴れた頑健さが唯一のとりえで、いくらお白粉をぬたくっても、どうにもならぬ顔、顔……である。

乱脈の屋敷で、この女たちだけが純潔であり得たのも、その不器量のお蔭であったろう……。

異変は、この女たちの上に起った。

「——よいか。類は不義者じゃ。時を移さず手討に致すべき女なれど、責め問う筋がある……よって、身柄をそちたちにあずけるのじや。見張って逃がすなよ」

左京が、後手に縛りあげたお類を、散々折檻した揚句に、四人の台所女中どもに看視を命じた。

「手首の縄は解くでないぞ」

台所の下女部屋であり、半死半生のお類を抛り込んで、さて——フフ……と残忍に笑ってみせた。

一つには虚勢もある。

怪異が続いて、心の安まるひまがなかったし、四人の家臣に逃亡されては、七千石の威厳も、とかく崩れがちだった。

朝から酒をのんでいる。

ふらつく足を踏みしめて、肥前守の居間に入った。

「父上、存外にしぶとい女子で……」

と言ったのは、お類の事であったろう。

「うむ。素姓が素姓じゃ……」

「明朝、もう一責め致しましょう」

「骨が砕けるまでやるがよい。——しかし、首吊り異変の張本は、あの女でないような気もするのう」

「は。……と申されますと？」

「お前は感じぬか？」

「……」

「あの胸文字には、底深い呪詛……どす黒い執念がこもっている。類は、お前が望んで嫁にした女であり、水茶屋勤めの素町人から、七千石の屋敷に入って、その出世をよろこびこそすれ、当屋敷を呪詛する何物もないではないか……のう」

「しかし、伏木新之丞は、類の寝所に忍んでそして消えたのです。類めが張本人でなくとも、何かしら存じておりましよう」

「——それもある」

肥前守は片頬を歪めた。

將軍家お声掛りの家柄であり、図に乗って数知れぬ悪業を重ねて来ている。

（——そのむくいが来たのか……）

小萩は、まるで煙のように消えたし、不審番士の目をかすめて忽然と再現している。

現れたときには首吊死体になっていた。

（不可解！）

人間業ではなかった。

「父上」

「うむ」

夜が更けて来ている。肥前守は、おのれの

寝所に入るのが一つの恐怖になっていた。

襖を開ける。

——と、また首吊人が一人……

それを思うと、寝所は安息の場所ではなく、地獄の坐であった。

では、毎夜、侍女の寝所に通えばよいのであろう。

しかし、また別の恐怖がそこにあった。

眠っている。

胸を拡げる。

——と、あの毒々しい胸文字……呪詛をこめたドス黒い墨文字が……

それを思うと、女どもの寝所に入るのも、

一つの苦痛であった。

結局、父子枕を並べて寝ることにしたのである。

二人は立ち上った。

寝所の襖を開いた。

「げっ！」

「うっ！」

叫んだのも同時であり、よろりとよろめいたのも同時であった。

二人は見た——肥前守の寝所の鴨居から、だらん……とぶら下ったお類の首吊り死体を……。

「左京！」

「父上！」

しばらくは、化石したように動けなかった。

「む……胸を……」

憑かれたように、異様な声で肥前守が囁やいた。

胸を拡げて……見よ——と言うのだ。

左京の足が、一步……二歩……まるで陷阱をおそれるように前へ出た。

「うっ？」

「なんと……なんとある？」

淫婦は淫夫の寝所にて首吊りたり未通女はすべて当屋敷より消ゆる

「未通女は……」

叫んで左京が走り出した。

「浜っ……継っ……」

台所の下女部屋は空であった。

屋敷中探し廻っても、その姿は発

見できなかった。

四人の女中は消えたのである。

七 毒血左京

酒井屋敷は、いまはもう逢魔屋

敷とってよかった。

だれの顔も不安気である。

肥前守は病氣と称して、おのれの居間に引っこもったきりであるし、嫡男の左京は、だれかれの見境いなしに怒鳴りつけた。

黒い雲が垂れこめている。

それが、微動もせず、どろりとよどんで、住む者の肌を、肉を、心を……音もなく、忍びやかに、じわじわと地獄の色に染めあげてゆく。——そんな感じであった。

「おれが手引きしてやるぜ。このまま住み続けてみる、いずれはお前さんも、だらんと……」

中間の弥八が首っ吊りの形をして見せた。

「こわいっ」

顔をおおったのは、腰元の小雪である。

「逃げるんだ。人間、いのちあつてのものだねよ。へっ、首吊屋敷たアよくいったぜ」

女たちは怖気づいている。

そこが弥八のつけ目であり、腰元の中から一番の上玉を選んで誘いの手をのばした。

（——屋敷女なんぞ、あめえもんさ……）

引っかけて、散々楽しんで、いずれは街道筋の宿場女郎にでも叩き売る腹である。

「この屋敷ア呪われているんだ。何だかしら

ねえが、考えて見ると、男の味を知った女は一人残らず首っ吊りにするらしいぜ」

「そんな……」

「へっ。小雪さんも危ねえな。お小姓の伏木新之丞と乳繰って、生きるの死ぬのと言った事もあるんだろ」

「——弥八どの！」

「ん？」

「一緒に逃げて下さいまし。小雪は、まだ死にとうはありませぬ」

「合点……と来たね。弥八が、ドンと胸を叩きやしたぜ」

（——へっへっへ……とうとう引っかかりやがった。かっちけねえ）

腹の中でニタリと笑った。

こうして、仲間の弥八と、侍女の小雪が姿を消すと、前後して、若党の雑賀彦七郎に口説き落された同輩の小末も、この逢魔屋敷から逐電してしまった。

ぼつり……

ぼつり……

まるで、櫛の歯が欠けるように、酒井屋敷の人影が減っていくのだ。

——左京は、すでに狂人に近かった。

無能なくせに、女色に明け暮れた十年の毒

血が、いま、理解に苦しむ怪異に遭遇して、ふっふつとたぎりはじめたのであろう。

昼も夜もなかった。

手あたり次第に、侍女のだれかれを引きずり込んで、狂気じみた時間を過している。酒は浴びるように呑んだ。

——本人は自覚しないまでも、目前に迫りつつある死……の手を、その皮膚が感取していたかもしれず、そのゆえの乱行と考えてもよいのであろう。

事実、死の黒い手は、もうそこまでのびて来ていた。

「むむっ」

肌寒を感じて目が覚めた。

夜っびて、侍女の一人を抱き寄せたまま呑み続けて、二人とも酔いつぶれてしまった。

傍に、侍女の葉月がつぶれている。

胸もあらわ、裾もあらわな恥態であり、しかし、今の左京には、もう何の興味もなかった。

頭がガンガン鳴っている。

「やっ？」

おのれの胸を見てギョクンとなった。

「とうとう来た！」

毒血を継ぐ者とかく消ゆるべし



胸肌に、ドス黒い墨文字であった。

「曲者ッ！」

絶叫して飛び上った。

——この時、背後に奇妙な……かすかな物音があり、——フフフ……とふくみ笑う声が聞こえたようである。

「なに奴？」

振り返った。

いや——振りかえろうとしたその瞬間をとらえて、脳天に激しい一撃が来たのだ。

「げっ」

眼の中で火花が散るとその身体は重心を失って前のめりにどたりと倒れた。

「ふふふふ……屑侍……」

腐れ旗本め……お前も、いやらしい首吊侍となつて、肥前守の前に現われるのだ……」

声——！

しかし左京は、すでに失神状態にあり、この毒々しい声……を聞いてはいなかった。

廊下に足音が聞こえた。

左京の絶叫を耳にして、おっとり刀で走って来た家臣たちであり、いずれも抜刀して踏み込んだが、逢魔屋敷は、またもその怪異を現していた。

左京の姿がない！

踏み込んだ家臣は七人であり、あわせて十四の眼に映ったものは、しどけなく眠り込んでいる侍女の姿のみであった。

「若殿は？」

「消えた！」

「いや、曲者を追って……」

「馬鹿なっ。襖も、障子も、みんな閉っていたぞ。緊急の際に、いちいち戸障子を閉めながら追いかける奴があるものか」

「ふーむ」

一同の眼に、疑惑と恐怖の蔭が走った。

八 神宝流警鬼

「首っ吊り……首……首吊屋敷……」

端坐して肥前守が呟やいている。昨日も、一昨日も、こうして、身動き一つせず、一つ

事を呟やいているのだ。

「首っ吊り……首吊屋敷……」

眼が真っ赤に充血して、ギラギラ光っていた。

「殿っ！」

襖の外で声があった。

「殿っ！」

肥前守はこたえなかった。まるで念仏のよ
うに呟やき続けている。

「首つり……首っ吊り……くびつり屋敷……」

「殿っ。若殿のお姿が見えなくなりました」

「首だ……首っ吊りだ……ううむ……」

「若殿がッ！」

「すてておけッ」

いきなり大喝した。

「はっ……」

襖外の気配が去ると、はじめて肥前守の膝
が崩れた。

「——わかったぞ」

ニタリと笑った。もし見る者があったとす
れば、思わず逃げ腰になったであろう。

それは、凄笑……とでも言うべき、地獄の
笑顔であった。

「あいつだ……」

長い間、心の片隅に引っかかっている、さ

で、どうしても思い思えなかった一人の男の
顔を思い出したのである。

（——棟梁勝五郎……きやつ奴の顔は、騎西
勝左衛門の顔だ……ふっ、似ているぞ……似
ているぞ。——成程、首っ吊りだわい……）

「ふっふふ……勝五郎！ 引っ捕えて、ハ
ッ裂きにくれる！」

ひとりで激して、居間の壁に怒鳴りつけた
と——

ガタリ……天井の一角で妙な音がした。

「うっ？」

見上げる肥前守の眼が、天井の片隅に、パ
クリと開いた黒い穴を認めた。

その穴から顔がのぞいた。

皺だらけの五十男の顔であり、しかし、そ
の眼は、若々しい気力にみちた三十男の眼で
あった。

「勝五郎！」

「そうだ。勝五郎……騎西勝五郎だ。これを
見ろッ」

顔が引っ込んで、同時に、天井の穴から白
い物が落ちて来た。その白い物は、ぶらん……と宙で停止した。

首吊侍だ！

左京侍だ！

「ふっふふふ……父母の恨み……」

天井の声は、毒々しく笑った。

「おのれッ」

と肥前守が立ち上る。

「おそいッ——見ろッ」

声と同時に、ガガガ……ガガガ……天井板
がずり降りて来はじめた。

吊り天井である。

「なんのっ！」

と襖を開けば、奥廊下の影がない。

廊下は、すでに陥没していた。
のぞけば深い穴であり、底に逆木がうえこ
んであるのだろう。

「飛ぶか、老体……飛べば逆木の餌食……ふ

ふ、串刺し肥前守ができあがるぞ」

天井の声が、毒々しく言った。

「曲者ぞッ！ 出合えッ！」

肥前守は必死に叫んだ。

「ははは、叫べッ。喚けっ！ いくら叫んで
も、救いの手は間にあわぬぞ。要所要所の廊

下には、天井裏から格子戸を落してある。勝

五郎が命をかけた神宝流の逢魔屋敷だ！」

ガガガ……

ガガガ……

天井板は、一尺……二尺……三尺……次第

に速度をはやめて降下している。

坐して待てば、やがて押し潰されるのである。

「勝五郎……許してくれい。わしが、わしが悪かったのじゃ……」

肥前守の声は悲鳴に変わっていた。

「おそいッ！」

天井の声は冷たかった。

「二十年前、罌を設けて、わが父騎西勝左衛門を陥し入れ、役目の落度を咎めて、おぬしは何をやらかした。せめて武士らしく切腹を……と願う父に、おぬしは無理矢理首を吊ら

せた！ 鬼め！ 人非人め！」

四尺……五尺……六尺……

肥前守は、もう立っていることができなかった。

天井板が頭を圧して来ている！

坐った。

両手をついて、はいつくばった。

「許セッ。こ……この通りじゃ」

「父も、そうして許しを乞うたぞ。——が、

おぬしは許さなかった」

「母……美貌のわが母はしさに、おぬしは父を死に追いやった。首っ吊りという最大の恥

辱のもとに……。まだある。その母も、やがて発狂し、首を吊ってこの世を去った。みんな、鬼肥前……きさまのためだ！ 甘言……

権力……フト迷って、父を裏切り、おぬしに操を奪われた母も悪いが、元兇は酒井肥前守

忠光……きさまだッ！」

ガガガ……

ガガガ……

肥前守は腹ばいになった。

天井板が、もう畳の上に迫って来たのである。

次号予告

江戸暗黒秘録

讐怨私刑抄

鈴木 和夫

- ★遊女の心中立てに制裁は禿にまで及んだ。姦通
- ★の密事あらわれた男女に封建の掟はきびしい！
- ★生首を抱く狂乱の蛮女等、暗き時代相を描く！

「ふふふ……十才のおれが、のぞき見た父の悲惨な姿……おれも鬼になったのだ。以来二十年、神宝流の大工術を修めて、將軍家御用の棟梁に出世した。フン、おぬしの屋敷が焼けたのは、あれアおれのつけ火よ。おぬしは屋敷を新築するだろう。おれア新築の棟梁を買って出た。神宝流の秘術をつくして、屋敷内至る所に、からくり仕掛けをこしらえた。廻る壁、開く壁、陥し穴、地下道……隠し部屋……こいつを利用すりア変幻自在よ。ふっふふふ……」

同時に最後の間隙をうずめた天井板は、人間一人を押し潰してギギギ……と不気味にきしんだ。

魔悪もそむき足に

★彼女の醜い義足に挑むせむし男！★
★執拗な眼は一瞬、異様に輝いた！★

空 腹

四、五日雨のない、からからした日が続いた。そのため三畳の狭い部屋は、火の気を持つてゆくとすぐにでも燃え上りそうに乾燥していた。

留美江は、暑さのため身の置きどころがないほどいらいらした気持と消沈した気持だった。敷きっぱなしの薄いせんべいぶとんで、だるい体をいやしていたが、何の効果もなかった。むしろ、汗の臭いのまじった悪臭が鼻をつくだけである。

留美江は思いきったように、せんべいぶとんの上へ起き上った。

這うようにして片足をひきずり、枕元に置いてある義足へ手をのぼした。膝の関節に似せて細工してある、アルミ系の白っぽい金属が、留美江の手が触れるたびにギー、ギーと奇妙な音を出し、狭い三畳にこもった暑い空気をきしませるのだった。

留美江は読みかけの月遅れ雑誌をミカン箱の上へ投げやり、ふとんをくるくるまるめて隅っこに重ねて置いた。

義足をつけた体が動くたびに左右にはげしくゆれ、大きな黒い影が部屋の中でパートナーのない奇妙なダンスをする。

——影だってやっぱり醜い義足をつけているんだわ。お前さんもせつないだろうね。そ



れとも、そのことがちつとも気にならないかえ？　そうだったね。お前さんは喋ることも聞くこともできないんだっけ……でも、それはいいことだわ――

と、心の中で一人呟やいた。

重い体を動かしながらふと空腹を感じた。

朝飯は食べていない。今が三時、もちろんそうなれば昼もまだである。

しかし、留美江の部屋のどの隅をみても米らしきものも醬油らしきものも見当らなかった。それでも留美江は、空になった石油カンの底をまんべんなく手でさぐり、少しばかりの米粒を幾月も前の新聞紙の上へ置いた。

ほんのちよっぴりで、おもゆさえも作れそうにない。留美江は裏口へ立った。

流れの悪い下水が淀み、その浅い黒い溝の底の方からメタンガスがたえずブクブクと軽い不潔な音をさせて地上へ発散される。

風雨にさらされた粗末な流し場は、からからに乾ききって、はげかかったポンプだけが留美江を誘うのである。

――私の今朝の食事はこれだわ。何しろ、私の周囲のもので口の中へ入れられるものなんてこの井戸水位なんですものね――
と、一人言を云いながらポンプの柄を力い

っぱい抑えた。

ポンプは重かった。

力を入れるたびにポンプの口から少しずつ水が流れてきたが、赤茶けた鉄錆が水に溶けて透明にはほど遠い色をしていた。

――チエツ、これじゃ飲めやしないわ。――
疲れてきた腕をなおも動かしたが、水はやっぱり赤かった。

留美江は観念したようにガチャツと、大きな音をさせてポンプの柄を投げやった。

再び三畳の部屋へもどり、さっき、たたんで隅っこに置いていたふとんを枕にして横になった。

――こうしていればいいんだわ。腹ぺこくらいにさ――

と、自嘲的に心の中で笑った。が、腹の中はまるでひとかけらの食物もないことをうったえるようにぐずぐず緩慢な動きと音をくりかえした。

それに、内職のスナップつけと、まつりの仕事がついてきてから四日にもなるので、じっと寝てもいられない。朝から食物らしいものは口にしていないので、これらの仕事をすることは非常なマイナスになるのである。

責任上、やらないわけにもゆかず厭々な気

持で、ゆっくり鈍い動作で、スナップをまきぐった。体を横にしたままの姿勢で何ができるものじゃない。いたずらにスナップをもてあそぶだけなのだ。

留美江は、そうすることも厭になり投げやったままうとうと眠りかけた。

胃のところで止っていた空腹が胸のところまでやってきそうで、また、裏口から井戸端のポンプのところへいった。

さっきより重いポンプの柄を力なく動かしているうちに、相変らず赤茶けた水が流れ出るのを少しの間眺めていたが、思いきったような顔つきでプラスチックのコップに水をいれた。

コップの色と濁った水の色とが不透明に重なって、飲むのに食欲をそそらなかったが、空腹感にしびれている五体をいやすかのよう、ぐいぐいと一息にコップの水を飲んだ。

鉄錆の臭さが鼻をついたが、のどを通れば水はやはり水であった。

コップで三杯。いつもわずか

子寂 木呂溝

な食物で萎縮したかんじの胃袋はいっぱいであった。水で満された胃は部屋までの短い歩みを邪魔するかのようになだぶとゆれた。

部屋に入ったら、がむしゃらにスナップつけだけを、やってのけた。

できあがってはいないが、まつりの方も体の調子が悪いからと云う理由で、ひとまず返そうと思って一緒に風呂敷へ包みこんだ。

かなり大きな荷物が、三疊の留美江の部屋を占領したので、身動きできないような圧迫を感じた。

——早く持つてゆこう。何しろ、この山をみているうちに、うんざりしてくるもの。まつりをやらなかったから、怒るだろうな——と、考えながら風呂敷を肩にのせて、裏通りの小路へ出た。

黒猫

家々が密集していて、ゴミ箱と、洗濯物だけがわがもの顔で路地をゆくぬるい風に、はたはたとなびいていた。

留美江は、なるべく義足の足へは力を入れずに背中を伸ばすような恰好で歩いた。

やはり関節の金属がギー、ギーと奇妙な音を出した。

その、何ともいえぬ異常な音が路地の静寂をやぶって、しみるように響くのを、誰れかが眺めていやしないかと云う恐れが頭をもたげ、ちよつと不快な気持になった。

それに抵抗するかのようには、

——私の不具が見たけりや見るがいいさ。ふん、私だって昔は二本、それも立派な足があったんだからね……でも、でも……

留美江は意識的にパツと後を振りむいた。

誰もいない。一匹の黒い猫だけがモルタル塗りのゴミ箱の上でうずくまり、留美江を見ているだけであった。

その安心感に胸を撫でる思いで一息ついたが、ゴミ箱の上の黒猫は、留美江を見て、背中を丸くして四ツ足をたて、フーと目を光らせ、歯をむいた。

留美江は、ハツとしたが、意地悪く心の中で自嘲的に笑いながら、

「クロ、クロ、クロ……私のところへおいで、さあ、いやなの、私が恐いの」

と、小さく呟やきながち舌をチュッチュツとならして黒猫を呼んだ。

黒猫はじいっと睨むだけで動かなかった。

留美江は焦燥をおぼえて、少しづつ義足をずらして猫の方へ近寄っていった。

ギー、ギーと、きしむ義足の音に警戒するかのようには、さらに攻撃的に目をらんらんと光らせた。

——ちくしょうめ、つかまえたらぶってやるから……馬鹿にしているわ——

ギーと大きく義足が傾き、そのはずみに、留美江はよろめいた。

その瞬間、ゴミ箱の上の黒猫は留美江を小馬鹿にしたように、ぶるつと毛をふるった。長い尾をたててスルリと下へおりと、動作の鈍い留美江の足元を、ぐるぐる歩きまわった。

皮膚の感触のない義足のところへきて、しきりに嗅いだりもした。たかが猫一匹なのに留美江は左足が口惜しさにぶるぶるふるえるほど興奮してきた。

肩の荷物の重さが、きりきりと背骨へくいこんでいたが、黒猫に仕返しをしてやろうと云う気持に、かき消されていた。

今度はゴミ箱の下のアスファルトの上に、うずくまった黒猫を見て、

「生意気な猫……今に見てらっしゃい。この義足だって、お前さんの厭がらせには負けやしないんだからね」

と、人に話しかけるようにいった。そして

左足に力を入れて、義足の方を少し宙に浮かせて思いきり黒猫めがけて蹴った。

自分の体の一部でありながら、動きは思う通りにはいかなかったが、それでも黒猫の目に足があたった。

ギャーといって飛びのき、留美江をうらめしそうな目で睨んでいたが、少しずつ後ずさって薄暗い路地へ消えていった。

その姿の消えた瞬間、あまりにもニヒルで不人情な自分の姿がいやになってきた。

執拗に、思い込んだらやりとげねば気のすまない片輪の心理がわれながらうとましい。そして、その後には、きまってやり場のない不安と、孤独を感じるのである。今日もそうであった。

「私は、不具になって心まで駄目にしてしまったわ。でも、これも私の意固地な性格からきてるんだから仕方がない。もし、私に愛する人がいたら……愛してもいいと云う人がいたら、私は幸福になるかも知れない。それが駄目ならせめて性欲だけをみたしてくれる男性がほしい。毎夜、毎夜、かきむしりたいほどの欲望をおさえるのに、私は大きな消耗をしているんだわ。三十一才の女体、何もかにもに飢えている哀れな体さ。黒猫さん、こめ

んなさいね。あなたをヒステリーのおもちやにして——」

と、留美江は云いながら、風呂敷包みの重さを感じながら路地を出て、足早に大通りの道を歩いていった。

会の入口の玄関はしまっていたので、裏へ廻ると会長の一番弟子の三上やまえが、廊下を歩いてやってきた。

彼女は、左手が腕のつけねからなくて、右手の指の三本が、第一関節からとれていなかった。中味のない片袖がふわふわと宙にういている五月のほりのようである。やまえは、不具者特有のひんやりした声で、事務的に、「いらっしやい。ずい分持ってくるのが遅か



ったようね。あなた全部やってきてくれたの。昨日、店の方へ出すのに、あなたの分が揃わなくて困ったのよ。とにかく、今持ってゆくから早く出してね」

「私、スナップつけだけしか、やってこなかったわ」

「え？　じゃ、まつりはしてないの？」

「そう。体具合が悪くてね。仕方ないでしょ」

「困ったわ。それはともかくとして、あなた仕事もせずに何で食べてゆくつもりなの」

「仕事がないや食べないまでだわ。今日も、井戸水三ばいが私の朝と昼の食事よ。それで結構、腹ぺこのかんじはなくてよ」

「まあ、大変な人ね。とにかく品物をおだしなさいな。私が、まつりをやるわ。それからスナップつけの方、あなたも困るでしょうから先渡しね。十九ダースで、二二三円になるわ。今日は、どうする、仕事持って帰る？」

「いいわ、二二三円がなくなるまで、仕事はしないわ。なるべく節約してやってくわよ。では会長さんよろしくね」

「ええ、しっかりがんばってね。あまり無軌道な事はしないでね。お互いに食べなきゃならないんですものね」

「もつともよ。しかし、それがまた、大変な

ものだからね……じゃさよなら」

留美江は肩の荷物を、やまえに渡して、裏口から家の方へ向って足をゆっくり運んだ。

さきの重さが疲れとなって足へ響き、そのたびに胸のところが息苦しい気持だった。

腰まであるルパシカ風なブラウスのポケットで留美江の全財産の二二三円が、お金が持つ重さを感じさせて、足の動いたびにじや、じや、と音をさせた。

帰りがけ八百屋で、つま芋を五百匁買った女将が目丸くして留美江の体を上から下へとじろじろ眺め廻し、不愛想に、

「どうも、ありがとうございました」

と、いった。

留美江にとって女将のそんな表情など、なんでもなかった。要は、さつま芋もがきっかり五百匁あるか、それ以上の目方であればいいのである。

せむし

路地は夕暮れの気配に、一層暗さを増していた。

留美江の部屋までは、この路地裏を、三百メートル近く歩いてゆかねばならないのである。右手に持った風呂敷包みの芋が、義足に

何度もぶつかり、ややもすればこぼれ落ちそうになる。

二メートル先の路地の道は、高いアパートの壁にはさまれて真っ暗で、ほこらのような感じがするのである。

その闇に近い路地を、留美江は不自由な足をひきずりながら歩いていった。

生きている限り、絶対離れそうにもない義足が

ギー　ギー　ギー

と一足ごとに不気味な音を立てる。

と、前方に人の気配を感じた。

男であるか、女であるか、大きな人か小さな人か、まるでわからなかったが、ただ、精力的ないきものの精気がうごめいていると云う気配が間接的に感じられた。留美江は女としての本能が働いたのか、瞬間、ギョツとして立止った。

前方の黒い方が、留美江の方へ近づくにつれて、その全貌が闇の中に浮きあがってきた。

留美江は目を開いて凝視しながら、歩きやめていた足をゆっくり動かしした。

前からくる人は、闇の中で病的なまで白く光る歯を見せて、ケタケタと水気のないかすれた声で笑った。留美江は背筋に水を浴びせ

られたような悪感を感じ、真正面を向いていた目をそらして歩いていった。

二度目に正視した時は、前からきていた人が、もう一メートル近くにいた。

男である。ものすごく背の低いせむし男であつた。

頭だけ異常に発達していて、普通の男の人と少しも変らなかつた。それだけに不均衡な感じである。体と云うものが頭の四倍位しかないのである。

胴体と肢体は十才位の体格であつたが、衣服を透かして感じられるそのせむし男の手足の骨格は逞ましくもりもりしていた。

偶然にも留美江は奇怪な、このせむし男と会つたのだろうか？……

だんだんと近づくにつれて、その男の顔が物凄く醜い容貌であることが一層、不安をかきたてた。

せむし男は留美江の前にきて、ちよつと立止り、下から上へゆっくり眺めまわした。そして、今度は声をたてずにニヤツと笑つた。

留美江は、齒をむき出して笑っているせむし男を見下しながら、歩行が緩くなつていた両足に力を入れて歩調を早めた。

路地は一メートル足らずの狭さなので、す

れ違う時、どうしても体が触れ合いそうである。留美江は厭な感じで、男を睨みながら歩いていった。

せむし男は、もう笑わずに黙々と醜い低い背を丸めて留美江のすぐ側まできた。

そして、びっくりするような低い声で、

「桐原留美江さんですか？」

とたずねた。

「えっ！」

といったきりで二の句が出なかつた。どうして私の名を知っているのだろう、なぜ私を呼びとめたのだろうという疑問が頭の中で渦を巻いた。せむし男はなおも続けて喋つた。

「あなたは五年ほど前、満州にいましたね。」

そして密航して帰ってきたんでしよう。安東丸に乗船して。その時、あなたは密航するだけのお金がなかつた。それでいろいろとかけずり廻つた揚句、苦役軍の頭に出会つて、泣きつくようにして、貞操をあたえて金を作ろうとした。しかし、親方は一銭も出さず売りどばそうとした。その時、一人の年老いた日本の女に出会つてわけを話して助けて貰つたそうでしょう。続けて話しますよ」

「いいわ、あなたは一体、何なのさ、私の一

身上のことを調べ上げて。何ならあとは私から説明してもよくてよ。その老婆に私が日本に帰りたくて帰りたくて仕方ない事を云うと、金もないのにそれは無理な事だと云つたわ。自分の体の一部を削つても帰りたいといつたら老婆は、ふうんふうんとうなずき、私が帰してあげよう。そのかわりお金をあげる代償として右足を一本くれといった。私はその時、ギョツとしたが、足が二本あつて満州の土地で埋れるより、一本でもいいから日本の大地を踏み、その上で日本の土の中に眠りたいと思つていたわ。だから、私は二つ返事で右足を売ることにした。老婆は、話がきまると私を苦役軍の親方に話をつけて遠くの山の洞窟へ連れていったわ。そこは生臭くて、真つ暗だったが、灯をともしと明るくて広々とした板の間が続いて、まるで堂のようだったわ。老婆は、私をベッドの上に寝かせ「じゃあ、やるからね、痛くないようにするから心配しなくてよい」といって、やはり日本人らしく日の丸の旗を祭壇みたいところへ飾つたわ。私は、少し不安になつたが、足を一本取られても帰れるのだからと観念して目をつぶつたの。それから、目をさましたのが七日目よ。私は、よくもまあ何も食べずに生き

でいたものだと思った。不思議に足は痛まなかった。しかし、それは薬のせいで、それがちよつとでもきれると、狂うように痛さが増したわ。それでも二月寝ているうちに、痛みは消えて、足を切り落したところからじゅくじゅくにじみ出ていた赤黒い血も薄くなり、出血もほぼ止ったわ。老婆は一心に私の義足を作るために、材料を捜しに毎日歩き廻ったわ。久しく寝たままなので、そりゃあ、足が痛むことよりも、肩や背中が痛くなつてどうしようかと思つたわ。そして三月目の終りに起き上り、ベッドの下へおりて見たほど、長い間寝ていて萎縮していた足の筋肉が弱々しく、おまけに一本足なので、その場にばたばたとくずれ落ちてしまつたわ。でもそれから歩けるようになったわ。もちろん、杖があつたけど。そして、足を密航費とかえてから七ヵ月ぶりに、私は日本の土地を踏んだわ。でも、何の感激も、嬉しさもなかったわ。それで、今日まで、四苦八苦の連続……」

「大変だったな——しかし、勇気のある人だ。僕が云う前に自分で喋っちゃったよ。どうです。そこらでお茶でも飲みませんか。少しお話がありますのでね」

「でも、私は、あなたみたい人は初めてお

目にかかるような気がするわ。そのあなたが私に用事なんて不思議じゃない？」

「もつともです。実は今、あなたのところへいつてきたんですが留守でしたよ……そしたら偶然、この路地で会えて幸いでした」

「でも、初めての私なのによくおわかりになつたわね。それとも、私のことを調べる時、義足をはめた女と云う先入感があつたから？」

「いや、そう云われると恐縮です。僕が君のことを知っていると言ふのは少しばかり理由がありましてね。そのことも話したいと思ひましてね。行きませんか？」

「お店は厭だから、私のお部屋にいらつしやい。その上で、ゆっくり話を聞かうわ。でも、話が單なる世間ばなしならいらぬ時間浪費になるからおことわりしてよ」

「と云うと？……」

「つまりね、何かプラスになることかつて云うことよ。どうなの？」

「君は足を売るほどの人らしい。まんざら、マイナスにもならないと思うんだが……」

と、出っ歯の白い歯を出してケタケタと意味ありげに笑つた。その笑いの中には、性もあり金銭的な利益もありそうな、ふくみがあった。留美江の気持をひいたのは、このせむ

し男の控えめな、男にしてはつましい物の云い方である。しかし、どうみても醜い。彼の欠点は喋るたびに露出された。

二人は奇妙なカップルとなつて路地を歩いていった。

闇の中で留美江は右手に下げている芋の重さに、しびれるような疲労を感じた。

その上、いつになく歩いたのと、スナップつけが祟つたのか、義足があたるところに肉ずれができたらしく、しきりに痛んできた。かなり腫れているなと留美江は思いながら歩いていった。

ギー、ギーと、少しも休まずに義足はきしむ。

「帰ったら井戸水で冷さなければ明日、義足に肉が喰い込んで大変なことになるわ」

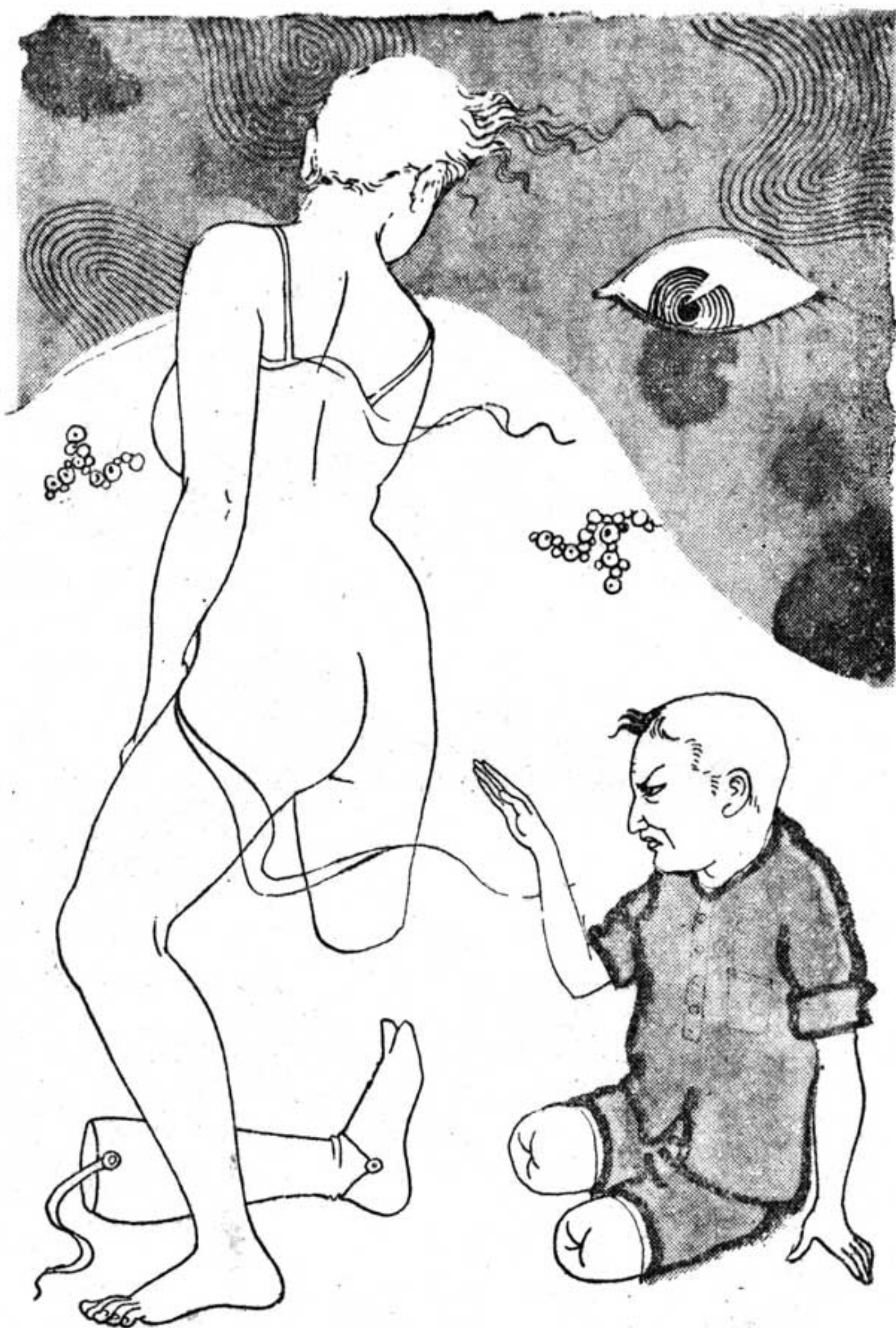
と、小さく呟やいた。

前に歩いていたせむし男が留美江の一人言に振り返つた。

妥協

裏口から入って灯をつけると部屋の中の貧しさがせむし男の夏物の上等らしい背広と、妙にそぐわない感じで灯の中に浮び上つた。

——案外、いいものを着てるわ、時計もし



ている。一体、何をしているんだらう。満州時代の私を知っているくらいだから、案外やばい仕事をしているのかも知れない。しかし醜男だな――

と、そこここをかたづけながら心の中で思った。

「座布団がなくて悪いわね。お茶もなしよ。

まあ、おすわりなさいな」

「しかし、ひどいですな。体に毒ですよ。この部屋は……」

と、さも常人らしい口のきき方だったのでその小柄なせむし男をみていたらおかしくな

って苦笑した。彼はすぐ横に坐りタバコを出して喫った。外国製のらしい横文字が書かれてあった。

留美江は、義足をはずして、まるで重ねて置いてあるふとんの上へ横になって、足をのばした。ほっとする心地であった。

「さあ、お話をきくわ、私が云うことに答えてくれればいいことよ。まず、どうして、私の過去を、それも明細に知ってるの？」

「とにかく、今後、お互に手を握るつもりだから、僕も嘘はつかない。第一の君の質問に答えるとすれば、僕は、君の足を買った老婆、つまり高村琴江の息子なのさ。それで、君の事を知ってるのに不思議はないだらう」

「まったくだわ。そうだったの。あなたがあの老婆の息子さんなの。私は帰

れたことは嬉しいので感謝するけど、無考えに足を売ったことに後悔をしているわ。そりゃ、足がなくても生活のことも性のことも解決できるような生活を持っていればいいけどそのどちらもない今の私なんだもの。ヒステリックにもなるわ。あのおばあさんその後は

元気なの」

「いや——死にましたよ。三年前だったかな、それで僕も、おふくろの遺言を頼りに、帰ってきたわけなんだよ。おふくろの財産は、無税で日本へ送った義足と、義手だけなんだ。左右の義足と、左右の義手をみつけて、おふくろの残した財産を、僕は今自分のものにしてようと走り廻っているのだ。もう一本の手だけは捜した。そして、それでかなりの金を手に入れることができたが、義手の方は少ししかく、せないので五十万円位にしかならなかったよ」

「そう。たいしたかくい、財産ね、その義足の片割れが私なのね。もし、私が義足をやらなかったら、どうする？」

「僕には腕力がある。唐手をやってきたので相当の大男でも倒すことができる。その僕がかよわい君を始末するのは簡単なことなのだ。しかし、僕は、片輪者同志の争いは避けたいんだ。それにさ、さつき手を握るといったんだ。考えて妥協する方が、かしこいと思うよ。どうだろう」

「そうね。あなたは奸知にたけているわ。そう云うことにしましょうか、フッフッフ」
「おかしいかね」

「おかしいわ。何となくもくもくと金の雲でも頭の中に浮んでいるようで、いい気持だわ」
「君の義足を、まず調べて見ようじゃないか。何しろ相当な額だからね」

「何が入っているの。お金、そのものじゃないことはわかるわ」

「さすがだな——麻薬だよ。粉末にして密閉してあるから大分あるわけだが、それにしてもそれを取り出すのにその義足をこわさなければならぬ。そうすると君が歩くのに不自由することになるから、とりあえず、神田の春木町の僕の知ってる義足屋へ行って、作って貰うといいな」

「でも、三万はかかるわよ。それに、私は、そんな金なんて一銭もないし」

「僕がそれくらい出すさ、とにかく出かけよう。早い方がいいからな」

彼は、そういういながら側へきて、留美江の義足を、ボンボンとたたいて、

「これにモノが入ってんだからな——」
と云った。

二人は、また路地をぬけて大通りで車をひろった。義足をつけたまま坐りにくくて、あせっていると、高村（せむし男の名）は、手を貸してまるで恋人のように、いたわった。

せむしのその醜さだけが頭へきて、厭な気持だった。春木町のいちようの木が続いているところへ、車を止めて店へ入っていった。

天井の高い応接室は、がらんとして、陳列戸棚に指にはさみこみの精巧な義指が、透明糸につるされてぶらぶらしていた。骨折用のセロイド製のコルセットや、女性用らしい膝下の義足が、並んでいて不気味である。

眺めているうちに、奥の方のガラス戸があら白髪の老人が顔をのぞかした。いざりながら二人のところへきて高村をじろつと見て、
「何ですか、奥さんの義足のやりかえですかね。……でも、その義足は、この辺の店の造りではないようすな」

と、いった。足は二本とももものところからなくて上等の大島の裾が、ぶかぶかと長く尾をひいていた。

「ええ、満州の方でやりましたの。新しいのを造りたいと思ひましてねえ」

「そう。でも、せっかく慣れなすっているのに。どこかよほど具合が悪いのですかね」

「そうでもないんですが、長歩きが無理ですよ。その意味でも新しいのを精巧に作って貰って一生やっておきたいんですの。それで日数はどのくらいかかりますかしら……」

「お返しするようですが、一年ぐらひは、慣れませんかので苦勞しますよ。こちらは商売ですからお作りすればもうけになりますからいいんですが、私も、こんな体でして、なるべく肉体的に同じ体を持つ人に苦しんで貰いたくなくてね」

「それでどうしろとおっしゃるの？」

「おやめになったら、いかがですか」

「あなたは義足屋さんでしょう。私は慣れるまでの苦しみぐらひ、耐えますわ。ですから作っていただきます。お客の私がこう云うんですものいいじゃありませんの。それに高村さんは御存じなのでしょう。それとも違いますの」

「よく知っていますよ。昔、一緒に上海で密輸をやった仲ですからね……」

と云って、じいっと、留美江の目をみつめた。からすのような目であった。

「それで、わたしは足を洗う時私刑に会って麻酔をかがされた揚句、日本へ連れてこられて、高村やドル買いの仲間に両足を切られて生き埋めになりましたね。しかし、運と云うものか、どうやら、助かって、まあ、借金しながら、この義足屋をつくり上げた。更生した悪人の姿と云っても過言ではないわけだ。

君のその義足の意味も、私だけは知っている。もし、君が新しい義足をつけて、その古い義足の中から麻薬を取り出されたとしたら、大変なことになるのだよ。だからと云って、私は君等の計画をやめろとは云わないよ。しかし大変なことになることを予想して忠告するだけだ。私も今は君達のいる世界とは離れてしまっているから、だれにも云わないし一切口外しないつもりだ。少し一人で喋りすぎたかな——奥さん、どうです。作りますか？」

「ええ」

「そうですか、残念ですが、それでは仕事をすすめましょう」

老人は力なく向き直った。

「義足を二日ほど、店の方でおあずかりしたいのですが、かまいませんか」

「そりゃ、困る！ 今日型取りをして貰うよ。

あきらめたと云いながら、お前も金には目がくらむだろうからな——持って帰らすのが昔の仲間への仁義だぜ」

と、今まで黙っていた高村が噛みつくように歯をむき出してそう云った。

二人の男の対立的な会話にちよつと当惑したが、仲間に入らず傍観していた。

三時間後、二人は外へ出た。高村は当然の

権利のように、彼女の側へついてきた。その態度には、さすがの留美江も、たじたじとした。

車が路地の入口に着いた時、十一時四十分だった。そんな時間なのに高村は執拗に留美江の側から離れなかった。まるで義足にとらわれた人間のように、下を向いて黙ってはげしく肩で息をしながら、義足ばかりをなめるように眺めた。留美江は、もう金のことは考えずに憂うつな気持になった。

そして、何やら、途方もない何かが起りそうな不安が体中を走った。

争 闘

裏口から入ったとたん、高村は真赤に上気した体を、どかっと畳の上へ投げ出した。

留美江は、たまりかねて、

「あなたもあつかましい人ね。夜分、たとえば義足が気になってもさ、そんなにくつつかれたら、たまらないわよ！」

「な、なにイ！」

と、さっきまでの落ちつきをかなぐり捨てて歯をむき出し、じろつと眺めた。

そのどろんとした精気の失せた瞳に、ペイ患なのだと知った。ペイ患、薬が切れたら

のすくあばれて、性をむさぼるのだ。

留美江は上海で、そのベイ患と苦力が肉体をもつれさせている場面を、高い金を出させて見せる貧民街の一隅で、一度みた事があった。その時二十五だったので、熟れきった肉体は敏感になり、自制できないほど欲情が燃えたものだった。

今、その高村が、その時の演出者の苦力の表情に似ていた、と思っている時、高村は意識が半減したのか、もうろうとした目で、「留美江、義足をはずせ」

と、云った。留美江はギョツとした。きつと麻薬をとり出すのだと思った。義足は、金を払ってあるので二週間して春木町へ取りにゆけばよかった。逆らわずに義足をはずして高村の方へ出した。無言である。

しかし、それを取らずに、「横へ置くん」

と、云った途端、ガバツと、留美江の体を抑えてきた。麻薬が目的ではなかったのだと思った時は、もう遅かった。

朝、裸のまま、それも留美江の体の上で、まきつくようにして高村は死んでいた。

留美江は驚いた。しかし、相当のベイ患だ

ったから死ぬのも仕方ないだろうと思って、彼の新しい服のポケットを見ると、財布に三万円あまり入っていた。それで線香と、ローソクを買ってきて、形ばかりの供養をしたが死体の処置に困った。

しかし、この路地はベイ患がゆき倒れになるには都合のよい場所であった。暗くなって、留美江は、それを実行した。裏口から硬直した高村の体を運ぶのに相当に苦勞をした。おまけに義足をつけた方の足が、うまく進まないものである。

辛うじて、この前黒猫がいたモルタル塗りのゴミ箱の側へひきずって行った。

その夜が過ぎて、朝方、裏口から人の入る気配がした。びっくりして目をさますと、高村が、いわのよった洋服を手に持って、むくっと立っていた。

まったく驚いた。死んだつもりの方が再びせむし姿で立っていたからである。

「どうも恥しいところをみせてすみませんでした。今から、帰ります」

といって、義足のことも何も云わずに帰っていった。

留美江は不思議で仕方がなかった。彼女の貞操の代償として、高村は義足を作ってくれ

ポケットの中の三万円を黙ってくれ、その上故意に死んだ真似までしてくれたのである。せむし男の一芝居、と思ってみても念が入りすぎている。とにかく、わからなかった。

不思議な面持ちで、その日一日を思案しながら送った。夜、今までにない夢をみた。朝頭の重い気持ちで枕元の義足に手をやった。と、どうだろう、いつも手に触れるところにあるはずの義足がなかった。分厚い札束が、その代りに置いてあるきりだった。

がさがたと起き上り、札束を数えた。五十万円もあるのに、いささか驚いた。

側にカタカナ文字で、

「ギソクハ、モラツテユク。キミガボクオ、マンゾクサセテクレタノデ、ソノオレイトシテ五十万円サシアゲル。ユウベハ、スマナカタ。ボクハ、アス、コノギソクオ、モツテヨコハマへ、ユク。ソシテ、ヨル、シャンハイニユクダロウ、ゲンキデイテクダサイ」

と、書いてあった。読んだとたん、千万円にも二千万円にもなる義足の行方へ、云いしれぬ未練を感じ、口の中で口惜しさが「やりやがったな。やりやがったな」と云う男みたいな言葉になって、繰り返された。

集 募 稿 原

◎小説（現代・時代）三十枚～四十枚程度◎読物三十枚程度
 ◎随筆（映画・演劇・文学）三十枚まで◎読者の頁原稿〓五枚まで
 ◎アブチックスリラア三十枚程度◎アブチックミステリー〓同上



☆原稿は必ず未発表のものに限ります。他誌に見られないような特異性のあ
 ☆る、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。読者の頁に対
 ☆するものは、本誌に掲載された作品の批評、希望等を御投稿下さい。採用
 ☆篇には掲載誌発売後一ヶ月以内に稿料をお送りします。

＝ 裏 窓 編 集 部 ＝

（送り先） 東京都中野区江古田1～2302 久保書店内



旗本閨房譜

橋爪彦七

東 桂史・画

のっぺらぼう

「もし……」

と、呼ぶ声がしたので、振りむくと、美しい娘が、

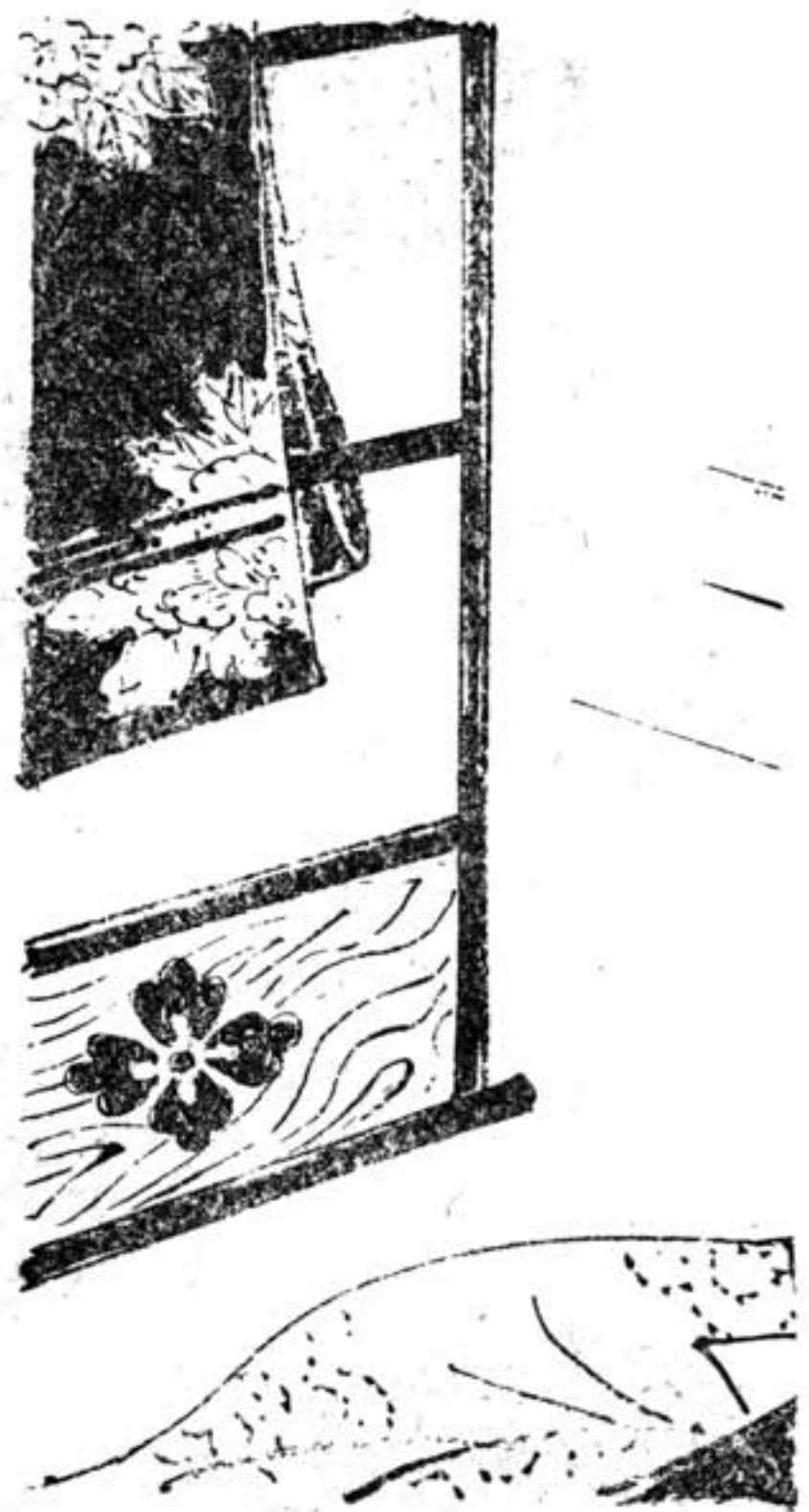
「あの、釣れまして？」

側に寄ってきて、金蔵が右手にさげている魚籃をのぞきこむようにした。

秋——日暮れどき。

本所の四ツ目と五ツ目のなかほど、俗に、笹谷堀といっている堀割土堤に、すすきの穂がさやさやと鳴って、足もとが、おやおもうほど、くらくらってくる刻限である。

大工の金蔵、きよう一日、仕事をやすんで、太公望をきめこんだ収獲——ずっしり重いその魚籃へ、娘が、手をかけそうにしたから、いぶか



しさと自慢との入り混った表情で、

「おい姐や」

と、もう一度、娘の顔を見なおすと、

「ウわッ！」

叫ぶがはいか馳け出していた。とたんにうしろで、

「置いてけ置いてけ」

これが、おさえつけられるような、引き戻されるような、ぞつとする奇声、金蔵、魚籃を抛り出すと、夢中で馳けつづけた。

翌日。

仕事つづきの野帳場、煙草やすみに、職人

心許すなと告げて去った娘は夢か現か？

紅閨をめぐって狸囃子は遠く近く……

同志が、

「やられたってじゃねえか金の字」

金蔵、にが笑いをしながら、

「もう知れたか」

「知れたかじゃねえ、

手前、慾の皮を突っぱらかして、日暮れまで釣っていたンだろう」

「やっていたとも、釣の味を知らねえから、

そんなことを云うが、日暮れだろうとなんだろうと、こう喰いがたつてきたとき、やめられるものか」

「ふッ、ふッ、手前、それでいて、せっかくの獲物ア、すっかり取られた——てのじゃア話にならねえじゃねえか」

「そう云えばそうだが、釣るときの気持と、取られたのとは別だ」

金蔵が云うのへ、ほかの一人が、

「取られたときに、お前、狸だと知ってたのか？」

「たれが知るものか、狸と知ってりや第一、逃げたりなどしねえ」

「だがお前、お竹倉から奥のあの辺、悪い狸が出るって評判の場所だ。釣に行った連中でまんぞくに魚籃を提げて帰った者の無えってことは知ってるはずじゃねえか」

「それが、面喰ったンだなア」

「どうしてだ？」

「出たのが娘だ」

「娘？」

「綺麗な女ン子でね、もしもしと云って、こう魚籃をのぞいて——」

「嫌な奴だな、女てえとすぐ眼尻を下げやがる、それでどうした」

「二度目にその娘を見るとお前、なんだとおもう？」

「知るものけえ」

「目も鼻もねえのっぺらぼうの顔なんだ、口がこう耳ンところまで裂けていて、ああ、いまい思ひ出しでもぞつとすらア」

「手前、それで馳け出したンだな」

怪異復讐譚特集

「夢中よ、まるで足が地に着かなかった、今にもそいつが後からおッかぶさってきそうだなア」

「そいつが狸だったんだ」

「うむ。だがほんとうに巧く化けてやがったぜ、あれが狸とすると……おれにはどうしても本物の化物とより思えなかった」

「金の字、聞いてりやお前、しきりに感心してるが、口惜しかアねえのか、人間が狸におどかされたりなんかして？」

「口惜しいよ」

「じゃいちばん、みんなで仇をとってやろう。どうだいみんな？」

「よし、やってやろう」

と、作事場の連中の気がそろう。

「置いてけ置いてけなんて云やがって、人間のものをただ取りやがる、太え畜生だ」

「そうとも——」

「いままでみんな、捨てておくって手はなかったんだ」

と、その場で、大工職の連中、威勢のいいのが狸退治の相談におよんだ。

亡妻供養

幾日かたって——

本所、錦糸堀に屋敷のある小宮山左膳、八百石取の旗本で御普請奉行。この左膳が本所五ツ目の御材木倉へ、材木の検査に行った帰途、四ツ目と五ツ目の間の笹谷堀——またの呼び名を置いてけ堀というところまで来ると豆しほりの手拭で鉢巻をした若い職人連中が七八人で、一匹の狸をつかまえているところだ。

「畜生、よくもよくも人間様の釣った魚を、ただ取って喰ってやがったな、何が置いてけだッ」

「さ、今日こそは年貢のおさめどきだぞ！」

「ざまア見やがれ、とうとう罠にひっかかりやがって。今晚てめえを狸汁にするからそうおもえ」

「もうそろそろそうそ寒くなる、薬喰いにアいい陽気だ」

「おそろしく肉づきがいい、うめえぞこれア」

「手ッ取り早く締めちやえ、締めちやえ」

口々に、なかでも最近の被害者、金蔵が、「やいッ、こん畜生め、もう一度、のつべらぼうに化けてみる、叩ッ殺してくれるから」などと力みかえる様子を、立ちどまって見る小見山主膳、

（なるほど、噂に聞く置いてけ堀——かような獣類の仕業とは……？）

三十五歳の左膳、分別ざかりの教養ある侍——信じるのではないが、ふとおもひ出したのは、今日が亡妻の命日であるということ、なるべく殺生は避けて——と考えていたおりからだから、

「これ、これ、町人」

「へい」

と、振りむくのへ、

「これにて聞けば、それなる狸を殺めるとか、総じて生類の生命を断つ、不惑ではないか」

「これアどちら様か存じませんが、こん畜生ア永い間人間をおどかして、釣った魚をただ取りをしてやがった太え畜生なんで、へい、それで、こうやってあつしたちが骨を折って生捕りにしたってわけでござんす。どうせのこと、今夜ア狸汁で一杯やろうって相談をしているところでござんす」

「左様か、人間をおびやかすとは、けしからぬ狸であるが、生捕りに相成ったとあれば、いよいよ運の尽きじゃな」

「へい」

「どうじゃ、その狸を身共に譲ってくれぬか？」

「へ？」

「無償とは申しぬ、飲代とやらをつかわす、

一両金にてどうじゃ？」

「旦那、ちょ、ちよっとお待ちなすって、こ

いつを一両——一両でござんすかえ？」

云いながら、みんなの表情を見て、

「どうする？」

それが、一応ことばの綾であることは、連中にも読めていた。

狸をおさえている一人が、

「安、お前にまかせらア、なア留、金の字も

不服アねえだろう」

「ああねえとも」

と、金蔵がうなずいた。

「旦那、お聞きのとおりで、みんな承知のようでござんすから」

「左様か、しからば骨折を遣わすさ、一両」

と、小判一枚、左膳、買い取った狸の縄をほどかせて、

「きょうは、亡妻の命日ゆえ、供養のために助けつかわす、今後ふたたび人里に出て、迷惑などかけてはならぬぞ」

云いきかせる狸公、キョトンとした顔をして聞いていたが、そのまま土堤の向うの森かげへ、いっさんに馳けて行ってしまった。

怪異復讐譚特集

「さてさて生物の命を助けた心持は、また格別、参ろう八助」

と、供の小者の八助をかえり見ながら、左膳、ゆっくりとした足どりで歩き出した。

むせっぽい匂い

「お帰りあそばせ」

神妙に、玄関に出て両手をついて出迎えるお玉——二十歳にしてはあだめいているが、

左膳、妻亡きのちの妾——淑やかで内気でと

いうより、手活の花は、ほどよくなまめいて、

「あの、殿様……」

と、ながし眼に、色気をふくむ

美しさの方が好い。

左膳、このお玉の酌で陶然とな

ると、いい気持で臥床に入ったが

とろとろと眠る夢路——ふと気づ

くと、枕頭に十七八の女——文金

島田の可愛い娘が、振袖姿で立っ

ている。

（はてな？）

左膳、夢のなかで、自分の眼を

疑った。だが、どう見直してもお

玉ではない。その証拠には、お玉

は罪のない顔をして、臥床を並べてよく眠っているのだ。

「何者だ、案内もなく夜中、うろんな奴？」

叱声をくれながら、引寄せる枕刀、次第に

よつては一刀に——と、きつとなると、娘は

ふわ……と、それへ坐って、

「その御不審はごもっともでございます。私

は今日、笹谷堀で危い命をお助けいただいた古狸でございます」

「なに、狸だと？」

「はい。畜生の悲しさには、あのととき御礼を申すこともできません、さりとてこのまま打ち過ごすわけにも参りません」

「……………」

「と、申しますのは、畜生の世界には、人間

とちがいはまして、義理という掟がいちばんや

かましいのでございます。今日、危い命をお

助け下さいました御恩、いつの日お報いでき

るかわかりませんが、旦那様に万々一の場合

畜生の身でかないますだけは、かならず影身

にお付きそい申しまして、おつくしいたすつ

もりでございます。どうか、この後、お側の

者に御心をゆるされませぬよう、お気をつけ

なされませ」

これだけ云うと文金島田、ふッと掻き消す

ように消えてしまった。

はッ和我にかえる左膳、臥床に起きなおつて、夢か現実か、判断にくるしんだ。

眼覚めていたか——というところでもなくでは眠って……？　というあまりに現実性が濃い。

(狸……)

たしかに狸の一命を助けはしたが、それが夢現のうちにあらわれる？

(ばかな！)

と、うち消そうとするが、ただ一つ、

「お側の者に心を許されるな——」

そう云い残して行ったことが、妙にここに結ばれてくるのだった。

側の者——考えるまでもなく、それはお玉以外にない。

だが、お玉は、可憐そのものである。両国の水茶屋で茶汲女をしていたのが、たまたま左膳の氣に入つての妾奉公、奥方の亡い小宮山の屋敷では、主人に次いで權威——權威というのもすこし変だが、

「ねえ……」

とかなんとか、左膳の膝に手をやって、二度かるくゆすぶると、

「なに？　ああよろしい、聞きとどける」

と、お玉の表情と言葉の裏とで、すぐ推察してくる左膳だった。

お玉、これに不満があるわけもなく、それどころか名のとおり玉の輿のおもいで、成熟したからだ、従順と、蠱惑とを、適当に捧げているのだった。

(これではない——)

では、用人の斯波三右衛門——これは先代からの召使で、正直で微塵も悪意のない人物。そのほか女中、小者など十人あまりの使用人を、それかこれかと考え合せてみても、別段に氣にかかるほどのかとも思い浮ばなかった。

(夢……。夢であろう——が、それにしてもまざまざと狸が娘に化けて物を云う、ふしぎな夢を見たものではある)

怪異——ではないが、心悸が昂ぶると左膳は眼が冴えて眠れなくなった。

蘭燈の灰明りに、美しいお玉の寝顔を見ながら、煙草盆を引寄せて、一二服ふかすと、ボン……と軽く吐月峰の音。

とたんに、ぱちと眼を開けたお玉が、

「おや、殿様はお眼ざめ？」

「うむ」

「ま、そのような強い貌をなさらずに、いつ

ものように、さ、御寝なされませ」

と、柔らかな手が、指が、左膳の膝にかかつて、半身おこしたお玉のからだから、女の匂いが咽っぽく左膳の鼻をうって来ると、左膳、膝をくずしてきて、ずいと伸ばす右手がお玉の肩へ行つた。

お玉、そのまま、左膳の胸へ顔を——

「ねえ、あの……」

と、これで左膳の結ばれた氣持が、さッと拭われて、

「これ、玉、痛いぞ——」

抓られて、女の怨むような笑顔のなかへ自分も微笑を溶かしこんだ左膳が、

「愛いやつ——」

と、横になったとき、それは幽かに、屋敷の裏庭とおもえるあたりで、

「置いてけ置いてけ」

という、奇妙な声が聞こえてきた。

八助語る

「八助、供せい」

「かしこまりました」

「月並みの参詣じゃ」

「へい」

左膳、非番で、毎月欠かさぬ浅草寺の観音

へ参詣。

お玉に手伝わせて、熨斗目の小袖黒絞付の羽織、外着に着替える間に、八助は供の仕度だった。

若侍や女中たち、むろんお玉や用人などに見送られて、錦糸堀の屋敷を出た左膳、割下水から表町に出て吾妻橋をわたると、やがて浅草寺の雷門をくぐった。ずつと行つて仁王門、それを過ぎて御本堂——御丈一寸八分の御本尊の秘仏にしては広大な丁八間四面のお堂である。

左膳は、御本尊を拝すると、いっになく廻廊の縁をぐるりとまわつて、まわりながら、考えことをしていたが、

「八助、駒形へまわろう」

「へい」

八助、これには、肚のなかで、にこりとした。

これまで、二度であるが、こうしたときに駒形——と左膳が云えば、きまつて、小料理茶屋の「青柳」へ立ち寄るのである。

やはり八助の期待どおりで、左膳は「青柳」



で無礼講、主従のかたくるしさを、しばしお預けにしての杯の献酬からはじまった。

「ときに八助、あの玉じゃが……」

「へい、お玉様が？」

「知つての通り、水茶屋の婢であつた。それゆえ、以前より懇にいたした男など、まま有ろうと存するが、耳へ入つておらぬか！」

「これは殿様のお言葉とも思えませぬ。あの

お玉様にかぎつて、御不審なことなど——」

「いやいやそう堅くるしい話でなく、たとえば、末は夫婦にとか、是非女房に——とか、よくあるではないか」

「それがその、手前など、御奉公の身分で水茶屋遊びなど、とてものごさいますし……噂にもなにも」

「八助、無い道理はない、別に取りたててど

うこうと申すのでなく、玉とていずれは他に嫁づけやろうと存じておる。いつまでも妾奉公をさせておくでもあるまい、心得のため、左様な者があつたればと考えるまでじゃ。さ飲らぬか、いっこうに杯があかぬようじゃが」

左膳、すすめ上手に、八助に杯を重ねさせて、じわじわと聞いてくる鎌問いというやつ、いわゆる誘導に引ッかかる下賤の根性。「なにしろその、お玉様は、両国の水茶屋でも指折りのお人でして……」

「評判であつたと申すの」

「ですからそれア、殿様の前でございますが引く手あまたというわけで……」

「うむ、大勢があれば目をつけていた、それで？」

「その中でございます。なんでも旗本の御次男様とやらが、御執心とかは聞いておりましたが……」

「ほほう、なかなか詳しい、話せるぞ八助」

「そ、そうおっしゃられたって殿様……」

「いや、其方も見かけによらぬ苦勞人じゃぞ。さ、冷えたぞ、ぐつとやって熱いのをどうじや」

「も、もういけません殿様、八助貴様は酔う

とそれだから……と、御用人様に……」

「よいよい、今日は身共が許しておるのじゃ。遠慮なく重ねて——」

「そ、そうでしたっけ、八助にア殿様がついていて下さるんだ、ねえ殿様……ですから、あつしにしたって、お、お、お玉様のことア……」

と、深く云いかわした情夫——情人のことにまで及んだが、八助、かんじんの男の名を知らない。

こちらは左膳、以前は以前、いまはいま、まず聞きおくだけ——と、詮議だてをするほどの野暮でもなく、しかし、ひそとの監視の眼を光らせることになった。

勘当浪人

かくせど色に踊れる——で、いつかは知れるのが男女の仲だが、お玉に限っては、それがない。

第一、親兄弟のない孤独——そう云った当人の言葉に偽りなく、お玉、もう一年にもなるといふのに、屋敷の外に出たことがない。むろん、外から尋ねてくる者もなければ、用事と称する使が来た様子もなく、ただ、ひどく嫌うのは左膳の外出だった。

役目の登城、これはよんどころないとして、下城すると、飛びつくばかりにして出迎える。そして夜ともなれば錦闥の、いとも濃やかな真情流露、惜し気もない軟肌のぬくみと、毛細管まで膨れようという血液の騰奔——左膳、いつとはなく、

「お側の者におこころを許されますな」

との、狸公が夢現での忠告も、あたまの隅へ容れ忘れることとなった。

その翌年——満一カ年をすこしたある日。

八助が、渡り仲間を相手に、師走の煤掃き——そろそろ初春の用意をはじめているところへ、いきなり門内へ馳けこんで来た浪人者が、奥庭の植込みへ逃げこんだ。

追っかけてきた五六人の侍が、たち働いている小宮山の仲間に、

「只今の浪人者を——」

と、引渡しをせまったが、疾風のように飛びこんで行った浪人者、迂闊といえはそれまでだが、八助はじめ誰も気づかなかった。

集特譚讐復異怪

「左様な浪人は当屋敷に——」

「ほかをお捜しになりましたは？」

「たぶん、御隣家様では？」

と、口をそろえるのへ、それでもとは侍たちも押しきらずに、

「さようか……」

とだけで、引揚げてゆく。

一方。

左膳はこの日、おりよく非番で屋敷に居たが、にわかには邸内が騒がしい様子に、居室から庭に降りて、飛石つたいに中坪へ——と行きかかる植込に、犬のように蹠っている人影を見て、

「何者だ」

と、咎めると、

「はッ」

這うようにしてそれへ出た侍——もとより浪人、月代も延びて羊羹色の紋服、大地に両手をつけて、

「無断で、御庭先を踏み荒しました段……」

と、殊勝に詫び入るのを一瞥した左膳が、

「あ、これ、其許は石井氏の御子息ではないか？」

尋ねるのへ、顔をあげた浪人、

「はッ、源次郎にござります。まことに、面

目次第もございせん——」

恥じ入りながら、肩をすぼめて語るのを聞く——

かねて、左膳の下役に石井源左衛門という侍があつたが、その伴が、この浪人、若くて学才があつて、一刀流の達者で、美男——これがいけなかった。

女に酒——いつか賭場入りまで覚えると、

三拍子そろつた道楽、父源左衛門から勘当を受けたが、どうもおさまらぬ素行、今日も本多家の仲間部屋で博奕のものを無くしてしまい、胴元から借りた星をそのままにして逃げ出すと、それと、用心棒たちに追っかけられた。

「……進退きわまつて御当家へ飛びこみまして不躰の段、どうか御許しねがいとうござります」

左膳、聞き取って、

(不心得な)

とは思つたが、下役の伴ではあり、どこかまだ見どころのある若者と考へて、懇々との意見、

「当分は身共の屋敷に居られるがよい。伴膳一も元服の齡、剣道でも教えてやっていただく。いや、折を見て、御父親へは身共から

——」

と、左膳、源次郎を薫陶して——と、源左衛門への思い遣りもあつて、その日から源次郎を屋敷に置くことにした。

その夜のこと。

左膳が、臥床に入ると間もなく、どこからともなく聞こえる奇声——

「置いてけ、置いてけ……」

と、風の波に乗って、遠くなったり、近づいたり、はてと左膳が眉をひそめて、例の狸公の忠言を思い出したが、それと、源次郎のことは、別に結びつけても考えなかった。

お玉の奸智

「久しぶりだなア」

と、いう源次郎へ、お玉は、びつたりとからだをよせかけて、

「待てば海路の日和とか……」

「逢いたかったぞ」

「あたしこそ！」

と、あとは、蜜のような甘いささやきの二人。

小宮山左膳が、公用で、木曾の山中へ立木検分におもむいた留守中のことである。

実を云うと源次郎、本多の部屋で博奕のも

とをすったなど、すらすらと書きおろした作りごと、逃げると見せて、追っかけさせたのも同じ仲間の無頼の徒。

お玉とは、相思の彼が、一策を編んだだけで、同じ屋敷うちに起居することになると、源次郎は別人のように身持を改めて、

(いつか機会を！)

と、狙っていたのだった。

次の夜——また二人の密会、鱗曳の味はまた格別で、月影の暗い葉桜の下を忍んでくる源次郎の姿を、お玉は、もう縁側に出て、待ちうけているのだった。

その三晩目——

「左膳が帰れば、また窮屈なお抱えの師範役——しみじみお前とも逢えぬしなア」

かこつ源次郎へ、お玉が、

「それぞれその短気がお前のいっちょ悪い癖、いまに私が……」

と、源次郎にだけ聞こえる囁き、

「——ね、気づかれぬよう、それまでは」

「うむ。とは云え辛いしんほうだぞ」

「それは私の云いたいこと……」

「なにを、その口前で」

喃喃と、痴語をからませて、忍び出るお玉の部屋、折から、丸窓の下をはなれようとす

る人影へ、

「動くな！」

ザッと斬りつける源次郎の一刀。

「うわッ！」

と、ひと声の悲鳴が、忠僕八助の最期だった。

「ま、源次郎様——」

と、真ッ蒼になったがお玉、性来の毒婦性をはたらかせると、即座に、持ち出してくる左膳が平常持の紙入、それを、八助のふところに捻じこんで、

「あれ、誰か来て——」

と、源次郎の袂をおさえながら、金切声をあげた。

たちまち、駆けつける用人の斯波三右衛門や、小者、女中——それらの者へ、

「ついうとうとする隙に曲者が……折よく源次郎様が……」

居たとも、来会せたととも、実にあいまいなのだが、斬られた八助のふところに、主人の紙入があったのが証拠となる。

「人に見かけによらぬもの……」

用人の三右衛門が云うそばから、

「咄嗟のこととて八助とは存ぜず、無残なことを——」

源次郎、はじめから無残を承知で、一身の破滅をふせぐ悪どい殺刀——輪をかけて、毒を利かせるお玉の奸智が、狼狽と混乱との感情の嵐のなかで、うまく、成功したのだった。

源次郎の偽装

左膳、木曾から帰ると、真ッ先に三右衛門からこの報告を受ける。

「八助め、ふとした出来心とは存じますが……」

と、自分の不行届を、八助の出来心という方へ片づけるつもりだったが、三右衛門ほど迂闊でない左膳、

(はておかしい……?)

と、感じたが、

「左様か、出来心でろう」

と、どちらにしても八助の死を認めねばならぬ立場、二十年の余も勤めている正直者の八助に、無分別な盗心が起せるか起せないか、左膳、狂いの無いあたまで結論を出してはいるが、表面、源次郎を称揚することを忘れたかった。

だが、月余にわたる留守——それに、つつしみの堰を切ったお玉の挙動、いくら奸智に



たけていてもしめ縄の数は争えなかった。

それに、不思議は、八助の死ばかりでなく、左膳の帰府以来、毎夜のように聞こえる狸の馬鹿囃子——遠くになったり近づいたり、陰々として聞こえるかと思うと、急に陽気に、それが月夜ばかりでなく、屋敷の周囲をぐるぐると取り巻いているように聞こえるのである。

(何かある!)

左膳、ちかごろではようやく考えるようになって、ある一夜、出先——深川からの帰りを帰邸を知らせず裏木戸にまわった左膳、そっと屋敷うちへ忍びこむと、不意に、離れ座敷から、陽気な馬鹿囃

子が起ってきた。

(あれだ!)

ピンと感ずるもののある左膳、足音をしのばせて離屋に近づくと、灯のない部屋の丸窓に、はつきりと映る男女の影——

(うぬ!)

左膳、ぐつと胸にきたが、こらえるも男、そう考えると、犬猫にも等しいお玉と源次郎を、手にかけてところで誉でもあるまい——そう思つて、一応二人をたしなめて追放しようという考え。

「お玉、源次郎、そこ動くな」

声をかけた途端、ぱつと部屋から飛び出した源次郎、いま濡れ縁をあがろうとする左膳の胸に、ぱつと突きあたった。

左膳、かわすによしなく、

「逃げるか!」

烈声をたたきつける刹那、抜撃ちの殺刀が、びゅーッ! と、左膳の肩口を割りつけていた。

このとき、またしてもお玉の機転、悪才のはたらきは、すぐ行動となつて、左膳の居室から持ち出してくる手文庫——中の小判を庭石のあたりに撒きちらして、

「あッ、あれーッ、殿様が!」

けたたましく絶叫しながら、つづいて、
「た、たれか来てーッ」

声に、馳けつける用人、続いて伴の膳一。

お玉は、左膳の死骸に取りすがったままで、

「殿様ア……殿様ア……」

と、ゆすぶりゆすぶり泣きじゃくるばかり
だった。ところへ、何くわぬ顔をして、立ち
戻る源次郎が、

「あな無慙、何者の仕業——」

と、嘆いたり憤ったり、お玉が、用人の三

右衛門と源次郎とを等分に見て、

「曲者が逃げようとする出会がしら、裏口か
らお帰りあそばした殿様が、不意にこうした
災難におあいになりました……」

一応の説明、しどろもどろだが、ただ恐怖
と悲嘆とに取り乱すものと、弁舌さわやかな
源次郎のとりなしで、それよりは、左膳が横
死とあつては家名のほどが……と、このところ
病死の体に届けるなど、源次郎、膳一をた
すけて、大いに小宮山家のために働く。

従って、膳一の後見をかねた剣道指南、悠
悠と、小宮山の屋敷に居坐ることになった。

こうなつて、はじめて、用人の三右衛門た
ちが、

「ははア……さては？」

と、小首をひねりだしたが、すべてがあと
の祭りだった。

膳一仇討

一年過ぎて——その年も秋。

膳一、ひとりで夕方まで書見にふけつてい
ると、にわかに催してくる眠気、うつうつと
して眼を開くと、南窓から見える庭の叢の上
に、血に染った八助の姿が茫——と立った。

「や、八助ではないか」

おどろく膳一へ、

「いえ、八助ではございません。借りに姿を
借りましたが、私は置いてけ堀の狸でござい
ます」

「なに、狸？ 狸とは面妖、何しに八助の姿
に化けるか？」

問いつめると、亡き左膳に一命を救われた
一条を語って、御恩報じと思つても、結局悪
人の妖気に勝てなかったことを詫び、これか
らは、悪人退治にお力添えをしますからとい
うのだった。

膳一が、

「悪人とは？」

と、たずねると、

「石井源次郎とお玉の両名でございます。八

助も殿様も、みな源次郎の刃にかかつてあえ
ない御最期、一日も早く、この兩人を退治な
さらぬと、殿様も八助も成仏ができません」
云ったかと思うと、霧の散じるように八助
の姿をした狸が消えてしまった。

その一瞬——

膳一、うつつから、はつきりと吾に還る
と、かねてから、不審におもっていた源次郎
とお玉の行状——

（そうであつたか！）

と、切齒して、悲憤にくれたが、それから
は、わざと源次郎になれなれしく、師父に仕
えるようにして自分を踏侮するのにつとめて
いた。

一夜——

奸夫姦婦が、語らいの後で、

「どうでしょう源次郎様、膳一も、あのお
りあなたを慕っているようですし、いっその
こと、二人の仲を表沙汰に……？」

と、お玉が、云うのへ、源次郎が、
「しかし、これ以上をのぞむことは、臍を得
て蜀をのぞむたぐいで」

と、ちら——とひらめく学才の弁、そのと
き、がらッと襖が手荒く開いて、

「仇！」

おどりこむ膳一、一念、源次郎の肩先へ斬りつけたが、弱年と、それに相手を師とたててきた心の怯み——ところへ、お玉の投げつける箱枕！

「あッ」

かわそうとして、身を反らす隙——床の一刀を取った源次郎が、いま抜打ち！と土壇場へ、朦朧とあらわれる左膳の霊が、血みどろの姿を寄せてきて、しっかり源次郎の手をおさえた。

見える！ 見える——膳一にも。

「あ、父上ッ！」

叫ぶ膳一へ、お玉が懐剣をひらめかした。が——こんどはその手へ八助の霊、両手で拝むように絡みつくと、

「う、うごいてみる……」

と、蛇の鳴くようなほそぼそとした声。

「ちッ、畜生ッ、畜生ッ……」

狂気のようになるお玉より、源次郎、魂をうわずらせて、

「迷ったか左膳ッ」

と、引抜こうとする一刀が、なぜか鞘から離れない。

そのときだった。

左膳の霊が、声を荒く、



次号予告

叛謀秘録

烏羽玉侍

高木 竜二

白い四肢はむなしくあらが
いつつ声もなく夜の凶手に
陥ちた！ 触るるものすべ
てを襲う氷刃の主は？

「これ膳一、早く斬らぬか！」

その一言で、膳一、全身の勇をふるって躍りあがる一揮！

源次郎を斬った——返す刀で、お玉の乳の下を、グサ！と、見事に刺しつらぬいていたのである。

同時に、からからと洪笑する声がして左膳と八助の霊が消え、一斉に、狸の馬鹿囃子がどこからともなく陽気に聞こえはじめた。

「置いてけ置いてけ——」
その声もする。

膳一は、どっかとその場に坐ったまま、用人や小者や、雇人たちの馳けつけてきたのに、まるで放心したようになっていた。

「置いてけ、置いてけ……」

またしても、そして、屋敷のまわりを、馬鹿囃子が、まるで凱歌を奏するように、いつまでもいつまでも続いているのだった。

怪異復讐譚特集

ストック・ホテルの怪

竹谷十三

篠田正一・画

美しい女子大生

南田健吉は、トランクを開けるのも忘れ、

窓から見える夕日に輝く美しい海をほれぼれと眺めていた。都会の雑音を離れ、ここまで来た事が何とも楽しく、少年のように久しぶりに見る海に胸がおどった。

ホテルのバルコニーから眺める光景は、申し分がなかった。まだ盛夏には間があるし、避暑地としては、大都会から離れ過ぎているので、今、健吉の目に入る光景は淋しい白い波頭を見せる岩の岬と長く続く白い砂浜、ほとんど、人影さえなかった。

思ったより淋しいところだなー
そう一人ごとをつぶやきながら、

部屋からバルコニーに出るドアを押した。扉は、ギーッといやな音をたてた。白いペン

キがはげかけたバルコニーの手すりは、体格のよい健吉が強く押したら折れてしまうかと思われるほどに、風雨に打たれて腐っていた。バルコニーから下を見ると、芝生が伸びるだけ伸びた荒れ果てた庭があった。景色の美しさにくらべ、何ともわびしい限りのボロホテルと言う事が、到着間もない彼にもわかった。

(川崎の奴も、ひどい所を紹介したものだなあ)と彼は、心の中で思った。しかし、この方が、結局は金もかからず、彼の旅行の目的にも適しているのだ。

南田健吉は、新聞の探訪記者川崎とコンビで、ここ一年ほど、いろいろなルポルタージュものを書きまくって来た。中肉中背、ガッチリとした彼も、いささか疲れを覚え、少々

ノイローゼ気味になっていた。

「どこか、静かな海岸か山の中で、心身を休めたいんだがねえ」

健吉が、川崎に話したのは、一週間ほど前の事だった。それが、急に、昨日になって、川崎から電話があつて、ここを紹介して来た。

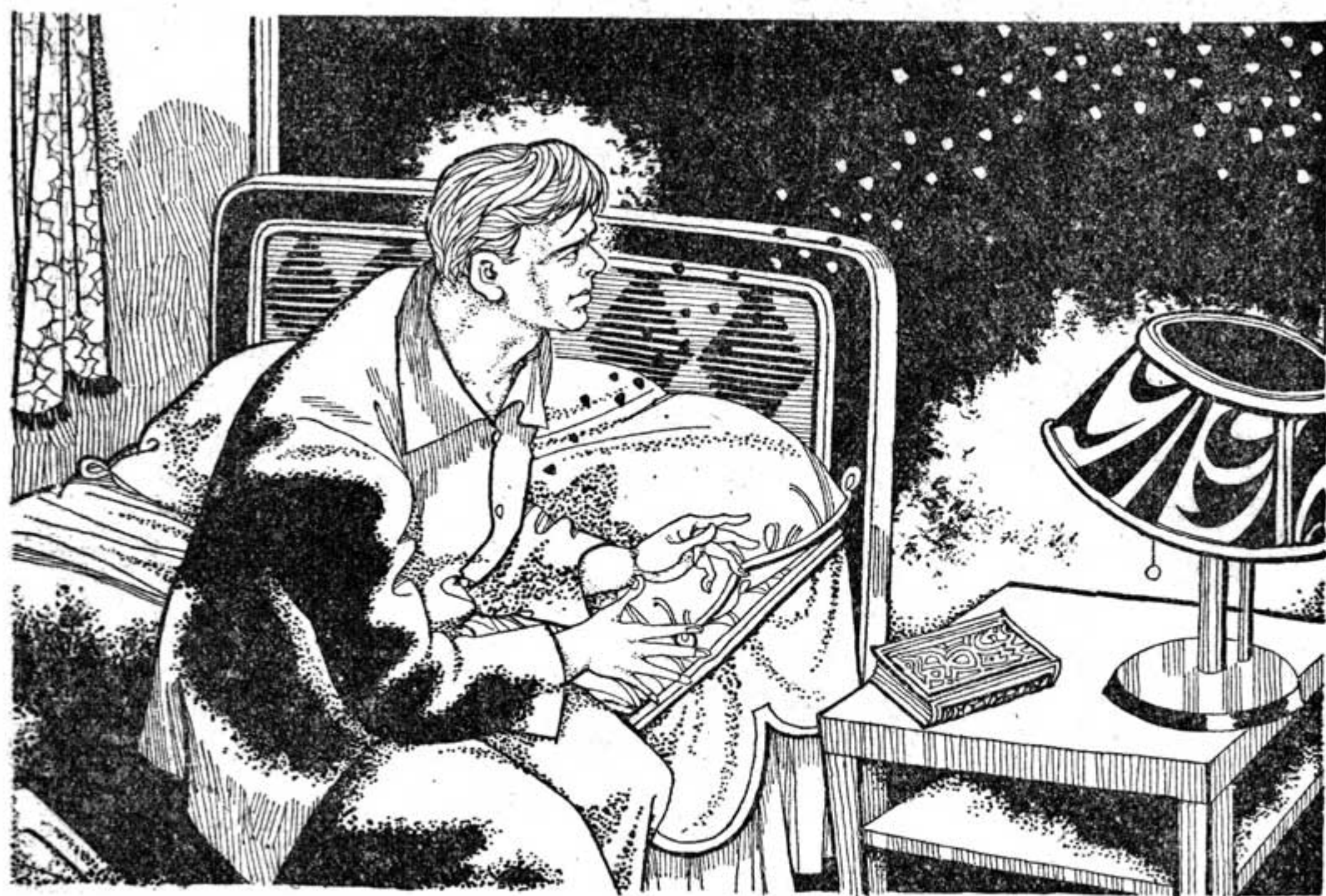
「景色のよい所だぜ。静かな事は、太鼓判を押すよ。真夏になると、それでも、多少は賑やかになるが、今なら大丈夫だ。S町まで車で行って、それからバスで一時間行くのだからね。遠くてもいいか？」

「遠い方がいい」

「そうか、じゃあ、そのホテルを紹介する。ストックホテルと言うのだ。ただ一軒しかない宿屋だから、すぐわかるよ」

「ストック・ホテル？ いやな名前だね。何だか倉庫みたいじゃないか？」

★深夜のホテルで閉ざされた部屋から女のすすり泣く声が！



「ハハハ……ストック
と言っても、このホテ
ルの名は、花の名前だ
よ。ストック・ジリフ
ラワーって花を知らん
かね」

「ああ、そうか。あの
丁字に似た匂いの高い
花だな。スマイレに似て
る……」

「そう、そうだよ。こ
のホテルの経営者を僕
は知ってるのだ。持主
は変人だがね。支配人
もよく知ってる。五、
六年前に僕はかなり長
く、そこに泊った事が
あるんだ。宿屋といっ
ても、半分、素人下宿
のようなものだけど
ね」

そんな会話をしたの
は、昨日の事だった。
今、こうして健吉は、
このホテルのバルコニ

ーから、沈み行く夕日を受け、黄金色から次
第にコバルト色に変わって行く光景を見ている
のだ。

「お客様、あのう、お食事は、食堂の方でな
さいますか。それとも、お部屋にお持ち致し
ましょうか」

東京のレストランには見られない古風なエ
ブロンを掛けている女中が、いつの間にか部
屋に入ってきて来た。

「そう、食堂に行くかな。ほかに、お客さん
はいるの？」

あまりに、静かなホテルの中だったので、
彼は女中に、そうたずねた。

「いえ、お客様は、こちら様お一人です」

「なに？ 僕一人？」

「ハイ……」

「じゃあ、食堂に出るも、なにもないではな
いか」

健吉は、呆れ顔で言った。

「ハイ。でも、マスターがおたずねして来い
と申しますので……」

丸顔の女中は、ノンビリとした調子で言っ
た。

「僕一人で、食堂で食べるのかい？」

彼は、広い食堂で一人で食事をする姿を想

像して苦笑した。

「いえ。食堂においで下さるのでしたら、マスターやお嬢さま方も御一緒です」

「なるほどそれもいいね。一応、ここの人達とお知合いになるのも……」

女中が部屋を出て行くと、健吉は服をきかえ、スポーシヤツになり、軽快な足取りで階下に降りて行った。

階下は、玄関のホールから食堂に続いていて、やはりホテルらしく出来ていた。ホールには、マスターと称する五十ぐらいの男が、別の女中と何か話をしていたが、彼の顔を見ると、ニコニコしながら寄って来た。

「さっきはどうも失礼致しました。お着きと同時に、お部屋の方に御挨拶に伺わねばなりませんのを……」

「いやいや。あなたですか、川崎君、K新聞の彼を知っていらっしゃると言うのは……」

健吉は、パイプを手にながら言った。

「ハイ。手前でございます。このホテルの支配人しております山野と申します。川崎さんとは、私が東京のホテルにおりました頃から存じ上げております」

「そうですか。僕も、川崎とは古い友人でしてね」

健吉は、マスター山野に案内されるまま、

食堂の方に入って行った。食堂は、ガランとして、半分、電気を消して暗かった。

「ちょうど今日は、朝、お客様がお帰りになって、他にお泊りの方もいらっしゃらないもので……失礼致しました」

そう言つて、山野は、消えていた方の電気スイッチをひねった。食堂は、やっと、明るくなった。さっき、部屋に來た女中が、窓の近くのテーブルに、食事の仕度をし始めた。

「夏場になりますと、このホテルもなかなか賑やかになりますので、パーティやダンスの会も開かれます……」

山野は、健吉にすまないとも思うのか、それとも、客のいないホテルを恥かしいとも思うのか、いろいろと弁解がましい事をしやべりたてた。

「いや……いいですよ。この方が静かでね。」

淋しいのは、いくら淋しくてもいいですよ。人の顔は、都会でいやと言うほど見ているから。ハハハ……」

と健吉は、朗らかに笑った。

「時に、僕と食事をなさる方は？」

ウェイトレスが、ナイフやホークを四人前

並べるのを見て彼は、山野支配人に尋ねた。

「ハイ。実は、他にお客様がいらっしゃいませんので、このホテルの持主でいらっしゃいます亀井菊五郎さんとお嬢さまの葉子さまが御一緒にお食事を致したいと申しますので。おさしつかえございませんでしたら……」

「いや、結構ですよ。一人で食べても面白くありませんからね……」

健吉が、そう言っている時、ホールの方から色の蒼黒い大柄な男と、華やかなワンピースを着た若い女性とが入って来た。

一通りの紹介がすみ、それぞれの席についた。

「山野、あのウイスキーをお客人に出して上げなさい」

色の黒い亀井菊五郎と言われる男は、低いダミ声で言った。

「いや、僕になら結構です……」

健吉は、前に坐った娘の美しさに、ちょっとテレたように言った。この女性が、菊五郎の娘とは……。こうも似ていない親子を見た事がないと健吉は心に思った。男であるから色の黒いのは驚かないが、この菊五郎と言う男の肌の黒さは、健康の黒さではなく、蒼黒く、何とも気味の悪い色だ。そして顔の肉が

「フヨフヨとたるんで、年は六十近いのだが何とも気味の悪い老人だった。それにくらべて葉子と言う娘は、小柄で痩せ型ではあるが、ビチビチと元気そうな若さにあふれていた。三日月型の美しい眉の下には、黒目がちなパッチリとした瞳が輝いていた。父親と顔形も似ていないのだ。葉子は、よくしゃべった。客である健吉にも、とても、愛想がよかった。二十前の娘にしては、世間なれたところもあった。」

「推理小説もお書きになるんですの？」

真赤な紅を塗った美しい唇が微笑んでいた。

「僕ですか？ いや……推理小説は大好きで読みますが、自分では書きませんな」

健吉は、葉子のコップにビールをついだ。

「私も大好きですわ。東京のお友達の家にとっても沢山あるのです」

「お嬢さんは、東京のS大に行っているから、いつでもは、あちらにいられます」

山野支配人が、健吉に説明した。

食事は、愉快的な雰囲気の中に終わった。

「どうぞ。こんな不便な所ですが、御ゆっくりとお泊り下さい」

亀井菊五郎も、最後に、ニヤリと笑って、

そんな愛想を言った。父親と支配人は、二人を残して、姿を消した。若い二人は、まだ、気楽に推理小説から世間話、ドキュメンタリードラマの事などと話題豊富に話し合っていた。

健吉は、こんな淋しい田舎で、葉子のような近代的な女性に会えたのは、何とも嬉しかったのだ。葉子のワンピースの胸を締めつける巾広いバンド、かなり胸を広く開けた洋服の姿といい、そこから見える乳房の谷間の美しさといい、健吉は、この娘が一目で好きになった。

「この辺は、静かですわ。朝早く、海岸を散歩なさるとよろしゅうございます」

クリクリとした目で、葉子は、健吉を意味ありげに眺めて言った。

「そうでしょうな。一つ、朝、早く起きませんか」

「御一緒に散歩致しましょうか。夜は、ここは、何にも見る所がない代り、朝の光景は、本当に素晴らしいですわ」

「ぜひ、お供しましょう。何時頃？」

「五時頃、お起きになれませんか？」

「五時？ とっても、駄目でしょうな。六時ではいけませんか……」

「オホホ……六時だっていいんですけど。五時頃に起きて、ここから一キロばかり離れた漁村に行ってみると面白いと思ったのです」

葉子は、生々とした子供っぽい調子で言った。

「そうですか。では、五時に起きてみましょうか。実は、僕は、ノイローゼ気味で、夜、眠れないんですよ。不眠症でしてね。眠っても、眠りが浅いんです」

「昼間、運動をなさるとよろしいんですよ。頭をお使いになり過ぎるの？」

「いや、いや……そんな事もないのですが。じゃあ、明日の朝、五時に起しに来て下さい。僕の部屋は、二階の隅から二番目の部屋です。一号室となっていました」

「ハイ……存じておりますわ。……では、おやすみなさいまし……」

葉子は、ハイヒールの音も高く、食堂から出て行った。

南田健吉は、彼女の後姿を見送り、心から楽しい思いがした。明日から、この少女、いや、もう、立派な娘になっている女性と、海岸

怪異復讐譚特集

を散歩したりするのだと思うと、幸福感をしみじみと味わう事が出来ると嬉しくなった。

不思議な泣き声

健吉は、あまり上等ではないが、それでも清潔なシーツのかかったベッドに入った。枕もとのスタンドをつけると腕時計を見た。まだ、八時半なのだ。(冗談じゃない。今から眠れっこない)と彼は、トランクの中から東京で買った長篇小説を取り出して読み始めた。この外国の作家は、決して、最近売り出した作家ではない。しかし、忙しい健吉は、今まで、読みたいと思いついて、ついに読めなかった作品だった。細かな活字で、二段組みになり、五百ページもあるのだ。こうした閑な時こそ楽しみながら読んで行ける本なのだ。

バルコニーの窓から見える海は、真暗だった。遠くの岬にある燈台の火が見えるだけである。廊下の方の窓から見る町の方も、観光地と違って、ネオンサインもなく、余り灯も見えなかった。海岸の片方の隅にあるこのホテルの附近は、全く、真夜中のように静かだった。このホテルの経営者亀井菊五郎とその娘葉子も、ここに住んでいるし、あの支配

人や女中、それにコックと使用人もかなりいるはずなのだが、ホテルの中は、まるで墓場のように静まりかえっているのだ。時折、ホールにある大時計が、時を告げる音が聞える。こうして、ベッドに横になりながら読書をする健吉の耳には、今まで、聞えなかった波の音が、ハッキリと聞えて来た。それは、なんとなく彼の心を子供の頃の思い出に誘い込んだ。大都会のあの神経を刺激するクラクシオンやリベットの音と違って、同じようなリズムが繰返し耳に聞えて来るのは楽しかった。(明日は早く起きて、しっとりと濡れた砂浜を子供のよう駆け



やるぞ！）そんな事を思いながら、健吉はいつの間にか、ウトウトとして来た。スタンドを消してみると、今度は、逆に、目が冴えてしまった。

銀座のバーの女のこと、仕事のこと、あれやこれやと頭に浮んで来るままに考えてみた。それでも、いつとはなく、健吉は、眠りについていた。

「くるしい……カンニンして……」

細い悲しげな女の声がした。健吉は、夢からさめた。いや、夢を見ていたのではない。どこからか、実際に、その声が聞えたのだ。それで、浅い眠りからさめたのだ。

バルコニーから流れ込む月光が、蒼白く、室内を浮き上がらせている。健吉は、ベッドから半身を起した。腕時計は、十一時を過ぎていた。ホテルの内部は、何のものの音もしないのだ。

「あなた……許して……アツ……アツイワヨ……お願い」

女の悲鳴だ。健吉は、今度は、ハッキリと現実に耳にした。

「ウ……ウーム……ウ……」

低い、身に迫るうめき声だ。

健吉は、ベッドから起き上って、スタンド

の灯をつけた。そして、そっとドアを開けて、廊下をのぞいた。廊下には、ボツンと階段の所に電気が一つ淋しくついていた。廊下にしかれた赤い毛のとれた絨毯が見えるだけで人影さえなかった。

廊下に出てみた。耳をすませて立っていたが何の物音もしない。

（変だなあ。夢かな……）健吉は、再び、ドアを閉めて、部屋に入った。

その時だ。

「もう、私を苦しめないで……カンニンしてアレー……」

女の泣き声だ。今度は、どこから、その声が聞えて来たか、健吉にも、ハッキリと分かった。それは、隣室だった。

健吉は、廊下に出た。この二階には、客として、彼以外に誰も泊っていないはずだった。経営者や支配人は階下の部屋らしいし、使用人達は、三階にいると思われるのだ。

健吉は、足音をしのばせて、隣室の扉の前に立った。その室は、特別室らしく、健吉の借りた部屋やその他の部屋と違って、やや広く、何号という札もついていなかった。

「苦しい……もう、やめて……アツ……ウー」

健吉は、扉に手をかけた。むろん、鍵がかかっていて、ピクともしなかった。ノックを試してみた。

「もし、もし……」

彼は声をかけた。

「ウーム……ウツ……」となお呻き声は続く。

「どうしたんですか。開けて下さい。もし、一体、あなたは誰？」

健吉は、扉をガチャガチャやりながら叫んだ。

「もう、私をいじめないで……お願い。あなたの御命令なら、何でも致しますから……」

カスレた細い女の声だ。

健吉は、扉の前で呆然として立っていた。（ホテルの者を誰か起そうか）と思った。だが、不思議に、内部の声は、それきり聞えなくなつた。しばらく、立って待った。しかし

再び、声は聞えないのだ。

夏の夜とはいえ、パジャマ一枚では、健吉は、肌寒さを感じた。

（変なことがあるものだ。これだけ、外から声をかけても、内部から何の返事もないのは、どういうわけなのだろう）

もう、声が聞えないので、仕方なく、彼は自分の室に帰った。

そして、ベッドに横になったが、目が冴えて眠れなかった。

(確かに、夢ではない。現に、自分は起きてあの室の前に行ったのだ。そして、外から声をかけた時も、内部から呻き声と悲しい女の泣き声が聞えたのだ) 彼は、何度も今のことを考えた。彼の耳の底には、哀れな女の声が今でも聞える気がした。

(ともかく明日になったら分ることだろう)

彼は、自分にそういう聞かせると、何とか眠る努力を続けた。

「南田さん……お目ざめになりません。南田さん……」

女の声だ。彼は、ハッとして目を開けた。

ドアを軽くノックする音がする。

「葉子さんですか……ちょっと待って！」

健吉は、大急ぎで飛び起きた。そして、服を着ると、ドアを開けた。短いスカートに白のブラウスを着た軽快な姿の葉子が、ニコリと笑っていた。

二人は、朝日がまだ上らない、夜露にしつとりと濡れた芝生を通り、ホテルを出た。葉子は、セッター種の犬を連れていた。朝の空気は、何物にもたとえようがないほど、さわやかで気持がよかった。

二人は、並んで小走りに駆けた。海岸は、人影もなく、波はおだやかで、二人を喜んで迎えてくれるようだった。

「素晴らしい、気持がいいな……」

健吉は、大きく手を振り、腹一杯に、空気を吸い込んだ。

「昨夜、よくお眠りになりました？」

葉子が、犬を鎖から離してやりながら言った。

「ええ……いや……」

健吉は、例の不思議な一件を思い出した。

「何かありましたの？」

葉子は、彼の顔を凝視した。

「ええ、ちょっとしたことがね。葉子さん、あの、僕の部屋の隣には、誰も泊っていないのでしょう？」

「ええ。どうしてですか？」

「何だか、昨夜、あの室で女の人の声がしたんですよ」

二人は、並んで、濡れた砂を素足になって踏みしめながら歩いた。

「まあ……」

葉子は、不思議そうに言った。

「変ですね。僕は、確かに聞いたんですよ。夢じゃないのです」

「こわいわ。そんなお話。だって、あの室は、母の部屋でしたの。二年前に死んでからあの室は、誰もお泊めしないし、閉ったままなのよ……」

「ええ？ 閉め切ったままですって？」

「ええ……時々、お掃除をすることはあっても、なぜか、父は、あの室をお客様にお貸ししたがないの」

「ウーム……」

健吉は唸った。

「それで……その声って、何をしゃべりましたの？」

「いや、しゃべったのじゃないですね。あれは、……ハッキリ分らないんですが……」

健吉は、あの哀れな女の泣き声のことを、そのまま、葉子に伝えるのは、何となく気がさした。

朝の気持のよい散歩が終り、ホテルの門の近くまで来た時に、葉子は、ピタリと健吉の前に立って、真面目な顔で言った。

「あの……どうかそんな話、ホテルの者にお話にならないで……この辺の人は、とても迷信深い人が多いから……」

「それはそうですね。第一、バカバカしい話ですもの。そんなことで、ホテルの名に傷が

つくと大変だから……」

「ありがとうございます」

葉子は、ニッコリと笑った。

再び、不思議な悲鳴

その日は、健吉は、近くの水族館に遊びに行ったり、忙しい一日を送った。ホテルの方も、二組ばかりの客が来て、賑やかだった。日曜日のため、町全体も活気づいていた。

その晩は、健吉は、隣室から何の声も聞かなかった。だから、あのことは忘れるともなく彼の心から消え去ってしまった。

だが、月曜の夜、再び、健吉は十二時近くになって、次の室から異様な物音と泣き声を聞いたのだ。

それは、ビシリ！ ビシリ！ と言う鞭の音とかすかに泣き悲しむ女の声だ。革バンドのようなもので、女のやわ肌を打つ音は、健吉の胸を締めつけるように響いた。

「お許し下さい。あ……あれ……」

女の声は、細くカスレていた。

健吉は、再び、ベッドから起きると、あの室の前に立った。例の如く、扉は固く閉じていた。彼は、今度は、ドアを叩きもせず、声もかけなかった。しばらく立って様子を確

かめて自分の室に帰るとバルコニーに出た。

そして、バルコニーをつたわって隣室の前行って見た。だが、やはり、バルコニーの扉も閉じて開かない。カーテンがしめられて、中の様子は見る事ができないのだが、どうも、人のいる気配はしなかった。

女の声はするが、相手の声は全く聞いたことがない。哀れなすすり泣きと共に、鞭のうなる音は続いた。

十分ばかりそうした声や音がした後で、また、例の静けさに帰って、それからは何の音もしないのだ。

その翌日、健吉は、意を決して、山野支配人に、それとなく、あの室のことを尋ねた。だが、結果は、平凡なものであった。あの室には、ここ二年間、誰もお泊めしていないとの返事だ。彼は、葉子に、この話をしようと思つて、彼女の姿を探したが、その日は、朝から、彼女は用があつて、駅のある町までバスで出掛けたとのことで、一日中、彼女に会えなかった。

健吉は、ボート遊びをして帰って来ると、食堂に久しぶりに亀井菊五郎の姿を見た。このホテルの経営者は、一日中、何をしているのか、ほとんど姿を見たことがなかった。彼

は、あのことを訊ねてみるのは、この男が一番だと思い、ズバリと切り出した。

「亀井さん、ちょっとお訊ねしますが、僕の泊つてゐる室の隣室は、前に、あなたの奥様が使つていらした部屋だそうですが……」

「そうですね……どうして……」

亀井は、不思議そうに健吉の顔を見た。

「実は、あの部屋に、夜中になると、女の泣き声が聞えるのですが……」

「女の泣き声？」

ギョツとしたように亀井は、目を丸くして、健吉を凝視した。健吉は、健吉で、亀井が、こんなにも彼の一言で驚くとは、全く、予想もしていなかった。

「ええ、あの声は、奥様の声ですか？」

「家内の声がするんですって……バ……バカな！ 家内は、二年前に死んでゐるんですよ」

「じゃあ、あの夜中の女の声は、誰ですか？ いじめられて、悲しい声で泣いてる女は」

「そ……そんなバカなことが……」

「いや、本当ですよ。僕は、これ

怪異復讐譚特集

で二晩も聞いてるのです」

「あんたは、夢を見ているんだ。あの部屋に泊った客は、今までに、何十人もあるが、誰一人、そんなことをいう人はない！」

亀井は、怒ったように蒼黒い顔を健吉の方に突き出して来た。

「しかし、本当に、聞えるんですからね」

健吉も、自分のいったことが子供だましのことでないことを強調した。

「いや、いや。何といっても、そんなバカなことはない。あんたは、わしをおどす考えなんだろう……」

「失礼なことをいわんで下さい。僕は、何も、そんなことをいって、このホテルの名を傷つけようと思っているのじゃないんだから！」

「さあ、どうだかな。あんたは若い。娘の葉子に、何かたきつけられているのじゃろ」

「何をいうのです」

今度は、健吉が怒った。二人は、暫く、睨み合った。

「女の泣き声が聞えるなんて、と……とんでもないいいがかりじゃ。……そんなことがあるはずはない。……ハマ子が死んで二年も過ぎて……そんな……」

亀井は、半分は自分にいうように、口の中ですつすつといいながら、挨拶もせず、健吉の傍から離れて行った。健吉は、一度は腹を立てたが、余りに亀井の態度が、常人離れがしているので、黙って彼の後を見送っていた。

健吉の一言は、よほど、亀井の胸にこたえるものがあつたのだろう。すると、このことの裏には、何か事件があるはずだ。健吉は、急に、あの声の実体を知りたく思った。彼は葉子の帰りを待っていた。

夕方、食事の後に、健吉は、葉子を誘い出して、散歩に出かけた。そして、今日のことを彼女に語り、彼女の母について、いろいろとたずねた。だが、葉子は、顔色こそ蒼くしたが、言葉少く、あまり語らなかつた。

「私の母は、二年前に病気で死にました。もともと、私は、もう、その頃、東京の高校に入学していたので、家にはおりませんでした。私の母は、私を連れて、亀井の所に後妻として来たのです。私が小学二年の時……」

「そうですか、道理で、あなたとお父さんは、少しも似ていませんね」

健吉は、わが意を得たりといった。「ハイ……父と私は、何の血縁関係もありま

せん。私が小学校六年の頃から、母は病気で死ぬまで、あの室から一步も出なかつたのです」

「それで、御病気は……」

「胸でした。母は、色が白く、とても美しい人でしたが、痩せて……」

葉子は、そつと涙を押えた。

話は、それ以上、何もなかつた。いや、それ以上、葉子は語りたがらないのだった。「とも角、あの室から女の泣き声が聞えるのは不思議ですね。明日でも、一度、調べてみたいのですが……」

「父が怒りますわ。あの室に、他の者が入るのを極度に嫌っています。きちがいのように怒り出すと思うの」

「では、尋常では鍵を借りるわけにはいかないですね」

「ええ……でも、あの室の鍵なら、私がある所を知ってます」

「では、今夜でも、何とか……」

「今夜は、駄目ですわ。でも、明日なら父が町まで出かけますから、その間に……」

「結構ですね。一つ、あの室を調べてみましょう。人工衛星が飛ぶという時代に、二年も前の女の人の声がするなんて、どうしても

信じられませんか……」

健吉は、優しく葉子の手を握った。葉子はいつもの明るい顔に帰って、ニッコリと笑った。

その夜は、あの悲しい泣き声は、いつまで待っても聞えて来なかった。

拷問道具と日記

翌日、健吉は葉子が父親の出かけるのを知らせに来るのを待った。部屋にいても、町を歩いていても、そのことが気になって、イライラしていた。

午後の一時半頃だった。葉子が、ホールにいる健吉の耳にささやいた。

「父が出かけました。夕方まで帰りませんわ。人目につかないように、二階に上って下さい。私は、先に行って、あの室で待っておりますから……」

葉子は、そう言うと、女中や他の使用人の目につかぬように、二階に上って行った。健吉も、はやる心をおさえて、しばらく、間を置いて二階に上った。

自分の室の隣の扉を開けて入ると、葉子が素早く、内部から鍵をかけた。

室内は昼でもカーテンがしめてあり、薄暗



る入口があり、右手の壁近くに、ダブルベッドがあった。室内は、キチンとして、テーブルなどには、ホコリが白く溜っていた。女の部屋であつたにしては、殺風景な室だ。もっとも、女の人が住んでいたのは、二年前のことなのだ。

「調べるといっても、何もありませんね」

健吉は、低い声で葉子にいった。

葉子は、黙って、ベッドの下を指さした。健吉は、膝をついてのぞくと、奥の方に大きなトランクがあつた。彼は、それを引き出してみた。鍵はかかつていなかった。トランクの蓋を開けて、健吉は、思わずアッと叫んだ。トランクの中には、鉄の鎖だの、革バンドだのが一杯つまっていた。

「こ……これは……」

健吉は、葉子の方を見た。葉子の目にはきびしい光があつた。

「私は、知っていたの。これで、お母さまが毎晩、苦しめられていたのです」

葉子は、トランクの中の物を出して、健吉に示した。細い鎖、鉄の足枷、手錠、革製の

コルセット、胸当などが出て来た。

「まだあるんです！」

冷たい声でいうと、葉子は、ポケットから出した小さい鍵で、室についた戸棚を開けた。そこには、乗馬用の鞭を始め、いろいろの拷問道具が出て来た。

「ウーム」

健吉は、唸らざるを得なかった。

「これが、お母さんの日記です……」

そういつて、葉子は、一番奥にある箱の中から、桃色の表紙の手帳を出して、健吉に見せた。

健吉は、手に取ると、パラパラとページをめくって、目を通した。

何月何日

私は、夫に責め殺される日も近い。みずから求めた運命だから仕方がない。ただ、葉子が可哀そうだ。何も知らない葉子。でも、高校に入って、伯母の家にいる間は、安心だ。夫は、怖ろしい人間だ。私は、昨夜は、三回気を失った。近頃は、体が衰弱しているためか、夫の気に入るまで、責め苦に堪えることができないのだ。あの人の責め方は、惨忍だ。体に傷が残らないで苦しめる方法ばかりを考え出す。

何月何日

こうやってベッドに寝たきりしていると、死んだ夫と知り合った頃の楽しい思い出が、わずかに私の心を慰めてくれる。あの人は優しくなかった。だが、原爆は、あの人をこの世から奪い去ってしまった。私は、今の夫に騙されたとはいわないが、葉子が小さいあの頃では私の手一つで育てることができなかった。私は、葉子さえ、立派に育てることができれば、どんなことでもがまんする覚悟はした。だが、こんなにまで苦しめられるとは思わなかった。裸にされ、鉄の鞭で殴られ、さかさに吊り下げられ……それが、今の夫の私に対する愛情なのだ。私を愛するから責めるのだという。この気持、私にもわからないことはない。だが……あまりにひどい。

海が灰色に見える日

こんな日記を書いてもどうにもならないことがわかっていく。だけど、やっぱり書いている私。昨夜は、ホテルのお客様が多かった。で、一日中、ほとんど責められなかった。不思議なもので、責められないと淋しい気もするのだ。人間で勝手なものだ。夫の虐待から逃げて逃げられないことはないのに、この細い体で、こうしてベッドにいるのも、やは

り、自分から求めている苦業かも知れない。夫ばかりを責められない。あの人が、私を愛していることは確かなのだ。

日記には、こんなことが書いてあった。そして、とても公表できないような、細かな点にも触れていた。

「この日記によると、結局、あなたのお母さまは、あの男に責め殺されたも同然ですね」

健吉は、日記を閉じると、ベッドの横に並んでかけている葉子にいった。

「ええ……死因は、明らかに肺病のため咯血したのですが、直接、間接の原因は、父が作ったのです」

「あなたは、これを前から御存じですか？」

「ええ、でも、この日記を見たりしたのは、半年ほど前です。この日記は、本当は、ここになかったのです」

「しかし、いかに愛するからといって、一人の人間をこんなに虐待するのは人権蹂躪ですね。刑法の罪は、充分に受けますよ」

「母は、三日も、四日も、絶食させられたりしていました。その頃、私は中学生で、何も知りませんでした。今から思うと、いろいろのことがわかります」

「僕は、このことを知った以上黙ってはいられませんが」

「でも、どうぞ。このことは公けにしないで下さいまし。それでないと、今度は、私が、母と同じ運命を辿ることになりますもの……」

「では、どうしろというのです。葉子さん」

「ただ、私、誰か、信じられる方に、母の苦しみだけ分っていただきたかったです。母は、きっと、あなたに苦しみを知っていたきたかったのでしょう。だから、夢に……」

「冗談じゃない。そんなことは信じられませんがね。あなただって、この文明の世の中に、死んだ人が叫ぶなんて信じていないでしょう。大学生のあなたが……」

「ええ……でも、不思議ですわね。どうして夜、女の声があなたのお耳に入ったのでしょうか」

二人は、互いに顔を見合せた。

「あなたの望みは、わかりました。あなたのお父さんを訴えることはやめましょう。そして、あなたの死んだお母さんの望みがある程度、達せられるようにしましょう。すべてを公けにすることは、第一、あなたの名誉にも傷が付きましますからね」

健吉は、そっと、葉子の唇を求めた。

それから三日して、健吉は、ストック・ホテルを黙って去った。彼が、亀井菊五郎とどんな話をしたのか、葉子も知らなかった。

秋になって、葉子も東京へ戻った。

暮が迫って来たある日のことであつた。

葉子から、健吉に次のような手紙が来た。

大好きな健吉さま

父が先月末に自殺を致しました。ホテルの経営が困難になったためというのが、表面の理由でございます。

しかし、本当の理由は、私とあなたの二人だけが存じているのだと思うと、何か不思議な気が致します。例のものは、すべて、父自身で仕末したものと思います。

いろいろと御心配下さいまして、どんなにお礼を申してよいやら分りません。死んだ母が、あの夜、あなた様に叫んだあの声は、もう、永久に聞えないことでしょう。母も、やすらかに天国に参ったことと存じます。クリスマスには、一度、お目にかかりたいと楽しみにしております。

葉子

健吉は、早速、彼女に返事を書いた。

可愛い葉子様

お父上の死去、お気の毒でした。でも、結局は、その方がよかったですね。あのいやな

思い出のホテルに、もう、あなたも帰らなくてすみますから。お母さまの苦しみの声も、遠い昔のことになりましたね。

葉子さん、あの不思議な声について、僕はあの部屋を調べた時に、すべて分っていたのですよ。あなたは、前の晩に、スピーカーを取っておいだしようが、コードまでは取れなかったのです。僕は、戸棚を開ける時に白い壁の上に急に取りつけたらしいコードを見て、ピンと来ましたよ。あの声は、あなたの声でした。あなたは、僕をこの事件に引き入れようとして、あの部屋に小さなスピーカーをつけ、コードであなたの部屋まで引きマイクホンで、お芝居をしたのでしょうか。何とかお母さまの復讐をしようと思ったのです。僕は、まんまと引っかかりました。もっとも、僕は満足です。あなたのような美しい恋人を得たのですから。

あなたが、あんなお芝居をする気になったのは、どうしてかということも東京に帰ってから分りました。あなたが、大学でドラマの研究をされ、立派な声優だということを知ったからです。

クリスマスには、ぜひ、愉快に一晩中、遊び明かしましょう。

あなたの健吉



お島仇討旅

や
ざり
じやう
大相堂ハ
山日向一亭



貞操代十両

左に見えるのが大菩薩峠。その裾をず
っと流れくだったってきた笛吹川の土境に、
江戸は浅草育ちの猿若伊太郎が、粉ッ煙
草を煙管につめこみ、一服やりながらニヤ
ニヤわらっている。

ひき廻しの旅合羽。紺の結城に一本どっこの
献上博多、梵天手綱染の上三尺をきりりと締
め、千種の股引、腰には長脇差——と、おあつ
らえの旅にん姿。

が、ゆっくり腰をおろしてニヤニヤわらっている
ところではない騒ぎが、伊太郎の目の前、五間と
離れていない土堤の上にもつれあっている。
若い女の一人旅を、街道雲助が三人ばかりで、手こ

怪異復讐譚特集



猛った男に、女はたちまち横面を思いきり張り飛ばされ、蹴倒され、

「ひいッ……」

悲鳴ひと声、草の上にねじ伏せられる。

「ざまアしろ。おい、縄、縄！」

あたりに落ちている荒縄で、女の両手をうしろに縛りあげ胸にも二巻き三巻きして、土堤のかげにおしころがした。

「どうだ。もがいてもあがいても、もうこうなりや、猫の前のねずみだ」

雲助三人、ふうっと息をつき、互いに顔を見合わせて、にやりと笑った。

女はなおも必死。通る人あらば助けを求めようと身悶えするうちに、土堤に腰をおろしている伊太郎が眼に入った。

「もしッ、ちょいとそこの旅の人、助けて！ 助けておくれふッ！」

が、伊太郎、そんな女の悲鳴を、ニヤニヤした顔でききながら、あいかわらず、煙管から紫のけむりをぷかり、ぷかり……。

雲助どもも、そんな伊太郎の姿に気づいてギョツとした。今まで女に夢中で気がつかなかったのだ。

めにしようと思えつづけている真最中だ。
「あれッ、ちくしょう！ はなせ！ 何しやがるンだい！」
女は気強く抵抗している。おさえつけられても、手足を必死にうごかして、雲助どもの自由にされまいと、襟も裾も乱してのけなげな奮闘。
が——しよせんは女の力。まして、相手はこんな仕事には馴れたゴロツキ人足が三人、
「ちくしょう、めっぼう力の強いアマだな。いいかげんに往生したらどうだ。こうなりや少し、痛い目にあわすぜ」

討ちそこねた当の仇に縛り上げられたお島、身を悶えてくやし涙に暮れるうち……

「ちくしょう！ お前さん、助けてくれないのかい。お前もこの雲助の仲間かい！」

じれて、女は絶叫した。

「よせやい。おれはそんな奴らの仲間じゃねえよ」

やっと、伊太郎、口をひらいた。

「そんなら、どうして、あたしがこんな目にあっているのに、助けようとしらないんだい」

伊太郎、のんびり川の流れを眺めたままの顔で、

「いくら、くれる？」

「えッ？」

女が、おどろいた。

雲助たちも（妙なやつだな）という顔で伊太郎を見る。

「助けたら、いくらくれるかって、きいているんだよ。うごくお腹がへるからな」

「ちきしょ！ こんな時に、なんてイヤな奴なんだろ！」

と、女はわめいたが、仕方なく、

「二分！」

首をのばして、黄色い声でどなった。

「馬鹿アいえ、やすい！」

伊太郎、おちついたものだ。

「一両！」

「まだ、まだ……」

「二両！」

「いやだな……」

「ちきしょ！ 五両！」

「もう、ひと声！」

「ええいッ、十両ですから、助けておくれよッ！」

「十両か……。よし、手をうとう……」

伊太郎、煙管をボンとはたくと、ゆっくり立ちあがった。

「やい、やい、やい……」

今度は雲助どもがわめいた。

「妙な渡世人だ。十両もらって、おれたちに手むかおうっていうのか！」

伊太郎、ニヤリとわらって、二三步足をすめた。

「そうよ。だが、おめえ達が、もし十五両だすっていうなら、おれはこのまま、眼をつぶっているぜ」

「何をいやがる。うす気味悪い野郎だ。おい兄弟、こいつからやつつけちまえ！」

「がってんだ！」

女を放りだす。三人一度に、ありあわせの棒を振りあげ、伊太郎の頭をめがけて打つてかかる。

「おっと、よせよせ。おめえ達より、おれのほうがいくらか強いようだぜ」

右に左に避けながら、伊太郎、すばやく雲助の一人から棒を奪いとると、片手にかまえた。

これといった流儀のあろう筈はないが、眼のくぼり、足の踏まえ、みるからに喧嘩馴れた身のこなし。

みるまに三人を叩き伏せる。

「ちくしょう！ おぼえてやがれ！」

お定まりのセリフを残して、雲助どもは逃げていく。

「強いんだねえ、お前さん。さ、早く縄をといておくれよ」

女は息をのんでみとれていたが、背中をまわして、伊太郎に催促した。

「よしきた。だがお前さん、約束の十両は確かに持っているんだろうな。十両といえど大金だぜ」

「持ってるよ」

「どこに？」

「ふところにさ」

「どれどれ……」

「いやッ、馬鹿ッ、そんなところをさわるんじゃないよ」

女は身をすくませる。

伊太郎、わらって縄を切りほどいた。

仇討ち女旅

その夜。甲州は七里の旅籠で――

「――金をだせば助けてやるといわれた時には、なんてイヤな奴なんだろうと思ったが、こうしてむかいあって話してみると、氣づぶのいい、惚れ惚れするような、おにいさんだねえ……」

膝に膳をはさんでのさしむかい。猿若伊太郎と、れいの旅の女だ。

膳の上には銚子も二三本並んでいて、女が目もともほんのりとうす赤い。年の頃は、二十二、三。年増だが、亭持ちではなさそうだ。ういういしいところもある。

「お世辞をいって、さっきの十両をとり戻そうたって、駄目だぜ。この十両は、ひと月たったら必らず返す。近頃さっぱり目がでねえで、今夜も野宿かとあきらめていたところへ、ちようどいいカモがあらわれたっていうわけだ」

「いいんだよ。約束は約束。その金は器用にふところへしまっておくもんだよ。それよりも、あたしやまだ、お前さんの名前を知らない

いんだが、袖すり合うも多少の縁、まして、危いところを助けてくれた恩人、ちょっと聞かせておくんなさいな」

「ひとの名を聞く前に、自分の名前を云ったらどうだ」

「こりやアあたしが悪かった。下総中山の生れで、あたしの名はお島。よろしくお見知りおき下さいよ」

「その下総生れのお島さんが、なんでこんな一人旅を……?」

「話して、あまり自慢にもならないんだが、あたしのお父っあんというのは、中山で小さな一家を張っていた半兵衛という貸元……。子分も二十人足らずの渡世でしたが、村の人たちからは、仏の親分なんて云われるほど、地元の面倒をよくみた人でした……」

「ふむ……」

「ところがある夜、家に草鞋を脱いだ一人の旅人が、子分の手薄をみると、いきなりお父っあんを斬り殺し、有り金を盗むとずらかりました……」

「ひでえことを……」

「あたしは、ちようどその夜、隣村の親類の家へ泊りにいって、その旅にんとは、残念ながら顔をあわさなかった。子分の口から、そのいつの名前だけはきいて……」

「それで、お父っあんの仇をうつために、その男を探して旅に出たというわけか……。それにしても、親分を討たれて、一家の子分衆は、いったい……」

「親分子分といったって、やくざはやくざ。命を張って、あてもわからない仇討旅にでようなんて奴ア、一人も居ないのさ。いいえ、骨ッ節の強いのが一人居て、あたしと一緒に旅立ちしたんだけど……」

「どうなすった……?」

「――旅を重ねて、十日もたたぬうちに、旅籠泊りの夜なか、間の襖をそろりとあけて、あたしの寝床に忍びこんできたってやつさ……」

「なるほどね。ひでえ奴だが、ありそうなことだ」

「そいつの横つつらをひっぱたいて、それからあとは一人旅……。苦しいことや辛いこと、女ひとりの仇討旅も、もう一年になるというわけさ……」

「せっかくの器量が、旅の垢と埃にまみれて

怪異復讐譚特集

「だいぶやつれているようだ……」

「おや、とんだ愚痴話をしてしまったが、お前さんの名前を、まだ聞かなかったね」

「おれは見たとおりの旅がらすで、名乗るほどの男じゃねえが、伊太郎という、ケチな渡世人さ……」

伊太郎は盃を口にふくんだ。

「伊太郎……さん……?」

その時、お島の眼がキラリと光った。伊太郎の盃に酒を注ぐ手が、かすかにふるえた。

十両返すぜ

真夜中――

眠っている伊太郎の部屋の障子が、そろりとあいた。

黒い影が、足音を殺して忍び込み、伊太郎の寝息をうかがう。

と、あいくちを逆手に持った白い腕が、伊太郎の咽喉もとを狙って、

ぶつり!……

だが、伊太郎、わずかに首をひねって刃をかわした。

「何しやがる!」

はじめの一撃に失敗した黒い影は、再びかまえて、こんどは伊太郎の脇腹をめがけ、

「お父っあんの仇!」

女の声だ。

「ええッ?」

伊太郎、びっくりした。暗い行燈のあかりにすかしてみると、相手は眼を血走らせたお島。唇を噛んで、あいくちを突っかける。

「じょうだんじゃねえ、お島さん。血迷うのもいいかげんにしてくれ。おれはお前のお父っあんなんか知らねえぜ」

泡を喰って弁明する。

「何いってやがんだい。今になって逃げるんじゃないよ。あたしのお父っあんを殺したのは、旅がらす伊太郎という男、年の頃から江戸訛、あたしのカンにくるいはないんだ!」

「馬鹿いっちゃいけねえ。ひでえ濡れぎぬだよ、そいつア」

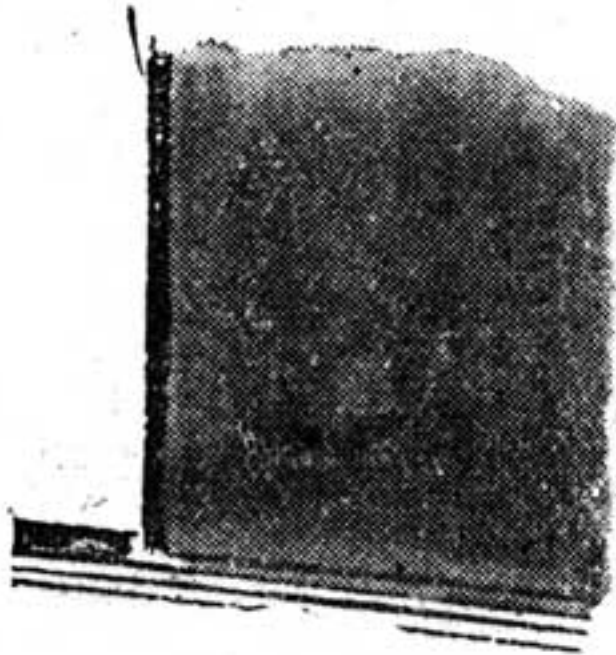
「伊太郎! 覚悟!」

必死になって突きかけるお島のあいくちを軽くあしらいな

らも伊太郎、面倒になってその細腕をピシリッと打った。

「あっ!」

と、もろくも取



り落すお島。

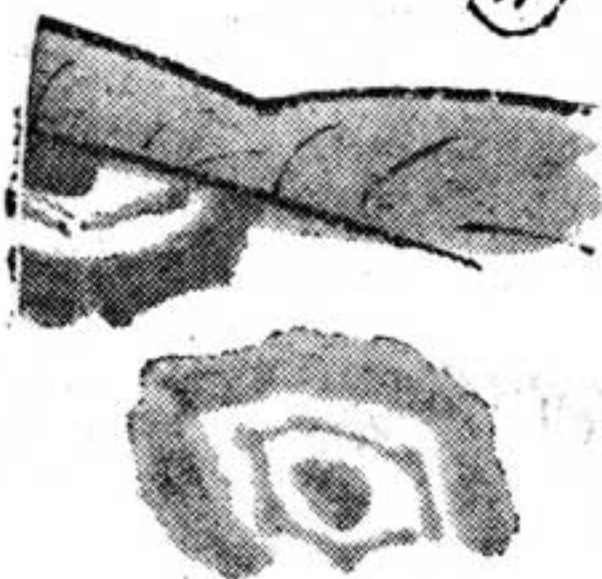
「お島さん。あっしがいま、いくら云いわけしても、お前さんは納得しちゃうくれめえ。ここで騒いだら、ほかの泊り客にも迷惑。おれは逃げだすから、あとを追わねえでおくんなさいよ」

伊太郎、お島を抱きすくめて、布団の上にねじ伏せた。

「ちきしょッ!」

ありあわせの布紐で、お島の両手をくるくるとうしろに縛り、ついでに足も縛って、口には猿ぐつわを噛ませ、布団の中に押しこんだ。

「縄をといてその札にもらった十両の金。また縛っちゃったんだから、持っていくわけにはいかねえ。残念だが、ここに置いてくぜ。ただし、旅籠代はお前が払ってくれよ。おれはまた、一文無しだからな」



縛ったお島の胸の上に、十両包みをそつとのせると、手早く身仕度、手甲脚絆に三度笠そつと宿を脱けだす伊太郎。
あとにはお島が、くやし涙をポロポロ、身を悶えてうめくばかり……。

美濃国恵那、長島在の貸元、佐々良木喜三郎の家。

あれから五日後、草鞋をこの一家にぬいだお島が、その一部始終を、涙をこぼして語った。

おだやかな顔で、お島の話聞いていた喜三郎、

「——なるほど。お前の口惜しがるのは無理じゃねえが、おれにはもう一つ、やはりその男を仇ときめつけることのできねえフシがある……」

「どうして？ 親分……」

「お前の父っあん半兵衛を斬って金を盗むほどの悪党が、せつかくお前からせしめた十両を、わざわざ返すかい。……いや、それよりも、お前の命だって、そのままにはしておかねえだろうよ」

「……………」

「お前が仇の顔を知らねえのが、なんといっ

ても残念だな」

「はい」

「まあ、あせつちやいけねえ。気を長く持って、しばらくはこの家で足を休めていけ。半兵衛とおれとは従兄弟同志の間柄だ。遠慮はいらねえ。そのうちにおれが仇を討たせてやるからな」

理にかなった喜三郎の言葉に、勝ち気なお島も、ただうなずくばかり。

やくざ稼業をしていても、おだやかな人柄の喜三郎に、お島はふと、死んだ父親の面影を感じて、ぬいだ草鞋を忘れるほど、居心地のよい逗留



を続けた。

この佐々良木一家で、ただ一つ、お島にと
ってありがたくないのは、喜三郎の子分の捨
松という、のっぺりした顔の男が、何かにつ
けて親切の押売りをする事だった。

色男をハナにかけて、ムシズのはしるよう
ないやらしい眼で、お島を誘う。

やがては、人気のない隙をみて、お島の肩
に手をかけるほどの露骨なそぶりでせまっ
てきた。

「何するンです。あんまりいやらしいことを
すると、親分にいいつけるよ！」

柳眉を逆立てるお島に、捨松は図々しく顔
をつきだす。

「えへへ……なにもそう嫌うことはねえで
しょう。年増さかりのその身体を、あそばせ
ておくのは惜しいと思ひましてね……」

ピシリッと、お島の手が、捨松の頬に鳴っ
た。

さすがにムッと、顔を青くした捨松、それ
からはあまり妙な誘惑はしない。

が、何とはなしに居辛くなったお島、仇の
手がかりはつかめず、そろそろ草鞋をはく時
と、喜三郎の前に、改まった顔であいさつに
でた。

と、待っていたように喜三郎が、顔色を輝
やかせてお島に云った。

「お島、よろこべ、耳よりな話だ——。実は
一年ばかり前に隣村の飯羽間へ巣をつくった
虎十というゴロツキ、腕つぶしの強いのを自
慢にして、ならず者を十人ばかり集め、てめ
えから飯羽間一家と名乗って、おれの縄張り
に爪を磨いでいる……」

「……」
「その飯羽間の虎十が、もとの名を山嵐の伊
太郎、しかも江戸生れだという、たしかに聞
きこみなんだ……」

「江戸生れで、山嵐の伊太郎……」
お島も眼を輝やかして、ひと膝ぐいととり
だした。

「名前を変えてもぐりこむほどの奴だから、
今までによくねえことをしてきやがったに違
いねえ。その伊太郎の虎十は、一家をかまえ
てからも、堅儀に喧嘩をふっかけ乱暴沙汰が
絶えねえ。おれも隣村の庄屋どんから、なん
とかしてくれと頼まれていたんだが、むやみ
な争いごとは好まねえところから、ついこれ
まで見逃してきたんだ。それが半兵衛の仇と
あっちゃもうがまんならねえ。お島、父っあ
んの仇は、この喜三郎が助太刀して、必らず

討ってやるぜ」

「親分、あ、ありがとうございますいま
す……」

お島、畳に両手をついて思わず
嬉し泣き。一年間の苦勞も、これ
でむくわれるというもの……。

が、その時、身内の捨松が、壁
一重の隣りに立ち聞きしているの
を、喜三郎もお島も気がつかなか
った。

お島にみだらな恋慕をしかけて
横つらを張りとはされた捨松、二
人の話を盗み聞いて何を思ったか
ニヤリとわらった。

そのまま佐々良木一家をぬけ出
して、夜の街道をまっしぐらに、飯羽間をめ
ざして馳けていく捨松である。

寝返り子分

飯羽間虎十一家の奥座敷。夜ももうだいぶ
更けている。

親分の虎十が、女房のお浜を相手に酒を飲
んでいる。女房といっても、ついこの間まで
は、村でただ一軒の居酒屋で酌婦をしていた
女、くずれた身体が虎十の膝のあたりにだら

集特譚警復異怪

しなくもたれかかり、酌の手つきだけは馴れたもの。

その虎十の前、一間ばかり離れて、頭をさげ、膝をそろえて、卑屈な姿で坐っているのは、喜三郎一家の捨松。

「おい、お浜。捨松にも酌をしてやれ」

虎十、既に五六合入って赤くなった顔で、お浜に云いつける。

「へえ、これはどうも。ねえさんのお酌じゃもったいない……」

ペコペコと頭をさげて捨松、盃をのべながら、お浜の色っぽい腰のあたりを眼でなめまわしている。裾が乱れて赤いもののかげから白い足がチラチラ見えるのだ。

虎十、そんな捨松の様子を眺めながら、

「まったく、よく知らせてくれたなア。なアに、喜三郎の縄張りも、近いうちにおれのものだ。その時には、捨松、お前を一の子分に、佐々良木の縄張りをまかせてやってもいいンだぜ……」

「へえ、ありがとうござえます。どうか、よろしく……」

いやしい笑みで、幾度も頭をさげる。

「これは、すくねえが足代だ。佐々良木からわざわざ夜道をかけて知らせてくれた礼だ。」

とつてくれ」

紙にひねった小粒が、捨松の前に無造作に投げだされる。

「あつしは親分、なにもそんな、礼をもらいたくて……」

「いいから、とつておきな」

「へ、へい。それじゃお言葉にあまえて」

捨松、金をおし頂き、小腰をかがめて部屋を出ていく。

虎十、お浜と顔を見あわせ、フフフ……とわらった。

「お島とかいったな。馬鹿な女だ。女の細腕で、この虎十が斬れると思うか。やくざのくせに仇討なんて、馬鹿々々しいにもほどがある」

「でも、その女には、どうやら喜三郎がついている様子。油断はできないよ、お前さん」

「なアに。かえってこっちの思うツボだ。これをきっかけに、佐々良木一家をぶつつぶすんだ。喜三郎さえ叩っ斬れば、その女の命もこっちのもンさ……」

「そうなりや、あたしゃこのあたりいったいの親分のアネゴだね。うれしいよ」

お浜は、しどけなく虎十の首に手をまいてかじりつく。

「——ところでお浜。きのうの夜、うちへ草鞋をぬいだ旅にん。いいつらがまえた。ひと目みたときに、かなり腕のたつ男と、おれはにらんだ……」

「わかった。あの旅にんに、喜三郎を殺らせる気だね」

「うふふ。おめえもだいぶ、おれの気持がわかるようになったな」

「そりや、お前の、女房だもの……」

あまえかかるお浜の身体を、ぐっと抱きしめ、そのまま横にくずれる虎十である。

月光殺氣

「——人殺し代が、たった五両か……」

星のよく光っている夜空を仰ぎ、ぼそりとつぶやいた。

「——この五両よりも、あんときの十両のほうが、割がよかったな……」

あの、笛吹川の土堤で、お島を助けた時のことを思いだしている伊太郎である。

あの十両は、とんだことで、またお島に返してしまつたが……

(いい女だったな……おれを仇を間違えやがつたところを見ると、だいぶそそっかしい女だが……)

お島を縛って布団の中におしこめた時の、
やわらかい感触が、まだ伊太郎のてのひらに
残っている。

思ひだすと、ふと、胸がうずく。
が、今はそれどころではない。

——奥座敷に呼ばれた伊太郎、こんな夜ふ
けに何のことかと思ったら、隣村の佐々良木
喜三郎をねむらせてくれと、虎十親分に頼ま
れた。

うまく殺してくれたら、礼金は五両……
人殺しの礼なんか欲しい伊太郎ではなかつ
たが、一宿一飯のやくざの義理は、旅がらす
の身にとって鉄よりも固い。

いやな時に、いやな一家へ草鞋をぬいだも

んだと悔んでみたが、これもいんねん、仕方
がねえ……

やりましょう……と、ひき受けてみたもの
の、恨みつらみのねえ人を斬るのは、どうも
寝ざめがわるそうだな。

さっぱり気のすすまない、猿若伊太郎だっ
た。

しかし、約束は約束、きりりと喧嘩仕度に
身をかためた伊太郎、夜の九つ、子の刻をま
わった深夜、佐々良木一家の裏木戸を身軽に
越えた。

裏庭を伝い、雨戸をそっとこじあけて、親
分の寝室とにらんだ奥の一間へ忍びこむ。

「ちよつと……もし、ちよつと……」

喜三郎の枕もとに立って、静かに声
をかけた。

はっと気がついた喜三郎

「誰だ！」

がぱっと身をおこす。さすがに渡世人、次
の瞬間、手は枕もとの長脇差をがっしりとつ
かんでいる、

「喜三郎親分は、お前さんでござんすか？」

伊太郎の声は、低いがていねいだ。

「いかにも喜三郎はおれだが、お前は？」

「親分のいのちを頂ぎにきた、物騒な男でござんす。といつても、寝ざめのわるいことは嫌いな男で、枕を蹴とばしの、いきなりバツサリの、あとはずらかりの……なんてことはできねえ性分で……。親分、せつかくおやすみのところを起して申しわけねえが、裏庭へでも出て、一人と一人の勝負をつけさせておくンなさい。今夜はよく晴れて、めっぼういい星空ですぜ」

伊太郎、微笑しながら落着いた声。

「おもしろい人だな。喜三郎、気に入った。

喜んで相手をしよう。なアに、お前さんをこへさしむけた男はわかつてる。どうやら旅にんさんらしいが、いい気つぶだ」

喜三郎も笑顔をうかべ、わるびれずに身仕度すると、裏庭へおりた。

伊太郎、先におりて身がまえ、長脇差に手をかけると、ぎらりとぬいた。

中天に満月。ちりばめた星。夜風が冷えて





頬にこころよい。

「なるほど。星空どころかい月夜だ。長脇差をふりまわすのも久しぶり。いい勝負になりそうだけ。草中じゃ、念仏がわりに虫も鳴いてる……」

空を仰いで喜三郎、にっこりわらった。ゆ

っくりとたすきをかけ 刀の目釘を湿す。

「こいつはちつとばかりおどろきました。大声だして子分の衆でも呼び起すかと思ったのに、せきもあわてもしねえその貫録。どうやらこの勝負は、あっしの負けらしいござんすね」



「馬鹿いっちゃいけねえ、勝負はやるまでわからねえ」

喜三郎、刀を抜くと、ぐいと身がまえる。伊太郎も、それにあわせてピタリとかまえた。

月光の中に、一瞬の殺気が生ずる。夜の静寂に、鋭い音をたてて白刃がぶつかる。火花が散る。

「旅にんさん。どうやらお前さんのほうが強そうだ。おれももう年だな。斬りあいのコツを忘れたよ」

喜三郎の額には、早くも汗がにじみだす。

「勝負はしまいまでわからねえと、いまお前さんが云ったばかりじゃねえか」

伊太郎、じりっじりっと寄りながらつぶやいた。

その時、寝床の中で、ふと不穏な気配を感じたお島が、起きあがって廊下にでた。

雨戸があいている。不審に思ってそこから裏庭を見おろしてびっくり。

男二人の、すさまじい斬りあいである。

「あッ!……」

それにも増しておどろいたのは、喜三郎を追いつめて白刃をふりかぶった男の顔が、月光の下に青白くうかびあがった時。

「あッ！ 伊太郎さん！……」

秋晴れ二人旅

酒さかなを二ノ膳、三ノ膳に用意して、しかも喜三郎を叩つ斬った時の礼金五両まで包んで膳の上に置き、伊太郎の戻りを待っている虎十とお浜である。

「ねえ、お前さん。ちょっと帰りが遅いようだが、大丈夫だろうか。喜三郎の子分たちにとり巻かれて、スタスタに斬られているんじゃないだろうねえ」

心配顔のお浜に、

「あの男の腕なら、し損じることにはねえと思うが、なアに、やり損って奴が反対に殺されたとしたって、もともとだ。心配するには及ばねえ……」

そういう虎十の顔も気がかりという表情をかくせない。

その時、裏庭の障子がすうつとあいて、姿を見せたのは、待ちかねた伊太郎。

「おお、戻ったか」

思わず腰をうかせる虎十。

「なんでそんな裏庭の障子をあけるンだい。おもてからくりやいいのに。びっくりするんじゃないか」

お浜がとがめる。

「すいません、ちょっとわけがありました。親分、ねえさん、遅くなってすいません。ただいま帰りました」

敷居に手をつけて伊太郎、一礼するとにやりと笑った。その笑顔をみて、ああよかったうまくいったんだと、内心喜ぶ虎十とお浜である。

「で、首尾は？」

のりだす、虎十。

「へえ。寝ている喜三郎を叩き起こし、裏庭へ連れだしました。今夜はいいお月さんで、人殺しにはもったいないような……」

「月のことなンかどうでもいい。で、どうした？」

「相手はもう年だ。庭石に足をひっかけ、身体にくずれるところを、ばっさり……」

「やったか！」

虎十、膝を叩いた。

「そこへちやうど、お島とかいう女が起きだして、わいわい騒ぎたてやがる……」

「なに、お島？ そ、それで？」

「しゃくにさわるから、こいつも冥土の道連れとばかり……」

「斬ったか！」

虎十、思わず半身をのりだした。

「へえ。……可哀想とは思いましたが、つい長脇差の手がへって……」

「なアに、可哀想なことなンかありやしねえよ。よくお島を斬ってくれた。ありがてえ。礼をいうぜ」

「と、おっしゃいますと、親分は、あの女に何か、かわりあいでもあるンで？」

こんどは伊太郎の膝が、ぐいと前にすすんだ。

「いやなに、つまらねえことで、あの女からは恨みを受けてな……」

「——下総中山の貸元、半兵衛を殺した恨み……でござんすかい」

「なに！ てめえが、どうしてそれを知っているンだ！」

虎十の顔色が、さっと変った。

「それでわかった。なににもかも、きれいにわかりました。もし、親分……」

伊太郎の眼が鋭く光り、がらりと声が凄んだ。

「親分、いえさ、虎十さん。いや、ほんとうの名前で呼ぶと、山嵐の伊太郎さん……」

「うッ！ そんなことまで、どうして知っている！」

虎十、真ッ赤になってわめいた。

「伊太郎なんて粹な名前を、どうしておめえみたいなハンパやくざにつけたのか、おれはまったく泣きてエくらいのもンだぜ。おれの名前も伊太郎で、てめえのおかげで、おれはとんだ濡れぎぬ……」

猿若伊太郎、後へふりかえって、障子の外へ声をかけた。

「お島さん、喜三郎親分、やっぱりこいつが間違いのねえ仇！」

「おう、みんな聞いたぞ」

と答えて、喜三郎、お島、身仕度十分に、ずかずかと座敷に踏みこむ。

「ちくしょう！ だましやがったな！」

虎十、憤怒の形相でとび退った。

「あれエ、誰か！」

悲鳴をあげて腰をうかすお浜に、伊太郎のすばやい峯うち、のけぞって気を失うお浜。

「野郎ども！ なぐりこみだ！」

わめいて虎十、刀をひつつかむと、ぎらりとひっこぬく。

「お島さん、あわてずに、おちついて！」

喜三郎の介添えで、お島のあいぐちが虎十に突きかける。

「しやらくせえ！」

はねかえす虎十。急をきいてなだれこむ虎十の子分たちを、伊太郎が大手をひろげてさえぎる。

「子分どもはあッしがひき受けた。お島さんは早く、虎十を、早く！」

斬りかかる子分たちの白刃を、伊太郎の長脇差が、びしびしとはねかえす。

「それ！ いまのうちに！」

形勢不利とみてあわてふためく虎十に、お島の必死のあいぐちが、恨みをこめて突きたてる。

「お父っあんの仇！」

肥えた脇腹に、ふかぶかと刺しとおる。

「うわアッ！」

のけぞる虎十。

力あまったお島も、よろよろと倒れる。その身体をしっかりと抱きとめた伊太郎、

「お島さん、よかったなア……」

お島、伊太郎の胸にとりすがって、わあッとばかりにうれし泣き。

「よくやったよ、お島……」

喜三郎も、眼がしらをおさえてほめた。

そして――

九月の空は晴れわたり、猿若伊太郎とお島

の二人、肩を並べて、東海道を東に……

お島は故郷の下総へ、伊太郎は江戸へ、同じ方角へ戻り旅。

さわやかな秋風が、二人の髪にふく。

見送るのは佐々良木の喜三郎。虎十を殺した後始末も、万事うまくとりはからって、喜三郎の顔も明るい。

ふりかえり、ふりかえり、遠去かっっていく

お島と伊太郎を見送りながら、（――江戸へ着くまでにあの二人、おそらく他人ではなくなるだろうよ……）

そんなことを思っただけ微笑をうかべる喜三郎である。

秋晴れの東海道をゆく二人の姿は、まったく仲がよさそうであった。

雲……

仲よし雲が、ぽっかりと浮いている。

原稿募集

本誌に適すると思われる原稿なら何でも結構です。アブ・ストーリー、告白、体験、小説等としどしお寄せ下さい。枚数三十枚迄

嗜虐の罇

宿の蝶毒

★ ★ ★

赤いカクテル

滝美が酒をのむことをおぼえたのは、夫が死んでからだった。

二十五才で結婚して三十才で滝美が未亡人になる頃には、独身を通した女友達は酒場遊びにいったの通ぶってみせたのだ。

もつとも酒場といってもスタンドバーか、

あまり美しくない、気のおけない若い女給のいる二流三流の酒場だった。

その一軒「ウィリー」へつれて行ってくれる時、オールドミスの茂子が、

「このバーテンさん、とてもハンサムなのよ、とってもあかんで」

とささやいた。

「茂ちゃんの彼氏？」

ときくと、

「ううん、片思いや」と、笑った。

ハンサムといわれたが、滝美はその男、瀬川保彦に、美しさよりも、刃物のような冷たさを感じた。

「きれいやろ？ 若い人の肌はええなあ」

茂子は年増女のような云い方をした。

「うちら、適当に男性ホルモン注射せな、早うお婆さんになっちゃう」

というのが茂子の持論だった。

「何にしましょう？」

と瀬川が注文を聞くと、

「何でもええ、甘いカクテル欲しいわ、この



松井 籟子

江淵 晃 夫・画



美貌のバーテンにひかれて自ら罠にもがく未亡人！

ふりおろされるベルトの

下で滝美は縛られた身をよじった！

人のもあんまり強くないのをね」

と、茂子はいう。

そして、氷を割る手許をみつめ、シェーカ―をふれば、彼の額にたれたおくれ毛が僅かに動くのをうっとり見ている。

そんな友の態度に滝美は頬が赤らむような気がした。

茂子がトイレへ立った時、瀬川はそれを待っていたように、滝美に話しかけた。

「先生とお友達ですか？」

滝美は茂子がこの酒場で先生と呼ばれてい

るのを知った。

茂子はポスターや衣料品の箱や石鹸の包み紙などの意匠を書く、デザイン研究所へ勤めていたし、自分で画筆もとっていたから先生とよばれているのだろう。

先生とよばれて、バーテンをはりにいくのも、現代の女の一つの生き方なのかもしれない。

しかし、家庭にばかりいた滝美には身近に見る友のそんな生活は、まぶしいような感じだった。

「先生のお友達にあなたのような方がいらっしやるなんて、ちょっと意外ですね」

瀬川はきれいな東京弁を話した。

「どうして？」

「どうして……」

と、彼は切れの長い目の奥を光らせるように滝美を見たが、

「それは僕がいうより、鏡をこらんになればわかりますよ、こんなところではあなたのような方には会えない……」

滝美は返事もできず、何か云わなければいけないような気がしたので、

「これ、何という名なんです？」

と、カクテルの名を聞いた。

「あててごらんになりませんか」

瀬川はいう。

「さあ……？」

滝美はその燃えるような赤さを見た。カクテルグラスのふちに、白く、雪のように砂糖がぬってある。

「僕はこのカクテルは作りますが、そんな経験はないんです。僕に教えて下さいますか」

「経験って……？」

「だってカクテルの名をお聞きになったのでしょう？」

「ええ」

「だから、そのカクテルの名のような経験……キスオブファイヤー」

「まあ……」

滝美は耳たぶがほてってくるのをどうしようもなかった。

男の魅力

「今度はおひとりでも気軽に……って下さい」

と瀬川は云った。

滝美は用事で大阪へ出ると、その言葉がよみがえってきて困った。

阪急沿線の芦屋にある高級アパートに住んでいた。

夫に死に別れて、月々入る月給は絶えたが二十万三十万と、夫の親戚や知人に貸してある金の利子が、月三万にはなる。女ひとり食べて通るのに不自由はなかった。

滝美は週に二回、大阪へお茶とお花を習いに行っていた。いつかはそれを生活の糧にできる日もあるだろうと思っていた。

冬の日短かくてすぐ日が暮れる。

日の暮れ時の薄光は女の心を落ち着かなくする。

夕餉の仕度をして、膳に向って食べてく

れる相手のない佗しきは、独身を通した女よりも、未亡人の方がより一層身にしてみるだろう。夫のために料理する張り合いを一度知ると、ひとりのための料理はあじけない。

二人寝の幅広い布団を、ひとりで敷くのに似た佗しさだった。

滝美の足はつい「ウィリー」へ向いた。

「いらっしやい」

瀬川が笑顔で迎えてくれるとほっとする。

待っていてくれる人があったという安堵が滝美の心を和らげる。

「茂子さんに電話かけたら、留守なので、ここかと思ったんですけど、みえませんでした？」

「さあ、今日はまだみえませんが、そのうちおみえになるでしょう、ゆっくりして行って下さい」

瀬川はいう。

のんでみると、滝美は自分が案外アルコールに強いのを発見した。

「ウィリー」へやる日が、続く。

ビールなら二百円、カクテルなら三百円位の勘定でも、一杯きりというわけにはいかない。

滝美は支出がかさむのを、

「だって、夫が死んだ淋しさは一種の病気で、すもの、こうして気持ちがなくさめられるんなら、くすり代だわ、淋しくて死んじゃうよりいいわ」

と、自分で自分に云い訳した。

「それに、私、べつにあのバーテンの瀬川さんを愛しているわけじゃないんですもの」

滝美はそう思っていた。

滝美の死んだ夫は小柄な男だった。

その死んだ夫を愛していた滝美は、自分小柄な男が好きなんだと思いこんでいた。

五尺八寸という上背と、広い胸幅を持った瀬川を、滝美は美しいと思ってみたことはなかった。

滝美が「ウィリー」へ二三日足が遠のいてから行くと、

「何にもものまなくてもいいからおよりになって下さい」

と、瀬川は云った。

「お客様にあの人来ないのかってよく云われるんですよ」

瀬川の、自分に対するおせじは店のためを考えてなのかと思ったが、滝美は悪い気持はしなかった。

自分がまだ、男の目を惹く美しさを持って

いるという自信が、夫を亡くしたみじめさを忘れさせてくれた。

ある晩、おそく滝美はウィリーへよった。京都の顔見世を見に行つて、おそくなつたのだ。

芝居の陶醉が酒の酔をうながしたのか、終電車にやっと間にあつた滝美は、酔った顔の人からそむけるようにして、電車の中へ小さく坐っていた。

駅からアパートへ行くのに足がふらついたやつとハンドバッグの中から鍵を出して、ドアの鍵穴に入れてガチャンとまわしてのび上った目の前に、瀬川保彦が立っていた。

「あらー」
思わず声を立てると、瀬川は落ちついた調子で、

「お忘れものなさつたから、持つて来てあげました」

という。

「あら、そう、なあに？」

それに瀬川は答えず、

「中へ入った方がいいんじゃないんですか？」
という。

滝美は反射的にドアをあけて、身をすべりこませると、つづいて瀬川もドアの中へ入っ

た。

どうして、彼女が瀬川の言葉で、急に秘密めいた行為をとつたのか、彼女自身わからなかつた。そんなところに女の先天的な娼婦性があつたのか、まるで情事になれた女のようにふるまわせるものが、瀬川の言葉の調子にあつたのか、ドアの中へ瀬川を入れたとたんに滝美は後悔していた。

しかしドアがしまると、いきなり彼は、滝美を抱きよせて、唇を近づけた。

滝美にそれをこばむ力はなかつた。

それはちょうど、夫の生きていた頃に、二人で映画を見に行つての帰りに、夫が彼女を抱きよせたのに似ていた。

瀬川がはなした唇を、滝美は本能的に追ひさえた。

夫の体臭

アパートは二日間あつたが、一と間は茶の間に使っているの、奥の六畳にふとんを並べてしいた。

さっきのが終電車だったから、瀬川が帰るにはタクシーよりない。瀬川の家は阿倍野のさきの萩の茶屋だったから、芦屋からではタクシー代が二千円位かかるだろう。

それを承知で帰えれとは云えなかつたし、二千円出してやるのも惜しかった。

「一緒に寝たつて何にもしなければいいんだわ」

滝美は思った。

それに滝美より五つは若いと思う瀬川を警戒するのもおかしいような気がした。

夫の衣類は大抵夫の親戚や友人にかたみ分けをしてしまつたが、ふだん着ていた浴衣だけ簞笥の底に入っていた。

それを出して瀬川に着せるのに、滝美は一瞬ためらつたが、シャツのまま寝かせるのも悪いような気がした。

「気持ち悪くなければ、これを着て。洗濯してあるから……」

滝美は云つた。

小柄な夫の浴衣は、瀬川には丈が短かすぎたが、いつもバーテンコートを着ている瀬川ばかり見なれた目に、彼の浴衣姿は新鮮な情感を感じさせた。

「おやすみ」

と云つて、べつべつの布団に入つた時、瀬川は滝美の方へ手をのばした。

滝美がその手を握つたのは、夫の浴衣の匂いに誘われたからかもしれない。

瀬川はふとんから体をのり出して滝美の方へ体をよせた。

「いけないわ」

滝美は拒んだ。

瀬川は唇をよせてくる。

「唇だけよ、ね、唇だけよ」

滝美は念を押して、自分で彼の頬を両手でさむようにして唇を合わせた。

瀬川は無言で次の行動に移ろうとする。

「だめ！」

滝美は身をかたくした。

「なぜ？ 僕はとうからあなたを愛しているんだ」

「でも……だめ、こうして、ただ抱いているだけ、ねえ、静かに、ただ抱いて……」

滝美は云った。

夫の浴衣にしみた樟脳の匂いがほのかに匂っていたが、その匂いの中に、煙草の匂いに混った夫の体臭が、消えやらずに残っているような気がした。

瀬川はいわれたようにただじっと抱いてくれた。

「何日ぶりだろう」

滝美は思った。

夫が死んですでに一年たっている。

そのくせ、何年ぶりなどという遠い感じはしない。

何日ぶり……。

そうとしか思えない。

滝美の体に熱い血がたぎった。

滝美は瀬川と夫を混同していた。

しかし、瀬川の手が動き出すと、

「いけない！」

びっくりしたように、そこに夫ではない男を感じた。

そのくせ、体は燃えている。

どうしたらいいんだろう？

仰向くと、壁の写真が笑っているような気がする。

夫が行った時買って来た広隆寺のしろくぼさつの写真だった。

立って行って、その額を裏向けにしたかった。

しかし、写真だけではない。

天井も、襖も、簞笥も……かつて夫との痴態を見ていた、もの云わぬ生きものがとりまいているような気がする。

この部屋ではかの男と愛情を語る……。

それは滝美にはできそうもなかった。

「もし、無理に瀬川が挑んでくれたら……」

滝美はそう願った。

「ねえ」

瀬川が促した。

「いや」

「今になってそんな……」

「じゃあ、どうでもなさったらいいでしょ」

「僕が強姦したって、あなたは僕を訴えられませんか」

「なぜ？」

「だってさっきあなたは僕に接吻を許している。法律的に強姦罪は成立しないんですよ」

そんなことがあるのかと滝美は思った。

「強姦」という言葉は刺激の強い言葉だった。

「どうでもなさったらいいわ」

「自由をうばわれてなら、彼氏に申訳がたつというんですか？」

「彼氏なんてないわ、もう死んじゃった」

「死んだのは旦那さまでしょう？ 彼氏はべつや」

「そんな女にみえます？」

「だって、この浴衣だって……」

「それは死んだ主人のよ」

「なつかしいんでしょう、御主人が……。僕は御主人の代用品になんかなってあげないからいい、せいぜい御主人の匂いをたのしみな

さい」

瀬川はいきなり着ていた浴衣をぬぐと、滝美の顔からすっぱりかぶせた。

「あっ！ 何をするの？」

滝美は云ったが、彼は浴衣で顔も手も包むようにすると、上から腰紐でぐるぐるとまいた。

滝美はもがいた。

瀬川は滝美の脚まで一つに縛ると、ふとんの上へころがして、上から掛布団をすっぱりかけた。

厚いふとんの下で滝美は息苦しかった。

「やめて！」

と、叫いたが、瀬川はふとんの上へ自分の体をのせると、ぐいぐいと押した。

「御主人の代用品でなく僕を愛してくれるなら、僕はあなたを抱いてあげる。いやだ、代用品なんか、さあ、どうです？ 何にもいいませんね、苦しいですか？」

瀬川はふとんの上へ腰をかけて、わざと、どすんと腰をおろした。

滝美は息苦しさのほかに、

「あっ！」

と声をたてるほど乳房を圧する力が痛かった。

しかし、その苦しさと痛さの中に、不思議

な陶酔があるのに気がついた。

「僕はひとりで寝ますよ、ちゃんと睡眠剤を持っているんだから、朝までぐ

っすり眠れるんですよ。あなた

が眠れなくても僕のせ

いではありません

からね」



瀬川はそんな捨てぜりふめいた云い方をすると、シャツのまま別のふとんにもぐりこんでしまった。

朝まで滝美は夫の体臭に包まれながら、不自由な姿勢でまんじりともしなかったのだ。

花は疼く

花が毒を持つのは、花から花へうつる蝶が
おいていくからではないのだろうか。

蝶は花から甘い蜜を吸って、毒をおいていく。

花が毒花として咲き匂う頃は、毒をうつした蝶は、もう別の花へとんで行っている。

滝美が純情さをただ表から見た容姿にだけ残して、人が変わったように愛慾にくずれた生活をするようになったのは、瀬川保彦が注入した毒素からだった。

滝美は保彦を愛していなかった。

しかし、愛なんて気まぐれでいつどう生れ
たり消えたりするかわからない。

何の関係もなくあかした一夜のあとで、滝
美はもうウィリーへ行くまいと思った。

しかし、行くまいと思うのは行きたいから
にほかならない。

稽古ごとで大阪へ出なくても、これといっ

た用のない滝美には、大阪へ行く自分への口
実はいくらでもできた。

肌が少し荒れたから、美顔術してこようか
しらと思い、それには近くの美容院よりは大
阪の方がいいと思う。

お金を人に貸しておくより、確実な株にで
ましておく方がいいのではないかと思ひ、そ
れには一度大阪の証券会社へ行ってこなけれ
ばと思う。

遊んでいてもしょうがないから、何か自分
にできる内職はないかしらと思ひ、一度大阪
の友達の所へ相談に行ってみようと思ひ。

大阪へ、大阪へ……

その大阪にはウィリーがあり、ウィリーへ
行けば瀬川保彦がいるのだ。

スタンドへ腰かけて、保彦がシェーカーを
振るのを茂子と同じ目で見えるようになった自
分にぞっとする。

茂子と思うと、保彦をはっきり自分のもの
にしたいという気持が強くなってくるのだ。

それを自分で自分に云い訳する。

「この間の晩のことを茂子さんに話されたら
困るわ、もう一度二人きりになって、茂子さ
んに云わないと約束させなければ……」

そして、保彦にささやく。

「ねえ、また、遊びにいらっしやらない？」
と――。

すると保彦はいう。

「僕は仕事があるんですからね、方角違いの
お宅まで行くのしんどいな」

「だってお休みの日は？」

「休みの日はうちで風呂へでも入って一杯の
んでいる方がいいな」

「じゃあ、どこかお風呂へはいりに行きまし
よう」

滝美はそう云わざるをえなくなるのだ。

「お風呂？　僕は前から白浜へ行ってみたく
と思っていたんだけどな」

保彦はひとり言のようにいう。

滝美は自分から云い出した以上、それを押
しすすめるよりしょうがない。

白浜温泉は関西では一番高級な旅館の多い
所だった。

そのかわり、部屋もいいし、御馳走もいい。

しかし、一泊三千円はいる。安い所もあっ
たが、滝美の見栄が許さなかった。

二人で一晩泊り、お酒をのみ、昼食を食べ
て来たら一万円で足りなかった。

今まで月三万あったら足りた滝美の生活費
は目に見えて足りなくなった。

その上、毎日のようにウィリーへ行けば、保彦がのむ分まで払わなければならなかった。

「御馳走になりますよ」

そう云われて厭とはいえない。

時には同じスタンドに並んだほかの客が滝美におこつてくれることもあった。

「のみに行きませんか、面白い酒場を御案内しますよ」

と誘ってくれる。

そんな晩に限って保彦は滝美のアパートへやって来た。

それも、ウィリーをしめてから二三軒はしごした上タクシーをとばして来た。

タクシーの運転手がアパートのドアの前までついて来て千円くれといわれれば出さないわけにはいかなかった。

「さっきの人とどこへ行ったんです？」

というのに、酒場の名を二三あげても本気にしない。いや、本気にしないような顔で、
「僕は鼻がよくきくんだから、あなたの体がかげばわかる」

と云って滝美を裸にする。

「お風呂へ入ったでしょう？」

「そりゃあさっき銭湯へ行ったわ」

「ううん、さっきの男と一緒に風呂へ行った

んでしょう？」

「まさか……」

「白ばっくれて……」

「だって、本当にのみに行っただけなんですもの」

「いいよ、そんなきたない女、誰が抱いてやるもんか、一晩中、僕の枕もとで坐っていらっしやい」

というと、滝美を後手に縛って、卓へくくりつける。

「痛い……」

滝美はうらめしそうに保彦を見た。

しかし、保彦が嫉妬してくれたということの嬉しさから、ひどいことをされているという気持はしなかった。

すると彼は口元をゆがめるように笑って、

「僕はあなたなんか愛していないんだから……。あなたが苦しんだって平気なんだ。どんなひどいことだってしてあげられる、厭だったら僕の目の届かない所へ行ってしまうなさい」

と云い放つ。

「保彦さん、どうしてそんなこというの？」

こんなにされたってだまっているのに……」

滝美は縄をかけられたままやさしい目を彼

に向ける。

「僕は人に愛されたくないんだ。どうして僕を憎まないんです、僕からはなれて行ってくれればいいんだ、よし、もっといじめてやる」
そういうと、部屋の中を見廻したが、簞笥の上にそろばんがのっているのを見ると、それを滝美の脛の下へ入れた。

「痛ッ！」

滝美は悲鳴をあげた。

大きなそろばんではなかったが、ゴリゴリする角が、裸の足へいくこんだ。

とろうとしてもがくと、よけい自分の脛をそろばん玉へこすりつけるようなことになった。

保彦は滝美の膝へどしんとまたがった。

「あッ！」

膝の上へ重量がかかれば、脛はよけいにそろばん玉へくいこむ。

「痛い！ 痛いイイ！」

滝美が苦痛の叫びをあげると保彦はよけいに興をおぼえるのか、自分の体をこっし、こっしと揺る。

「ああッ！」

美滝は体をそらせて口をあけて、のどから声を立てた。

保彦はその口を自分の口でおおった。

苦痛が官能の喜びに通じること、滝美は瀬川保彦によって教った。

「さあ、僕なんか嫌いになったでしょう？」

「どうしてそんなこというの？　こんな……こんな目にあわされて……」

「だからあいそがつきたでしょう？」

「ううん」

滝美は身動きもできない体で、僅かに首を振った。

「じゃあ、あした僕に五万円作って下さい」

「五万円？」

「だめなんでしょう？　ほら、僕が嫌いになった。もっと嫌いにしてあげましょう」

そう云いながら保彦は滝美の膝にまたがったまま彼女の肌にあふれた。

「ああっ！」

滝美はまた、苦痛と歓喜に動物のような声をあげる。

「五万円作ってくれますか？」

「作ったらかんにんして抱いてくれる？」

「本当に作ってくれる？」

「ええ」

保彦の唇をうけながら、滝美は五万円をどうして作ろうかと一瞬考えたが、そんな金銭的な観念を押し流すように、体の中に熱い血のたぎりが奔流のように渦巻くのだった。

待っていた男

五万円は保彦の時計になった。

七万円出してキャノンを買った。

五万円の時計と、七万円のキャノンを持つには、靴も背広も、ネクタイも、みんな新しくしていかなければうづらなかつた。

そして、そんな

保彦と一緒に歩くためには、滝美の服装もそれに合わせなければみじめだった。

滝美の生活費を産んでくれていた

金を借主から集めては使った。

入っていた利子が減れば、生活費のためにまた貸金を回収しなければならなかつた。

滝美の手許がだんだんにつまってきた。滝美は保彦に手許の不如意を知らせまいとしたが、彼は知っているのか知らないのか、平気で派手に使っていた。

ある日保彦が云った。

「君に会いたいって人があるんだけど……」「どんな人？」

「僕のとて世話になった人なんだ。君の話をしたら一度ごはんをおごりたいっていうんだよ、僕も一緒に行くといいんだけど、店があるだろう、君、ひとりで行ってくれないか。斎藤実造といってね、灘波精工の重役だ」

滝美は彼の妻のように扱われたことに嬉しさを感じた。

「僕は母方の姓を名乗っていたんでね、瀬川って云っては駄目だよ、田中に聞いてきたといつてね、六時に、ここへ……」

と、地図を書いて、料亭らしい名の家を教えられ、滝美は出かけて行った。

それは料亭といっても一間一間が長い廊下でしきられていて、旅館のような造りだったが、表の看板には屋号しか書いてなかつた。





「田中に聞いてきたのですが……」
 という、相手はもう待っていて、奥のは
 なれへ通された。

「まあ、一杯やってからにしましょう」

た。

五十年配の金持らしい男だった。
 「田中がいろいろお世話になってるそうで……」
 滝美は挨拶した。
 「いや、こちらこそ、田中君にはいろいろ無理を云っているんですよ、よく来て下さいましたね」
 斎藤は如才なくいうと、
 「写真より素顔の方がよっぽどきれいだ」
 という。
 「え？」
 滝美は聞き返した。写真という言葉がわからなかった。

と、酒肴をとりよせて、
 「いける口なんですってね、あなたとのめるなんて、本当に嬉しいことですよ」
 とすすめてくれた。

滝美は初対面の人と会うために、保彦が自分の写真をこの男に見せておいたのかと思い写真という言葉はそれっきり頭からはなして盃をとった。

一本、二本と、男の顔に陶然とした酔いが流れ出すと、

「さあ、そろそろいいでしょう？」

と男は云った。

何がいいのか滝美はわからない。

それにかまわず、

「最初から裸っていうのもなんだから、肌着でしましょう」

と、男は手さげかばんを引きよせると、中から細引の輪にしたのを、何本も畳の上へとり出した。

ザラッという音が、滝美の二の腕にチリチリと、蟻が這ったような感触を起こさせた。細引は保彦との情事につながるものだったしかし、今、斎藤がそれを出して何をしようというのだろう。

滝美は体をかたくした。

「さあ、着物をぬいで」

と、斎藤は促した。

「でも、私……」

滝美の困ったような顔に、

「今になって厭っているんじゃないんでしょ
うね、僕は田中君に云い値どおり払っている
んですよ」

「え？」

「恥しがることはないでしょう、ほら、あな
たの例の写真……。あれをいつも田中君から
売ってもらっていてね、一度御本人に会いた
いって云ったらあとの写真が売れなくなるか
ら一万円よこせという、一万円はひどいだろ
う、ヌードモデルだって一時間千円もやれば
くると云ったんだが、縛られれば何をされて
も抵抗できないから、貞操代だっていうんで
ね、ハハハハハ」

滝美は胸へ得体のしれないかたまりがふく
らんで来た。

保彦に対する激しい怒りと、それと知らず
にここへ来た後悔と、この男に自分の恥しい
写真を見られていたという羞恥とが入りまじ
って、言葉も出ないような息苦しきだった。

斎藤は、滝美に自分の言葉を証明しようと
したのか、数葉の写真を取り出した。

それは保彦がたわむれに……としか滝美は
思っていなかったのだが……彼女を縛りつけ
てとった写真だった。

「このスキーの写真なんか秀逸ですよ」

斎藤はいう。

それはスキーとストックを使って、部屋の
中で礫になっている滝美の姿だった。

スキーは身長よりも長いから、伸び切った
滝美の体を縛りつけられる。

ストックの竹は首かせのように彼女の首を
しめた上に、両手首まで縛りつけることもで
きたのだ。

四つの板と竹は、組み合わせによっていろん
な責め具になった。

保彦が面白いから写真をとっておこうと云
った時、滝美はすでにそれを止められない姿
にされていた。

手足の自由を奪われていたから、保彦がす
るままにさせるより仕方なかったのだ。

しかし、保彦のキャノンが商売道具だとは
思っていなかった。

スキーの時ばかりではない。

キャノンを買ってから、今までより足繁く
彼が芦屋へやって来たわけが、滝美には今は
じめてわかったのだ。

自分から小遣いをせびるだけでは足りなく
て、そんな写真売っていたのだろうか。

「さあ、どうしました？」

斎藤は滝美の心も知らず促した。

「でも私……そんなこと、ちょっとも知らな
かったんです」

滝美はおずおずと云った。

本当に知らなかったのだ。

斎藤の顔色が変わった。

「知らない？ ようそんなことが云えまんな」
男は急に大阪弁で云った。今まで一生懸命
東京弁を使おうと努力していたのだろう。

「だまされたんなら、人の口にのって一万円
出したわてが悪い。けどな、わては泣き寝入
りなんかしやしまへんで。この写真が証拠や、
ちゃんと顔もうつつている、ここで電話かけ
て、その筋の人に、来てもらうたらそれまで
や。けどな、あんさん、そんなやほなことし
ても、しゃあないやおまへんか。それよりな、
二人だけで話合いましょう。あんたが、知ら
なかったというのはほんまかもしれへん。あの
田中たらい男がわてもだまし、あんたもだ
ましたのかもしれへん。けど、あんただって
田中になら、こんな写真とらしているんや、
そのけがないこともないのやろ。ねえ、どな

いだす？ わて、あんた気に入ったよって、もう二千元、いろつけるわ、な、わてのモデルになっておくれやっしや。ここは廊下の向うの戸をしめといたら、誰も来やせんし、その柱がちょうどええあんばい思うて、ここにしたんやから、な、ほんのちよつとだけ、痛いことせえへん、その柱にな、肌着一枚でくくられてくれへんか。な、ええやろ？」

滝美は仕方がないと思った。警察沙汰にされては困る。保彦が一万円着服してしまったことは、この男のいうとおりなのだろうという気がした。

自分の女房を人に売る——。そんなことができる保彦だったのだと思うと、私は自分でこの男に自分の体を売ってやろうという気がした。

夜の開花

肌着一枚の滝美は、その白い肌がよけいに白くみえる。

彼女は後手に縛られて、柱にくくりつけられた。

胸にまわした細引が肌にくいこんで、胸のふくらみをことさら大きくみせていた。

斎藤は満足したように、カメラの用意をし

た。

素肌にうすい肌着一枚しか着ていない滝美は、はじめは羞恥にほてっていた頬も、いつしか血の気を失うほどになっていた。

「痛いわ！」

思わず声を出した。

「もう少しや、ちよつと辛抱してや」

と、斎藤はいうと、

「もう少し衿が乱れている方がええなあ」

と、わざと肩を出すほどに肌着を押しひろげる。

「やめて！」

滝美はあらわになった丸い肩を、すぼめるようにしたが、おおいようもなかった。

「よっしや、じつとして」

と、斎藤は右から写したり、左から写したりしていたが、

「どうもかたいな、おもしろくないな」

と、ひとり言をいうと、

「痛いかな」

と、聞く。

さっきから痛くてたまらない滝美は、今さらきくこともないだろうと、無言でうなずいた。

「よっしや、痛うないようにしてやるわ」

斎藤は云った。

滝美はほっとしたように斎藤の顔をふり仰ぐと、その肩へ、火傷したような熱さを感じた。

「あっ！」

と思わず悲鳴をあげるのと、斎藤の手にベルトが握られているのに気がつくのと一緒だった。

「ビシッ！」

とベルトが鳴る。

「あっ、痛っ！」

滝美は身をよじってこらえた。

斎藤のベルトは息つく暇もないほどに、滝美の体にふりおろされた。

「あっ！ ああっ！」

滝美は縛られた体をもだえる。

裾の乱れるのもかまっていられなかった。

ものも云わずにふりおろされるベルトの下

で、身をもだえるのが精一杯だった。

もがけば手首の縄がよけいにしめつける。

どうもがいても、柱にくくりつけられているのだから、ベルトから逃れるわけにはいかないのだ。

ただ、縄のゆるせる範囲に体をよじらせる

と、縄までが奇妙にゆがんで、かえって体の

安定を失った。

もう坐っていられなかった。

髪も肌着も乱れに乱れ、肌にはシトツと汗がうかんだ。

やっと斎藤がベルトを振りおろす手をとめた時、滝美は崩れた牡丹のような姿で、荒い息をついていた。

そんな滝美を支えているのは何本かの細引だった。

縄目のみじめさがよけいに感じられる姿だった。

斎藤は満足そうな笑いをもらすと、カメラを向けた。

しかし、その時だった。

廊下の外のガラス戸のところで、カチッとシャッターの音がした。

——と思うより早く、庭からガラス戸があげられた。

「誰だ？」

斎藤が驚いて声をかけた。

「おたのしみのところをすみませんね」

おちついた声で姿をあらわしたのは瀬川保彦だった。

「君は……」

という斎藤を尻目にかけて、保彦は滝美の

縄をといった。

「早く着物を着なさい」

と、云われても、すぐには立てないほど、体が痛かった。

しかし、保彦にだまされていながらに、こへ保彦があらわれてくれたことの方が嬉しく心にひびいた。

「何か文句がおありですか？」

保彦は高飛車に斎藤に云った。

「もう大分、いい写真がおできでしょう？」

僕の方には、あなたがこの女を縛って苛めている写真が残っていますからね、そちらに何か文句があればこれを出すところに出すこともできるんですよ、それともついでにお売りしてもいいですがね」

「——」

「それともおたくの奥さんに、あなたの旦那様はこんな方だとおみせしましょうか？ 僕の腕はたしかですから、あなたの顔をうつしそこなうようなことはしてませんよ。まあ、お買いになった方があなたはとくですよ、写真はいくらでも、焼きましできるんですからね、今すぐのお取引ならこのままお渡しします。どうです？ あんまり悪い話じゃないでしょう？」

滝美は保彦の言葉を酔ったように聞いていた。

悪魔の声というのだろうか？ 不思議な魅力を持っていた。

「いくらだ？」

斎藤がはき出すように云った。

「十万といたいところだが、負けときましよう五万に」

「五万？」

「厭ならかまいません」

斎藤は靴の中から小切手帳を出した。

「現ナマではいいですね」

「現金はない」

「ないことないでしょう、ここの帳場で借りたって五万位の金は何とかなることはちゃんと知っているんですよ」

斎藤は仕方ないという表情で、五千円札を十枚数えた。

保彦はカメラをあけてフィルムをとり出した。

「前にうつした分までおしゃやかにするんですからね、五万じゃ損なんですよ」

あつと制する間もなくフィルムを光にさらした。

「現像しておたのしみになるのは、あなたの

フィルムだけでたくさんでしょう。さあ、滝美さん、仕度はいいですか？」

「ええ」

「あつ、忘れもの。滝美さん、二千元もらっていらっしゃい」

いつ立ち聞きしたのか、それまで承知している保彦だった。

料亭の門を出ると、さっさと足早に歩いて

行く保彦に、滝美は小走りにつけよるとささやいた。

「私がほかの男に苛められても、体までおかされることは厭だったのね」

それでだまされた恨みが帳消しになる気持だった。しかし、保彦はそれに答えず、

「ちょっと派手だったね。どうですか、御気分は？ いい気持だった？」

茶化すようにいうのに、

「ひどい人！」

滝美は保彦の手を握った。保彦も握りかえた。滝美は五つも年下の保彦の上背のある体が妙にたのしく、もつれるように夜の道を歩いて行った。そしておそらくそれは滝美にとって、どこまでもつづく人生の夜道だった。



★グラマア・ミステリー特集号！ 九月上旬発売予定！

なまめかしい依頼者

N・J・コウ

妖女は灯の下に……

島本春雄

グラ・ミステリー 女の決闘 今官一

★女の炎が迫る！俺は狙われたのだ

グラ・ミステリー 情事の罠 原三明

★女は俺に陥ちたさまア見ろ！だが

悶える肌は誰のもの

★運命は誰の手に 岡田鯨彦

踏みはずした青春

★十代はこう叫ぶ 野北淑子

銀座ドマン通り

耶止説夫

耽奇小説

10月号

この他・多数満載！！ 定価二二〇円
中野区江古田一 久保書店発行



膚はだ塚づか美び女じょ因いん果が



二人の男

嵯峨、あだし野の簀坂路を抜ける頃から、大粒の雨が俄に降り出した。

漆黒の暗闇の中で不気味な夜光の目を放っていたふくろうも、その雨に射たれて鳴き声をひそめ、鈍い羽音をたてて、朽木の穴へもぐり込んだ。

雷鳴が轟き、青白い雷光が、孟宗簀の青竹をくっつきり浮き上らせて走った。強風に煽られた竹は、くきッ、くきッ、と泣くようにしわって、女のさんばら髪のように、葉が乱れて騒いだ。

「こりゃあ、好都合な嵐じゃて……追っ手共も我等が後を追えまいて……」

五郎次は、歯の一本もない黒い洞穴ほくちうのような口をぱくぱく開けて、伴の小平太に声をかけた。

栗原 伸・画
葉田 光



「のう親父どの、この布袋の中のお姫様、先刻より、ちつとも身動きしねえや、ぐうの音も吐かねえ……死んだのじゃああるめえなア」
「そーいやあ、そーうだのう……袋の結え目を解いて見ようかい」

五郎次はちよつと不安な眼になって、小平太と二人で担いでいた布袋を肩から降した。五郎次と小平太はつきはぎだらけの小袖袴

に烏帽子、一目で町方の者と知れる身なりであつた。五郎次は白髪を蓬のように乱し、瘦せて、皺の深く多い顔は、般若の能面そっくりの妖気があつた。それとはおよそ対照的に、伴の小平太はでっぷり小肥りの色白で、その眼は明らかに精神の一部がゆるんでいる間の抜けた風貌である。

路上に降した布袋は、ぐにヤツと人の型をして長くなった。小平太がきんちゃく結びになつてゐる袋の先の紐を解いた。ひっきりなしの雷光が、真昼のようにあたりを照し出す。

皮を剥ぐように布袋の中から濃の（紫じみた色）小袖に紅袴の若い女が転がり出た。青白い顔は長く黒い睫毛を伏せている。垂髪の黒さが、その白い頬にもつれて、凄艶な感じであつた。胸の隆起や首筋の清潔さから、鬢髹して間のない若さがしのぼれた。（鬢髹は室町時代の婦人成人の儀式で十六歳に行われる男子の場合の元服）

五郎次は、ニタツとほくそ笑むと、女の胸元に耳をつけた。

「小平太、血の音がしてござるぞ……笛のような可愛い音（ね）がのう……」

「したが、親父どの。綺麗な女子じゃなあ、まるで天女（てんにょ）じゃ」

小平太はニヤニヤと相好を崩して、喰い入るように、女の顔を凝視した。

「むッ……」

大粒の雨が女の顔を叩くうち、その冷たさに意識を取戻した女は軽く呻いて、つぶらな眼を開けた。

★五郎次は異臭を放つ油を、恐怖にゆれる乳房に肩にべちゃべちゃと塗りつけるのだ！

怪異復讐譚特集

が、近々と覗き込んでいる五郎次と小平太のやにつこい四ツの眼に、女は恐怖の眼尻を引きつらせた。

「あれッ……」

「そのように恐れることはない……取って喰おうとは云わぬからのう」

五郎次が胸元へ手をのぼすのへ、女は不意にむっくり立ち上ると、孟宗簍の中へ駆け込んだ。

「小平太、逃がすでないぞ！」

五郎次と小平太は青竹の間を縫って、女の後を追った。逃げる方も追う方も、林立する孟宗竹が邪魔だったが、やはり、女の足は弱かった。女は五郎次と小平太に挟み追われて取り押えられてしまった。

「ふてえ女子じゃ……小平太、容赦は無用じや、引ッくくってしまえ」

五郎次の言葉にうなずいた小平太は、やにわに、女の腰の紐を引きちぎると、荒々しく女の両手足を縛った。

「さ、小平太、早いうちに引っかついで行こうぞ」

女は軀の上下を、二人の肩に担がれると、暫くは、芋虫のように激しく身をくねらせていたが、失心したらしく、また、動かなくな

った。

地獄の部屋

異様な臭が部屋に充満していた。そして、奇怪な部屋の様子だった。溪流際の岩場に、恰も狐狸の棲居のように、人目につかぬよう作られてある洞穴である。

燭台の油が、ジジッと微かな音を立てて燃えていた。その淡い光に照し出された部屋の天井も壁も黒い岩肌だった。

部屋の一際に人間の頭骸骨や肋骨などが雑然と積まれてある。女の生首が五、六個、棚に並べてあるかと思うと、生々しく白い、その柔らかな感じから妙齡の女のものと思われる手足や乳房のついた胴などが、恰も床の間の置物のように据えられてある。大小とりまぜた瓶や壺が、積み上げられてあった。陰惨なというより、一種の妖しい雰囲気が漲っている。地獄の部屋といえは適切かも知れない。

五郎次と小平太の二人は、酒壺から濁り酒を汲んで飲んでいた。その傍に、さっきの女が、まだ意識を取戻してないらしく、長々と横たえられていた。それも、酒の肴のつもりらしく、むっちりした二つの乳房が押しひろげられてあった。

「小平太……よっく、この女子の顔を見るのじゃ……こ奴は、憎い敵の片割れなのじゃぞ……儂が二十年この方、狂わんばかりに呪い続けた敵の片割れを、やっと一人だけ捕まえることが出来たのじゃ……後まだ三人いる……一人一人捕まえて、昔、この儂が受けた以上の苛責を、与えてやるのじゃ」

「親父どの……この女子を生き膚のまま、傀儡にするのか？」

「そうよ。二十年この方、儂が頭をしぼって考え出した生き身の傀儡にするのじゃ」

五郎次の眼が獣のように血走って、粘つく光る。そして、ギラギラする視線が、棚の女の生首や手足に移る。

「見ろやい。あれにある生首や手足は、誰が見ても人形としか思わぬじゃろう……まさか拾って来た屍の生膚を剥いで拵えたものとは思えぬはずじゃ」

「したが、親父どの……今までは死人じゃから出来たのじゃなからうか……この女子は生きてるんじゃ」

「生きた奴の生膚を剥ぐのも一興じゃぞ」

「痛かろうな」

「敵の片割れじゃ、痛かろうと、それも儂にとっちゃあ、快よいことだわい」

怪異復讐譚特集

五郎次は、小平太を睨むように云ったあと「小平太、いらぬ同情は無用じゃぞ……いつもお前に云いきかせて来たとおり、二十年前儂等親子が踏みにじられたことを忘れるでないぞ、よいか……この二十年、儂たちは、ただ復讐のためだけに生き続けて来たのではないか」

「親父どの、判ってるぞい」

「ではそろそろ、仕事に掛ろうかい……さ、早よう、その女子の衣を剥ぐのじゃ」

小平太は、五郎次の威圧の眼におどおどしながら、女の側になじり寄った。

小袖が剥がれ、袴が脱がされた……やがて、若く柔らかな白い絹肌が、燭台の下に惜しげもなく照し出された。

「ほう。流石は執権義政の腰ぎんちゃくで、栄耀栄華の暮しに現を抜かしておる奴輩の腹から出た女だけのことはあるな。飼いがようて、ぼっちゃりしたええ練膚じゃ……小平太、見い、なんと乳房のふくらみ具合の見事なことよ。それに腰つきの艶はどうじゃ」

惨忍な五郎次の眼が、女の膚を舐めずり廻すように見詰めた。

やがて、女は、木の細工台の上へ、あられもなく仰のけにされ、両手両足をがっしり結えつけられた。その緊縛の痛さに、女は意識を戻したが、視界にうつった妖しい部屋の様子に、恐怖の眼を瞠った。

身動きができない。ただ、豊満な乳房や腰が空しく揺れるだけなのだ。

「お助け下さいまし……」

女は蚊の鳴くように哀訴した。

「そうはならぬ……」

「何故、お前たちは、このあたしを……」

「聞きたいか……お前は、儂等親子の敵なのじゃ」

「知りませぬ……」

「お前は知らぬとも、こちらは知っておるのじゃ……今に、お前は、未来永劫、今のままの美しい膚のまま傀儡になるのじゃ、醜い婆アにもならず、いつまでも年をとらずに美しく若い女子のままでおられるのじゃ……女子として、これほどの本望があるうか……」

小平太が細工台の傍で、細い小柄の刃を、砥石で、キイキイ、とぎはじめた。その響が不気味に、洞穴の岩壁に反響した。

洞穴の外は、沛然たる豪雨が、凄まじい雷光を伴って、おどろおどろにとどろいている……。

復讐鬼

五郎次の悪鬼の如き報復の執念の起因は、応仁元年に遡る。

当時、五郎次は、京師、大宮通りで大きく門戸を開き、室町幕府御用を承る商家を営んでいた。屋号を鷹屋と云った。彼の家には、番匠、鍛冶、檜皮葺、壁塗、塗師、機織、紺搔（染師）、車作、酒作、果ては枕売り、瓦売り、縫笠、水かね堀などの下職者までが入りするほどの繁昌ぶりで、折から、執権義政が東山に建てていた別邸の諸材の調達方を承っていた。

別邸建築のすべての采配役は、義政將軍側近の桑田満正という政所（財政機関）別当だった。彼はその権力を利用し、かてて加えてみだらな漁色欲を満足させるため、五郎次の妻の柏と共謀して、五郎次を抹殺したのである。柏は容色人に秀れていたが、もと白拍子という男出入りのあった浮奔な女だっただけに、五郎次を無惨に踏みにじったのだ。桑田満正は五郎次の諸材調達にケチをつけ、家業

を取りこぼった拳句、柏を妾に囲うた。五郎次と伴の小平太は、九州探題預けの終身奴隸として送られることになった。五郎次と小平太は九州へ手鎖をはめられて、大勢の奴婢と一緒に、恰も牛馬のように追い立てられた。

妻の柏は、満正と共に、高台から、五郎次たちを微笑さえ浮べて見送ったのだ。当時、伴の小平太は六歳の童だった。頑はない小平太は母親の姿を見つけると、「母者！」と叫んで走り寄った。小平太が柏の袖に取りすがると、彼女は邪険に、突き倒した。小平太は仰転して、したたか大地に後頭部を打ちつけた。それが、彼を人並外れの痴呆にした原因だったのである。

五郎次は、柏と桑田満正へ憤怒の眼をむいた。涙が出た。文字通り血の涙だった。

（己れ柏奴、見ておるがよい、きっとこの怨みは存分に晴らして見ようぞ）

彼は猛火のような怒りに燃え立つ胸の中で叫ぶのだった。桑田満正と柏にして見れば、九州探題へ送られた奴婢の運命が死を意味することを知っていた。重労役の拳句、病死するか、例え生き永らえたとしても、息のあるうち、京師には戻って来られないのだ。二人は安心して、五郎次の財産をわが物にした。

もともと、虚栄に富んだ柏は、満正の寵愛を受け、室町幕府の上層社会への交りに快心の笑みをうかべて、夫五郎次を裏切って悲遇に追い落した良心の苛責は寸毫も感じていなかった。

が……。五郎次と小平太の運命は、応仁の乱の勃発によって、思い設けぬ好運と呼んだのである。

京師を出て、陸路を九州へ曳かれて行く途中、五郎次たち奴婢が、備前路に差しかけた頃、幕府内で鬱積していた細川家と山名家の管領の対立が、遂に勢力争いとなり、両管領が戦火を交えた。東軍二十四国、西軍二十国に分れ、十六万と九万の軍勢が京師を戦場にして荒れまわった。世に謂う応仁の乱である。

五郎次たち奴婢を警護していた侍たちは、この突発事に周章狼狽。この隙にあらかた奴婢は逃亡した。五郎次も、小平太を抱き締めて逃げたのであった。

応仁の乱は文明九年まで、勝敗決まらぬまま続き、十余年後に自然に終息した。京都の町はあらかた灰燼に帰し、人心は混乱し、暮しは貧窮のどん底に喘いだ。將軍義政はこの乱世をよそに、「天下破れば破れよ、世間は

滅びば滅びよ、人はともあれ、我が身さえ富貴ならば他より一段栄美様に振舞わん」とうそぶいて、奢侈贅沢の限りを尽していた。もちろん、政所別当の桑田満正も同様であった。京都の町には無頼の貧民が瘦せ狼のようにさまよい、辻々の引剝、昼打入、夜強盗、女奪誘拐は日常茶飯事と化していた。餓死者は路頭に死臭を放ち、野犬がその腐肉を喰いあさっていた。

この間、五郎次は嵯峨の奥山の清滝近くの岩場に潜み住み、夜盗、死人剥ぎなど辛酸をなめ尽し、小平太を育て上げて来たのである。五郎次の憎悪の眼は、絶えず桑田満正と、柏の動静探査に光っていたのは云うまでもない。桑田満正は柏を正室に引き入れ、二女を産ませていた。四条の堅固な屋敷内に棲み、尋常の手段では、入り込むことは不可能だった。

星霜を重ねるたびに、五郎次の復讐心は燃えさかっていた。彼にとって、二十年の歳月は、優に四十年の長さだった。まだ五十に少し間があるにも拘らず、髪は純白と化し、総齒が脱落した。面貌は七十の老爺であり、しかも人間離れをした鬼気があった。正に一匹の復讐鬼だった。

「小平太よ……お前の頭の髄にひびをゆかせた柏という女子を地獄に落してやるのじゃ……お前がそのような阿呆になったは、みんな柏という女子のためじゃぞ、よつく覚えて置けよ。柏という女子の生き膚引ン剥いて苦しめてやるのじゃ……柏だけではない、桑田満正も、娘二人もじゃ……この世で、今までになかったような苛責を加えてやろうぞい」

五郎次の酸鼻を極めた復讐の方法は、着々と彼の頭の中で形造られて行つたのである。

小夜姫掠奪

応仁の乱後、まがりなりにも世情が戦火を浴びなくなると、京の町も、少しずつ平和な姿に立ち戻つた。灰燼の路傍に座（市）が立った。米座、茶座、酒座、魚座、塩座、紙座、布座、小袖座、櫓物座などの座商人の仲間に五郎次ももぐり込んで、保津川でとれる川魚を売った。彼の著しい変貌は、昔の五郎次の顔を知っている者とても気づかなかつた。

その日、めっきり秋の深くなった高い青空から灼熱の陽光が、四条通りの路傍に並んだ座商人の群を焼いていた。大勢の客が行き交う中で、五郎次と小平太は、荒蕪の上に、鰯、やまめなどを並べていた。

五郎次は人群の中に、際だって美しい身なりの若い女に眼を瞞った。女は濃の小袖の上から曇子の間着を附けて、秋の烈日を遮るための長柄の絵日傘を若い伴の女が頭上にさしかけている。二人の屈強の武士が、警護に随伴していた。一見して高家の婦女のお忍び姿と見えた。周囲の薄汚ない町人とは格段の華麗さであつたために、群衆の視線はいわずもがな、座商人たちも見とれていたが、五郎次の見とれようは違つていた。（柏と生き写しじゃ）

五郎次はその女の眼鼻立ちに柏の倂を見たのである。ぼってり色白の豊頬で、つぶらな黒眼と小さな受け口が、



柏そのままの美貌だった。

「あの女子はどなたじゃい、知らぬか？」

五郎次は、隣の座商人に訊ねた。尋かれた座商人は物識顔に即座に答えた。

「政所別当の桑田満正様の御息女で、小夜姫様じゃ……美しいじゃろうが。したが、姉の綾姫の方は、それこそ天女と見まがうばかりの美女じゃぞ……」

五郎次の胸がギクンとふるえた。

「時々、忍びで座商人の溜り場へお見えなさるのか」

「そうよな。よくお見えになるぞ」

「姉の綾姫もか」

「なんでも、姉の綾姫様は、將軍様がぞっこん惚れこまれたとかで、東山の御屋敷住いじやそうな……儂は、二度ばかり、牛車の中のお姿を見かけたきりじゃ」

五郎次は、小夜姫が、座商人の前を面白げに見廻っている姿を凝視しながら、眼に血の上るのを覚えた。

（なんとか引ッさらえぬものか……）

五郎次は激しい焦燥を覚えた。

（そうだ、今やらねば、いつまたこのようによい機会があるか判らぬ……）

彼の憎悪は、暴挙を決意させた。

陽は高く、人は群れている。警

護の武士が二人。条件は悪い。

「小平太よ」

五郎次は傍の小平太を呼んだ。

「なんじゃい？」

「あの女子じゃ……いつも云うて聞かせておった敵の片割れの一人じゃ……なんとか引ッさらえぬか」

小平太はぽかんと口を開いたまま小夜姫に眼を据えた。小平太は六尺豊かな大男である。頭の働きは鈍いが、腕力と脚力は人並み外れて屈強だった。

「どうじゃ、あの女子を引ッさらって、嵯峨まで走り続けられるか」

「雑作のないことよ」

「そうか。では、人の群にまぎれてやるのじや……儂も後から追いつく。嵯峨のあだし野で落ち合おう。よいか」

「うむ」

五郎次の命令に従順な小平太は、のっそり人の群の中にまぎれこんだ。五郎次は目をこらしていた。

小平太は群衆の客を粧うて、ゆっくりと小夜姫一行の身边に近づいていたが、一瞬、長

集特譚警復異怪

柄の日傘を持った伴の女を押し倒した。日傘が群衆の頭上で、陽にキラキラ光りながら、宙に舞った。小平太の太く逞しい腕ががっしりと小夜姫を抱きかかえた時、「ひいッ」と小夜姫が悲鳴を挙げ、着ていた曇子の間着がふわりと舞い落ちた。小平太は間着の脱げた小袖袴の小夜姫を横抱きになると、群衆の中を押し分けて姿を消した。

「狼藉者！ 待て！」

二人の武士が喚きながら追ったが、群衆に邪魔されて思うにまかせない様子だった。五郎次はその時、遙かな路上を、小平太が小夜姫を横抱きにしたまま、疾走して行くのを見届けると、莞爾と笑った。そして、庭の上の魚をそのまま、布袋だけを引っかついで、惶と人群の中にまぎれ込んだのであった……

嵯峨、あだし野近くで五郎次と小平太が落ち会った頃、既につるべ落しの秋の陽が、小倉の山の端に沈みかけていた。

「小平太、ようやったぞ」

「親父どの……追手はまだ諦めておらぬ様子じゃ、早よ、行かにゃあ」

小平太の横抱きした小夜姫は、ぐったり失心していた。

「そうじゃ、手頃の布袋じゃ、これに抛り込

んで、二人で担いで行こうぞ」

五郎次は持っていた布袋の中へ、小夜姫を無体に押し込んだのである。

五郎次の眼はその時、二十年来燃やし続けていた復讐の念願の成就に一步進んだ快心の笑みが、不気味に光っていた。

生 膚 剥 ぎ

細い小柄を研ぎ終えた小平太は、まじまじと細工台の上の小夜姫を見詰めた。

小夜姫は、これから我が身に加えられる得体の知れない苛責に、ただ、恐怖の眼を一杯に瞠って、激しい息づかいで、豊満な乳房をなまめかしく揺れさせているだけだった。

「おう、小平太。こうして、この女子を見詰めていると、僕は憎い柏の裸形が思い出されてならぬ……このまま、傀儡にするだけでは怨みは晴れぬように思えるのじゃ。一思いに生膚剥ぐことは雑作のないことじゃが、それだけでは興がない……」

「親父どの、どうしようというのじゃい」

「そうよな。よい考えが浮んだのじゃ」

五郎次は小夜姫をおとりに、姉の綾姫や柏や桑田満正をおびき寄せようと考えたのである。そのためには、小夜姫を殺してはならな

いのだ。

「小夜姫とやら、そなた姉御や母者や父者にあいたかろうが……」

「お助け下さりまするのか？」

「そうよ。そなたも生膚剥がれて痛い目を見ようはあるまい……助けてやるが、その代りじゃ、母者の許へ文を書け」

「どのように書けばよいのでござりまする」

「僕の云う通り書けばよい」

五郎次は細工台から、小夜姫の縛めを解いた。

小夜姫は縛を解かれて自由になると、さすがにわが裸身の赤らさまな姿を恥じて、くくり猿のように、乳房と前を押さえてしゃがみ込んだ。

「お慈悲でござりまする、衣を、衣をお返し下さりませ」

絶え入るように云ったが、五郎次は惨忍な眼の色を少しも柔らげず、彼女の前に、筆と紙を突き出した。

「……今夜亥の下刻、嵯峨の奥、清滝のほとりまでお出で下されたく、そのみぎり綾姫を同道の上、母者と二人して来て下さいまし……きつと伴の者は無用にて、この文の由も御他言なきよう……もし御他言なされたならば

妾の命は亡きものと思召せ……くれぐれもこのことお守りの上、お出でのほど……」

五郎次が淡々と吐く言葉を、小夜姫はただどしく書き進めた。

書き終った文を、五郎次は小夜姫から取って黙読すると、深くうなずいて、にんまり笑い、小平太に命じた。

「小平太、この女子奴をもう一度、細工台に縛りつけるのじゃ……この文さえ書かせればもう用のない体……とっくり、生膚剥いでやろうぞい」

「あたしを計りやったな！」

「そうよ。それがどうした。それ小平太」

小平太は荒々しく、小夜姫を押さえつけると、前のように縛りつけた。

「蛇奴！ 鬼奴！」

「そうよ、僕等親子は、二十年前、そなたの母に地獄の鬼にされたのじゃ。喚け、呻け、もだえろ、やい。今に、そなたの生膚を、白兎の皮剥ぎのように引剥いてやるわ、ヒヒヒッ」

五郎次の笑い声はすでに人間の持つ響ではなかった。

五郎次は小平太をせかせて、油壺に両手を突っこむと、異臭を放つどろっとした油を、

べちゃべちゃと、小夜姫の全身に塗りつけた。
「小平太、躊躇するでないぞ……若い女子と
思うな、一匹の白兎と思え……生きた女子と
思うな……憎い憎い敵の片割れに、今こそ存
分に報復してやるのじゃ……それ、くねくね
とよう弾む膚じゃ……二人して笑ってやろう
ぞい……小平太、笑ってやるのじゃ、フフフ
ッ」

洞穴の岩壁に五郎次と小平太の不気味な笑
い声だけが反響した。

瀑下の裸女

この頃、京の町は、小夜姫掠奪の噂で持ち
きっていた。四条にある桑田満正の屋敷内
は、柏と満正が青い顔を突き合して、沈鬱そ
のものだった。満正の下知で、座商人のすべ
てが取調べを受けたが、五郎次の素姓や住居
を知る者は一人としていなかった。

「白昼、事もあるうに、この儂の姫を引ッさ
らうとは、よほどのしたたか者に違いない……
大方、人買いの類であろうが、心配するこ
とはない……嵯峨近くまで伴の者が追って行
った故、嵯峨の山々へは、捕吏を数百人つか
わして、しらみつぶしの探査じゃ……追っ
つて吉報を持ってこようぞ」

満正は柏を慰めるように云ったが、柏は眉
根の皺を少しものばさなかった。

翌朝になって、嵯峨一帯を捜査した捕吏が
空しく引き上げて来た。

柏はその報を聞くと氷のように冷たく硬ば
った顔をした。

「この上は將軍に願って、諸国の管領へ下知
してでも、探し出して見せる……安心せい」

満正の將軍への奏上で、諸国の管領へ嚴命
が下った。各所に高札が掲げられ、正長天文
小判千貫の、賞金が与えられる由が告示され
た。

その莫大な賞金は、貧窮に喘ぐ人心を眩目
させた。金欲しさのあらぬ訴えが陸続と問注
所に殺到したが、一つとして真実のものではな
かった。

一句が空しく過ぎた。柏の焦悴の様は目に
見えて濃かった。柏は小夜姫を盲愛していた
のだ。狂乱一步手前の態だった。

ある朝早く、邸内警護の武士が、庭に射込
まれていた矢文を見つけて、名宛の柏の許に
届けた。

文を一読すると、柏は喜色を満面に溢れさ
せた。文面を疑う心の余裕もなく、ただ、小
夜姫会いたさに、綾姫を伴って、清滝のほと

りへ出向く決心をした。伴もなく、他言もせ
ず、ひっそりと夕刻近くに綾姫と共に邸内を
忍び出たのである。

あだし野でとつぷり昏れた。折から十月半
ばの月明りで、簾路は青白い光の縞になっ
ていた。

「母上様、なんだか空恐ろしゅうございま
する」

綾姫が柏の袖を掴んで震え声で云った。

「なんの恐ろしいことがありましようぞ。き
つと相手は人買いに違いありません。ほれ、
ここに用意した小判百貫の墨付をやれば、金
欲しさに小夜姫を返してくれましようぞ」

「なにゆえ、あたくしを呼んだのでしろうか」
「きつと、小夜姫が一目あいとうてでありま
しょう……さ、早よ、歩きましようぞ」

柏は小夜姫の筆蹟を信じ込んでいたし、ま
さか、復讐の鬼と化した五郎次の所業とは夢
想だにしていなかった。五郎次の存在を考え
るには、二十年の歳月はあまりにも長かった
のである。

しっとり夜露が降り、奥山へ進むにつれて
二人の被衣がしっとり濡れそぼった。

「母上様、ほら、滝の音が聞こえまする」
「きつと清滝でありましよう」



急に傾斜が酷くなつて、溪音が轟き、その音の中に一きわ大きく滝のなだれ落ちる水音が木魂した。

岩場が多くなり、溪流の水が、月光に光って躍るのが見えた。

柏と綾姫が一条の白い糸をひいて絶え間なく落ちてゐる清滝の滝壺近くへ、岩伝い、裏裾の足をとられそうになりながら降り立った時である。

白く泡立つ滝壺を背にして立っている二つの黒い影が、待ち構えていたように、のっそりと近寄って来た。

「お待ち申しておりましてぞ」

二つの人影の背の低い方が、ふわふわと息のもれるような囁れ声

で云った。

「その方達か小夜姫をかどわかししたのは？」
気丈な柏は、凜とした声で云った。

「はい左様で……」

臆面もなくその影は答えた。いうまでもなく五郎次である。もう一つの影は小平太だ。が、顔が影になっていて、柏には判らなかった。例え、光を受けていても、五郎次の変貌と三歳の童の時に別れた小平太の成人では、判じようがなかったはずである。

「大方、金欲しさの悪業だろうが、これこの通り、小判百貫の墨付を持参した故、早く、小夜姫を連れて参るがよい」

「金は不用にごさります」

「なに、金はいらぬと……それでは、小夜姫を渡さぬというのか？」

「いえ、小夜姫様は、ほれあの通りお連れ申しております」

五郎次は、滝の方を指さした。

「あっ！」

柏と綾姫の喉笛が驚きの声を発した。

ひっきりなしに奔り落ちる滝のしぶきを浴びて、一糸纏わぬ小夜姫が、滝壺の中に突っ立っていたのである。

「小夜姫、小夜姫ではないか……何故、その

ようなあられもない姿で、滝にうたれておるのじゃ、早よ、母の許へ来やれ」

だが、小夜姫は微塵の身動きもせず、水しぶきに黒い垂髪を両肩に散らし、折からの月光に、豊かな両乳房の膨みと腰の艶冶な曲線を浮き上らせている。

「早よ、来やれ」

柏は絶叫した。が、その声は滝の轟音に空しくかき消されてしまった。

「聞こえぬのか？」

「小夜姫様には魂がありません故……」

「な、なんと？ 魂がないとは……気でも狂ったと云うのか？」

「さ、それは、とっくりと近寄って御覧うじめるがよい」

五郎次はそう云うと、柏の顔を上眼づかいに、シロツと睨んで、にたりと笑った。

生 膚 傀 儡

柏は狂ったように、滝壺の中へ、ざぶざぶと入って行った。綾姫は恐怖のためか、棒をのんだように突っ立ったままだった。

柏は滝の側に近寄ると、小夜姫の腕を掴んだ。一瞬、ぐにゃつと、小夜姫の白い裸身が腰から折れて、柏の胸に寄りかかった。

「げっ……」

柏が絶叫した。それもそのはずである。生きているとばかり信じ込んでいた小夜姫が、まるで反応のない死人、いや、死人にしては余りにも柔軟な肌触りだったのだ。小夜姫には骨が抜けていた。柏はその不気味な小夜姫の感触に魂を奪われたのである。

柏は、それでも、ひしと小夜姫を掻き抱いて、滝壺を上って来たが、放心したように、岩の上に長々と横たえた小夜姫の体中を撫でまわした。

「これは一体どうしたことなのじゃ」

柏はきつと五郎次を睨めつけた。

「小夜姫はその通りの傀儡になってしまったのじゃ……魂も骨も血もない生膚なまはだだけの傀儡にな……小夜姫は生きながら生皮を剥がれて傀儡になったのじゃ……生きていた時そのままの姿でな……未来永劫変らぬ傀儡になったのじゃ」

「そのような世迷事を聞く耳持たぬ……これは小夜姫に似せたただの傀儡じゃ、さ、早よ小夜姫を返せ！」

「まだ信じられぬのか……よっく見るがよいそなたが腹を痛めた可愛い娘なら、体のどこかのアザぐらゐは覚えておろうが……よっく

見るがよい……」

柏は頭が混乱したように、何度も首を振っていたが、月光に照し出された小夜姫の膚を丹念に調べ始めた。が、やがて、恐怖の眼をみはって、五郎次を見た。

「どうじゃ、小夜姫に違いなからうが……」

五郎次は心地よさそうに高笑ってから、
「信じられぬのも道理じゃ……では、そなたの目の前で、そこにいる姉の綾姫も、この小夜姫と同様の傀儡にして見せてやるぞい……それ、小平太、そこな女子を引き立てい」

「小平太とな……」

はじめて柏は、凝然と二人を見詰めた。

「げっ……そなたは五郎次……」

柏は白眼をむいて吠えた。

「やつと判ったか……僕は五郎次じゃ……ここにいる男は、小平太じゃ……二十年前、お前にむごい目に会わされた者よ」

「五郎次どの、生きていやったのか？」

「死んだと思うていたのか、うつけ女子奴……二十年この方、お前のことは一日として忘れたことはないぞい……さ、今こそ、存分に怨みを晴してやるぞ、それ小平太、綾姫を引き立てるのじゃ」

小平太は荒々しく綾姫を抱きすくめた。

「小平太……あたしは、そなたの母じゃぞ……綾姫はそなたの妹じゃ」

柏は小平太へ叫んだ。

「何をこの期に及んでほざくのじゃ……小平太は、お前が阿呆にしておるわ、そんな言葉は通じぬぞい」

五郎次は柏の肩を蹴上げた。

「む……」

柏はその場に気を失ってしまった。

小平太は、綾姫を軽々と担いで岩場を上った。

五郎次は柏の体と傀儡と化した小夜姫の裸身を両抱きにして後を追った。

月光が皎々と冴えかえり、この世ならぬ悲惨な復讐の出会いにも素知らぬ顔で、滝口に垂れ下った櫓の枝の上で、ふくろうの眼が魚鱗のように光っていた。

父子殺戮

それから数刻後――

五郎次と小平太の洞穴の棲居の中では、無惨な地獄図が展開されていた。

息を吹き返した柏は、高手小手に縛られて、すぐ目の前で展開されている綾姫の苛責に、恐怖の眼をみはり戦慄にうめき続けていた。

綾姫は、小夜姫と同様、細工台の上に縛りつけられていた。

「のう柏、お前が信じるように、これから、この綾姫を小夜姫と同じ傀儡にしてやるぞ。赤裸に引剥いてやるのじゃ」

「五郎次どの……許して下さい……あたしの体はハツ裂きにされようとも、綾姫だけは……綾姫に罪はありません」

「嫌じゃ……二十年間、僕は血の涙を流し続けて暮して来たのじゃ……」

「そなたの心は鬼か蛇か！」

「そうよ。鬼じゃ。蛇じゃ。二十年のうちに僕は血の涙を流し続けて、もう一滴も人間の血は残っていないのじゃ」

「小平太……そなたは判ってくれるであろうな……あたしはそなたの母じゃぞ」

「腐抜け……小平太はお前に押し倒された時頭を打って、人並ではのうなっておる……いくら、母じゃと喚いたとて詮ないことじゃ」

「小平太……あたしはそなたの母じゃぞ……そなたに乳房をふくませた母じゃぞ」

「その母が、何故、あの時、邪険に押し倒したのじゃ」

小平太は、五郎次と柏との口論には頓着なく、皮剥ぎの小柄の刃を、砥石で、ぎいぎい

とき続けている。

綾姫は、すぐ側に立てかけてある妹の世にも恐ろしい傀儡の姿へ眼をみはり、やがて、わが身の運命が、それと同じ姿にされる恐怖感で、白い裸身を震えさせていた。

「ほう。妹の小夜にも勝る玉の膚じゃ……剥ぎ甲斐があるわい」

五郎次は、獣の眼になって、綾姫を見据えた。

「小平太、とげたか？」

五郎次の言葉に、小平太は、ギリと光る小柄を差し出した。

「待って――」

柏が絶叫したが、その時すでに五郎次の復讐の血にこりかたまつた小柄の刃先は、綾姫の胸を薄く裂いていた。

と、その時、柏が縛られたままの姿で、五郎次の足許ににじり寄ると、ガッ、と彼の脛へ歯を立てた。

「ちッ」

軽い叫び声をあげて、五郎次が横倒しになった拍子に、五郎次の手を離れた小柄の先が、小平太の

怪異復讐譚特集

後頭部に突き刺った。

「ぐえッ！」

蛙を押しつぶしたような呻き声を挙げて小平太はその場に倒れたが、しばらく経って、意識を取戻した。

「小平太……大丈夫か？」

五郎次が心配顔で云うのへ、小平太はきょとんとした眼を見ひらいていたが、後頭部の小柄を抜いた。思ったほどの深傷ではなかったらしい。それよりも、小平太の眼は、以前のような間の抜けた眼ではなかった。彼は六歳の折、柏に押し倒されて後頭部を打ったと同じ個所への思いもうけぬ小柄の一撃で、その時失っていた正常な頭脳の働きを取戻したのである。

小平太は柏の顔を凝視した。その眼は親近感に溢れていた。彼はおぼろげながら、母親の記憶をよみがえらせたのである。

この小平太の変貌に気づかなかった五郎次は、小平太から小柄を取ろうとした。

「小平太、早よ、かさぬか……何を呆うけて、見とれておるのじゃ」

「母者……」

小平太はぼつりと云った。この言葉を耳にした柏は勢を得て、小平太へ絶叫した。

「おうッ、思い出してくれやったか……小平太……あたしはそなたの母じゃ……腹を痛めてそなたを産んだのじゃ……助けてくりやれ……」

「なにをほざく！」

五郎次は、やにわに、柏に挑みかかると、細首を締め上げた。

「小平太……この母を助けてくりやれッ！」

柏の恐怖の声を聞いた時、小平太は、いきなり、手に持った小柄を、五郎次の背へ突き立てた。小柄の柄までめりこんだ。

五郎次は低い呻き声を挙げただけで、一瞬のうちに絶命した。

「小平太、助けてくりやったのじゃな……早よ、縛めを解いてくりやれ」

柏がせかすのへ小平太はぼつりと聞いた。

「ほんとに母者か？」

「偽りを云うてなんになろうぞ……そこにいる綾姫はそなたの妹じゃぞ……」

「そうか……」

小平太が親しみを眼一杯に溢れさせて、先に綾姫の縛めを解いた時である。

柏と綾姫の後を秘かに尾行していた桑田満正の率いる武士たちが、どっと、洞穴の中へ乱入して来たのだった。

膚塚由来

柏は救助の武士の姿を見ると、そこに小柄を持って呆然と突立っている小平太を眼顔で示して、憎々しげに叫んだ。

「者共、そなたを斬り殺せ！」

うって変った柏の言葉に、小平太はぎくんとした眼で柏を見詰めた。

「母者……」

「何を世迷い事を……あたしはお前のような鬼奴を子に産んだ覚えはないぞ……さ、者共早よ、斬り殺さぬか！」

「母上様、……それは余りむごい……さっき云ったことは嘘だったのでござりまするか」

綾姫がたまりかねたように口をはさんだ。

「そなた、余計な口出しは無用じゃ」

だが、この柏の言葉が終るまでに、小平太の眼には、柏への憎悪の血の色がみなぎっていた。

一瞬、小平太は、柏へ飛びかかると、手に持った小柄を、彼女の白小袖の胴元へ、深々と刺し込んだ。

「ぎゃッ！」

柏の断末魔の声が、岩壁に反響し、みるみる白小袖に毒けしのような真ッ赤な鮮血が花

ひらいた。

が、小平太の方も、大勢の武士の白刃を浴びて無惨に斬り殺された。

綾姫は辛うじて浅傷だけで救出されたが、その短時間の恐怖の連続に、息も絶え絶えの有様であった。

満正はじめ、家来の者は、洞穴の中の惨劇に目をそば立てたが、とりわけ、小夜姫の生けるが如き傀儡には、肌を粟を生じた。

この血を血で洗う復讐譚には後日物語がある。

後日、この世にも悲惨な、事実談を誌した「嵯峨奇話」に次のような文字が綴られてある。

「……世にも稀有なる五郎次親子の報復は、死後数刻経たぬ間に、桑田満正の身にふりかかりたり。即ち、嵯峨清滝の岩場の洞穴を出でて、救い出せし綾姫を帯同なし、満正が岩場を渡らんとせし際、満正、如何なる事にや足を踏みすべらし、数十丈下の保津の溪流に転落なし、頭破れて鮮血奔り、保津の清らかな流れを朱に染めて絶命したり。もともと、悪の張本たりし満正なれば、世にいう因果はめぐむるのとえの通り、天の神、満正をば制裁なせし業ならん。さて、綾姫ひとり健を保ち

將軍義政殿より、たつての所望なりしが、綾姫堅く拒み、剃髪なして、清滝近くに草庵を営み、五郎次、小平太、柏、小夜姫、満正の菩提を弔いたりという。

あるひと、その庵に綾姫を訪いし折、あやしげなる傀儡を、綾姫の愛玩なせるを見たり。その傀儡のさま、恰も生けるが如き若き女性にて、綾姫によく似たるを、そのひとの

問うに答えて、綾姫曰く、こはわが妹の写し身にて候と。その砌、世にも哀しげな面をしたは如何なる謎ならんと、そのひと余に口伝したり……」

後年、綾姫は庵の側に小さな塚を築き、それを膚塚と称したが、その塚の下には、小夜姫が手厚く葬られたのは、いうまでもなからう。

次号予告

隠密覚書 第二十話

般若狂女

島本春雄

深夜にまろび出る半裸の女！ 可憐な心狂うまで追いつめた者は誰ぞ？ 般若面を擲る非情の浪人は？ 争い継ぐ渦中に狂乱の美女は笑う！



妖気を誘う家

アロハの男に誘われて訪れた家は不気味な幻想をもたらす家であった！

猿 若 屯 平

美濃村 晃・画



杉の木立が境内にびっしりと生え、木と木の間には熊笹が人の腰ぐらいの高さに繁っていた。その中心には朱色の玉垣をめぐらし、古びた八幡の祠が風雨に黒ずんだ木の色をみせている。

いつ来ても森閑と静まりかえって滅多に人の姿を見たこともない。近くには私鉄の線路が敷かれ、これも同じ私鉄の分譲地がおりからの土地ブームの波にのって、整地を終り、ブロックの塀でこの神社との境界を歴然と区劃し、お客サマを人待ち顔だが、この境内だけは特別の冷い空気が漂っているような気がする。

その朝、その八幡宮のまん前で妙な男を見た。



妙と云えば第一服装からして妙なのであ

る。一と頃よくアメちゃんが得意然として着て歩いていた紫縹子地の派手なジャンパーに黄色い虎が尻っぽをおったてている図柄で、刺繡の虎がすこぶるヘタクソときているから老いぼれた猫がくしゃみをしているように見える。そのジャンパーだけでもだいたいの身元素性が知れようと云うのに、そのジャンパーの胸元をだらしくあけ、青と赤の恐ろしく眼につくマドロス好みの横縞のシャツをのぞかせているし、素足の指先には赤い帯革のついたサンダルをつっかけているから見るからに鼻もちのならない野郎だ、と云う印象を与えるようにできている。

その上念のいったことに気味のわるい兎唇で、それさえなければ充分に人をひきつける美男子であり、端正な顔つきであるのに、兎唇の紫色の瘡痕が、その隆い鼻も、白い歯の列をも一層やりきれない悪相に彩っているの

だった。

そいつが社頭の手洗石の上に横着にも馬乗りの姿勢で足の先の赤いサンダルをぶらぶらさせ、その朝の清らかな空気の中でいったい何をやっているのかと思うと、聞くにたえない胴間声をふりしほり、浪花節をうたっていた。せめてそれもロカビリーとかウェスタンとかカリブソとか云うのならまだしも我慢のしようがあるものを、こともあろうに浪花節をうたっていることが形容しがたいイヤがらせに聞えた。この男から兎唇をのぞけば、およそ浪花節と云うものから無縁の世界を誰しも感ずるにちがいない。それが兎唇と浪花節が結びつくとは何とも云えないイヤらしさと、畸形的凶兆を暗示する。

とにかくその男の浪花節を聞いた瞬間、恐ろしく不愉快になり、むらむらと胸のおくからつきあげてくる反感を感じたことはまぎれもない事実なのである。

街道から一直線に敷石づたいにその樹齢二百年をこえる大きなうろのある古櫓までつづいている路が、櫓から直角に折れ玉垣の正面の扉に通じている、その短い敷石路の上で、私は朝の散歩の途中、思いもかけずその妙な男とキツとにらみ合い、相對峙する形になった。

彼の方の立場としてみれば突如現われた闖入者によって浪花節の口演——と云うべきかまたは歌声と云うべきか——を中絶させられ、理由なき反感を明かに示しながら、黙って顔を見ている人間に対して鬱然として怒りを発したのかもしれない。不機嫌きわまる顔付で同じく黙々と私の顔色をうかがっている。

上眼づかいにじっと人の顔を見、そこにかくれている侮蔑の色をみると、私はその兎唇の首をしめ上げ、眼を白黒させたくなる欲望をじっと押えつけていた。元来私と云う人間は小学校の昔から兎唇と云うものに本能的に嫌悪をかんずる性質で、女も男も兎唇であるかぎり一切傍へよりつかないことにしている。嫌悪と云うより、どうにもならない生理的恐怖をさえともない、どんな頭脳明哲なすぐれた人でも人間外の別種のものとして考え

てしまふ癖がある。

往來で会ってさえイヤなものを、まして知己、友人として顔をあわせるのはたまつたものではない。小学三年の時、どうしてもつきまとして離れない同級の兎唇を二十尺程の石垣の上から突きおとし、危く殺し損ってから一層生来の嫌惡に輪をかける始末だった。お蔭でその子の片足をびっこにさせ、家のオヤジを嘆じさせる程の治療代をとられた。兎唇のひどいを見ると世の中が灰色にかすんで見え、自分で自分の首を絞め、むしろこんな世の中からおさらばしたい位である。

正直に云ってしまえばそいつが浪花節を唸っていても、大虎のジャンパーを着ていなくてもやはりイヤなやつにかわりはない。いつもならベツと唾を吐き、さッと身を翻して兎唇の見えないところまで、遁走してしまうのだが、どう云う加減か二匹の闘犬のようにまっこうからヒタと額をつきあわせ、睨みあった以上、何だか足がその場に釘づけになって、どうにもうごかすことができないような気がした。

二

ややしばらく睨みあいの末、今さら逃げだ

すわけにもいかないし、相手に飛びかかって首をしめる時期を失っているので、その気味のわるい兎唇からやや視線をそらせ、今度は自分自身に対するバツの悪さに憤りをもよおしている、虎がわざとらしいエヘンと云う暖ばらいを一つしてのろのろとポケットから赤丸印のシガレットを引きだして、カチッとライターの火を点じた。

それがつまり休戦の合図であった。

私もまたドテラの袂をさぐって光の箱をとりました、そんなこの馬の骨かしれない虎野郎をことさら無視するような態度で煙草をぶかぶか吸いはじめた。それから何気ないふりをして余り体面を傷つけず、きれいにその場を退散することとまた可能であったが、その時にかぎり、どうもそうさせない空気のようなものがあつた。やつが手洗いの上へ跨がっているから、こちらも当然、そこにある灯籠の傘石と火袋を叩きおとした柱の上へ尻をどっかりとおろして、反対の方向へ顔をむけひと休みの態度をとることにした。

するとその兎唇の虎が妙なことを口走りはじめた。

「いくらオレがパンパン屋の亭主だと云ってあんまり人をバカにするな！」

「エ、何だつて？」

と、私はわれにもなく思わず聞きかえした。

「とほけるなよ。知っているだろ？ 如何にもオレは女を売って暮している人間だ。それがわるいと云うなら仕方がない」

「冗談じゃないよ君、僕は何も知らんぞ」

と、私はそんな兎唇などと言葉をかわさなければならぬ破目に陥ったことに鋭い痛みと、腹だたしさを覚えながら、抗弁した。

「フーン知っているよ。世間の人間はみんなそんな眼をしてこのオレを見やがるのさ。いいとも、大きに見てくれ！」

「知らないんだぞ、本当に。僕は何も知らん！」

「OK、知らなければ教えてやる。オレはパンパン屋のオヤジさ。最愛の女房の肉体を売って飯を喰っている下等な男だよ」

眼をすえて、ギラギラする光を放つ瞳をじっと私の上にあて、ナニか執念のこもった口調でからむように云った。どうやら私はほんでもない人間にキャッチされたようだ。気持ちのいい朝の散歩はその身ぶるいのであるほど嫌いな兎唇の出現によって、どす黒い不吉な筆に黒々と塗りたくられてしまった。

「ひと口に女を売ると云うが愛するがゆえに妻を売る場合もある。オレは彼女に首ったけに惚れている。だから彼女を売るんだ!」

と、彼はトの字形の三方に裂けた口を歪め理屈のあわないことを云ってヒ、ヒ、ヒと笑った。私は少しばかり胸がムカついてきた。その男の顔にはみじめったらしい苦痛の影がちらりとしたが、それを強いて陽気らしく装い、

「女房の手や足を喰って生きている人間はさぞ嫌なやつだと思うだろうが、オレ達はおたがい満足しているんだ。その上愛しあっている、と云ったらきつとヘンに感じるだろう?」

「しかしなぜ売るんだ?」

と、私は妙な好奇心をそそられつい口を入れた。

「それは彼女と相談の上合意の結論に達したからだ」

「しかしともかく肉体を提供し、金をとると云う行為は不潔だよ」

「不潔だって? ジャタダにしろって云うのか?」

と、やつは大きな声をだした。

「いったいオレ達は現在ただの一日でも金を

払わずに生きていられるか? 水、日光、シヨバ代、家賃、税金 etc……イヤ応なしに毎日金をむしりとられるのが今日の文化生活と云うものだ。まして完璧の美に磨きあげられ、微妙に反応する女の肉体をただで鑑賞さ

せるやつがあるか。金をとるのは当然の権利だ!」

そうムキになってまくしたてられると、あえて異議をたててみてもはじまらない、と私は黙って喋べらせておくことにした。



見え

「美術館へ行ってみろ、とにかく画に描いた女をみるだけでも金をとられる。精神も人間の命も何もかもピンとソロバンをはじいて金に換算される世の中だ」

彼の熱した言葉の中には何かもっていき場のない憤怒の情が含まれているように思われた。べつに私は虫の好かないその兎唇の説をもっとも千万だと思って聞いていたわけではない。そんな弁をふるっている如何にもふんまんに堪えないと云った様子の中に何かしら虚構の影がさしているように感じられたからだ。

「相手は金を払い、オレは女の代価を受取る。この簡単明瞭な取引によって不潔どころかオレはますますぞくつとする程嬉しくなる。それはオレが今日までわが女房を美しく価値あらしめるように育ててきた苦しい努力の当然の報酬と云うわけさ。おわかりになるかな？ この気持が」

と、やつはうなじを反らせ、その気味のわるい兎唇をまっすぐ私の方へむけ、誇りやかに云った。

「しかし売春法実施以来、商売はやりにくくなったのじゃないかな？」

と、私はなるべくその唇を見ないようにし

て当りさわりのないことを口にした。

「事実はその逆でさ。ますます繁昌してる」

「ナゼ？」

「つまり禁止したからさ」

「だがなかなか取締りはきびしいそうじゃないか？」

「取締り？ フン、いくら追いかけても肉の皿には蠅がたかってくる」

「蠅かね？」

「みんな蠅でさ。しかも腐りかけたやつが好きてきている」

と、また兎唇から白い歯をムキだしてケラケラと笑った。

三

その時突然耳を突きさすような鋭い金属音が大气を切り裂き、ビューンと身近く聞えた。虎はパツと手洗石から身を躍らせると雑草の間にうずくまり、両手の人差指で耳に栓をし、じっと眼をつぶってうつむいた。

どうやらジェット機は高い杉の梢の間をかすめて急降下を試みたものらしい。音が遠ざかるとようやく彼は眼を見開き、よろよろと立上り、みえもなく茫然としたかたちで、
「チェッ畜生め！ おどかしやがる！ オレ

はあいつが大嫌いさ」

と、やや云いわけがましく云った。こけおどかしの大虎の派手なジャンパーが見るもだらしのないでいたらくに、私は少々気の毒になり、

「まったく傍若無人だな」

と、彼をなくさめるように云った。

「どうもオレはいつかあいつにやられるような気がする。故障で空から落ちてくる飛行機と心中するのもちよつとしゃれてるかもしれない」

と、若干の実感をこめ、虎は独り言のように呟いた。

「とにかくオレは大分アメちゃんからしほったからな」

ひとかどの悪党らしく女房を稼がせているやつが飛行機の降下音に脅かされ、気の弱い世迷言を云っているのを見るとつい皮肉を云ってみたくなった。

「それがつまり罪ほろぼしと云うわけか？」

「冗談云うな、商売とそれとはまったくべつの話だ」

と、憤然として彼がほざいた。

「だっていいことをしていると考えてるわけでもあるまい？」

「ナンだって？ 売春法にふれてるとでも云うのか？ よしてくれ！ それはオレの権利でもあり、生きる楽しみであるんだ」

と、あたかも人権を踏みにじられたかのごとく昂然と、やつは放言した。

「オレはオレを軽蔑する人間をみるたびにかえって元気がでてるんだ。愛する女房の肉体を売る勇気のある人間が少くともここに一人はある。そいつを軽蔑できるものなら軽蔑してみろ！」

ナニを血迷ったかそんな支離滅裂なことをやつは両足をひろげて、酔いどれのようにわめきはじめた。

「べつに軽蔑はしてない」

「イヤ、している。その顔が証明している」

私は少々もてあまし、仕方がないので煙草をむやみにすいながら沈黙していた。

しばらくすると虎が云った。

「じゃオレの家へ行こう」

「ナンで君の家へ行くんだ？」

「やっぱり軽蔑しているな」

「してない」

「じゃ行こう！」

私は今日始めて兎唇の男と口をきいたことをしめじみ後悔した。

「パンパン屋だと思ってバカにするのか？」

「そんなことはない」

「じゃよって行ってくれ」

と、しつっこく彼は勧誘した。

「だが商売の邪魔はしたくない」

「本当は暇なんだ。オレは一人で退屈している」

「いったい家はどこだ？」

「すぐその朝日湯のうしろだ」

私はそこでやむなく、その虎のジャンパーの背中を鼻先きにみながら、渋々とその正体不明のパンパン屋の後から下駄を引きずって歩きだした。

四

そこから歩いて五分ぐらいの距離だった。

確かに朝日湯のうしろの材料置場の空地のむこうに灰色の四角い建物がたっている。外から見た外面はモルタルで塗りこめられ、入口には硝子入りの格子戸がはまっている。から日本風の建物に見えるが、洋館のようでもあり、この主人公同様すこぶる異様な姿をしている。格子戸の上の框には横に細長い板をうちつけ、片仮名でミスタ・ヤコブ・ベホルスとインとミセスハルミと、かなり大きな字で

書いてある。まさかこの一緒につれだってきた虎の名前がベホルスと云う牛のような名前ではあるまいとげん顔を上げて仰いでいると、虎がこともなげに、

「カムフラージュさ」

と、云ってニヤニヤ笑った。

「これは架空の人物か？」

「イヤ、実在している」

「じゃ、下宿人か？」

「主人公さ」

「すると君は？」

「主人公さ」

「妙な話だな」

「ナンでもないことだ。彼がきている時は彼が主人公で、彼が行ってしまえばオレが主人公なのさ」

「このミセスハルミと云う人は？」

「オレの女房であり、彼の女房さ」

私は思わず虫ずの走るほど嫌いなその兎唇を見つめた。

彼が最上級の親愛の情を示し、ほとんど手をとらんばかりにするので、私は下駄をぬぐとその板敷きの廊下へ飛上った。左側にはレースのカーテンのついた部屋があり、ドアがしまっていた。われわれはやや暗い通路をと

おつて奥の方へ進み、彼の常住巢としている一角へ入り込んだ。

そこはパンパン屋の楽屋とも名づくべき一室で、うす汚れたテーブルといくつかの椅子と鉄製の簡単なシングルベッドが置いてあった。およそ女気とは縁のうすい環境をなしているのは如何にも不幸な兎唇の身をひそめるのに似合いの場所であつた。もっとも彼が幸か不幸かはよく知るところではないが、

私は耳をたてて物音に気をつけていたが、「ほかに誰もいないのか？」と、訊いた。

「猫と兎ぐらいはいるよ」

そんな人をくった科白を吐きながら、片隅から酒瓶とグラスを二個、ドンとテーブルの上へ置いた。酒はジョニーウォーカーの赤で

虎が虎のジャンパーをベッドの上へ投げすて無雑作にガラス器の中へドクドクと注ぐと、高級ウイスキーの芳香がかすかに鼻さきへただよってきた。

この広さ十畳ぐらいの部屋には窓が一つしかない。しかもその窓には厚ぼったいオレンジイエローの布地に一面に赤い飛沫をちらしたカーテンをピッタリとおろしてあるので、部屋の中の空気はくらい黄色がハンランし、眼にしみるような赤い色がちらちらした。戸外では五月の太陽が輝いているはずだが、この中は妙によんだ空氣が、アブストラクト派の絵画のような雰囲気をつくっている。たとえばちぎれたギターが——そこにはギターは見あたらないうが——宙にぶら下ったり、ウイスキー瓶とコップののっているテーブルが

斜に踊りあがったり、コップがコックリきんのように急に独樂のように回転しはじめる、と云つたようなことが今そこではじまってもさほど不思議に感じられないだろうと思わせるなにかがあつた。

第一この私が平素もつとも嫌悪する兎唇の男、しかもそれがひとの指弾するパンパン屋のオヤジと共に舶来ウイスキーをくみかわすと云うような恐らく三十分前までは夢想だに نہなかつたことが現実に行爲されていることがすでに奇怪至極と云うほかはない。

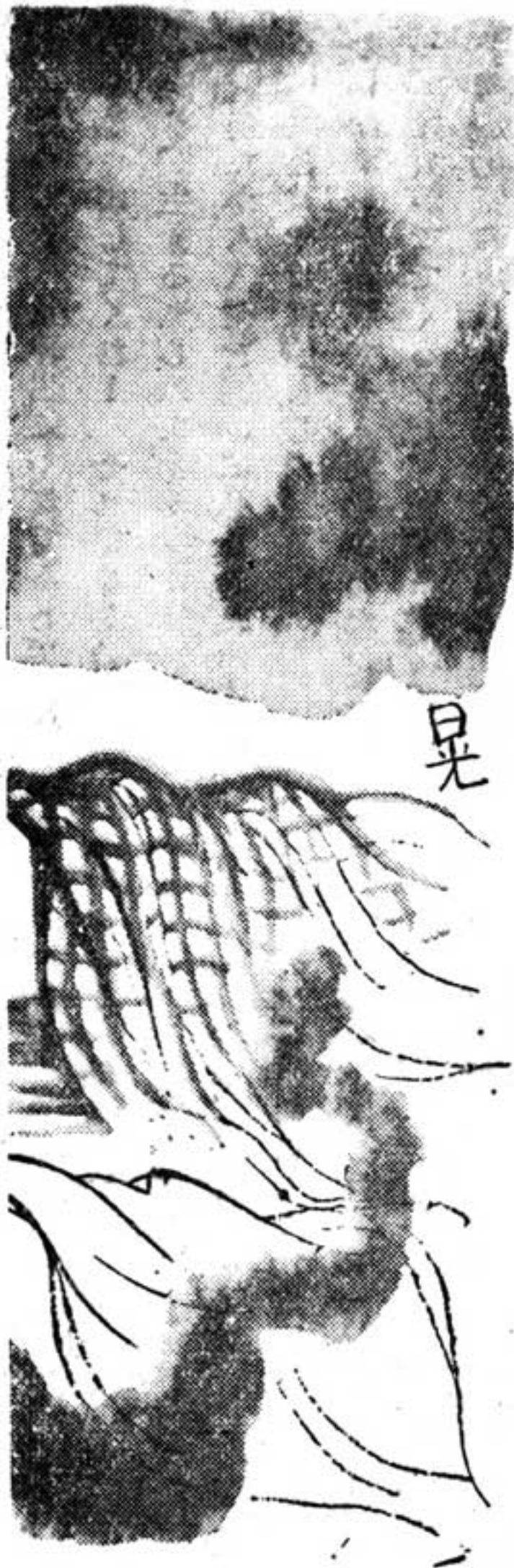
私ははなはだ浅ましい話だが、その虎の注いでくれた舶来ウイスキーに生唾をのみこんだが、どうも手をだす勇氣がでてこない。

「よかつたら飲ンでくれ。どうせアメちゃんから捲きあげた代物だ」

やつは横眼で私の顔を見ながら、ナニが意氣こんだ調子で云い、自分のグラスをつかむと、その琥珀色の液体を喉元へ叩きこむようにしてぐいとストレートでやった。

「オレの楽しみは女を売り、持っているやつからギリギリとしぼり上げることだけさ」

と、余り悪党らしくない癖に彼は傲語した。また立上ってコーヒーの受け皿に何か盛つたものを眼の前に置いた。私はやつとグラ





スの方へ手を伸ばしながら見ると、カチカチに乾いた梅干が若干のっっている。へえ、ずい分変っている。こいつをウイスキーの肴にしようと思つていると、彼が一つ摘んで口の中へ投げてみ、さほどすっぱい顔もしないでがりがり嚙んでいる。

芳醇な液体が私の喉から胃にかけてポツと点火し、その匂いを嗅ぐと私はまたあらためてその部屋の中を見まわした。何か変った空

気がこの中に流れている。私はふと壺中天と云う言葉を思いだした。確かに現実ではなく、架空の別天地だと思つてどうやらそんな気がする。

その時やつと私がテーブルを挟んで対座している右手のドアが音もなく、なかばそっと開かれ、怯々とあくどい口紅をぬった青白い顔が部屋の中をのぞきこみ、私を認めるとはつとした様子で顔はかくれ、またもとのよう

にずっと扉は閉じられた。ほんの一瞬のことだが、私はその感じでパンパンだな、しかも肉体の酷使のためか疲れている、とすぐそう思った。

「誰だね？」

と、私は思わず訊くと、明かに人の気配でその方角へ顔を向け、彼女を認めたはずの彼が、

「何が？」

と、逆に質問した。

「今、その戸をあけた人さ」

「知らないね」

「知らない？」

「誰もいないよ」

と、彼は至って静かな様子でまたグラスを口へ持っていった。演出だとすれば見事な演出であり、半眼を見ひらき、何か考えているようでもある。放心のていでそらをつかつているとはちよつとうけとれない。何か見られでは都合がわるいのでかくしているものか、それとも確かに見ないとすると、彼のまともに見える眼の玉は特別の義眼でもあるのか、と私は彼の横顔をじっと見た。

五

やつの顔は憂鬱とふてぶてしさと、幾分かの内気とのまじり合った表情をし、例の兎唇が悲劇めいた彩りをつけ加え、氣むづかしげに梅干をかみ、ウイスキーを口へ投げ込む作業をつづけている。

「ことによる猫かもしれないね」

と、無心にやつは云った。

「人間の猫か？」

「人間は人間、猫は猫さ」

と、こともなげにやつは言い放った。

そう云えば青白くて眠そうで、あのちらりと顔を見せた女は猫に似ていた、と私は考えた。

「妙な猫だぜ、まったく。牡猫だが、あれが大好きときている。あれがはじまるときと寝室の中へもぐり込むのさ。そして事がすむまで一ぶ始終を見とどける、エロ猫だ。まったくハハハ笑わせるよ」

と、この妙な男はそんな話をするときと、女を売っている、と云う時に限って生々としてくる。ナニかそれは挑戦するようなひびきがこもっている。

「ところでヤコブ・ホルスタインとは何者だね？」

「ベホルスタインだ」

と、やつは手を振って訂正し、
「シドニーだよ。つまり進駐軍民間要員だ。そして当ハルミアンドミのパンパン商会の大株主でもあるのさ」

少し酔いのでたような声で彼が云った。

「ミセス・ハルミもないのかね？」

「営業中だよ」

と、うるさそうにセイラー然としたシャツの虎が云った。

「そとでかね？」

「ウン、そうだ。だがまるでその筋のおしらべだね。まあいいや。黙ってウイスキーでものみな」

「しかしいったいミスターの方はミセスと君が夫婦であることを知っているのかね？」

酔いが少しずつ身体をまわってくると私もだんだん遠慮をかなぐりすて、やつを料理してやろうと云う気になってくる。

「少くとも紐であることは知っている」

「それでよく円満にいくものだね？」

「毛唐は皆ひどく女が好きで、その上嫉妬ぶかいよ。だから円満と云っても波と風はつきものさ」

「しかしそうしている以上、まず順調にいつてると見えるね」

「ヤコブもオレを失うことは、彼女を失うことぐらいはわかっているさ。やつもよっぽどハルミには惚れている」

と、自信たっぷり云うとまたガリガリ梅干をかじった。と、急に声を秘密らしくひそめ
「ところでもうそろそろこっちからあのジジイを追放してやろうと思っている」

「ミスタ・ベホルスタインをか？」

「この頃だんだん金を出し惜しみしやがる」
急に何か思いだしたものの憎々しそうに云い、片時をテーブルにドンとつき、兎唇の口をゆがめ、

「このごろ不良外人がふえて困る。金を払うどころか逆に女からせびりとろうとしやがっている、驚いたお客さんさ！」

その時森閑とした家の中のどこかで女のうめきが聞えたような気がした。

「二階に誰がいるのか」

「誰もいないよ」

「声がしたような気がする」

「気のせいさ」

「そうかな」

朝っぱらから強い酒をグラスに二三杯傾けたので少しねむくなった。何だか小舟にのつて波のうねりに身をまかせていると云ったよ

うな気がしてくる。

冷たい雨のしずくが一ひら、頬つべたにあ
たったので、私は思わず掌をひらいて片頬を
押え、妙なことがあるものだ、と、眼の前で開
いてみると赤い筋が一本、手のすじの上に滲
んでいる。さっと顔色をかえ、

「血だ！」

と、大きな声をだすと、やつもはっとした
とみえ、眼をみひらいて、半身をのりだし、
「へへへへ葡萄酒だろ？ よくあることだ。
誰かが持ってきた瓶が倒れ、それがしみだし
たのさ」

と、天井を見上げた。頭上の白い漆喰に黒
い汚点が円形をつくり、その中心から凝固す
るしずくが一つふくらんで、今にも垂れよう
としている。

私は自分の掌のうちを見つめ。

「こいつは確かに血だぞ！」

と、また云った。そのトタンに背すじがぞ
くつとし、急に悪ろしくなった。

「そんなはずはない！」

と、急に大声をだし、やつは叫んだ。

「こいつは青い色をしている！」

「これが青い？」

と、私は驚いて彼の顔をみた。みるみるウ

イスキーの酔いは潮の引くようにさめはてし
ばらく茫然としていたが、

「二階に誰かいるな！」

と、私は大声をだし、さえぎりとめようと
する兎唇をつきのけ、ドアを開いて、二階へ
の上り口を探した。

「オイ、どこへ行く？ 家宅侵入で訴えるぞ
！」

と、やつは必死に私をとめようと後から飛
びかかってきた。私は大嫌いな兎唇に身体を
さわられたかと思うといささか逆上し、夢中
でそいつを突きのけた。

ようやく二階へかけ上り、閉じられたドア
を無理矢理にこじあけ、中へ入るともはや二
人の心中者は冷たくなっていた。ベッドの上
で裸のまま抱き合った情死者の一人は禿頭赫
顔の外国人で頑丈な体格をしていて、多分こ
れがミスタ・ヤコブ・ベホルスタインと云う
人物であろうと想像され、女の方は痩せた華
奢な身体つきのミセス・ハルミとおぼしい屍
体であった。だいたい外国人と云うものは滅
多に心中をしないものだ、と云うが、図らずも
確かに心中している処をまのあたりに見た次
第で、よほど強い薬でも用いたとみえ、夥た
だしい血を口から吐き、それが床を浸透し、

下の部屋へ垂れたとみえる。死因は勿論不明
であり、もうどうにも手のつくしようなない
状態であった。私の後からその部屋へ入って
きたやつが外聞もなく手放しでオイオイ泣い
ているのを見て、確かるとやはり男はミスタ
であり、女は彼の妻、つまりミセスの方であ
ると判明した。

それにしてもこの色盲と思われる兎唇の行
動の一切が不審の連続であり、怪しいと思え
ば怪しいことだらけだ。彼の言によれば最愛
の愛人たる女がこともあろうに客の一人であ
るヤコブと心中したことに對するショックも
あろうが、手放しで泣いていることも何か空
しい芝居めいた感じがなくてもない。それ
からこのミセスはやはりさつき下でドアを細
目にあげた人物とどうやら同一に思われるが
ちらりと見た印象とその強烈な衝動をよぶ情
死体の外観では確実に同一人であると断定で
きない。

お蔭で私はパンパン屋にいてしかも情死者
を発見した参考人として再三警察へ呼びださ
れ、いい加減恥さらしの世評をあびる憂目に
あい、意地のわるい係官の質問に赤面した。
やっぱり兎唇の人間は生涯私の敵であるこ
とにかわりはない。

——(完)——

変化若衆



三国沢 隆

古正英生・画

夜半の闖入者

——誰かがいる。わたしの枕元に誰かが座っている——

そう思いながらも、お雪は目を開けるのが怖かった。床の中で四肢をこわばらせ、戦く胸を押え、じっと息を詰めている。それが若い乙女にできる唯一の防禦法だった。

離室に娘ひとりが寝むことの危険を咎めたのは、父親の六兵衛だったが、それが杞憂でなかったのだ。いくら気の強いおきゃんな娘でも、それは日常家人の前だけのもので、こんな場合には鼻柱の強さも通用しない。

座っているのは、日頃変な素振りをする手代の久助でもないらしい。といって父の六兵衛でも、母のお吉でも、いや、家族や奉公人たちではない、全然見知らぬ者らしい。

静まり返った夜半の空気が、余りにも息苦しく、目を閉じたままでは耐えられない。お

雪はついに、そっと目を開けてみた。

「……あ！……」

反射的に飛び起き、布団の上に半身を起したが、短い驚愕の聲は、自分でも不思議なくらい、恐怖を忘れた柔らかさを含んでいた。

ふわりと行灯を覆った羽織を透かして、ほんやりとした火影に映ったのは、紫ほかしの友禅、七草模様の大振袖に精巧の袴、水もしたたる大前髪の色若衆である。

一体、どこから、どうして、何の目的でこの離室へ忍び込んだのだろうか？ お雪の頭をチラと掠めた不審は、端座したまま微笑を送る若衆の、妖しいまでに美しい容貌に押し流され、暫くの間はただうっとり、白く輝く横顔に見とれるばかりだった。

先年、初の東下りで江戸の人気を集めた佐野川芳松そのままのあでやかさである。「八百屋お七」の小姓吉三に扮した彼の一枚絵が飛ぶように売れ、お雪も一枚買ったが、今宵のこの若衆は、その一枚絵が抜け出たかと思われるほど、比類のない美しさだ。

「お前さま、どこからここへ？」

なじるでもない柔らかな口調で、こういう言葉が出たのは、ようやく持前の気丈さを取り戻したからだだったが、若衆は問いには答えず、切れ長の目を伏せたままにいる。黒い睫毛が行儀よく孤線を描き、人ごころをそそるように濡れていた。

「なんで、わたしの部屋に入ってきたのです。娘ひとりの寝間へ、失礼でしょう？」

続いて今度は、少し咎めるように問いを發したが、心の内では些かもこの美しい若衆をなじる気持はなくなっていた。夜半の闖入者にしては、その美貌といい、容姿ものごといい、決して無理に危害を加える相手ではないと見極めたからだ。心が落着けば、相手の出方を観察するゆとりも出てくる。若衆は案外正直そうに、視線をそらせた顔をポツと染めて、呟くように答える。

「あなたをお慕いして……」

低い、よく響くきれいな声だ。

「夜中不寐に参上して、お騒がせ致しましたことはお許し下さいまし。——私はただ、あなたのお顔を拝見できれば、それで幸福なの

でございます。御無礼を致しました」

つつましくやかに、愁いを籠めた声音でそういい終ると、若衆は立ち上っていた。

ハッ、と思う間もない。狭い室内に風音ひとつ立てず、鮮かに大振袖が翻える。若衆の姿は一転すると屏風の上へ軽々と乗り、次の瞬間には、完全に部屋の中から消え去ってしまった。まるで魔術か幻術のような素早さ、お雪は夢に酔う心地で、若衆の消えた屏風の上の闇のかぐろさを見つめ、面影をさぐるように呟いた。

——いまの若衆、いったいどうやってこの部屋に入り、また煙のように消え去ったのだろうか？ あれが物の怪、魍魎魍魎、または年経た獣類などの変化とはどうして思われぬ。だがあの妖しいまでの美しさ、芝居がかった綺羅を飾った服装、思いをめぐらすといかにも不自然だし、第一、戸障子を開けたてしない部屋への出入りとても人間業とは考えられない――

美女の寢室に深夜忍び寄る美貌の若衆は果して何者？ 蛇性の怪物か？

怪異復讐譚特集

しかしお雪は、若衆の奇怪な振舞いを恐怖するよりは、冷たいまでに整ったこの世ならぬ美しさの魅惑が、しっかりと胸の奥深く刻みつけられている自分をどうにもできなかった。——明日の晩もあの方は姿を現わしてくれるかしら？ そんな甘ったるい期待までが湧いてくるのだった。

恋のからくり

「あなたは、一体どこのお方なの？ こうして毎晩お会いしながら、お名前さえ聞かせて下さらない。心細くて……」

「そんなことはどうでもよいではございませんか。私とあなた、ふたりだけの世界、ふたりだけの夜があるということが、生甲斐だと仰言っただけではありませんか」

「でも……わたし、なんだかこうして夢のような夜をすごすのが、少し不安にもなってきたのです。それに……なにかも許し合ったあなたのこと、少しでも詳しく知りたいと思うのも、無理はない娘ごろだと、お察し下さいませんか」

「よくそれは判っております。でも今は申し上げられません。やがてなにかも申し上げる時期が参ります。それまでは、私を信じて

なにもお聞き下さいますな——」

若衆は腕をさしのべ、お雪の肩をやんわりと抱いた。熱い頬と頬とが近づき合う。

身も魂もとろかす恋の美酒に酔う夜のひとときが、あの次の晩からずっと続いている。

だが若衆は自分の素性も名も、微笑に紛らして答えないのだ。さすがにこの頃ではお雪が雨戸の棧を外して置くので、そこから部屋へ入ってくるようになってはいたが、時々是最初の夜と同じく、いずこともなく現われたりしてお雪を驚ろかすこともある。それを別に気にもしなくなったのは、なにかも捧げつくした女の弱さが、敢て咎め立てしても仕方のないことだと覺らせたのだ。いつも素性をただしたりすると、笑って別の話に紛らしてしまう男の態度にも馴れてしまっていた。

誰も知らない秘密のよろこび。屋の棟も三寸下るといふ深夜の室に、歌舞伎草子から抜け出したような美貌の小姓と共に過ごす、夢とうつつの境をさまようような歡樂に溺れて悔いがない。相手の持っている秘密に対する不安が、未知のものへの強いあこがれを誘い、いやが上にも情熱をあふる。

ふたつの袖が絡み合って、永い口づけのうちに若衆は、上気した顔に憂いを湛えてなに

かいい出そうとしてためらった。もう二ヶ月余りの逢瀬が続いたある夜だった。

「どうなされました、今夜は少し顔色が悪いようですけど……」

憂いにいいいよ艶治さを増した若衆の顔のぞき込んで、お雪は問いかける。

「私はもう、苦しくて苦しくて仕方がございませぬ。お雪さま！ いままであなたをいつわり欺して参りました罪悪感に、良心の苛責に今夜は耐えられなくなりました」

「えッ！ わたしを欺してきた？ それはどういう訳なのです？」

「はい、なにかも申し上げます。お聞き下さいまし。実は私、お雪さまに、いつわりの恋をしかけるため、夜毎人目を忍んで参りましたが、度重なる逢瀬の増すごとに、その偽わりの恋が、まことの恋、私の胸にまことの恋が芽生えてきたのでございます」

若衆はなにを語ろうというのだろう。はじめて聞く恋のからくり、お雪にとってはまさに寝耳に水の驚きだった。呆然としながら耳だけが、若衆の説く真相だけを、一句一言も聞きのがすまいとしている。不思議と、若衆の告白による「偽りの恋」に対して、憤りも悲しみも感じられないのは、まことの恋が芽

怪異復讐譚特集

生えたという言葉よりも先に、身をもつて偽りのない恋の実証を、既に掴んでいたからなのかも知れない。

「私はある目的で、お雪さまに近づき、恋のとりこにした上、いうも思わしいことですがあなたのお命まで、ある方法で頂戴するつもりでございました。毎夜お逢いするたびに、はじめはその企みの成就を、どんなにか願ひその日の近づくのを、心の中で喜び、ひそかにほくそ笑んでさえたのです。でも、その

うち私の心は次第に変わって参りました。人を疑わない純真無垢なあなた、清らかさに心打たれたのです。——先頃から、今日はいおうか今晩は打明けようかと思ひながら、あなたのさげすみを受けねばならぬことを考えると、ついいそびれて——でも、今晩はどうしても話さねばなりません——一日延ばせば一日、私の罪が深まる心地に耐えられなくなりましたのでございます」

「まあ。わたしをそれまでに想っていて下さったのですか。わたくし、あなたにそう想っていたたく

だけで幸せですわ。お話を聞けば、なんてあなたをさげすみなどしましうか。過去は過去、もうそれはお互いに忘れましょう——そして、もっと詳しく、そのお話を、わたしの納得のゆくまで、お明し下さいませんか？

一体、わたしの命が、どうしてあなたに必要だったのでしょうか。あなたのためになら、少しも惜しいとは思わないわたしなのですの……」

若衆は苦渋に満ちた面ざしだった。

「私の最初の目的というのは、あなたのためにも私のためにも、申し上げない方がよいと思うのです。——いまできるのは私の素性もありのままに申し上げることだけ、それでお許し下さい」

「そして、あなたの素性というのは……？」

「はい、——私は……」

若衆はハツといいよんだ。部屋の外に誰かほかの人影が忍んでいることに気がついたからだ。お雪も同時に息を呑んだ。

「お雪！ この夜更けに、誰と話しをしているのだ？」

父親の声だ。

ガラリ、障子が開けられる。と、瞬間、若衆の足は畳を蹴って、大振袖は屏風の上の暗

がりに消えていた。

「お雪、いま、お前、誰と話していた？ 確か若い男の声だったか……」

六兵衛は不審そうに部屋の内を見廻した。

八畳一間の、よく整頓された娘の部屋、別に怪しい個所もない。狐につままれた面持で六兵衛は、乱れた裾を気にして、さしうつぶむいている寝床の上のお雪を、じっと見下す。

娘の用いる伽羅香ではない、馥郁とした香の移り香が、まだ部屋に残っていた。

「わしは決して怒りはしないよ。ただ大事なお前に間違いがあつてはならないので、正直にありのままを聞きたいのだ。夜毎に男が通ってくることは、前からそれとなく知っていた——ことによつたら添わしてもやろう、そう思って今夜までお吉にも知らさず、こっそりやってきたのだが——いままで声のしていた男の姿が、わしが入ってきた途端、掻き消えてしまったのは、どうした訳なのだ？」

優しい父親の言葉、母にも知らさず、こんなにまでわたしを案じ、愛してくれる父親の温かい思いやりに、お雪は、ワッ、と泣き崩れた。

いまは隠すよしもなく、お雪も一部始終を打明けたが、かんじんの若衆の素性や名前は

父親の出現で聞き洩らしている。

「ふーむ！」

腕を組んで首をかしげた六兵衛、

「戸障子を開けたてせずに出入りする？　ひよっとしたら……？」

行灯を明るくして、部屋の中をしさいにあらためていたが、屏風の上、欄間格子の端に落ちこぼれていた白い薄紙様のものを拾いあげて、愕然と目を見張った。

——蛇の脱け殻——

「なんですの？　お父様？」

「う……いや……なんでもない」

慌てて隠したのも、娘可愛いさの親ごころからだった。その代り、六兵衛自身が、娘がこの事実を知った時の驚き、悲嘆を思いやっでまるで死人のような蒼ざめた顔色になっていた。

奪われた花嫁

古来蛇が人間に魅入って、情を通じたという話は幾らもある。上田秋成の「蛇性の淫」は美女に化けて、紀州三輪ヶ崎の長者の二男豊雄を誑かし、宇治大納言物語にも、若い僧が夢に美女と通じた話、蛙を助けて蛇に魅入られた娘の話など、数多くの例がある。近世

になってもあちこちで、時には同様の話を聞くこともあり、その時には単に奇異な話だと驚くだけだった六兵衛も、秘蔵の一人娘がどうやら蛇に魅込まれたらしいと思うと、狼狽せざるを得なかった。翌晩からはお雪の寝間を母屋へ移し、魔除けの護符をそと部屋の四方に貼り、勿論戸締りも厳重に、自分たち夫婦はすぐ隣りの部屋で寝むことにした。

そのせいか、若衆の姿は全然現われなくなったが、お雪は夜毎の逢瀬をせかれ、身内にせつなくたぎる血潮の熱さに悶え、いま一度もう一と目でもと、若衆の出現を、——奇蹟を待ちながら、空しい日々を送らねばならなかった。

父親はこの際、どこかへ早急に縁付けければそれで娘の迷いも晴れるだろうと考えたらしい。それまで内々申し入れのあった、三日月藩のお蔵奉行石垣帯刀の長男、主水との話を運ばせた。

「お前には気の毒だが、どうかこの縁談を承知して貰いたいのだ。石垣様には御国表でも色々世話になっているし、こうして江戸へ出てきて、一人前の回漕問屋として安楽に暮らしているのも、石垣様のお引立てによるところが大きい。——これまで確かな返事をし

てやらなかったのは、そうした恩は恩としても、どうも主水様のお人柄が、お前にふさわしくないように見受けられるので、お前の幸せを考えて洩っていたのだ。——しかしもういまとなつては仕方がない。得体の知れぬ若衆とのふしだらは咎めるつもりはない。お父っあんもそりゃあよく判る。淋しいだろう。悲しいだろう。あれからこっち、あの男が正堂々と現われて、お前を嫁に欲しいと頼んだら、たとえ相手がお菰でも非人でも、お前がそれで満足するのなら、一緒にさせてもいいとさえ思っていたのだよ

その男もあれ以来、ぱったり来ないではないか。お前も過ぎ去った夢は忘れて、どうかわしのいうことを聞いておくれ……」

あふるるばかりに慈愛のこもった六兵衛の囁んで含めるような言葉に、抗らうすべもなく、お雪はよよと泣き伏すばかりだった。

そしていよいよ興入れの当日。

町家から武家への縁組は、正式には許されていないので、一旦石垣帯刀の相役、岡部源三郎の家へお雪の興は運ばれ、改めて石垣家へ入る。岡部が仮親という訳である。

その岡部家の奥座敷で、お雪は最後の化粧を直しながら、ぎりぎりの際まで、若衆の出

現を待ち望んでいたのだが、遂に期待はむなしく終った。

拭いても拭いても頬を伝う涙のあと、ようやく白粉で隠し、白無垢に着替える。

——あの方はとうとうきて下さらなかったもう最後の望みも絶たれた。わたしはあの方に魂を捧げた脱け殻で、石垣主水の妻にならなければならぬのか？——

周囲の浮き浮きした賑わいも、（まあ美しい花嫁さま！）と褒めそやす声も、総ては違った世界のものののように、虚ろな心に聞きながら興に乗った。そして赤坂の石垣家へ——

生ける屍のごとく式台へ附り立ち、幾間も手を導かれて奥の広間へ通ると、既に花婿はじめ石垣家の者たち、数十人の客が控えていた。燭台煌々とまばゆい祝言の席に、お雪は顔もあげ得ず正面の座に直る。

高砂の謡と共に、男蝶女蝶が盃と銚子をもつて前に進んだ。もうこれで、永遠にあの若衆のおもかげとも袂別しなければならぬかと思うと、両の手にささえた朱塗の盃が重く感じられてならない。酒を受ける間に自然と手が小刻みに震えてくる。

死地におもむく心地で、目を閉じたまま、



ぐっと盃をあふろうとした。その時、「あッ！」急に目の前に黒い影が舞い下りた。手の動きを止め、綿帽子の中から見たその影は、どこから降ったか湧いたか、鱗蚊様の袴に秋草の大振袖！ 謎の若衆だった。「あ、あなたは！」われを忘れてお雪は若衆にすがりついた。

遂に待ち望んでいた奇蹟が、最後の土壇場に至って実現したのだ。この方はやっぱりきてくれた。もうわたしは離れない。父親の憂慮していた（あの男は人間ではない。蛇の化身だ）ということも、いつとなく入ってはいったが、それでもわたしは慕わしい。これがわたしの天から与えられた運命な

のだと、お雪はとっさに思った。

「お雪さま、あなたを忘れられず、お迎えに参りました！ 詳しいことはあとで……さ、私と一緒においで下さい」

「無礼者ッ！ なんの遺恨で大切な祝言の席をさまたげにまいったッ」

もうその時には、石垣父子、多勢の客たちが円陣を作り、不意の侵入者を囲んでいた。

「お雪さま、しっかり私につかまっけて下さい。——石垣様、お雪さまの心に染まぬ縁組はおやめ下さいまし、この私が、お雪さまをいただいて参ります」

「うぬッ、不将なッ！」

花婿の主水は、満面朱をそそいだ顔で、怒声と共に燭台を振り下ろした。祝言の席なので、いずれも刀を身邊に置かなかったから、手近な獲物を無意識にとったまでだが、伊藤派一刀流免許の主水だ。燭台も大太刀以上の殺気がほとばしる。なみいる面々は誰もが、弱弱しそうな小姓姿の若衆が、額から血を噴いてのけぞる次の瞬間を想像した。

おお、だが、意外にも予想に反して、燭台は空に流れた。若衆はお雪もろとも、ひらりと体をかかわす。

「えいッ！」

怪異復讐譚特集

構えを取り直してまたも打ちかかる。

パッと飛び上った若衆、お雪を片手抱きにしたまま軽々と天井に吸い付く。ののしり騒ぐ有様を尻目に、そこから部屋へ侵入したのだろう。ぽっかりあいた格天井の隅の穴へ、素早く体を没しようとする。

その時ようやく槍を持ち出した帯刀、「えいッ」とばかりに繰り出す穂先は、すでに没し去ろうとした足首を突いた。段巻に鮮血がしたたり落ち、帯刀は相当な手応えを感じたが、若衆の姿は遂に天井に消え去っていた。

「あとを追えッ、逃がすなッ！」

主水はやっきとなつて絶叫する。待望かなつてやつと手に入れたと思つた美しい花嫁を、瞬時にして奪われた憤激だ。

「曲者は傷を受けているぞッ、血痕を目印に逃げのびた先を探すのだ！」

若衆の正体は？

「まだ痛みますか？」

「いや、大分痛みは去りました。

お雪さまも疲れていることでしょう。

う。少し休んではいかがですか」

目黒の藪端、古い荒れた社の中まで逃れた若衆は、傷の痛みを耐えかね、もう一步も進めなくなつてしまったのだ。お雪はかいがいしく介抱に努めた。谷へ降りて手拭に水を含ませてくる。白無垢の打掛けを惜し気もなく裂いて繻帯をする。すっかり女房気取りで、いそいそと手まめに世話をするのが、いかにも嬉しうだった。その甲斐あつてか、一刻ばかりの後には若衆の痛みは大分やわらいだ様子で、お雪もほっと一息ついたところだ。

「それよりわたし、あなたにお聞きしたいことがあるのです。話して下さい。——あの晩に聞き洩らしたこと——父は、あなたを蛇の化身だと思つていたのですが……」

「もし、私が想像通り、蛇の精であつたら、あなたはお驚きになりますか？」

夜明けに近い薄明りが、社の板壁の破れ目から洩れ入っている。ほんのりとした白い顔が、お雪にはもう若衆がどんなものでも構わないほど、いとしく見えた。

「いいえ、たとえあなたがどんな素性の、どんな方でも、わたしのあなたをお慕いする心は変わりません。どうぞなにも、はつきり打ち明けて下さいまし」

「その気持を聞いて、私も嬉しゅうございます。なにもかも申し上げましょう。——私は六兵衛さまの御想像のような、蛇性のものではございませぬ。——しかしお雪さま一家に危害を加えようとした点で、やはり憎むべき魔性、鬼畜にひとしいかもしれません。——私の名は綾太郎、あなたのお父様、播磨屋六兵衛さまと同じく、一と昔前、堺の町で回遭問屋を営んでおりました姫路屋利衛門の息子でございます——」

「その綾太郎さまが、どうしてわたしに人知れずお逢いになるようになり、またそれがなんでわたしたち一家に危害を加えることになるのでございますか？」

「お聞き下さいまし。私の父母は、あなたのお父様と石垣帯刀様に、家財も命も、奪われてしまったのでございます」

その頃、大阪蔵屋敷の用人だった石垣帯刀が、ふと姫路屋の内儀お徳に懸想したのがこの起りで、しつこく言い寄るよこしまな恋をしりぞけたお徳の貞心が、不幸を招いたのだった。商売仇の六兵衛が抜目なく帯刀に取り入り、それまで利右衛門が握っていた蔵米の権利を、三日月藩のものばかりでなく、両人が手を廻してすっかり奪ってしまったのだ。

「その上、誰とも知らぬ者のつけ火でわが家は全焼、燃えさかる炎の中で父は発狂、それを助けようと母も火の海に飛び込んで焼死したのです。幼な心にもこの時の両親の凄まじい怨みの形相は、目の底に強くやきつき、いまでもありありと思い出せるほどでございます」

綾太郎はハラハラと双の目から涙を落してむせびあえいだ。お雪にとってはじめて聞く父親の旧悪だったが、あの優しい慈愛に満ちたわが父が、そんな悪らつな手段で人をおとし入れたということは信じられない。でも綾太郎さまのこの話も、決して嘘ではないと考えると、首うなだれてじっと、まるで自分が罪の裁きを受けるような気持で聞き入るのだった。

「あとに残されたのは姉のお玉と私の、まだ幼少のふたりだけ……。どうにかして父母の怨みを晴らそうと、明け暮れ心を励まし合って成人し、今年ようやく江戸へ出、なんの間違ひもなく栄えている仇の様子を見て、復讐心はいやが上にもたかまったのでした」

先ず手はじめに習い覚えた軽業を利用し、お雪の部屋へ通って、変化の者が娘ごろをたぶらかすと見せかけて恐怖を与え、次には

お雪を囹に六兵衛を誘い出し、積年の怨みを晴らす計画が、お玉綾太郎の間で着々と実行に移されて行ったのだ。

しかし途中で、お雪に真実の愛を感じた綾太郎は、この美しい娘を、復讐の犠牲に供することが、苦しくなってきた。六兵衛に見とめられた夜から、なんとか理由をつけて姉のはやる言葉をそらし、通わないようになったのも、愛と怨みのジレンマからなのだ。

「お雪さまのことは、忘れよう、忘れよう」と心を押えました。しかし、その後に起った縁談が、帯刀の息子でなかったら、私は淋しく諦めていたでしょう。ほかの者はともあれ、主水にだけは、あなたを渡したくはなかったのです」

「綾太郎さま——」

切々たる男の真心に、お雪は激しく胸を揺り動かされ、感きわまってガバと男の横たわっている板の間に身を投げた。

久々の、温かい、力強い男の抱擁——。

「でも、お雪さま、あなたはながくここにいてはいけません。——今夜の計画も、姉が勧めて私を石垣の屋敷へ行かせたのです。——もう、ここへ姉が来るかもしれません。姉は依然として復讐心に燃えています！」

「そうよ、妾はお前のような意気地なしじゃあない。悲惨な最後を遂げた両親の、呪いの言葉を受けついで育った妾だ。怨み重なる仇敵の片割れ、のがしはしないよ！」

いつの間にか、狐格子の前に、姉のお玉が立ちはだかつていた。

恋の法悦

「あッ、姉さん！ いけない！ お雪さんにはなんの罪もないのです」

「お黙り綾太郎、お前は劫火の中で地獄の責苦に狂死したお父さま、仇を呪い人を怨んでお父さまと共に焼け死んだお母さまの、無惨な最後に誓ったことを忘れたのですか？ こ

の娘も憎い仇の一族、妾たちのなめた辛苦の万分の一でも、思い知らせてやらねば、地下の両親は浮ばれないでしょう」

足の痛みにたえて立ち上る綾太郎を、どんと突き放して、お玉はお雪を荒々しく外へ連れ出し、御神木の杉の幹にくくりつけた。

「ま、待って下さい姉さん！ どうか、お雪さんだけは、助けてあげて下さい！」

よろばいながら、あとを追って社を出た綾太郎の、必死の懇願も、復讐心に燃えるお玉には、なんの効果もない。

「女の色に迷って、積年の怨みを忘れたのかい綾太郎！ ようし……それなら姉さんにも考えがある。お前も仇同様、責めて責めて責

め抜いて、その性根を叩き直してやるッ」

綾太郎の体にも、容赦なく縄がきりきりと巻きつけられた。お雪と背中合わせに、杉の幹に縛りつけたお玉、

「綾太郎、お前の性根の直るまで、姉さんがお父さまお母さまの苦しみを、この手で思い出させてやる！」

ビュッ、ヒュッと青竹が空に鳴った。

女にも見まほしい白い頬に、青竹の打ちあとか一つ、また一つと、次第に増えてゆく。

怨念と恋の板挟み——姉の手で打たれる苦痛にもじっと耐えて、綾太郎はさすがに気強く、呻き声も発しない。

「止めて、止めて……。綾太郎さまを打つのはお止めになって下さい。——お玉さま、お話をうかがってわたしも、あなたたち御姉弟の御無念、もつともだと思えます。父の犯した罪のつくないに、わたしは甘んじてどんな制裁も受けます。どうか、綾太郎さまをお責めになるだけはお止め下さいまし！」

お玉の顔が、キッと憎悪に歪んだ。最愛の弟の心を奪った、憎い憎い仇敵の娘に対する怒りが、ぼつ然と血潮を湧き立たせる。

「お前は、怨み重なる播磨屋六兵衛の娘！ 責めて責めて、地獄の苦しみを、思う存分味





わせてやる」

二重の憤りに燃えたお玉の腕が、めちやくちやに青竹の雨を降らせる。髪は乱れ、白無垢の衣裳も破れ、形のいい胸のふくらみも、痛々しい傷あとを印して、あかつき近い空気に肌を露わしてきた。

「姉さん、もうそのくらいで、お雪さんを打つのは止めて下さいッ！ お雪さんを打つなら、代りにこの私を打って！」

「いけない！ 綾太郎さま——あなたのお心を知っただけで、わたしはもう、この世の中に未練はございません。幸せだった夜毎の語らいを思い出に、いさぎよくお玉さまの憎しみをお受けして、あの世へ参る覚悟でござい

ます」

全身汗ぐるみになって打ち据える青竹も、ふたりにとっては火に油をそそぐごとく、甘くこころよい恋の法悦を増し、苦痛を麻痺させる効果をあげるばかりだ。水のように澄んだ、冷たい幸福感が、それぞれの体に思いをひとつにして浸み込んでゆく。

「ああ……」

お玉は遂に自らの力を出し切って、がっくりと砂利の上へ膝をついた。

恩讐の果て

「おおッ！ ここだここだ。おうい——お雪どのを見つけたぞうッ——」

俄に数名の武士が現われた。祝言の席から滴る血痕を目当てに、お雪と綾太郎を追ってきた者たちだ。ひとりの叫び声を聞いて、あとからまた数名が集まった。その中には石垣父子もいる。六兵衛も駆けつけてきた。お玉は一旦倒れそうになった体を起こし、キッと振り向いた。

「丁度よいところへ石垣帯刀。妾はお前たちの奸計に身を滅ぼされた、姫路屋利右衛門の娘の玉、杉に縛ったお雪も共に、積年の父母の怨みを報いてやる！」

意外なこの場の展開に、帯刀父子は驚きと怒りを一度に顔に表わし、

「やあ慮外者めが！ とるにたらぬ女の方で仇呼ばわり。それッ皆の者！」と叫ぶ。

四方から襲いかかる白刃の中に、短い茜木綿の裾をたくし上げ、お玉は油断なく身構えた。綾太郎と共に軽業で鍛えた身の軽さと、手拭一筋で大の男を自由に操る酉条流縄術の腕前が、彼女の戦闘力を支えている。

パツ、と飛び込んだ武士の刀に、艶にあでやかな紅の腰紐が、くるくると巻きついてピンと張る。どこに呼吸があるものか、紐が一つ波を打つと、刀はからりと地に落ちた。酉条奥伝の「飛電」というのがこれである。

振り下そうという間一髪を狙って撃ち上げ、
鋭峰をそらす「青嵐」、横なぐりの白刃をも
ろに叩き落す「紫電」など、お玉は秘術を尽
して渡り合い、遂に帯刀をもたおした。

「うぬッ、父の仇ッ！」

一刀流正眼の構えで、シリシリと押してく
る主水、さすがにいささかの隙もない。気魄
を避けて少しずつあとずさりするお玉の顔を
正面からのぼりはじめた太陽が、まぶしくカ
ッと射る。

「やあッ！」

到底避けられない必殺剣が、僅かな体の乱
れについて、真ッ向から浴びせかけられた。

だが、その時、素早く白刃の前へ身を投げ
たのは、様子いかにとうしろでうかがってい
た六兵衛だった。

「わアッ」

——一瞬、血飛沫が飛ぶ。

「えいッ」

とっさに構えを直し、紅紐を空に泳がせた
お玉、サッと絡みつけて手もとへ落した刀を、
手にとるやいなや、

「やアッ！」

さすがの主水もかわすひまなく、朱に染ま
ってのけぞって倒れた。

「ああ、お父さま！ お父さま！」
神木に縛られたまま、身悶えして叫ぶお雪
の声。

お玉は放心から覚めて、主水に切られて呻
吟している六兵衛を見守った。

——この男も、憎い憎い父母の仇だ。父や
母の怨念、妾たちの辛苦に比べれば、その位
の苦しみではまだまだあきたらない。

——しかし、この男は妾の身をかばってく
れたのだ。

怨みは怨み、恩義は恩義。

断末魔の仇を目の前に、無念晴らしのひと
言もいう考えは捨てせめてもの際にお雪さん
に、死水をとらせてやるのが、ひとの道かも
しれない——

そう思いつくと、杉の木に駆け寄り、お雪
と綾太郎の縄をぶつ切り切ったお玉

「さ、早くお父さまのところへ……」

とお雪を押しやった。

「お父さまッ、しっかりして下さいッ」

「おお、雪か……。わしはもう駄目だ……。い
まはの際に、一言……そこのお玉さん姉弟
にわびなければならぬことがある。……わ
しも商いの上とはいえ、随分無道なことをと
あとで姫路屋さんの霊に、日夜あやまってい

た。こうなるのも自業自得……お前さん方の
腹の癒えるよう、どんな風にしていただいて
も異存はございませぬ……ただ……ただ、残
ったお雪だけは……可愛いお雪だけは……
罪のない者……お許し……そして、なろうこ
とならば……好きなお方と……そわせて……」

「お父さま！」

がつくりことぎれた六兵衛に取りすがって
おえつするお雪、ひざまずいて悲しみを共に
する綾太郎。

「これで復讐はすんだ」

晴れ渡った朝空を仰いでお玉はふたりに、
「なにもかも忘れて、仲好く幸せにお暮らし
よ——。妾はまた、大阪の親方のところへ帰
って、綱渡り、籠抜けの軽業師に戻るよ。仇
を討つの討たれるのって、しとげてみると余
りあと味のいいものじゃあないねえ」
そういう残して去ってゆく。

「姉さん！」

「お玉さま！」

見送る男女の目には、恩讐を越えたお玉の
うしろ姿が、おりからの陽光を受けて美しく
も尊く見えたことだろう。

(終)

①羅生門河岸――

舟が、どっさり浮いている。
肉の舟だ。ここは江戸ヨシハラの路地の奥だ。男の袖をつかんだら離さないと云う所から来た名の河岸の小店。せまい路地に白粉だけが白く浮いたなまめいた闇。
その夜は……

さっき、フリの客が三人ほどあがって、下卑た笑いが響いたきり、妙にシーンとした三日月屋だった。

格子の中に、まだ売れ残って暗い影をしょっているのは、お熊とお辰。

「今夜は、ひとッ降り来そうだねえ」

目のフチの黒いお辰が、つぶやく。

「アア、あたしや雷さんがオドロオドロと鳴る夜に骨までしみるような大雨に打たれて見たいよウ」と、お熊。

「フン、変ってるよ。そうだ、お前は夏の雨が降ると、昔の男を思い出すんだってネ。こちそうさま」お辰の歯がニュツと出た。

絵と文 歌川大雅

恋しい男七之助を待つお熊の
柔肌に片目按摩の玄助が迫る

②御守殿お熊。

そんな名の安女郎だった。

前身は、だれも知らない。だが、夏の夜のドシャ降りに、きつと目を閉じて昔の男の名を呼ぶと云う。

――アア、七之助さま！

雷の鳴る最中に、こう呻く彼女の声にはゾソとするヨと、お辰はフチの黒い目をしかめる。

「何かイワクがあるに違えねえ」

内所で楼主の藤八も、肩をすぼめる。

「陰気な、毒のある女さ」「何かにトリツカレてんだヨ。まさか、七之助と云う男をムゴたらしく殺したんじゃあるまいね、せつかくイイ女に生まれながら、惜しいヨウ」

朋輩の間でヒソヒソ話。

今夜のお熊は、そんな怪談めいた印象を強めるように、折から急に吹き出した雨風に身をふるわせる。と、その時だ。

鬼火河山坪

七之助

火の用心

火の用心



④ドキッとした。時が時だけに藤八、

「ああッ 驚かすねえ」

と、こわい顔をふりむけたか、

「へへエ、こりや、よくお運びで。へへへ」

「けっ、何をアワを喰ってるんだ」

そのフワリと来た客は、黒い影を引いてあがった。

「チョイト、見た事のあるお兄いさんだよ」

救いの神とばかり、今までチヂまっていた

お辰が、客に飛びつく。

「ちげえねえ。オイラは三年ぶりで江戸へ帰

って来たんだ。お久しぶりでナところか」

客は、苦みばしった顔をゆがめた。

「三年ぶるかエ。では、今夜はタンとお江戸

の女をタノシンでおくれよ」お辰は、抱きつ

いたまま割部屋へシケ込んで行った。

「ありがてえ。千客万来、これでさっきのイ

ヤな気持もおさまったぜ。オイお熊、お前さ

つきからふさぎ込んでいやアがって、陰気で

イケねえ。まだ客一匹くわえ込まねえじゃね

エか。女なんてもんはナ、お上品ぶってるよ

リパツと花の盛りを拝ませりや喜ぶんだ。パ

ツと陽気にやってくれ。エエ、お辰を見ろい

今の客は初会だが、きつと首ったけにしてし

まうだらうヨ。へへへ」

うつむいて、黙々としたお熊の目は、異様

に光っていた。恨めしそうな目だ。

⑤キャッと、お辰が隅へちぢまった。
「ああッ」とお熊が息をつめた。
「何でえ」内所から藤八が飛び出る。
お辰がふるえる指をむけた格子先。
トロトロと燃える陰火……
鬼火が、廂の上へスイと消えた。
「おッ」いや、藤八が立ちすくんだのは、そ
のためばかりではない。
「南無アミダ……」
お熊が、糸のような細い声で、しょんぼり
と肩を落して、鬼火の消えた後を一心に拝ん
だからだ。
「エ、幽霊みてえな姿だ！」
藤八は、影のうすいお熊の後姿にゾッとな
った。
——やっぱり、あの女は悪霊にとりつかれ
たんだ。酒の酔もさめはてた。と、フワリと
藤八の後に人の影。



⑤藤八は、ムッとした。

「イイ女だ。だから大目に甘やかして来た、

が、思いきり痛え目にあわせてやろう。こん

な陰気な女は叩きなおさなくちゃ、使いもの

にならねえからナ」

だが、ここは店先だ。藤八は怒りを舌打ち

にかえて奥へ引込むと、

「へえい、こりや旦那、へへへ」

よこれた古猫のようにうずくまった男が、

座敷の中で動いた。片目のあんま玄助だった。

「うむ、いつもの通りやってくれ」

「へえ、へえ、旦那のお店はいつも御繁昌で

結構ですな」

「まあ、どうやらやっているが、どうもお熊

の奴が陰気くさくってイケねえ」

もませながら藤八は、また舌打ちをした。

「こんな河岸店にはもったいない上玉。胸の

病いでもあるのかとも思ったが、年は若えし

まだ使える。フン縛って水でもブツかけてく

れようか」

藤八の一人言。みだらな妄想にニヤリと唇

を曲げた時だ。

「旦那。お熊さんと云やあ、妙な事がありま

すぜ」玄助が、急に声を殺した。

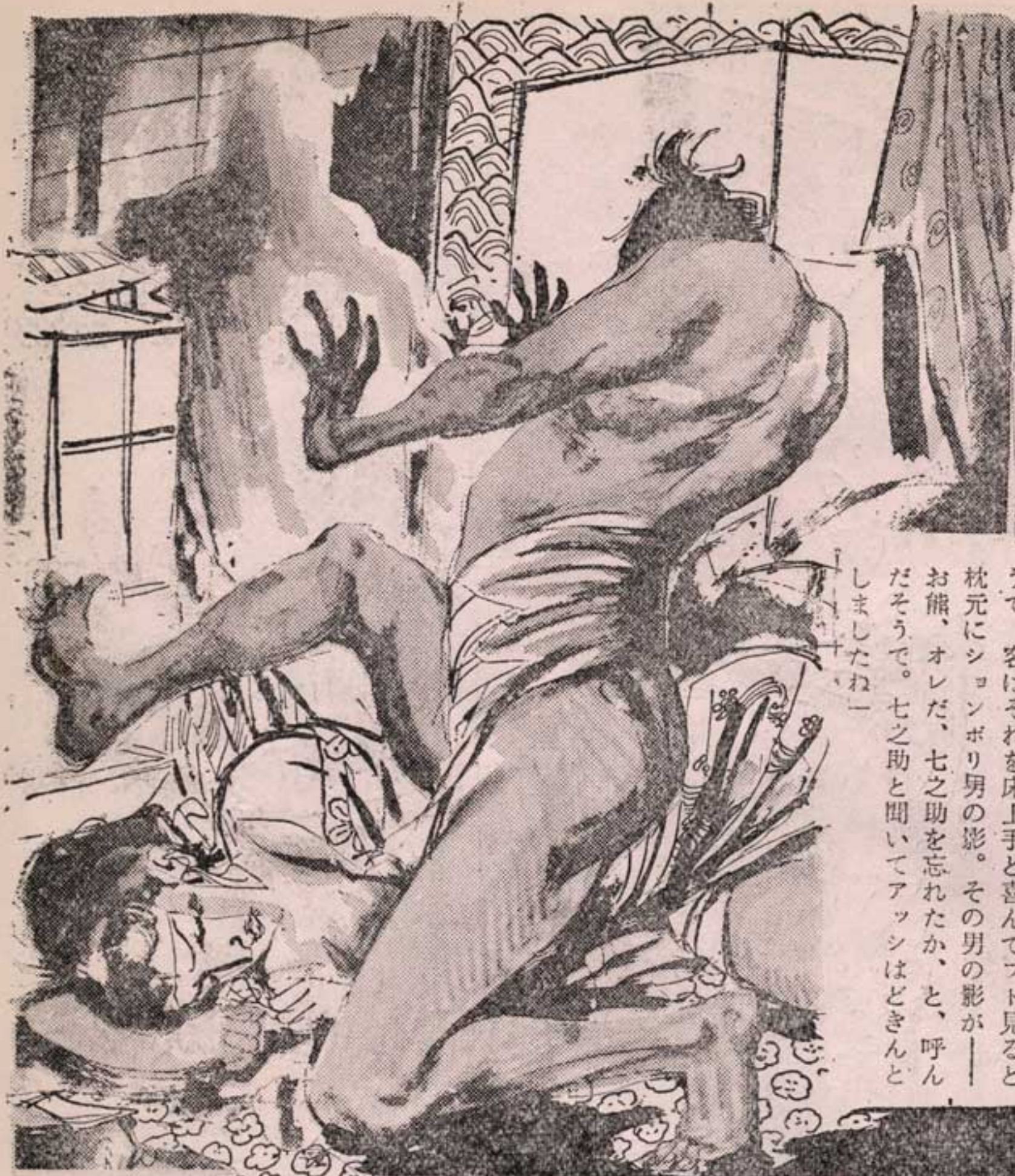
⑥「あの女には幽霊がツイているんじゃないやありませんがね。イエ、お店の人にケチをつけるつもりじゃありませんから、御かんべんを」と、玄助が恐る恐る話し出したのは――

「三日ほど前の晩。あつしが大音寺裏を流してますと、フイに呼び止める男がある。それが陰にこもった声で――オレは七之助と云う者だ。吉原に御守殿お熊と云う女郎が居ると聞いたが、どこの店かえ、と云うんで、青ざめてるがイイ男だ。河岸の三日月屋でさあと

教えましたが、こいつがイケねえ、しばらくするとこのお店から帰りの客と見え、二人の男が話しているのに出会いました――こんな怖い事はなかったぜ、何がってお前、おれが遊んだお熊って女にア、タタリがあるんだ。若い男の幽霊がついているんだ――と、こう申しているでは、ござんせんか」

「何だ？」藤八は開きなおった。

「へえ、その客の話とは、お熊さんを抱いてしばらくするとお熊さんが烈しくもがいたそう、客はそれを床上手と喜んでフト見ると枕元にションボリ男の影。その男の影が――お熊、オレだ、七之助を忘れたか、と、呼んだそう。七之助と聞いてアッシはどきんとしましたね――」



大音寺うり



⑧「お熊……」

ひっそりと呼ぶ声。格子先へ忍びよった影。頬がぶりまぶかな男。

「玄助かい」「お熊用心しねえ。藤八の奴は鬼火に驚く所か、あべこべに幽霊に味方してお前をイタメつける算段だぜ」

「ふーん。せっかくお前が焼酎火を燃したりつくり話の怪談の、オドシには乗らないかねえ」「こいつア一番数蛇になりそうだ」

「こうなったら一刻も早く連れて逃げておくれな」「あ、イケねえ。人が来た、後でゆっくり逢うが気をつけねえよ」

頬がぶりした玄助は、そそくさと姿を消した。

⑦「止めてくれ！」

肩をゆすって藤八はどなった。

「えんきでもねえ。だが、実はオレもさっき店先で鬼火を見たんだ」

「ゲッ、鬼火!？」

玄助は片目をむいて、前へ這い出した。

「だんな」

「うむ確かにあの女にア崇りがあるな。だが金で買ったものを幽霊くらいじゃ手ばなせねえんだ」

「でも、めったな事はできませんぜ」

「玄助、お前も手を貸しねえ。あの女を縛りつけ、幽霊か死神が落ちるように、責めてやろうじゃねえか」「ト、とんでもねえ。悪霊のついた女をイジめて御らんなせえ。こっちへ死神がのり移りやすぜ、鶴亀、鶴亀、それよりいっそ証文書いてやったら功德でげしょう」

「ふん、男に恨まれるような女だ。オレ達が代って叩いてやりやア幽霊も喜ぶぜ」

藤八は、あんどんの光で赤くなった顔で笑った。



⑨「玄助の入智恵で、あたしに祟りがツイて、
 いるように評判させ、幽霊にさらわれた風に
 みせかけてこの廓を抜け出すと云う趣向だけ
 ど、どうせ廓を出りゃ、あのイヤな玄助に暫
 く身をまかせなくちゃなるまいが、これと云
 うのも、恋しい七之助を探し出したため……」
 「お熊は一人つぶやいたが、
 「しかし、気になるのは、今しがたお辰さん
 の部屋へあがったお客。どうやら七之助のよ
 うな気もするけど……」

お熊は、耳をすませた。
 せまい家だから、お辰の恥しらずな笑声は
 よく聞える。客の声はもれない。
 —三年前あたしから逃げた七之助じゃな
 いかしら？ お熊の胸は騒いだ。



⑩前のお客を送り出して、女が二人ほどもど
 ってきた。それと入れかえにお熊は内所へ呼
 ばれた。
 「お熊、商売中すまねえが、そこへ坐ってく
 んねえ」
 藤八は怖い目をむけた。
 「ハイ」お熊は、シオシオと崩れる如く坐っ
 た。

⑪お熊は一人、あんどん部屋でうなだれてい
 た。

「お前が店にいと陰気くさくって、客がよ
 りつかねえ」
 と藤八がここへ押し込めたのだ。

「おあつらえ向きサ」
 お熊は胸の中で舌を出した。

しばらくして藤八は、お熊の居ないのに気
 がついた。誰も彼女の姿を見た者はなかった。
 「あいつは、気味わるい女だ」藤八は唸った。

⑫お熊は、もと、ある大名に仕えていた。
 それが、雷雨の夜、州崎の土手で落雷のた
 め気絶しているところを、仲間の七之助に襲
 われて、とうとう、市井へ身を崩した女だ。
 七之助は小猿と異名の小泥棒だった。そう
 と知っても肉の遊びを教えてくれた男とは離
 れられなかった。七之助は御用風に吹かれ三
 年前にお熊を捨てて、江戸から消えた。お熊
 は人にダマされ吉原へ売られた。ここに居れ
 ば七之助に逢えそうな気で夜毎に枕を変えて
 来た。





⑬——ソワソワと、お熊は天井裏のハリを伝わり始めた。あんどん部屋の天井板をめくって忍び込んだのだ。

お辰の部屋の真上。

あの客の顔が見たかった。

「七之助だったら……？」

小さな節穴を見つけ、瞳をこらした。

下の部屋は、暖かった。

海底の中に白い魚がうごめいていた。

男の肌が、赤黒く光っていた。

畜生！ お熊は腹の底からうめいた。

安女郎にまで身を沈めても、恋いこがれていた七之助が、朋輩の女郎とヌケヌケとふざけていたのだ。

「ねえ、あんたにア、さぞ可愛い人が居るんだろう」

「いねえよ。そんなものは」

お熊は身をふるわせた。

「幽霊に……あたしは本当の幽霊になっても七之助に取りついてやる」

⑭「やい、このアマ！ 天井うらに隠れるたあ太エ女だ」

お熊は着物をはがされ、くくられて転がった。

「まあ、アタイ達の部屋を、のぞいたんだって。イケ好かない」

いつも、お熊の美貌をソネンでいた朋輩たちは、ここぞとばかりお熊をむざんに縛りつけたのだ。

「これ、お熊。手前にア狐がついているんだ。

追っばらってやるから、ありがてえと思え」

藤八はまるで気が狂ったように力をこめ、

お熊の足を両手の如くひろげた。

「水をぶっかけろい」

ザッと、あがる飛沫の中に、お熊の白い四肢が磨かれた王のように光った。



⑮ヒイ……細い声。

お熊はまだ生きていた。

「オウ、むごくやられたなア」

そっと忍び寄ったのは片目のあんま玄助。

偽りの怪談をネタにお熊を弱から逃がし、

夫婦になろうとタクラんだ玄助。白い肌が、土

間に投げ出されているのを見てはたまらない

夢中で縄を切った。

「かわいそうに」

玄助はお熊の体中をなぜまわした。

⑯後日、お辰から話を聞いた七之助はフーンと考えこんだ。

昔の女房のお熊に違いねえと直感した。

「そのお熊って女に逢いたかったぜ」

「この浮気男メ」お辰にしたたか抓られた。

——七之助が吉原を出て、山谷堀にさしかかったころは夜もだいふけていた。



⑬「おや、七さん」

闇から女の声。「えっ」七之助はすくむ。
幻のような女の影。

「オオ、お熊じゃねえか。久しぶりだぜ」

「何だい、あたしやこの間お前とお辰のふざけ方を見て気がわるくなったから、よほどお前を殺してやろうと思ったが、やっぱり逢って見るとそうも行かないねえ」

「当り前じゃねえか、お前だってオレの女房のくせに女郎になって、いろんな男と……」



「やめておくれ、それと云うのもお前があたしをじゃけんに捨てたからさ」

「しかし、邸を抜け出し、こんな所にいたア胆が太すぎようぜ」

「お前が通ってくるのを待伏せるためさ」

「そう怖い顔をするねえ」七之助はお熊を抱いた。三年ぶりで触れる女房の肉体は、七之助の血をわき上らせた。

稲妻の光りが、一瞬、二人の口づけを浮上らせた。



⑭片目が光って、玄助が後に立っていた。

「やいお熊。お前、こんな所ウロツいてちゃあぶねえ。むかえに来たんだ」

「あっ」甘い抱擁に酔っていたお熊は、玄助の顔がとても怖しかった。

「何でえ貴様は」

七之助はお熊をかばった。

「手前こそ何だ。お熊はワシの女房だ」

玄助は吠えた。吉原からうまく逃して自分の家へかくまっていたのであった。

「チッしゃらくせえ。化け物面の手前にお熊をとられるほどオイラはもうろくしちや居ねえよ」

七之助は、せせら笑った。

あらそうはずみに、玄助は堀へ落ちた。にわかには降り出した大雨、稲妻と共に烈しい音を立てはじめた。

玄助の体は、モガキながら、流れて行った。



⑮鬼火河岸、そんな所に裏長屋があった。

「早えもんだぜ。もうお前と元のサヤにおさまって一年だ」

「今夜もかみなり様が鳴っているねえ」

お熊はこの頃冷たい七之助の横顔を見た。

「お前と初めてネンゴロになったのも稲光りがきらく夜。玄助を殺して一緒になったのもこんな夜だった。思い出すよう」

「ふん、玄助はあんまだから、さぞよくモンだりナせたり嬉しかったろう。オイラは無器用な男だから、つまらなからうね」

「何を云うんだよ。お前は飽きっぽいから、また私を捨てたくなったんだらう」

お熊は、腹ン這いの七之助にかぶさった。暑くるしいなア、少し位離れたってバチもあたるめえによ」

「捨てようたってあたしア離れやしないよ、化けて出たってお前を逃すものか」

お熊は、男の耳の底へ云い聞かせた。



②「七さん、お前の病いは浮気だよ、郭でなんかに責められても、イヤな男の玄助に身をまかせても、どんな時でも想うはお前の事ばかり、ああ、あたしは女に生まれたのが、いっそ恨めしい」

「しめっほいなア。酒でも買って来ねえ」

七之助はお熊をはらいのけた。

「あいよ、すまなかつたネ。あたしがグチッほくって」とお熊は貧乏徳利をさげて外へ。

「酒でも飲んで、早く寝るか」七之助はごろりとなった……

あわててお熊が飛び込んで来た。

「ちょいと、お前さん！」

と、その顔は真っ青だった。

「何でえ、そうぞうしいや」

「お前さん、玄助があたしの後にいんだよ」

「ゲッ、生きていたのが」「いた、ションボリとしめってねえ……」「幽霊が、冗談じゃねえ、今どき、化物なんか……」

ガタ、ガタ、雨戸がゆれた。



③雨戸がゆれる……

「ふん、あんなアンマの一匹くれえ化けたって驚きやしねえや」

七之助は、お熊が買って来た酒を徳利から喉へ流し込んだ。

「こわいんだよ。あたしや」

「はいって来たなら、蹴殺してやる！」

七之助が酒の息を吐いた時、コトコトと雨戸を叩く音、二人はゾッと水を浴びたよう。

「ダ、誰でえ」「へえ、酒屋ですが、ツリ銭をまちがえたんで、持って参りました。ちょっとなあけておくんなさいまし」

「オオ、何でえ酒屋か、戸を開けねえ」

「おかしいネ、ツリ銭をまちがえたなんて」

お熊は首をかしげて、心張棒はずした。

ガラリ、あいた雨戸。

「七之助、いやさ小猿、神妙にしろい」

ぬっとはいった男は八丁堀の同心。

「あっ、いけねえ」

七之助は、行燈をふき消した。

④御用！ 捕縄が、七之助の首にかかった。

「うむッ」七之助は転がった。

「あっ、お前さん」お熊は夢中で、縄を引く同心に体をぶつけた。同心はよろけたはずみにどこか打ったらしい。苦悶する間に七之助とお熊は外の闇へ走り出た。

御用！ 外で張っていた手先がバラバラと馳けよる。

「ちえっ、小猿七之助がお前らに捕まるかてんだ」七之助はヤケクスに走った。

鬼火河岸。

七之助は棒抗の間で息をこらしていた。

「女もろとも、川へはまって心中とシャレたか」「ここへ飛び込んだら命はねえ、底なしの魔の淵だ。朝になったら仏が浮くぜ」

御用提灯が、引き上げて行つた。

河岸には、もう人の足音はなかった。

ホッとして水のしたたる体で這い上った。

と。

「ヒヒヒ」風のような笑い声。



②③「あつ、ゲ玄助！」

七之助の腰がヘタヘタと崩れる。

「ヒヒヒ、化けて出たのじゃ」

坊主頭の玄助が、ヌツと近よる。闇の中、

足が見えなかった。

「よくも、ワシを殺したな、よくワシの女房

を盗んだなア……」

玄助の声は低いが、ノシかかるような寝み

があった。「うむむ」悪夢にうなされた如く

七之助は動けなかった「ゆ、ゆうれいだあ！」



②④ジリジリ、逃げようとした七之助は、川の方へ追いつめられた。

玄助の手が、宙に浮いて、七之助の首にまきついた捕縄をつかもうとする。

「た、たすけてくれ」七之助は悲鳴と兵に川へ落ちた。ここで死んだ多くの亡霊が引っぱると伝説の鬼火河岸、七之助はもがいた。

「ヒヒヒ、とうとう仇をとってやったぞ、お熊もよく見ろ。もうお前はワシのものだ」

玄助は川端へその全身を現した。

「おい七之助。手前みてえな青二才に女を盗られるほどまぬけじゃねえ、ワシが幽霊に化けたら驚きやがって底無しの淵へ落ちるたあどジな野郎さ。役人にサシたのもワシだ」

「ちくしょう、やりアがったな」

もう首だけになった七之助は、口惜しそうにわめいた。

②⑤すると、不思議な事が起った。突然、玄助が足をすくわれて川の中へよろめき落ちたのだ。

「ひやあッ」

玄助はあわてた。

「フッフ、玄助さん。七之助の恨みの手につかまれたのかい」

河岸にフワリと浮いた白い女の影。

「お熊！ 助けてくれ」玄助は手をのばした。

「そこへ落ちたら死ぬだけさ。息のある内に聞かせておこう。七之助の首についていた縄のはしを、幽霊に変装して、スゴんでいたお前の足にしばりつけたの気がつかなかったかい」お熊は川端へしゃがんだ。

「うぬっ、畜生、ワシを助けぬと化けて出るぞ」

玄助は、泡を立てて沈む七之助に引っぱられて、見る間にもぐって行った。

「畜生、化けて出るぞ——」

水を吐き吐き、玄助はわめいた。



②⑥お熊は、我を忘れていた。もう二人の男の姿はなかった。

鬼火か、御用提灯か、妖しい光がお熊にせまってきた。お熊は驚かなかった。

「化けて出たいのはあたしの方だよ。さんざイヤな男のおもちゃになり、とうとう今夜は好きな七之助に死なれてしまった。一体、この恨みをどこへ持って行ったらいいのさ」お熊は幽霊のように、闇の河岸へ立ちつくした。

遠く稲妻。涙雨を含んだ嵐だった。(完)

裏窓

既刊号目次

33年(九月号) 敗戦落城秘史特集号

○絵物語・夢魔の殺人	画・山田 彬弘
○雪姫受難	画と文・歌川 大雅
○女夜叉	画と文・東 桂史
グラビア・夜のえくぼ	撮影・藤沢 修
落城悲愴譜	宇治川 龍
餓鬼供養	伊能 孝
関ヶ原悲歌	橋爪 彦七
父恋い娘旅	矢桐 重八
怒りの焰	麻布 義朗
落城洞窟地獄	高木 龍二
疾風馬賊黒鷹団	南村 蘭
琴姫散華	葉田 光
戦国女房	小山龍太郎
アポロの少年	砧 真砂男
切支丹殉教史(下)	鈴木 和夫
変性の破戒尼	梅田 楠雄
髪地獄	志摩 不二
邪宗門小町	小田桐 爽
隠密覚書・妖雲小倉城	島本 春雄
おつや櫛	鷺尾 素人
連載妖異・地獄の乳房	飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(八月号) 一揆殉難秘史特集号

○口絵・泥人形	画と文・歌川 大雅
---------	-----------

33年(七月号) 裏窓妖異譚特集号

グラビア・渇きの夜	カメラ・藤沢 修
天保血笑録	小田桐 爽
美作一揆秘譚	葉田 光
独立黒月党	南村 蘭
一揆に咲く花	曲 二十八
四郎時貞の復活	宇治川 龍
美女門一揆	高木 龍二
黒旋風一揆	小山龍太郎
人魚と短剣	画・沖 涉二
切支丹殉教史	鈴木 和夫
お綱草紙	画と文・東 桂史
天正あじさい若衆	大門 正人
黒い陽炎	浜松 武
隠密覚書・幽霊奉行	島本 春雄
佐渡夫人の魅惑	尾嶋 新
蜥(とかげ)蟻	伊能 孝
秘密のよろめき	三国沢 隆
墮ちた虹	堀 杏子
連載・地獄の乳房	飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(七月号) 裏窓妖異譚特集号

○口絵・花鬘體	画・古正 英生
蒼白い手	文・高須信次郎
黒猫小町	画・秋吉 轡
あおみどろの座	画と文・歌川 大雅
七化け死霊	宇治川 龍
怨霊狂い化粧	矢桐 重八
変化屋敷	橋爪 彦七
	高木 龍二

33年(六月号) 女忍者・女間諜特集号

妄(もうきょう)鏡	酒井 皓介
寄生人の恐怖	前田 勇
かつば沼の魅惑	伊能 孝
近松門左衛門の血	平林 啓子
天使をいじめるな	佐々木 力
苛責嚴刑譚	鈴木 和夫
黒い陽炎	浜松 武
いざりが夜にやってくる	否笠 一郎
レインコートは左利き	潮井 拓
ハラハラ場面オンパレード	高円寺 一郎
K君の女装系図	滋賀 雄二
隠密覚書・裸女小判	島本 春雄
お町の罪	小田桐 爽
危険な曲り角	竹谷 十三
過去のない女	堀 杏子
連載・地獄の乳房	飯田 豊吉

(定価百二十円・送料十二円)

33年(六月号) 女忍者・女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄	文・岩堀 光
○グラビア・夜の砂時計	構成・喜多 玲子
蛇林洞秘文	南条 慎一
間諜曉に消ゆ	黒羽 新
伝奇怨霊沼	曲 二十八
血染曼陀羅	橋爪 彦七
間諜散華	藤見 郁
雪肌密書	葉田 光
紅紐呪縛	小田桐 爽
傾城忍者	高木 龍二

慶安女忍道……………円城寺 達

連載・地獄の乳房……………飯田 豊吉

隠密覚書・妖異呪文鏡……………島本 春雄

極刑秘抄……………鈴木 和夫

女館南蛮船……………画と文・歌川 大雅

にせ札を獄中で造る男……………柳生 亘

卯の花くだし……………大門 正人

蛇使いの王女……………藤 琴也

死者は蘇える……………矢桐 重八

悪魔は見ていた……………神行 京一

裏窓増刊・第七集《耽奇小説》③

(定価百二十円・送料十二円)

33年(五月号)裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記……………画・山田 彬弘

○絵物語・血まみれマリ……………画・秋吉 修

グラフィア・別離の詩……………撮影・藤沢 修

新連載・地獄の乳房……………飯田 豊吉

愛憎血潮傘……………松井 籟子

白い幽霊……………中村 猷

大名屋敷の怪……………橋爪 彦七

獄門首供養……………宇治川 龍

麝香肌小町……………高木 龍二

妖異お告げ狸……………矢桐 重八

吸血艶魔伝……………青木 憲一

アマゾン流刑奇譚……………大町 三郎

女刺青師……………歌川 大雅

戦国刑譚……………真野 麗

黄色い帯をしめた少女……………竹谷 十三

海賊貴族……………川野 京輔

拷問と処刑……………鈴木 和夫

マダム僕をどうぞ……………青葉 繁

連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三

隠密覚書・美女秘巻……………島本 春雄

服地がほしい……………岬 洋之助

波に笑う女……………柳生 亘

(定価百二十円・送料十二円)

裏窓増刊・第六集《耽奇小説》②

(定価百二十円・送料十二円)

33年(四月号)あぶちっく・さすべんす特集

○口絵・白獣の市場……………画・山田 彬弘

裏窓巷談・島の喜三郎……………鳴海 玄吉

東西映画・名場面を探る……………高円寺一郎

野鷲復讐奇譚……………矢桐 重八

魔の二十分間……………横山 正勝

手提金庫の鍵……………神行 京一

肌絵を蒐める男……………三国沢 隆

桃色の替え玉……………大河内常平

冷酷な雌獣……………京極 美岐

鼻から上だけを見た……………宇治川 龍

情炎千姫絵巻……………橋爪 彦七

禍夜草紙……………黒木 忍

隠密覚書・闇若衆伝奇……………島本 春雄

十寸髪執念……………大門 正人

仁俠恋まんじ……………榎 剣吾

連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三

美代吉捕物暦……………飯田 豊吉

伝馬町牢屋敷……………鈴木 和夫

蛇女郎呪文……………滝 一平

連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(三月号)裏窓妖婦伝特集号

○口絵・お百化粧草紙……………画・東 啓三郎

十六夜お新……………橋爪 彦七

白狐呪伝……………青木 憲一

奴の小せん……………松井 籟子

刺青百万石……………高木 龍二

まぼろしお徳……………伊能 孝

松風吟味……………宇治川 龍

からす猫お紋……………飯田 豊吉

らしゃめん駕籠……………小山龍太郎

紅筆さんげ……………岬 洋之助

黒い王座……………ワストン・独田

地獄部隊……………大宮敬一郎

獣(じゅうじん)人……………横山 正勝

隠密覚書・幽鬼大名……………島本 春雄

仮面の青春……………藤川 博

連載伝奇・刺青弁天……………中林 節三

白い顔の悪魔……………矢桐 重八

連載伝奇・お小夜嵐……………高月 大三

裏窓増刊・第五集《耽奇小説》①

(定価百二十円・送料十二円)

33年(二月号)裏窓遊俠伝特集号

○口絵・柔肌偶奇……………榎剣吾作・古正英緒画

英五郎笠松土産……………橋爪 彦七

情怨姫買宿……………葉田 光

疾風飯岡街道……………飯田 豊吉

やわ肌仁義……………中村 猷

ちよほ一お松……………宇治川 龍

遊俠剣法……………	高木 龍二
愛憎メキシコ無宿……………	大門 正人
人工怪物……………	ワトスン・独田
仮面の青春……………	藤川 博
リユカ大王の宝庫……………	藤 琴也
隠密覚書・どくろ遊女……………	島本 春雄
白いくちなわ……………	三国沢 隆
狐(きつね)灯……………	松井 籟子
連載伝奇・刺青弁天……………	中林 節三
鏡の中に男がいる……………	岬 洋之助
死体を運ぶ男……………	潮井 拓
地獄の指輪……………	神行 京一
連載伝奇・お小夜嵐……………	高月 大三

(定価百二十円・送料十二円)

33年(新年特大号)あぶちっく忠臣蔵特集	画・中島 喜美
○口絵・妖説女忠臣蔵……………	法界寺 嘉
阿撫的赤穂囃子……………	海部 陽三
美しき奴隷ジュリスナア……………	島本 春雄
闇に生きる義士……………	橋爪 彦七
元禄二筋道……………	宇治川 龍
黄泉路の影……………	松井 籟子
投籠燈秘聞……………	窪村 弘
妖説絵図まんじ……………	真野 麗
元禄闇安曆……………	伊能 孝
雪嵐お美代さんげ……………	飯田 豊吉
血まみれ観音像……………	黒木 忍
元禄乱れ小袖……………	小山龍太郎
二人の内蔵助……………	岬 洋之助
あしのうら源内……………	鳴海 玄吉
こんばんわ……………	

墓屋敷……………	神行 京一
狐(きつね)灯……………	松井 籟子
白い芋虫……………	否笠 一郎
SS秘密クラブ……………	横山 正克
隠密覚書・逢魔娘……………	島本 春雄
連載伝奇・刺青弁天……………	中林 節三
パチンコ地獄……………	大河内常平
リユカ大王の宝庫……………	藤 琴也
痴情仏心……………	山田 重義
放浪の記……………	伏見 和夫
音響魔……………	阿部すけはる

(新年特大号定価百五十円・送料十二円)

裏窓臨時増刊(第四集)ムード

(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

43年(十二月号)あぶちっくすりらあ特集	高月 大三
○色頁・倒錯のよろめき……………	秋吉 鬱
○口絵・女を探せ……………	編集部・編
○グラフィア・罌に陥ちた暴漢……………	島本 春雄
隠密覚書・怪異蠟人形……………	南屋 彦六
鱗肌異聞……………	美作 賢
地獄島……………	京極 美岐
雌花のいたずら……………	黒木 忍
死人駕籠……………	藤 琴也
盗賊煙丸の最後……………	大河内常平
妄(もうしゅう)執……………	三谷 春樹
輪(りんね)廻……………	岬 洋之助
殺(さつい)意……………	岩堀 光
夢(むえん)魔……………	大町 三郎
死体工場……………	窪村 弘
妖夢呪葉譚……………	

青い顔の男……………	飯田 豊吉
歪んだ眼……………	真野 麗
狐(きつね)灯……………	松井 籟子
死を弄ぶ女……………	花町 右門
紅燈夢……………	横山 正克
血の蜜月旅行……………	陶山 密
刺青弁天……………	中林 節三

(定価百二十円・送料十二円)

32年(十一月号)あぶちっくみすてりい特集	秋吉 鬱
○口絵・魔屋の妖精……………	朝山 蜻一
人差指の妬み……………	大河内常平
闇(やみ)……………	神行 京一
悪魔の祈禱師……………	三宅 一郎
闇入者……………	真野 麗
地獄から殺しに来る男……………	宇治川 龍
金曜日の戦慄……………	鳥羽 瑛子
殺意の黒白……………	岬 洋之助
窓(まど)……………	松井 籟子
傷痕だらけの人魚……………	坂 みのる
なめくじ幻想曲……………	黒木 忍
宝石呪縛……………	中林 節三
連載伝奇・刺青弁天……………	島本 春雄
隠密覚書・鬼姫変化……………	鳴海 玄吉
恋人人形……………	波戸 容
罌にあえぐ女……………	狭山 温
手裏剣……………	柳生 亘
死体買います……………	京極 美岐
妖虫……………	岩堀 光
女炎脂地獄……………	田井 良栄
コレラの正体……………	

黒いマニキュアの女……………木原 康夫
偶奇談義……………川口 映治
放浪の記……………伏見 和夫

(十一月号、定価百二十円・送料十二円)
(裏窓臨時増刊・第三集) ムード

(定価百三十円・送料八円)

32年(十月特大号)時代伝奇小説特集号

○口絵・妖異羽子板呪法……………秋吉 轡
海外グラマア写真集……………編集部・編
書き下し長編・猿鰐伝奇……………島本・春雄
悲曲梟雄伝……………岩堀 光
女犯経秘図……………円城寺 達
笄呪文……………松井 籟子
隠密覚書・地獄大名……………島本 春雄
播摩灘の裸女……………稲垣 史生
紅毛記秘篋……………鳴山 能平
続肌邪宗門……………杉 良平
甲斐の舞面乱……………宇治川 龍
耽奇亭秘舌……………真野 麗
人肌菩薩……………橋爪 彦七
放浪の記……………伏見 和夫
悪魔と情婦……………否笠 一郎
女妖の檻……………京極 美岐
(十月特大号、定価百二十円・送料十二円)
32年(九月号)耽美小説特集号
○口絵・日光浴
○〃・殺された七人の裸女
悪のホザナ……………絵口 浩
女足の賊……………真野 麗
女犯経秘図……………円城寺 達

毛……………夢野 蓉古
黄金の処女帯……………柳生 亘
チーズ臭い三人の女……………花町 右門
紫(しどく)毒……………薔薇蒼太郎
ヒー・イズ・マイ・ギャグ・マン……………鳴山 能平
虹の雫……………早川小夜子
マヒトの告白……………岬 洋之助
花吹雪天保女地獄……………須崎 龍平
悪魔に呪われた三人の男……………神行 京一
おもとの亡霊……………三谷 祥介
放浪の記……………伏見 和夫
ヒットラーの財宝を探しあてた男……………陶山 密
罪をたたく女……………広尾麻津夫
隠密覚書・十人小町……………島本 春雄
ウェストニッパの枷……………竹谷 十三
殺された七人の裸女……………北小路一郎
偶奇坊主……………岩堀 光
鐘ヶ淵因果絵巻……………稲垣 史生

(裏窓臨時増刊・第二集) よるとひる
(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

32年(八月号)異色読物特集号
○口絵・裏窓裸天国

贅の花……………松井 籟子
狂恋懲罰監房……………村岡 良平
貞女お道……………竹谷 十三
いぬ……………麻布 義朗
放浪の記……………伏見 和夫
夜の緋縮緬……………鳴山 能平
蝦蟇物語・肉ごたつの群……………佐々木 力

隠密覚書・首吊り中蔵……………島本 春雄
最大の逃亡者……………陶山 密
日本ムスメを売買した男……………ワトスン・独田
黒髪さんげ……………真野 麗
仇情お浜船……………加藤 晋三
道化地獄図絵……………夢野 蓉古
山西の黒い嵐……………大町 三郎
兎男と猫女……………神行 京一
あ(蛇)ぶ……………三宅 一郎
女形地獄……………稲垣 史生
生人形の夢……………阿部 佐治
吹雪とお花……………佐木 勉
胡蝶秘文……………岩堀 光
(定価百円・送料八円)

32年(七月号)倒錯の手記特集号

○口絵・映画緊縛場面集
蝦蟇物語・むしだんご……………佐々木 力
あべじの足……………新津 勉
金色に魅せられる女……………西条恵美子
草雙紙の世界……………鳴山 能平
放浪の記……………伏見 和夫
あ(蛇)ぶ……………三宅 一郎
娼媒嬲哀史……………片岡 省吾
悦虐濡れ肌地獄……………岩堀 光
乳房を蒐める男……………神行 京一
死に誘う天使……………花町 右門
生きている竹槍……………ワトスン・独田
ノーマン氏の不思議な実験……………柳生 亘
情炎白肌双紙……………稲垣 史生
弄(ろうじゅう)獣……………雪俊 遥

青(あおせん)線……………杉山 清詩
 魔(まぐつ)窟……………梅崎 登志
 妬(とけい)刑……………松井 籟子
 脱(だつこく)獄……………大町 三郎
 隠密覚書・女人駕籠……………島本 春雄
 耽美小説・紫夫人……………竹谷 十三
 旅芝居見てある記……………境 幸彦

32年(六月号)女隠密・女スパイ特集号
 (定価百円・送料八円)

○口絵・ケツ圧が高いのヨ
 ○〃・憲兵と女スパイ
 マタハリ二世の悲劇……………大町 三郎
 観世流蜘蛛の秘曲……………小山龍太郎
 黒水仙の女……………竹谷 十三
 喰人館炎上始末記……………真野 麗
 赤い二十七号……………花町 右門
 紅毛玻璃玉地獄……………加藤 晋三
 逆スパイ青木菊子の最後……………柳生 亘
 仮面の女体……………宮下 文作
 真珠湾の女間諜……………木村 文平
 驚色の眼をした女……………宮本 潔
 プロセス・5と女……………陶山 密
 特高秘話・赤い花々……………高月 大三
 悩乱破れ葛籠……………岩堀 光
 柔肌ごよみ……………稲垣 史生
 福清の蟻地獄……………鳥飼 ゆき
 愛怨人斬り船……………川越 八郎
 カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎
 女工哀史・春岡村事件……………雪俊 遥
 隠密覚書・白珊瑚地獄……………島本 春雄

Fの世界……………佐瀬利五郎
 女装礼子行状記……………藤 琴也
 悦唐女体讃……………高月 大三

(定価百円・送料八円)
 (裏窓臨時増刊第一集)よるもひるも

第一集は売り切れましたが、臨時増刊第二集△よるとひる△との合本がございます。

32年(五月号)女の隠謀・お家騒動特集号
 (定価百円・送料八円)

○口絵・裏窓はだか天国
 ○〃・内外映画緊縛場面
 児小姓を犯した浅岡の局……………加藤 晋三
 雌雄まんじ……………真野 麗
 染血の百物語……………戸山 一彦
 大奥狸囃子……………稲垣 史生
 癡狂院の相馬子爵……………瀬戸口寅雄
 天保素走り小僧……………西尾 富岳
 ボルシア家罪悪史……………三宅 一朗
 曠野をさまよう死体……………陶山 密
 ドイツ皇太子の陰謀……………大町 三郎
 プレンヴィリエ家没落始末記……………花町 右門
 仇(あだばな)花……………松井 籟子
 カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎
 カルカッタの生地獄……………ワトスン・独田
 聖アガートの乳房……………竹谷 十三
 悦唐の女にせ聖女……………雪俊 遥
 一家を狙う復讐鬼……………柳生 亘
 隠密覚書・丹州鬼の巢城……………島本 春雄
 祖国を売った女スパイ……………戸山凡太郎
 監獄十字路……………藤 琴也
 秘録・暴帝略譜……………桜井 純二
 (定価百円・送料八円)

32年(四月号)妖奇犯罪実話特集

○口絵・泥靴にけがされる小羊……………秋吉 右門
 男装の淫婦モーパン嬢……………花町 三郎
 邪恋京人形師……………若尾 敏
 翻られる女体……………瀬木 敏郎
 女性憎悪者(ウーマン・ヘータ)……………柳生 亘
 カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎
 女囚を奪う怪盗団……………瀬戸口寅雄
 ロックン・ロールの鳴る間に……………大宮 敬一郎
 アミアン街道女教師殺害事件……………大町 三郎
 夫は満足してない……………宮下 文作
 地獄塔の脱獄者……………陶山 密
 ちりめん赤い紐と女……………雪俊 遥
 花嵐遊女の逢引……………稲垣 史生
 煮られた女達……………川越 八郎
 淫草(みだらぐさ)……………柏倉 欣造
 モイ族の娯楽……………稲垣 史生
 秘境女人国……………島本 春雄
 死棺屋敷(隠密覚書)第一話……………神谷 三郎
 姉妹奴隷……………竹谷 十三
 若妻地獄……………三上 綾子
 呪われた神々の地獄……………(定価百円・送料八円)

32年(二、三月合併号)妖艶毒婦姦婦特集号

32年(一月号)凄艶妖奇読物特集号

31年(十二月号)名刑事特異犯罪捜査特集号

31年(十一月号)戦慄犯罪特集号

○第二巻・32年三月号までは売り切れしました
 ○32年九月号までは定価百円・送料八円
 ○32年十月号より定価百二十円・送料十二円
 ○新年特大号は定価百五十円・送料十二円
 ○臨時増刊は定価百三十円・送料八円

東京都中野区江古田一〇二三〇二
 株式 久保書店
 振替口座・東京一〇七五六番

妖異死神旗本

小田桐 爽
画七比呂 玲子

176



★累代の墓に女の生首！非道の主命を拒んで生ける幽鬼と化した女中の怨念か？★

文政十三年の夏である。

下谷車坂の永昌寺という浄土宗

の寺で、おぞましい事件が発生し

た。墓石の上に、凄惨な女の生首

がのつていたのである。

深い恨みのこもった表情は、宙

を凝視して物凄く、ザンバラ髪が

朝風になぶられて、生あるものの

ようにゆらめき、墓石をなでてい

た。

首の切口のあたりからは、生々

しい鮮血がしたたり、墓石を真紅

に彩っている。

墓地の掃除に來た寺男がこれを

発見して、腰を抜かさっぱりかに

恐怖した。

注進により、ただちに検屍の同

心が出張し、地元はもとより、浅

草、神田、本郷、根岸、などの目

明しが駆けつけた。

「……血は確かに新しい血だが、

首の方はそうじゃあねえ。昨日や

今日の生首じゃあるめえ」

ズバリと断定したのは、定廻り

の同心、榊原半次郎だった。

八丁堀二百五十余人の同心の中でも、抜群の腕つきで知られる男だ。

だが、その程度の鑑定なら、こ
とさらに腕つきでなくてもでき
ることだった。

首の皮膚は青黒く変色し、異様
な臭気さえ漂っていたからであ
る。その状態は、死後数日を経て
いることを物語っていた。

「……この血は、犬や猫の血じゃ
ねえようだ。人間の血には違えね
えが、……小細工をしやがる」

半ば独り言のように、半次郎は
呟やいた。

「おや？ 榊原の旦那、この首に
やあ、齒がござんせんね」

岡っ引の一人が、口の中を調べ
て云った。

「うむ。刃物で快って、抜き取ら
れているようだ。だが、それは
死んだ後から細工をしたものだ。
何の企らみかはわからねえが、あ
くどいまねをしやがるぜ」

半次郎は無雑作に、淀みもなく
判断を下す。

「それじゃあ、この首も殺してお
いてから切り離したもののなんで？
……」

「違うな。一刀のもとに刎ねた……
……斬り手はなかなかの凄腕だよ」
「……するてえと、下手人は侍で
？」

半次郎は腕組みをし、しばし黙
考したが、やがて、

「下手人か。……下手人は、いね
えのかも知れねえよ」
と云った。

岡っ引には、その意味が掴めな
い。

「へ？ いねえんで？」

「つまりな、下手人は無いかも知
れねえと云うんだ」

「下手人の無え殺し……」

岡っ引は、不気味そうに、首を
すくめて立ち並ぶ墓石を見廻した
「生首があるからといって、必ず
しも殺しとは限るめえ。殺してな
かったら、下手人はあるめえよ」

「はーあ……するてえと、お仕置
者の首」

「それよ。凄腕の主は、山田浅右
衛門。いろいろと小細工をしたの
は、首を盗んだ奴だ。」

見ればまだ若い、顔立ちも悪く
はねえ、生きている時アいい女だ
つたろうと思えるこの首だが、髪
の汚れ具合と云い、化粧のねえ顔
と云い、どうやら、伝馬町の御牢
の匂いがするじゃあねえか」

「なーるほど、違えねえ！ さす
がに榊原の旦那はお見透しだ！」

岡っ引たちが感嘆すると、半次
郎は苦笑を浮かべた。そして、さ
らに絵解きを続ける。

「この首筋を見ろ。切口のすぐ上
のあたりに縄目でこすれた痕がい
る……」

「この女が、伝馬町の縄付きだっ
た証拠でござんすね」

「そうだ。……だがな人を縛った
り首を刎ねたりするのは、お上だ
けとは云えねえ。」

理不尽、無理無体に女を掠った

り、縛って痛めたり、首を刎ねて
殺める悪党もいることだ。

そこで俺も目利きに迷ったのだ
が、なあに、よくよく眺めればら
ちもねえ。髪の毛の中に藁くすが
少しと、耳の穴の中に泥があらあ
な。

すなわち、お仕置が終った後で
俵に詰め、回向院へ運んで、土の
中へ埋めた証拠だ……」

まことに明断。鮮や
かな目利きの牙えであ
った。岡っ引たちは、
感に堪えぬというよう
に、うなずき合った。

見透し同心

幽霊の仕業でないこ
とがわかって威勢を取
戻したのか、一人の岡
っ引が、

「畜生め！ 人騒がせ
な悪戯をしやがって、
いつてえ、どこのどい
つが、何だってこんな

怪異復讐譚特集

ふざけた真似をしやがったんだ
！」

と肩をいからせて、遠巻きに人垣をつくっている弥次馬たちを、意味もなく睨んでみせた。その安っぽい十手風を、榊原同心は、すぐさま聞き咎めた。

「ふざけたいはずら……ですむ事じゃねえ。」

首を盗むだけでも大それた仕業だ。齒を抉り取ったのは何の為だ？ 人間の血を流したり、墓石の上へのせたり……いたずらにしちやあちと手がこみすぎているようだぜ。事件はこれからだ。深い企らみを持つ奴が、どこかにいるに違えねえ」

たしなめられて、その岡っ引は固い顔つきになった。

「お前達、お上の御用をつとめる者は、十手の手前もある。無冤録の一つも読んでおくことだ……」

と、半次郎は云った。

その「無冤録」とは、この時代の犯罪捜査参考書であり、検屍鑑

識の科学書である。

武宗の朝、即ち西暦一三〇八年に、王与という人が完成し、朝鮮を経て日本へ伝わったのを、元文元年、泉州の人河合甚兵衛尚久が邦訳し、出版されたのが明和五年であった。

以来、捜査の実務にあたる役人にとっては金科玉条となり、与力同心はもとより、気のきいた目明しならば、座右の宝典としているはずの書なのである。

馴れや勘だけを頼りに、強引な召捕りや苛酷な責め向いで事件をさばこうとする一部の役人たちを榊原半次郎は常々苦々しく思っている男なのであった。

彼が岡っ引たちの前で示した焔眼の根拠も、すべてその書によるものだった。

例えば「検法」の章には、

○盛熱の時は、屍一日過ぐれば却ち皮肉の色変りて青黒色になり臭気も出で三四日過ぐれば皮肉がそろそろ壊れ脹れて蛆虫もわ

く、口鼻の内悪汁が流れ出て髪もそろそろ脱けかかるなり。

○屍を改むる時、死人の脳後、髪の内などもとくと見るべし、鉄の釘を火に焼て血の出ぬやうにして打こんであることもあるなり。又目の瞳、口の内、齒舌など鼻耳の内なども、よく心を付けかわりたることを無きかを見るべし。大小便の二所も念入れて見るべし、何ぞ打込んであることもあるなり。

等々とあり、「刃傷死」の章には、

○死んで後に刃物を以て截たる疵は切口が乾て其色白く血も出てなし、捻りて見ればただの清だ水が出るなり。

○生きて居る時首を刎落したのは首筋が縮まり込んで短くなり死んで後に首を刎ねはなしたのには首筋が縮まらず長うしてそのままのろりと伸して居るなり。等々と書かれているのである。

「三、四日前に、打ち首になった

女があるはずだが……」

半次郎が呟やくと、

「へえ。確か深川辺の質屋の女中で、主殺しのため御仕置になった女がござんしたが……」

「そうか。伝馬町から回向院、浅草の非人溜までを洗ってみるのだな。非人の中に、生首を掘り出して、売り渡した奴がいるかも知れねえ。俺は、こいつを探ってみよう」

半次郎は、十手の先で墓石をさした。

黒岩家先祖代々之墓——と彫られてあり、これは小普請組で八百石の旗本、当主の名を黒岩主膳と書いた。

「相手が直参の御旗本じゃあ、こいつは少々骨かも知れねえが、墓石の上へ生首を据えられたんだ。因縁噺の一つや二つ、聞き出せねえはずはあるめえ——」

玄関 払 い

岡っ引が直ちに、伝馬町牢屋敷

怪異復讐譚特集

や回向院へ飛んだ。

やはり半次郎の目利き通りだった、と知れるまでには、半日とかからなかった。

回向院の御仕置者埋棄場には、土を掘り起した跡があり、調べてみると、三日前に死罪となった質屋の女房の首が、何者かに持ち去られていたのである。

その際、非人の協力があつたかどうか？ それはすぐには判明しなかった。

非人頭の弥左衛門は探索に全面的の協力を示したが、処刑の当日牢屋敷で働いた非人達

はもとより、仲間の非人からも何も探り出す事ができなかった。どうせ金で転んだのだろう、という見込みだったが、目下のところは、急にまとまった金を掘んだようなそぶりの非人は、一人も見

当らない。

榊原同心が、黒岩主膳の屋敷へ赴いたのは、その日の午後だった。本所三つ目橋の近く。松平能登

守、松平筑後守、津軽大隅守、等の大名の下屋敷と道をへだてて、旗本屋敷の立ち並んだ一劃がある。その中に、黒岩主膳の屋敷があつた。

一見したところ、何の変てつもない、至極当り前の旗本屋敷だが一。

「やっぱり妙だぜ。何かあるに違えねえ。ズンと胸にこたえる何かがない……」

と、半次郎は、ともなつた岡っ引の、相生町の仙造に耳うちした。何しろ、来意を告げると、取次ぎに出た用人が「暫時お待ち下さるよう」と引っ込んだまま、小半時もたつのに、まだ現われないのだ。

半次郎は、首に関しては事実を告げなかった。「身元の知れない女の生首が——」と伝えたのであ

る。相手の反応をみるためだった。

「何だ何だ、町方役人が来ているというのか。場違いな野郎じゃないか！」

傍若無人な蛮声と共に現われた者がある。

六尺豊かの大男で、相撲取りにした方が似合うようなものだが、崩れた感じながら、それでも侍だった。

「おう、貴様達か。ここは不浄役人の来るところではないぞ。足元の明るい中に帰れ帰れ。墓石の上の生首なんぞは一向に心当りがないが、そんな悪戯に一々驚くほど旗本八万騎は腰抜けではない！——とまあ、そういうおおせだが……」

「ご貴殿は？ 当家の……」

「ご貴殿、と呼ばれるほどの者ではないが、俺は天下の浪人犬神七十郎、当屋敷の居候で用心棒も兼ねている」

「はて……武家屋敷に用心棒とは妙でございますな」

「何の、妙な事があるものか。近頃

頃は、武家屋敷ばかりを狙って忍び込む単小僧とかいう泥棒が、横行しているそうではないか。そのうち、この俺が単を引っ捕えて、奉行所へ引渡す事になるかもしれない。貴様たちも墓場などをうろつくのはやめて、こそ泥でも追っかけた方が身のためだぞ」

大男の用心棒は、人を小馬鹿にしたような薄笑いを浮かべながら云いたいほうだいの文句を並べるのだった。

「と申して、まんざらのいたずらとも思えません」

「なあに、モモンガアでも天狗でも、現われたらたちどころにこの俺が、八つ裂きにしてやる。俺の名を聞いたら、幽霊の方で怖れをなす事になっているから心配はいらん。さあ、帰れ帰れ！」

シッ！ シッ！ と犬でも追うような手つきまでしてみせる、人を喰った用心棒だった。

半次郎と相生町の仙造は、取り

つく島もなく屋敷を出た。

「旦那、大変な野郎ですね」

と仙造は、首筋の汗を拭いた。

「なあに、あれでいいのさ。今日のところは小当りに当たってみただけだ」

町方の者は武家屋敷へ踏み込めない。不浄役人呼ばわりで玄關払いを喰わされるのが関の山——とそんな事は百も承知の半次郎だった。

「ところで仙造。この辺りはお前の縄張りだが、黒岩の屋敷について何か変わった噂はないか？ 例え、これだ」

半次郎は壺振りの手つきをしてみせた。

「へえ。お見込み通り、あの屋敷にやあ賭場が立っておりやす。大きな声じゃあ申せませんが、黒岩という旗本は、どうもとてもねえ野郎で、あれがもし御武家でなかったら、首が幾つあってもたりねえだろうってえ評判なんで……」

「すると、あの浪人者は賭場の用

心棒だな」

町方の手が及ばぬのを幸いに、屋敷内に賭場をひらく者が、旗本はおろか、大名の中にさえもあつた時代である。

「去年の夏、ちょうど今時分のことでござんしたが、女中奉公に上つていたお秋という女が、皿屋敷もどきにむごたらしく責め殺されたとか、自害をしたとかで……」

「何だと？ そいつは耳よりな話じゃねえか」

榊原半次郎、往采の真ン中で思わず立ちどまってしまった。

女たち

犬神七十郎をさし向けて、剣もほろろに追い返しはしたものの、来訪者の伝えた用向きは、身に覚えがあり過ぎる無頼旗本、黒岩主膳であつた。

会おうか、会うまいか？ 随分

とためらった末に、会ったところで何になる！ と心に決めたのだ——やはり、気にかかる。

「迷って出ようというのか。小癩な女め！ 亡者はこっちだ、フ、フフフ」

不思議な呟やきを洩らして、うつろに、低く笑った。

四十五才、男盛りの、何不自由ない身の上だが、どういふものか女に運がない。

彼は、ふと最初の妻の面影を思い浮かべた。遠い記憶に、映像が半ばかすんでしまっているが、可愛い美しい女だった——と思う。

そして、また、呟やく、

「あの頃は、俺も若かった。武士として、人間として、まっとうだったものだ……」

だが、その追憶は、長くは続か

ない。

今から二十三年も昔の事だ。十八才のういういしい新妻が、不慮の災難で急死した。

文化四年八月の十九日。深川八幡の祭礼でこつた返す人の波に、永代橋が墜落したのだ。

永代落橋の死者千五百余人、その中には彼の妻の名があつた。

当日、供をしなから命捨いをし、独り立ち帰った腰元を、

「おのれ、不忠者！ 成敗してくる！」

前後を忘れて、思はず刀にかけてしまった。

初めて斬った女の名や顔は、もう憶えていないが、夏が来ると哀れな妻の死を思い出すのだ。——悲しみを忘れようとしてか、乱行の始まった主膳を見かねて、親類縁者が、二度目の妻を迎えさせた。

だが、その女は五年後に、上方役者と駈落ちをした。烈火のように憤怒した主膳は飢えた狼に似た



文字通りの血眼で不義者を探し廻った。それもどうやら忘れかけた頃、ドサ廻りの旅先で男に捨てられ、江戸へ舞い戻った女を偶然見つけた。季節は夏だった。

うむを云わさず、刀の下げ緒で縛り上げ、駕籠に括りつけて屋敷へ連れ帰った。

「僧い女だった……」

主膳は、また、独り言を洩らす。貧しい着物を剥ぎ取って、一糸まとわぬ姿にしたのだ。鎖で高手小手に縛り上げた。

泣いて詫び、すり寄って哀願する姿の中に、恥知らずな計算がひそんでいた。

責められながら、色っぽいぐさで悶えてみせる女の肢体には、奇妙な自信のようなものが漂っていた。

だが彼は、数日後に、女の期待を冷然と裏切った。女は蒼白な顔色と化したまま、刀の錆となった不義者の仕置は実夫として当然の事だ。この時は格別に表面を取り



つくろう必要もなかった——、三度目は、吉原から落籍^{ひか}せた遊女で、これは妻とは呼ばなかったが、真実、惚れ抜いて屋敷へ住まわせた。

夜毎に見知らぬ男と枕を交わした前歴を、消し去ろうとするかのように、この女は誠心誠意、主膳に侍づいた。貞淑であった。涙ぐましいほどに、真心が見えた。

ところが、七年前の、文政六年不思議にこの時も夏だった。

原因不明の得体の知れぬ病気で女が寝込んだ。金にあかして手当を続けたが、そのかいも見えず、女は衰弱するばかりだった。

日本の医者では駄目だ！ と主膳は思った。この年の八月に、長崎へシーボルトが来た。日本人にとっては奇蹟のような医術を持つこのドイツ人の噂を、主膳はいち早く耳にした。

（万難を排してシーボルトに診て貰おう。彼を江戸へ招くか、病人を長崎まで運ぶか？）

とまで思ったものだが……あれが、俺の人間らしい心の最後となつた……」

女は、主膳の腕の中で、先立つて行く詫びと、受けた情の感謝をくり返しながら、弱い火が燃え尽きるように死んでしまった。

それから、破れかぶれであつた。

分別の盛りを、性欲の亡者として、無頼で押し通した。憑きものがついたようだった。

蚊帳落し

「俺の求める女には、皆死神がつくのだ」

とは云うものの、お秋の事は、さすがに後味の悪い思い出であつた。

日本橋、馬喰町の町家の娘お秋、二十五才で出戻りの女だが、美しかった。

腰元のような、行儀見習いの無給奉公ではない。年に一兩二分がしきたりの屋敷女中、それも台所

仕事という事で雇つたのだが、御目見得の挨拶に出た女を見て、その美貌に主膳は目を見はる思いだった。

奉公は普通三、四年間が定めだが、お秋はもう二度と世帯を持つ気はないので、婚期を失するとうような氣遣いは無用だから、どうか末長く召使つて下さるよう——という口入れ屋の言葉を用人から聞き出して、主膳の肚は決まつた。

吉原通いも、すでに興醒めであつた。

お秋は美貌の上に、姿もよく物腰もしとやかだった。事情はわからぬが、人妻の経験を持ちながら女としての悦びを諦め棄てているその心にも興味があつた。

主膳は露骨に云い寄つたが、お秋は従わない。それが男の情欲を一そう掻きたてた。

「この上は、手籠めにしてくれるまでだ！」

と決意した頃、お秋が、ある夜、

「……お暇をいただきとうございます」

と申し出た。

「——それほどまでに、このわしが嫌いか」

お秋は顔を伏せたままで、答えなかった。

「そうか。では、明日にでも去るがよい」

——その夜、主膳は睡りに入れなかった。

可愛さ余つて憎さが百倍、という文句の通りであつた。

起き上り、抜き身を下げて、女の寝所へ忍び寄つた。

夏の初めで蚊帳が吊つてある。「あッ！」

小さく叫んで女が身を起した。とっさに、主膳は蚊帳の吊手を

刀で切つた。落ちた蚊帳の中で身をもがく女の艶めかしい姿は、網にかかった獲物に似ていた。

「何をなされます！」

「お秋、観念せい。わしはお前を

手離しはせぬぞ。わしのものになれ」

「御無体な！」

「いやだと申すか」

主膳は白刃で女の頬を叩いた。

「命を賭けてもか。生娘でもあるまいに」

「お離し下さりませ！ お殿様ともあろうお方が、夜盗のようななされ方！」

「おのれ！ 許せぬ雑言。窮命してくれる！」

主膳は、有り合わせの紐や帯で、蚊帳の上から女を縛つた。

蜘蛛の糸にかかった蝶のように女は必死の身悶えを続けた。

物音に眠りを破られて、屋敷の者達が駆けつけた。

「何事でございます？ お、これは？」

「不埒な女！ 縛って閉じ込めておけ。……いかにあやまちとはい

え、先祖より伝わる海北友松の絵

を傷つけた上、ひそかに屋敷を脱け出そうとした。のみならず、主であるわしに対して無礼の一言」

弁明も云い開きも叶わぬままに、お秋は嚴重に縄を打たれて、座敷牢へ投げ込まれた。

昔、主膳の二度目の妻を繋ぐために設けられ、血に染まったまま開かずの間となつてゐる陰惨な私牢であつた。

それからのお秋は、この性格破産者の格好のなぶりものとして、完膚なきまでにさいなまれた。

刺青仕置

この時代の江戸で流行した風俗の一つに、刺青がある。それは単なる市井の流行とばかりはいえないものがあり、文政十二年に作事奉行となつた五百石の旗本、遠山左衛門尉景元や、下総香取郡小見川の領主で禄高一万石の大名、内田伊勢守正容などという武士は、背中一面に刺青を施していた事で

知られていた。

黒岩主膳は、ある席で鉄火な芸者の背に、刺青のあるのを見て以来、その妖艶な美に魅せられていた。

美しい虜囚を得た主膳は、その統肌をなぶる手段として、ただちに刺青を思いついた。

ある夜、屋敷へひそかに刺青師が招かれた。

不当な仕事、と、もとより気づかぬ訳はない。大金を掴まされ、すべてを承知の上で来た、これは二流の刺青師であつた。

しかし、牢格子の中で、裸に剥かれたまま、手足に縄を掛けられて床に固定されている、哀れにも美しい犠牲を見ては、さすがに刺青師もためらつた。

「迷惑はかけぬ。本来ならば手打ちにしてもかまわぬ不屈な女だ。一命を救ける代償として、仕置がわりの刺青を致すのだ。早く仕上げてくれい」

否も応もない。刺青師は屋敷へ

泊り込みで仕事を続けた。

背中一面へ刺青を彫るのに、通常一年はかかる。血氣盛んの我慢強い者が無理に彫らせても一月はかかつた。

主膳は、それ以上に急がせた。刺青師が操作する針は、そのまゝ、地獄の責道具となつた。

「：アッ！ ウッ！ アアッ！」針が肌を刺すたびに、女の唇から切ない悲鳴が洩れた。

あぶら汗が流れて、床を濡らし

た。両の手首や足首は、縄目にこすれて血がにじみ出た。

幾度か失神しては、針の痛みで意識を引き戻された。

苦痛を与え過ぎて死に至らぬよう、最小限度の休みが、日に三、四度あつた。

その間、女は熱氣に似た息を吐きながら、呻き続けた。

恨み、呪い、また、時として許しを乞う哀願の声も次第に絶え絶えとなり、やがては、言葉ともな

らなくなつた。

主膳は、非道な監督者として、常に牢内にいた。同時に彼は、冷酷な見物人であり、拷問の指揮者でもあつた。

「どうだ、辛かろうが。まだわしの意に従う気にはならぬか？」

「悪魔！ 鬼！」

「その鬼にさせたのは誰だ？ わしとても生れつゐての鬼ではないぞ。むしろ、哀れな男なのだ。わしが女を憎むのも、女愛しと思ふのも、すべては相手の女次第だ。お前は、何の不足があつてこのわしを忌み嫌つた？」

「いっそ、一思いに殺して下さい！」

仕事の合間に、そんな問答が交わされた。

やがて——刺青は仕上つた。

「うむ。美事な出来栄だ。お秋、いくらお前がわしを忌み嫌つてもその肌は、もはやわしのものだ。他の男では、この肌は好むまい」

脹れが退いた後、主膳は意味あ

りげに云った。

鏡にうつされた我が身を一目見て、お秋は

「アッ——」

心が凍った。

それは見るからに、おぞましい構図の刺青であった。

鬨が三つ。女の獄門首が一つ卒塔婆にお化け提灯——。

凄惨きわまりない、それらの図柄が、桜の花びらの中に配されている。

「どうだ、わしの女にはふさわしい刺青であろうが。この上は、観念して、わしのものとなってくれい。縄も解いてつかわすぞ」

刺青師に解放されてから、数日たっていた。お秋の気力は、幾分か回復していた。

その気力をふり絞って、お秋は最後の反抗を試みた。それは、舌を噛み切って自害し、この男から逃れることであった。

だが、主膳は、お秋の意図を知ると、狼狽して猿轡を噛ました。

「強情な女め！ 美事その強情を通してみい」

一たん狂いだした齒車は、回転を続けて、とどまるところを知らなかった。

主膳は、女の齒を抜歯した。

一本——また一本、と、すでに狂気の果て、妄執の虜であった。

「死ぬことは許さん。死なせはせぬ。殺してなろうか！」

齒が抜かれると、お秋は食事を拒んだ。

「おのれ！ あくまで抗らう気か！ 飲め、喰らえ！」

主膳は、鞭を手にして牢を訪れるようになった。

夏も盛りを過ぎたある夜。例の如く牢へ足を踏み入れた主膳は、お秋を一目見て、思わず慄然として鳥肌立った。

薄暗い牢の隅に、生きながらにして、幽鬼と化した女の姿があった。

深い呪いをこめた眼は、青白く燃え上るようであった。

ザンバラ髪が、肩へ流れて、のたうつ蛇の形を思わせた。

後手に縛ってある体は、やせ細り、地獄の底から這い上った者のようだった。

「……お殿様、この恨み、秋は必ずはらしてみせます。……七生までも、呪います……」

陰うつな低い声が、牢内を流れた。

「ええ！ 申すな！」

主膳は思わず刀の柄に手をかけた。

「往生せい！」

白刃一闪、お秋の首は床へ落ちた。

その眼は、床の上にあっても、まだ主膳を睨んでいた——。

その事があって以来、主膳は屋敷内に賭場を開いた。

仲間や用人に申し付けて、半ば命令的に開かせたのである。

理由は云うまでもない。屋敷には人が出入りし、夜遅くまで活気を呈するようになった。

賭場

「さあ、張った張った！ 張って悪いは親父の頭、張らなきゃならない提灯屋だ！ さあ、ようござんすか？ ようござんすか？ ようござんすか？ ようござんすか？ 勝負！」

と、そんな、鉄火場なみの掛け声も飛び出すが、これはいささか風変りな賭場だった。

第一に、寺銭をとらない。貧乏旗本なら寺銭の上りを財政の助けにするのが普通だが、黒岩の家は裕福だった。

それだけではない。酒肴がふんだんに振舞われる。次の間にこもかぶり二つ、デンと据えられてあり、鰯などが置かれ、絶えた事がない。

「奇特な殿様だねえ。よっぽど丁半が好きとみえらあ」

誰に云うともなく呟やいて、湯呑みで冷酒を、グイとやった男がある。

額から右眼にかけて大きな刀傷

があり、片眼なのが玉にキズだが
色白で、小粋な感じの遊び人だっ
た。この賭場では新顔の方だが、
馴れ馴れしい。如才のない
男だ。

いま一人、酒樽へ近づい
た者がある。

年の頃三十二、三の、小
柄な男で、この賭場ではよ
い顔だった。

「今日も芽が出ねえ……」
「堺町の。今夜も鴨ですか
い」

と片眼が云った。

「どうも、わたしは下手の
横好きでねえ」

「御同様で、あつしもスッテンテ
ン。いっそ清々するようなもんで
さあ」

「仕方がねえから振舞い酒でも飲
もうという、お互いに涼しい話さ
ね」

二人の男は、顔を見合わせて苦
笑を浮かべた。

「ところで堺町の、あの女は何者
の芸者さ」

「柳橋の小春……あまり聞いたこ
とがねえ姐さんだな？」

片眼が、盆座の方を指さして聞
いた。

「柳橋の小春……あまり聞いたこ
とがねえ姐さんだな？」

片眼は、ちょっと口ごもって、
照れたように再び視線を賭場へ転
じた。



小股の切れ上った、滅法きれい
な女が、負け込みに夢中となつて
たつた今、クルクルと手早く帯を
解き、「これで——」と着物を賭
け金の代りにしたところだ。

「あれかい。見た通りの粹筋で、
柳橋、とか云ったが、小春って名
の芸者さ」

「お前さんと同じ頃に、この賭場
へ通いはじめた女だが、……まあ
いいや、下手な岡っ引じゃあるめ
えし、女の素性を洗ったところで
銭にやあならねえ」

「いや、なに。素性の身元のとつて
つもりじゃねえが、あまりいい女
だもんで、せめて名前だけでも知
っておきてえと思つてね」

「……丁と張りやんせもし半出た
ら、わしを売りやんせ吉原へ、か。
どうやら小春姐さん、からだを張
るつもりらしいな」

堺町と呼ばれた男が云ったのをきっかけに二人は賭場へ戻った。

立て膝になり、仇っぽい姿の女は、よほど利かぬ氣とみえて、その勝負も自分の負け、とわかるためらいもなく云つてのけた。「からだを張らしておくんなさいまし」

「そいつはよくない了簡というものだ。着物は私からお前さんに進上しよう。今日のところはお引取りなさるがいい」

中年男が云うと、女はキュッと唇を噛み、

「お言葉ではござんすが、わたしも、ちつとは名の売れた芸者なんだ。人から施しなんか受けやしません。からだを張ると云つたって一晩や二晩というケチな張り方はしないつもり。もし半と出た時は一生あなたの御用をつとめる覚悟でござんすのさ」

「それはまた大そうな覚悟だが」男はにが笑いをみせた。

「私はお前さんのような女を囲え

るほどの身分じゃない。それに、愉しみはこれだけだよ」

男はサイコロに眼をやった。

「それならなおのこと。さ、器用に勝負を受けておくんなさいまし。勝つてわたしが氣に入らなきゃ、吉原へでもどこへでも叩き売って貰います」

「しつっこいお人だな」

「お前さんこそ、男らしくもない。あまり盆座の上で恥をかかせなさんな」

「云い過ぎやしないかね！ それなら望み通り、叩き売ってやろうじゃないか。百両、丁だ！」

中盆の男がうなずいて声をかけた。

「ようござんすか？ ようござんすね？」

壺振りの男が、賭を壺へ投げ入れる。

「勝負！」

鋭い声に、周囲の眼が一斉に賽へ注がれた。

目は、四六の丁。

女の負けだった。

「畜生！」

女は口惜しげに叫んだ。

「約束は約束、いさぎよく守つて貰うよ。さっきも云つた通り、私はお前さんのからだに用はない。と云つて吉原くんだりまで、女衒の真似をしに行けたもんでもない。だから、この場で売つてしまおうと思うが異存はあるまいね」女は、さすがにたじろぎをみせた。

「逃げはすまいね。私も百両という金を伊達や酔狂で賭けたんじゃない。……そうだ、どなたか、この女を縛つて下さらんか」

「おう、そういう事は俺にまかせろ！」

野放図もない声を上げて立ち上つたのは、用心棒の犬神七十郎だった。

どこから、いつの間に持ち出したものか、手廻しよく細引きを手提げている。

「女、神妙にしろよ」

役人のようなせりふを吐いて、女を後手に縛り始めた。女は弱い抵抗をみせ、身悶えた。

「フン、いくら負けたからって、縛られる覚えはないよ。あ、痛いじゃないか！」

「辛抱せい。権藤流捕縛の術と云つてな、女にはちときつ過ぎるかも知れぬが、俺に縛られてみる、不思議と諦めがよくなるものだ」

勝手なことをぬかしながら、キリキリと縛り上げ、畳へ転がした。

「着物もなしに縛られて、柳橋の小春姐さんとしたことが、何てさまなんだらうねえ！」

棄鉢な自嘲が紅唇を洩れた。

「これは先生、お手数を掛けましたな」

男は何がしかの金を、七十郎の手へ握らせた。

「若い衆、面倒だが、この女の値をせつて貰おうか」

中盆の男が合点をして立ち上った時、黒岩主膳が姿を現わした。

怪異復讐譚特集

亡 霊

黒岩主膳はいきなり百両の値を付けて小春を買い取った。

これまでの、どの女にも負けな
い美しさであてやかさがあつた。

男の扱いが巧みであつた。

主膳は久しぶりに、満ち足りた
思いを味わつた——。

今宵は、どんな責め方をしてく

れようか？ どのよう

な言葉が聞けるだろう

か？ 考えると、ひと

りでに頬がゆるんでく

る。廊下を渡る足も軽

くなる。

と——突然、

「キヤア！」

すさまじく恐怖した

小春の悲鳴が、二度、

三度と続いて起つた。

「どうしたのだ！」

小春の寢所へ飛び込

んだ主膳は、愕然、息

をのんで棒立ちとなつ

た。

背を向けて座つた女の上へ、蚊

帳が切り落されていたのである。

それは、一年前に責め殺した女

お秋の姿であつた。

「き、貴様は誰だ！」

だが、振り返つた女は、恐怖に

身を震わす小春である。

「……小春か。どうしたというの
だ」

とは云つたが、舌が乾いて、思

うような声にはならなかった。

「怖い！」

小春は夢中で男に這い寄り、す

がりついた。

「誰かがいるんです！ いきなり

蚊帳が切れて、黒い影が私の上に

……ああッ！ あすこに、あすこ

に居るのは誰？」

おびえて、震える指が示したの

は壁の隅。

だが、主膳の眼には何も見えな

い。

「落着け。……何も、何もおらぬ

！」

「何かが、確かに……」

「何かの誤まりだ、気のせいだ」

「それならなぜ、蚊帳がいきなり

……」

主膳は、蚊帳の吊手を調べた。

すべてに刃物で切つた痕があり

その三本までが血でいろどられて
いた。

「だ、誰かおらぬか！ 誰か来て
くれい！」

思わず叫んでしまった。

「お殿様、どうなさいましたんで

？」

意外に近い所で答える声がして

現われたのは、賭場の客、片眼の

男であつた。

「い、いや、もうよい。何でもな

いのだ」

男としての、武士としての面目

を保つのが精一杯、という感じの

わざとらしい声であつた——。

そんな事が何度も続いた。

ある夜ふけなどは、牢の中に髪

をふり乱した女が、絶え入るよう

に泣いていたこともある。

「おのれ！ 亡霊、迷つたか！」

槍を取りに引き返して、犬神七

十郎と共に再び牢に来てみると、

すでに、怪しの影は跡かたもなく

消え去つていたのである。

小春は幻影に悩まされ続けた。

「血だらけの唇を、物凄く開くと
その女には歯が一本もないんです

よ……わたしは、怖い！」

「真つ暗な納戸の中に、髑髏が三

つ、確かに浮かんでいた。ああ、

恐ろしい！」

ひとしと身を寄せて、しきりと訴

える。

「そんな馬鹿な事が……」

主膳の言葉も、もう強い打ち消

しとはならない。

賭場にも噂が流れ始めた。

はじめて云い出した者は誰なの

か、噂というにはあまりに正確な

それはお秋殺しの真相をついたも

のだった。

最も熱心な聞き手は、片眼の遊

び人だった。

この男は、ただ聞いているだけ

ではない。要所急所を掴んで、一
そう深く聞きただそうとする。妙
に好奇心の強い男であった。
堺町から来る男は、怪談よりも
片眼の男の方に、もっと興味を持
っているようだった。

復 讐

フワリ——。

音もなく蚊帳が落ちて来た。

主膳は眼をさまし、素早く起き
上った。かたわらを探ったが、小
春はいない。

「……おのれ！ 何奴だ！」

主膳は、獣のように低く唸った。
呪文をかけられたように、手足の
自由が利かなかった。

背後に異様な気配を感じて、振
り返ると、ほの白い影が浮かんで
いた。

ザンバラ髪、青い顔、口の端か
ら、一筋流れる血潮——。云いよ
うもない物凄さであった。

「お、お秋！ 亡霊、失せろ！」

「黒岩主膳……悪業の酬い、今こ

そ思い知らせてやる……」

影の手に冷たく光るものがあり
それが素早く動くと、主膳の咽喉
笛が掻き切られたのである。

「ぐえっ！」

血の音の混った絶叫がほとぼし
り、苦し紛れに、主膳は両の手で
刀身を固く握った。

断末魔が過ぎると、白い影が静
かに立ち上った。

髪の毛に手をかけて引くと、陰
惨な毛の束は、かつらであった。
変装なのだ。

女は小春であった。

これを、天井裏の梁の間から見
ていた者がある。

片眼の、いや、今は片眼でなく
素顔は八丁堀の同心、榊原半次郎
のそれだった。

「おい、そこにいるのは誰だ？」

不意に後ろから声をかけられた
闇の中をすかして、凝視すると
頬かむりの男が、油断なく身構え
ているのだった。

「お互いに、眼のいい渡世らしい

が、闇の中や逃げ足なら、こっち
はお手のものだ」

軽く素早い身のこなしで、男は
音もなく遠ざかり、半次郎の視界
から消えた。

「待て、単小僧！」

「知っていたのか。もうこの屋敷
にやあ用はねえ。お先におさらば
させて貰うぜ……」

長さ九十八間——。

両国橋は月に長い影をおとして
いる。川風が涼しい。

「そうかい、お秋さんというのは
お前の姉さんだったのか」

聞いた男は単小僧次郎吉。答え
る女は小春実の名をお春という。

「お縄を頂戴して、江戸お構いと
なったのが三年前。たった一人の
姉がむごい殺され方をしたと聞い
て、舞い戻って来ましたのさ」

「手助けをしたのは、お前の身内
衆かえ？」

「あい、堺町の親分さん。わたし
も今じゃあ二つ名前の白浪稼業」

「かげろうお春、というのがお前
か」

「お恥かしゅうござんす」

「姉の仇に身をまかしたのは、よ
ほどの事だな」

「捨て身でござんした」

「女は怖えものだ」

「あれ、親分さんこそ、賭場の客
になりすまして武家屋敷の様子を
探り、その上で仕事をするお手の
内……怖いこわい」

「おっと、それを云うねえ」

ピーーッ！

夜空に呼子の笛が鳴り響いた。

「お、網が張られそうだな。あの
御仁も、八丁堀の旦那の中では、
ちったあ怖え方だ。達者で暮らせ
堅気になれと、云ってもやりてえ
ようなものだが、お前もどうやら
まともな暮らしのできる女じゃな
さそうだな」

「末は三尺高い木の空で、逢うか
も知れませんかえ」

お春は、ふと淋しい笑いをみせ
た。

(終)

だって女はその時……

The Charle

Turners case

リチャード・デミング

「おひる前、十一時半ごろでしたかしら、呼鈴が鳴ったんです。あたくし、ちょうどお湯をつかい終わったところで……、ローブをひっかけてドアに出ましたの。」

ターナーさんが立ってらして、「ハイ、おじやまします」なんて調子でしょう。ちょっとびっくりしたんです。なぜって、今までたずねてらしたこと一度もないんですもの。でも、これは何かきつと、チャンとした御用件なのだと思います——。

お帰しした方がいい、というような感じは

全然受けませんでした」

「では、あなたが招じ入れられたのですね？」

彼が押入ったのではないのですね？」

「とんでもない！ あたくし、着物を着る間とつぎの部屋でお待ちください、って申し上げたんです。でも、あたくしが寝室に入ってローブを脱いだとたん……」

彼女は息をのんだ。眼を床に落した。声をはげまして続ける。

「あの人が寝室へ飛び込んだ時、あたくし、丸裸でした。あの人も、自分の服は全部、向うの部屋で脱いでしまつて、やはり丸裸なん



です。びっくりして声を立てようとするといきなり抱きすくめて来て……」

「寝室のドアはお閉めになったんですか？」

私はことばをはさんだ。彼女はまた、赤くなった。チラリと娘に流しめをくれた。

「ピッタリ閉じてはございませんでしたの」ししぶ答える。

「すきまはあいていたと思います。でも、向うの部屋からのぞかれる気づかいは、絶対にございませんでした。鍵をおろさなかったのは、もしあの人が急な用なのなら、あたくしの着がえの間に話しかけてくれると思ったからです」

「なるほど、そこで彼はドアを押し開いて、あなたを抱きすくめた……。あなた抵抗しましたか？」

「いたしました。でも、若いからたいへんな力なんです。お会いになればおわかりですわ。あたくし、こわくて気を失うかと思いました」

「叫び声をあげたんですか？」
婦人は首を振った。

入詳しくは久保書店発行のマンハント九月号を御覧ください！ 絶賛発売中！

綺 消
談 失

水

中

消

滅



藤井 讓二
和泉多摩夫・画

(一)

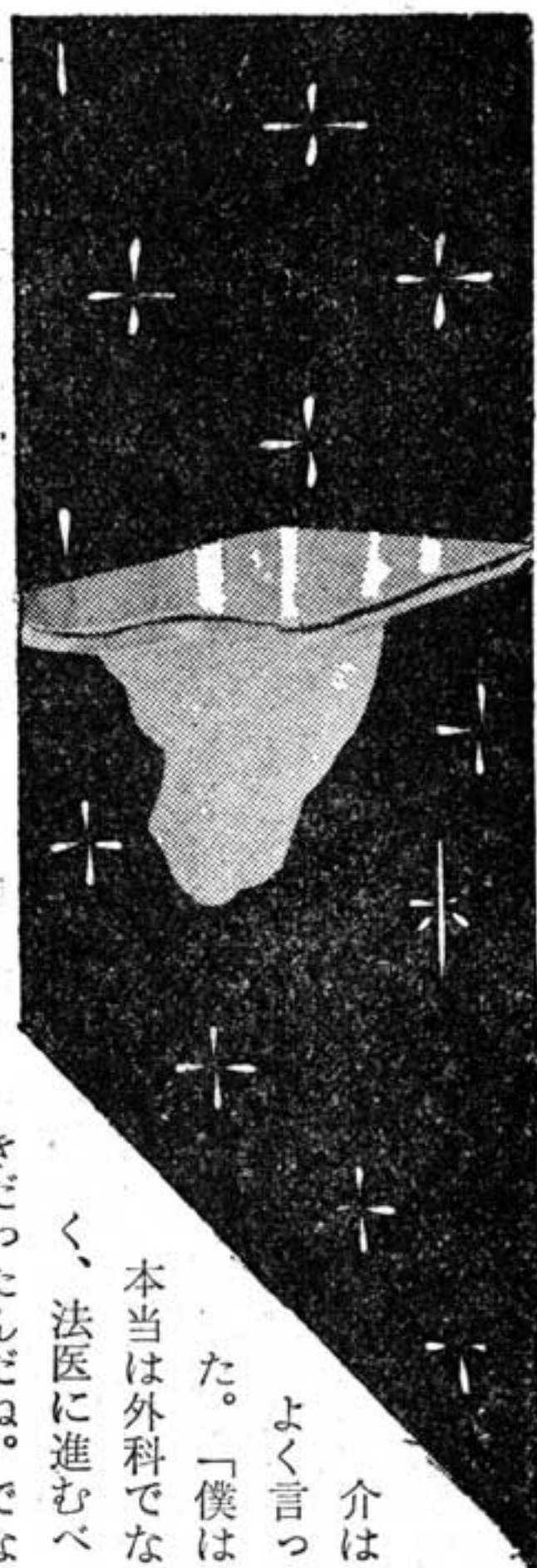
着古したしみだらけの手術衣をまとして試験管を片手に臨床検査室を出て来た、この春還暦を迎えたばかりの産婦人科医操慎平は、初夏の朝のさわやかな日差しをいっぱいに受けた書齋の方に向って、老軍医然としたさびのある大声で呼び立てた。

「慎介！ おい、慎介はおらんか？」

すると、診察室から看護婦の松野がひよいと首をのぞかせて答えた。

「あの、若先生はちよいと警察まで行ってくるからと、つい今しがた車でお出かけになりました。何ならすぐに電話でお呼びいたしましょうか？」

「いや、そんならばよろしい。……しかし、まったくもってしようのない奴だな。一体いつになったら商売気が出て来るのじゃろう」もうそろそろ地盤を固めておかなければい



介は
よく言っ

た。「僕は

本当は外科でな

く、法医に進むべ

きだったんだね。でな

ければ精神医学だった。だが僕は実に親孝行
な性質でね、親父の言に素直過ぎたんだ」

自分で言うのだから間違いない。彼の言に
よれば、いつまでも父慎平を働かせておくの
も、実は親孝行の一端の現れだというのであ
る。つまり、それが心身共に老化する事を防
止する最良唯一の効果的な医学的手段だとい
う主張であった。

「先生のお蔭でこの事件はようやく解決でき
たのですよ」と、今年四十才になる矢野俊郎
警部は、時折八才も年下の若い外科医に向っ
てお世辞でなくもらすのもたびたびであっ
た。
「僕はどうか専攻を誤ったらしい」と操慎

慎介と、高輪警察署の司法主任矢野警部と
は、共に父慎平をへば碁の師と仰ぐ点におい
て永い間の親交があった。そのために、彼は
その天賦の才能を生かして自分の方から犯罪
の匂いを嗅ぎつけては、矢野警部の注意を促
す事がしばしばであった。

操慎介がその撫子利殖組合の名前を知った
のは、その土曜日の朝刊の広告欄だった。そ
の広告は、紙面の隅にほんの小さく載った
ものだったが、それにもかかわらずその内容
は彼の好奇心を強くそそるものがあったの
だ。

「僅か五ヶ月で、貴女のお金を倍にする事が
出来ます！ 面談を乞う。撫子利殖組合理事
長 川崎房枝」

その記事を読んで数分の後に、彼は警察署
の応接室で矢野警部と会っていた。

「H経済会を記憶しているかね？」と操は切
り出した。

「むろんですとも。朝鮮事変の終り頃、十数
億円から踏み倒したといわれるあの事件でし
ょう」

警部は昂然と頭を上げてそう答えた。綺麗
にチックで撫でつけられた胡麻塩髪には、粗
い櫛目がついたまま一本の乱れもなかった。
「そうだ。じゃあ撫子利殖組合というのを御
存じかね」

「なるほど。いや、今朝の新聞に広告が出て

☆一人は婦人トイレの中で、一人は温泉プールの中で、二人の女が忽然として消滅した！

いたと営業係の刑事の報告がありましたよ。

大変な人気がいいですな。客のほとんどは牛売り損なう口のへそくり族だということですが、何しろ事務所の前は正に押すな押すなの盛況らしいです」

「ほほう！」と操は眉をひそめて言った。

「前にH経済会やそんな類いの大がかりな取り込み事件が次から次へと起った矢先だというのに、まだそんなものに金を出す手合いがいるのかね」

「まだいるどころの騒ぎじゃありませんよ。」

——いや、実は以前にあんな不祥事が幾つもあったので、またその轍を踏ませては大変だと思って、当時早速詳しく調査をしてみたのです。ところがあの組合、といっても法律上有効な法人組織ではないのですが、あの撫子利殖はちょうど共同の高利貸みたいな内容のものでしてね、これといって引っかける条項がないのですな……」

組合の理事長と称する川崎房枝という女は三十四五才の、長身でなかなかの美貌だった。二年も前からその貸事務所を借りて、凄いはど美貌の二十四五才の姪と称する秘書と二人でそこに住んでいたが、洋装がよく似合い、大柄なだけあって押出しも利き、どこか婦人

代議士めいたうるさそうな印象を持つ反面、一度会って話してみるとたちまち十年の知己も及ばないような親近感を与えてしまうという、いわば生れながらの事業家的素質ともいうべきものを備えていた。

「……株式投資も少しはやるようですが、高利貸がおもな業務内容のようです」と警部は愛用の濃い縞目のフライア・パイプを鹿皮で絶えず磨きながらじっと聞いている操慎介に言った。

「しかし新規加入者はそれぞれ次の加入者の保証人となる仕組みなので、文句のつけようがありませんね」

操はパイプを磨く手をふと休め、少し考えてから静かに口を開いた。

「業務内容は大方想像がつく。だがね、僕の言いたいのは、奴らがもうそろそろ好い潮時と見てやしないかという事なのだ。いま君の話聞いているうちに、今朝の広告が何を意味するものか少しわかってきたような気がする。あれはハッタリだよ。奴らは新しい加入者の金でもって古い満期契約者に支払いをして安心させ、新しく加入を促しておいて、大金をまとめてどろんをきめ込む最初からの計画なのだ。あの広告を出したのは、さらに事

業を継続拡張しますよ、という一種のデモンストレーションだ。川崎房枝は必ず近いうちにパイと旅行に出て、二度と帰って来ないよ」その日の午後、慎介が父の往診中にやって来た簡単な蜂窠織炎患者の手術をすませて手を洗っているところへ、矢野警部からあわただしい電話がかかって来たのだ。

「操先生！ 撫子利殖組合に関して妙な事が起ったのです。お閑でしたらすぐに署まで来ていただけないでしょうか」

(二)

五分の後に操が愛用のフォルクス・ワーゲンを警察の前に停めると、たった一人で居残っていた矢野警部は入口まで彼を出迎えた。土曜日の午後なので、非番の者はもう全部帰宅してしまっていた。

「お呼び立てしてどうもすみません。誰もいないのでここを離れることができなかったのですから」と警部は言い訳をしてから、

「実は、あのバーバラ・スタンウィックが津島恵子のような顔立ちの、あの撫子利殖の秘書が突然消えてしまったのですよ！」

と言いだした。

「ほほう、消えたというと煙のように人の見

ている前でという意味かね？」

警部は首をふって、

「いえ、そんな事ではないのですが、それとよく似たような事なので、実は今朝先生に注意されてから私は、早速腕利きの刑事を三人刈谷という部長刑事につけて撫子利殖の周辺に張り込ませたのです。今日は土曜日で、組合も午前中しか仕事をしないので、事務所の前にたかっていた人々も午後一時には散ってしまいました。すると、一時三十分頃になってあの美人秘書が重そうなスーツケースを提げて裏口から出て来たのです。スワと色めき立ったのですが、中には理事長が残っています。そこで組を二手に分け、部長刑事はもう一人の刑事と共に事務所に残り、ほかの二人の刑事が秘書のあとを追って行きました」

「うむ。それで？」

「やがて銀座に出た彼女は、スイと百貨店の中へ入って行ったのです。そこで二人の刑事は見失っては大変と、人混みを逆に利用してかなり間隔を詰めて尾行して行くと、女は四階までのぼってから化粧室の中へ消えました。まさか婦人用トイレの中まではついて行く事ができないので、二人は入口に頑張っていたのですが、女はなかなか出て来ません。

そうしている間にもひっきりなしに出入りする女客があり、変装して来る場合も考えて十分注意して十五分ほども待ったのですが、とうとうしびれを切らせ、掃除道具を提げた中年の掃除婦がやって来たのを幸い、中の連中に了解を求めて貰って一応トイレ中の客を全部集めて一人一人首実験してみたのですが、

それらしい女はまったく見当りません。そこでびっくりした二人は、個室の内部はもとより壁から鏡、タイル張りの床に至るまで入念に調べたのですが、脱け道らしいものは全然ないので。出入口以外の、外へ出られるたった一つの窓は、内側から錠が下りているので出られるわけがありません。結局二人は蒼くなつて私のところへ電話して来たという次第なのです。弁護がましいようですが、この二人の刑事は決して新米ではありません。十分な経験のある信頼できる男達で、途中でズラかられたためにいい加減な嘘を吐くような連中では絶対にならないのですよ！」

「ふむ。……それは優秀なものだ」と操慎介は落ち着いてパイプに火をつけながら言つた。うす紫色の、香い高い煙が署の高い天井に立ちのぼって行った。

「え?!」警部は、操の短い言葉の意味を解し

かねて妙な顔つきをした。刑事達の腕前を冷やかされたのではないかと思つたのだ。

「いや、その女の逃げっぷりがさ」と操は言つた。

「結局のところ女は二人の刑事の尾行をとうの昔に感づいていた。という事はむろん何か尾行されるような事をしていた。もっとはっきり言うならば彼女が提げていたその重そうなスーツケースの中には多分不浄な千円札がギッシリ詰め込まれていたという事なのだ。が、とにかく、うまくデパートの人混みを使って逃げおこせた。つまり二人の刑事よりもその女の方が役者が一枚上だったわけだよ」

「まあ、いわばそうなのですかね」と警部は少しきまり悪げに頭を掻いた。

「それで事はわかったが、一度現場を見に行つてみようか。舞台奇術じゃあるまいし、人間一人がそう簡単に消えてたまるものか。何か重大な見落としがあるのかもしれない」

「その点は刑事共を信頼してやってもいいと思うのですが、しかしひょっとして何かいい手がかりが掴めるかも知れませんか。じゃあこれから――」

ガランとして、人気のない署内の一隅の壁に取りつけた警察電話のベルが、その時突然

激しく鳴り出した。警部は大腿に室内を横切
って受話器を取り上げると、

「ああモシモシ。私は矢野だが」

「――刈谷です。報告します。川崎房枝がい
ま撫子利殖の事務所を出ました。現在尾行中
です。五分ごとに電話連絡します」

利殖組合に張り込んでいた部長刑事からだ
った。

「よし、少しでも逃げ出す気配を感じたらす
ぐに不審尋問するのだ。連絡があったろうが
秘書女めにはうまくまかれてしまった。人手
が不足だったら俺の名前を言って附近の交番
から応援を頼め！」

電話を切った警部は、

「デパートへは行けなくなりましたよ。少し
忙しくなりそうです」と言って、今の電話の
内容を慎介に告げた。

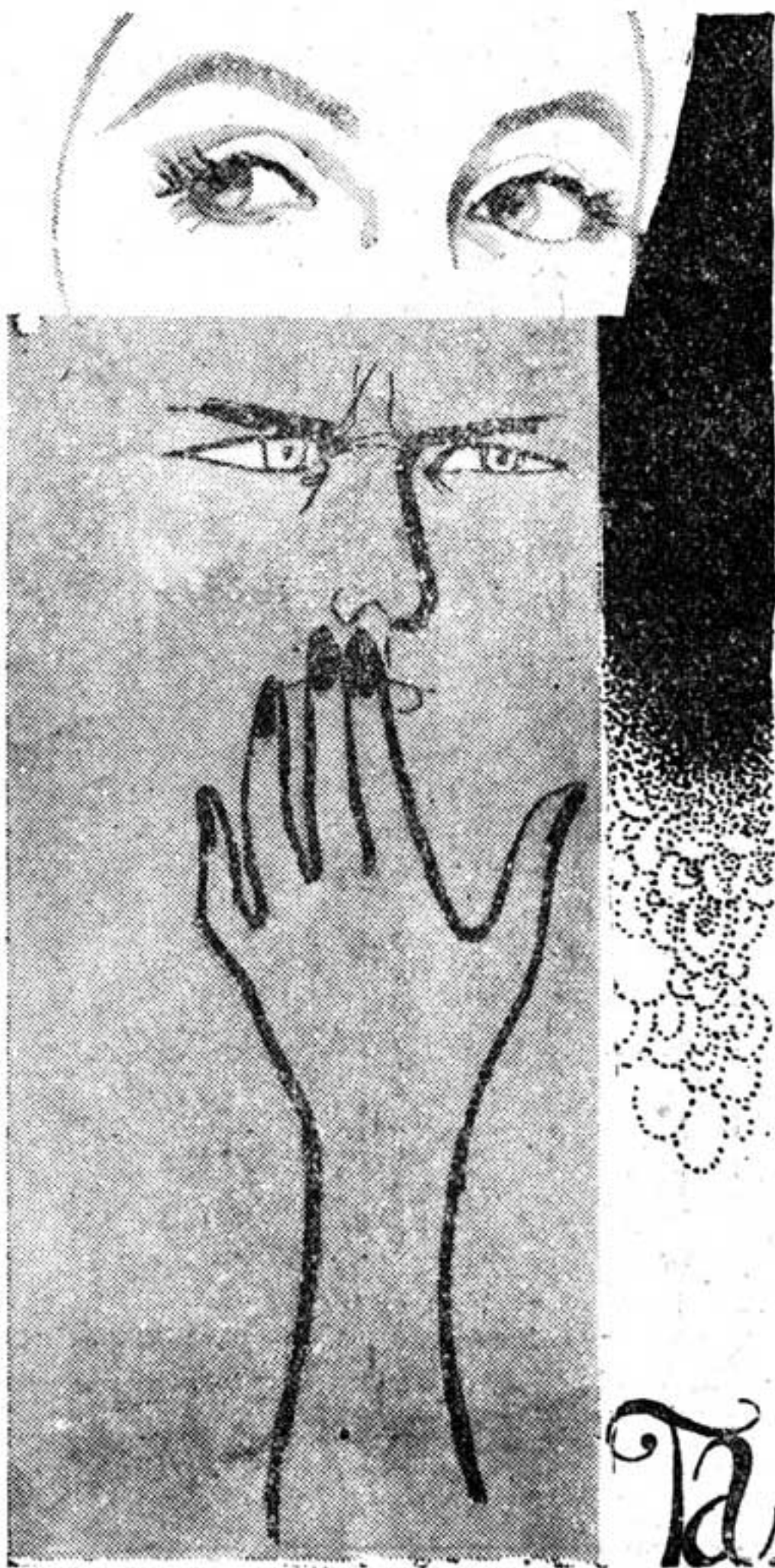
「ほほう。こりやおもしろい事になって来た
ぞ。ほくの診断がどうやらか的中し始めたよう
だ。何か起るよ。きっと何かが起る。よし、
その報告をしばらくここで待っている間に、
矢野君、さっきの化粧室の事を少し考えてみ
ようじゃないか」

警部は、罫紙の裏側に鉛筆で簡単な見取図
を書いて見せた。それはごくありふれた、ど

このデパートにもありそうな婦人用のトイレ
ットで、扉はバネの入った蝶番で内外に自由
に開閉できるようになっており、入ってすぐ
両側に鏡と化粧台があって、そこから先左側
に四つ、右側に三つの個室が並んでいた。右
側の一番奥は物置になっていた。窓は突当り
にあり、観音開きの形式で真中に錠が装着し
てあった。このトイレで外に通ずる道といえ
ば、最初の出入口と窓以外にはまったくなく
扉の外では二人の刑事が、腕時計の秒針を気
にしながら両眼を皿のようにして頑ばってお
り、窓には錠前がしっかりとかかっていたの
だった。

「不思議でしょう」と警部はこの場合いささ
か残忍な勝利感をかすかに覚えながら操慎介
に説明した。「天井や壁や、タイル張りの床
は文字通り水の洩る隙間もないコンクリート
で、絶対に種も仕掛けも見当らんです」
「もしそうだとすると」と少し考えてから今
度は逆に操が探るような眼で警部の顔を見詰
めながら言った。「そうだとすると、入れ替
り立ち替り女が出入りしていたのだから、優
秀な二人の刑事君達はあの秘書女の変装を見
破る事ができずに見過してしまったものとし
か考えられないが」

「いや、まあそうかも知れません。だが、



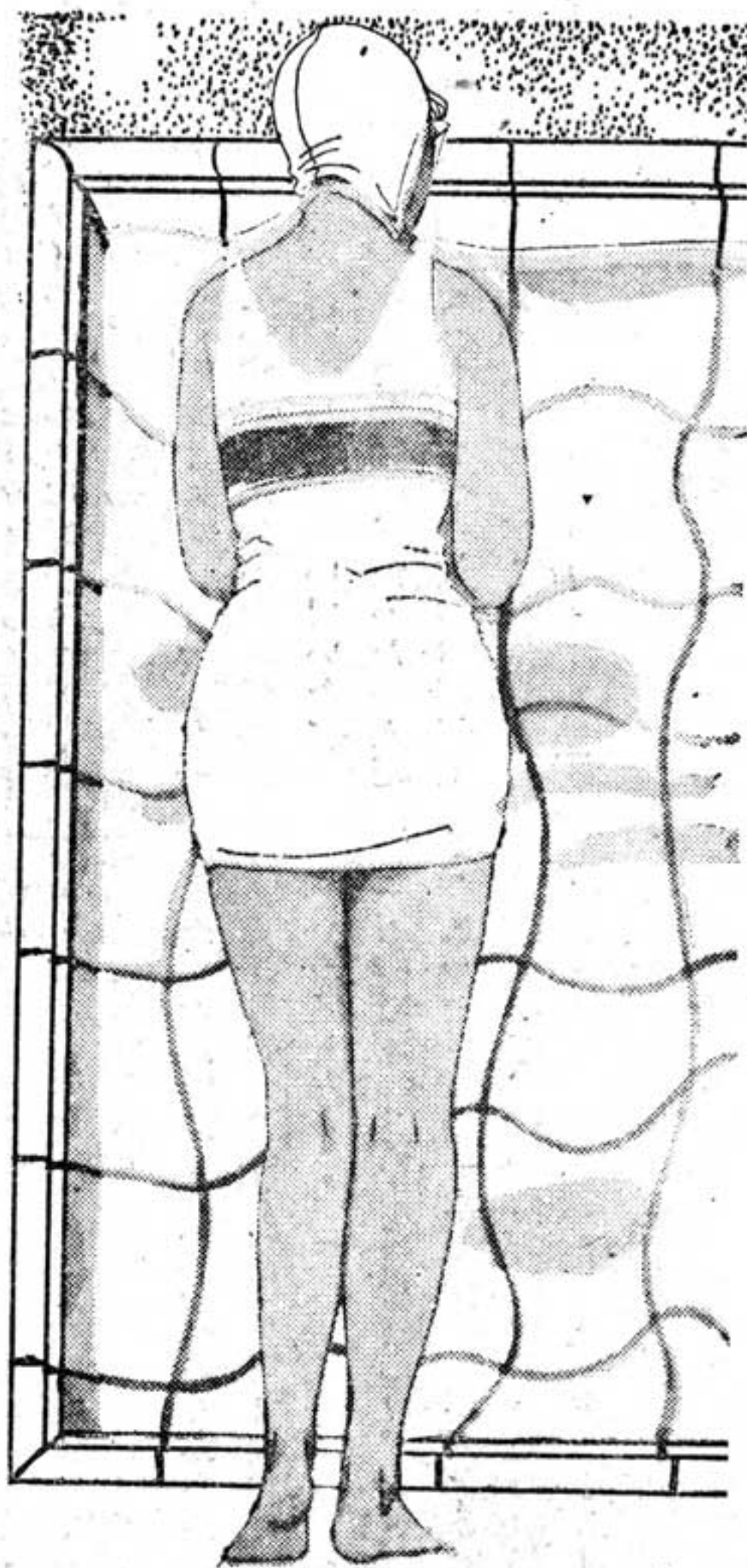
うーとするとあの大型のスーツケースは一体どこへ行ってしまったのです？ 窓から投げ落したりしようものなら、二十米の舗道には往來の群衆がうようよしています。もしそんな物が落ちて来れば怪我人の一人や二人は必ず出るでしょう。怪我人は出ないにしても大騒ぎになるにきまっています。また出口から持って出ようものなら、二人の刑事はそれこそ決して見逃しっこありません。とするとあのスーツケースは、やはり彼女と共にどこかへ何らかの方法で消え去ったとしか考えられないと思うのですがね」

操慎介は、凶面を喰い入るような眼つきで見詰め、それから、いま正に昏迷の状態に落ちようとする噪鬱病患者のような表情を作つてじつと空間を睨んだまま考えに沈んだ。

警電が再び鳴った。矢野警部は躍り上がるようにして受話器に飛びついた。

「報告します」と刈谷部長の声が言った。繁華街からかけているらしく、自動車のクラクションや拡声器の音が混乱して喧しく聞えていた。

「川崎は、いまT温泉に入りました。彼女は泳ぎに来た模様です。いまプールの中にいますが、伊藤巡査に入口から見張らせていま



す。中は湯気が濃く、見失う危険がありますから、これから私が浴槽の中へ入って近くから監視を続けたいと思います！」

「よし、引続き尾行を続けていくれたまえ」

警部は、まだ数学の難問と取り組む受験生のような真似を一生懸命続けている操慎介に今の電話の内容を伝え、「このT温泉には最近二十五米の制式プールができたのです」とつけ加えた。

「料金が大众的なものと冬でも泳げるという魅力からなかなかはやるそうです」

「僕も知っている」と操は顔を上げ、にっと白い歯を見せて「シーズン・オフに女性の均

斉美を楽しむのに、そうザラにはない場所だからね。この春まで、僕はちよいちよい出かけたんだ」と言ってから、ふと真顔にかえり「だが待てよ？ あそこはプールだけでなく家族風呂だとかそのほか個人的に借り切る事のできる小部屋がふんだんにあるんだぞ。おい矢野君、そいつは少し危いことはないか？」

「危いって、何がです？」

「あそこにはデパート以上に内緒の部屋が多いという事だよ。デパートのトイレでさえ秘書女に手品使いみたいに消えられた矢先なんだ。その親方だったら、あの浴場ビルを利用すれば純真な君の部下達をまくぐらいは何で

もないはずだぞ。おい、君はこうして安閑と情報を待っている場合じゃない。大急ぎで現場へ駆けつけるべきだ」

あわてた矢野警部がそそくさと机の上を片づけ始めた途端、警電がけたたましくまた鳴った。弾かれたように立って受話器を耳にした警部は、たちまちさっと顔色を変えて叫んだ。

「なんだと！ よし、すぐ行く。建物の中からは絶対に一人の人間も出すな！」

叩きつけるように電話を切り、操に向きなおった彼は、やがて呻くように言った。

「やられた！……川崎房枝は浴槽の湯の中に沈んだきりで、いつまでたっても浮いて来ないのだそうです！」

(三)

「みたまえ、入口はもう固めてあるんだ」

ワーゲンのハンドルをきりながら、なにか出たとこ勝負とでもいうような楽天的な表情を浮べて操が言った。警部の方は、重なる失敗にほとほと苦りきっている顔つきだった。

一時都の風紀取締委員会でも問題になったことのある巨大な水着美人の看板がかかっているT温泉浴場の正面出入口を、三人の制服警

官がしつかりと固め、そのぐるりを野次馬が取り囲んでいたが、車の中に警部の姿を認めると道を開いてくれた。車から降り立った矢野警部に手をあげて敬礼するのを受けた彼は「裏口の方は？」と早速尋ねた。

「裏口と、二つの非常口はそれぞれ二人ずつ配置してあります」

警部はその答に満足して操をふりかえり、「では奴はまだ必ず中にいるわけだ」と言った。

大浴槽の男子用の入口に、私服の伊藤刑事が突っ立っていたが、警部の姿を見ると少しまぶしように視線をそらせた。湯気に煙る内部には三十人ほどの水着姿の男女が、二組にわかれて、タイル張りの上に素足でうすら寒そうに佇んでいた。

微かに硫黄華の匂うプールの中にはもう一人の人間も残っていない、なめらかな波が天井の照明燈を無数に散らしてゆらいでいた。

向う側の女子用入口の脇に、たった一人だけ浅黒い、頑丈そうなパンツ一枚の男が仁王立ちになって頑張っていたが、その呆然とした表情には、信じられないといったようすがありありと現れていた。それが刈谷部長だった。いつもならば彼は、理路整然と順序正し

く、事実をありのままに報告して来るはずなのだが、今日だけは少しばかりようすが違っていた。

いま自分達が犯した、まったく失敗とは思えない奇妙な大失敗を一体どういうふうに説明したらいいのかわけがわからないといった面持ちで、浴槽に姿を現した警部に対して敬礼する事をすら忘れていたようであった。

「刈谷部長！ これは一体どういうわけなんだ？」

警部はできるだけ落ちついた口調で言ったが、それに対する彼の答えは、まるでたった今昏睡状態から覚醒したばかりのてんかん病みのようなしどろもどろの言い方であった。

「そ、それがですな……」と彼はどもった。

「最初から言いますと、あの撫子利殖の事務所を出た川崎房枝は、しばらくぶらぶらと歩いてから、タクシーを拾ってまっすぐにここへやって来たのです」

「巧妙だな」と操は口を挟んだ。「車に乗らなかったら電話一本で呼ぶ事ができる。少し歩いてみて、尾行の有無を確かめたのだ」

「今から思えばそうに違いありません。——とにかくわれわれもすぐ、別の車で尾行しました。彼女は料金を払って中へ入って行きま

す。われわれもむろんそのあとに続きました。するとやつは左手にあるバーラーへ入り、コーヒーを飲みました。その時伊藤君は彼女の真後に一間ほどの間隔をとって席を取り、私はカウンターのすぐ近くに頑張りました。そこまでは結果的にもよかったと思っております、というのは、彼女は手にした黒い小さなスーツケースを席に置いたまま一回だけ電話をかけに立ったからです。電話器は私のすぐそばの、カウンターの上にありました。だから彼女の言葉は完全に聞き取る事ができたのです。だが、それにもかかわらず話の内容は少しもわかりませんでした。彼女はダイヤルを廻して相手が出ると、

「どうだったの？……ああそう。よかったわね……大丈夫よ。じゃまたあとで電話するわ。しばらくそこにいてちょうだい」とだけ言ってきつちまったからです。——やがて彼女は御輿を上げると、ぶらぶらプールの方へ行くので、これは困ったぞと思っていると案のじよう婦人用更衣室の中へはいと入っちゃいました。どうもその中までは、いくらわれわれでも私服のままでそう無闇に踏み込めないし、職務尋問をするにしてもその理由がないので、仕方なく伊藤君に男子用の方から

入って貰い、私はそのまま見張っていますとやがて彼女が出て来て、中で泳ぎ始めた。湯気が立ちこめているので顔までははっきりとしないが、今しがた入って来た黒っぽい旧式の水着に黄色の海水浴帽の女がどうもそうらしい。背丈が五尺四寸ぐらいあって痩せがただからおおむね間違いないというのです。そこで私は伊藤君にその場について貰い、一応電話で中間報告をすませてから、その女をはっきりと確認するために泳ぎの客をよそおって浴槽の中へ下りました。——そいつはまぎれもない川崎房枝でした。平泳ぎがなかなか達者で、素晴らしい肢体を伸して、悠々と泳いでいました。そのうちに彼女は、三四人の娘達と親しくなりました。あの女は誰とでもすぐに親しくなれる性質らしく、まるで小娘みたいです。湯のかけあいなどしてはしゃいでいたのですが、そのうちにあの女が、みんな潜りっこをしようと言いだしました。これがそもそものはじまりだったのです」

「ええ、解説はせんでもいい。先だ」と警部がいら立って促した。

「はっ。……で、つまり、私はその声はつきりと聴き取れるほど近くにいたというわけですが、私が相変らず遊泳をよそおってそれとなく監視を続けていますと、彼女達はやがてジャンケンを始め、結局一番勝った編のビキニ水着——その一番右端に立っている娘が審判になって、一、二、三で川崎とほかの三人の娘が同時に湯の中へ潜りました。水の中ならばともかく、こんな硫黄臭い、しかも摂氏四十度もある湯の中では、男だってそう永くは潜っておられません。たちまち一人、二人と浮き上って来てカン高い声で笑いこけていたのですが、そのうちに笑い声がはたとまりました。その瞬間、私の背すじをただならぬ予感がズンと走りまわりました。潜った四人の女のうち三人まではもうとうの昔に浮き上って来ているのに、二分近くたって一人だけまだ浮いて来ない者がいるのです。二分近くですよ！それが川崎房枝でした。普通の人間の息がそれほど長く続くとはとても考えられない事です。伊藤刑事はと見ると、川崎の姿を求めてプール全体をキョロキョロ見廻しています。私は、これはいけないと思いました。そこで大声で伊藤刑事に、出口から一人も出してはいかと命令しておいて、裸のままに電話室に飛び込んで報告をし、最寄りの交番に戸口を固めるよう頼んでおいて、再びここへ引っ返したのです。彼女が潜ってから、ま

だ一人もこの浴室を出た者はおられません。川崎はまだ浮いて来ないのです。ひよっとしたら中で溺死しているか、あるいは浴槽のどこかに抜け穴があるかもしれません！」

「ううむ」と警部は口の中で唸った。浴槽の湯はもうほとんど静まって、ゆるやかな波が天井の蛍光灯の数を三倍にも五倍にも増して揺れているだけであつた。立ちこめていた湯気も今は湯の表面だけを静かに這っていた。

「ねえきみ、せめて皆さんに服装だけでも整えてもらつてはどうかね。濡れた水着を着せたままでおくと、風邪をひかせることになるが」

やがて操慎介は、見かねて、まだぼう然と考え込んでいる矢野警部に医師らしい警告を与えた。

「——まさか、まだ中にいるなんて事はないでしょうなあ。いや、もちろんなんらかの手段を用いてですよ」

操は笑い出して、

「もし十五分間以上も生きたままで湯の中に潜り続けている事のできる海亀のような人間にお眼にかかれたら、僕は即座に医者辞めるね」

あちこちから失笑が起つた。警部は、浴客

達に向つていまいましてどなった。

「みんな、湯の中であたままでくたさい、一斉に——おい伊藤君、婦人警官連中に言つて、ここの浴室の出入口を固めてもらうんだ。君らが狐につままれたのでない事が確かなら、建物全体をそういつまでも包囲しておく必要はない」

男女の浴客達はおとなしく湯の中から首だけをのぞかせて沈んでいたが、そのうちに一番女子側に近い所にいた一人の男が、「おや何が沈んでいるんだ？」と小声で言いながら足でプールの底をまさぐっていたが、やがて何やら小さな布切れをつまみ上げた途端、「やつ！こりゃ一体何だ！」と頓狂な声をはりあげた。一同の視線は一樣にそこへ集つた。それは大きな白い絹ハンカチであつたが、それには大きな文字がマジック・インキで黒々と書いてあつたのだ。

「臨兵倒無開陣列在前——房枝」

それを手に取つた警部は、はてなと首を傾げた。何の意味かさっぱりわけがわからなかつたのだ。ただ房枝と署名がある以上川崎が残した物である事に間違いはなかつた。

「何だろうこれは？」

と彼は不思議そうに低くつぶやいた。

「——ははあ。敵もさる者、なかなか味な趣向を考えついたものだ」

横あいからそれをのぞき込んだ操慎介が感心したように頭をふつて言つた。

「アジな趣向ですと？」

「そうだ。……僕の記憶に間違いがなければ忍術だよ、これは」と彼は言つた。

「忍術?!」

「そうさ。臨兵闘者皆陣列在前——昔の忍術使いのいういわゆる九字を切るというその九字だ。何かのくだらない本で読んだ事がある。こいつはさしずめ水遁の極意というわけだ。やられたぜ」操はほんと一つ警部の肩を叩いた。

「ちえつ、そんなばかな！」

警部はやや憤然としたおももちで、

「さあ皆さん、服装をととのえてください！」とどなった。そして、

「刈谷君、君達は川崎が絶対に浮いて来なかつたというが、万が一という事もある。周囲の窓に出入りした形跡がないか一応あらためるのだ！」

客達は、不平そうなつぶやきをもらしながら、それでもおとなしくめいめいの衣類を身につけた。

臨兵闘者皆陣列在前



心花

女の更

衣室に、主

のない衣類が一

人分だけぼつんと残

っていた。化粧道具のほ

かにはろくすっぽ物の入って

いない小さなスニーカーから、

下着まで、そっくりそのままであった。

それが、今警部達の血眼になって探し求めている利殖組合の理事長のついでさっきまで身につけていた物であった。

「湯を全部落して浴槽のタイルを調べよう！ どこかに、隠れた横穴があるのかも知れぬ」

と警部がやっきとなって叫んだ。すると、

「やめたまえ！ そんな物はありません」

とやにはに操がきっぱりと言いきった。

「問題は下水孔だけだ。この浴槽の下水孔はどのぐらいの大きさですか！」

部長刑事は即座に答えた。

「さっき潜って調べたら、大きさはちょうど

赤ん坊の頭がやっと通れるくらいで、鉄蓋に

ゴムパッキングがついています。上げ蓋式で

すが、小さな赤ん坊がせいぜいで、大人が抜

け出すことは絶対に不可能です。——それか

ら、次席さん、周囲の窓は全部螺旋錠が締り

つ放しで、ここ四五日は開かれた形跡が全然

認められません」

「さあ矢野君」と操慎介はさとするような調子

で矢野警部の肩を叩いて言った。

「ここにいる人達にそういつまでもつき合ってもらうわけにもゆくまいから、もういい加減に解放してあげてはどうかね」

「ちょっと待ってくださいよ。じゃあ川崎房枝は、一体どこへどうなってしまったのです？」

彼の声には強い不満の色があった。

「水遁の極意によって水中に消滅してしまったのだらう。生死のほどわからない。あるいは今頃巨額の持参金を持って龍宮城で蟄居りでも見物しているのかもしれない。とにかく今のところ、スコアは相手の方が一点リードしている事だけは間違いない」と至極のんびりと答えた。が、ふと真顔になり、「だが君達が今日中にしておかねばならない大切な仕事の一つだけある。それは組合事務所で川崎とあの秘書女の指紋をとっておく事だ。遅くとも月曜の午前中には大きなとりつけ騒ぎが起って、数百人の群衆のために現場が滅茶滅茶に荒されてしまうことだろうからね。——さあ、僕はこれから手術を一件すまさなくてはならないから、これで失礼しよう」

言うだけ言ってさっさと立ち去って行く慎介の後姿を見送った矢野警部は、思わず舌打ちをもらした。

「チエツ、節め。少し冗談が過ぎるぞ！」

だがその警部とて、今はもうつくすべき手段がなかったのだ。彼ははなはだ不満ながらとうとう川崎房枝と遊んでいたという四人の娘達の住所姓名だけを書き取り、川崎の衣類は浴場主に保管を託して引きあげる事にした。むろんあとで何者かが取りに来たら、すぐに通報させるつもりであった。

矢野警部達がまるで負け犬のように尻尾を股の間に挟んで浴場の外に出ると、さっき彼が乗って来た操産婦人科のフォルクス・ワーゲンがもうとっくに帰ってしまった後だった。

そこでまた舌打ちのやりなおしをして流しのタクシーを呼ぼうとすると、外に突っ立っていた制服巡査が気を利かせてすぐに呼んでくれた。そしてその巡査は、警部を車の中に送り込むさい彼の手の中に、何やら小さな紙片をそっとすべりこませたのだ。意味ありげなそのようすに、走り出してからしばらくたったところで掌を開いてみると、手帳の破れはしに見覚えのある下手くそな万年筆の走り書きで、『武装して署に待機しろ——操』と書いてあった。

(四)

私服や制服の警官達が音もなく暗闇の中から現れて来て、まるでやもりのようにそのMIホテルの出入口をすっかり固めてしまうとやがて矢野警部を先頭にした四人の武装警官が玄関から侵入して行くのを、道路の向い側の暗がりに停めて明りを消したワーゲンの中から、操慎介はじっと見詰めていた。ものの五分とたたないうちに拳銃の音が二、三発闇をつんざいて聞えたと思うと、間もなく手錠をはめられた二人の男女が引き立てられて警部等と共に玄関口に現れた。それを見て、操は、合図の警笛を二、三度短く鳴らした。すると矢野警部は、道路の向う側から一分一厘のスピードで駆け寄って来た。

「いや驚きましたな、先生」と彼はせいぜい息をきらしながら言った。「始めは部屋を間違えたのかと思いました、押し問答の最中に例の秘書めが寝室からひよいと顔をのぞかせたので飛びかかってとらえたのです。やっぱり拳銃を撃って来ましたよ。だが用心してこっちも廊下から狙いをつけさせておいたのでたちまち奴の手首をぶち抜いて叩き落してやりました。しかしあいつが男だったとは！」

「まあ乗りたまえ。話は車の中の方がいい。ほかの連中はジープで来るだろうから——」

と操は警部を助手台に乗せ、ギアを入れて走り出しながらきげんよく言った。

「川崎房枝がひょっとしたら男ではないか？という疑念は、今朝君の所へ行った直後から持っていたのだ。むろん潜在的にだが。というのは、実は僕は警察の帰りに車を廻して撫子利殖の事務所をのぞいてみたのだ。なるほど組合の前は未亡人やサラリーマンの細君やらで道路が埋まってしまうほどの繁盛ぶりだったのだが、その雑沓の間からちらりと見た事務所の中の光景に、ふと何か異常なものを感じたのだ。これは僕が医者だからなのかもしれない。が、とにかくよく注意して観察すると、あの事務所の中にかかっている幾つかの絵は、色彩感覚の点から言って、配列がまるででたらめなのだ。いいかね、普通の人間ならばどんなに絵心のない人でも一応光線の具合を考えて、素人なりにあるていど秩序ある配列をとるものなのだ。それがでたらめであるという事は一体何を意味するか、それは色盲だからなのだ。色盲というものは普通女にはほとんど現れない。遺伝因子が劣性なんだね。だから、女ばかりのはずのあの事務

所に色盲を疑う徴候を発見したとすれば、それはすなわち男の存在を疑うことができるというわけだ。僕は、だから最初からこの事件の蔭には必ず男がいると思っていた。蔭で糸を操って二人の女を踊らせていると考えたのだ——

ところが、今度は川崎房枝が二人の刑事の眼の前で湯の中に潜ったまま消えてしまうという事件がもちあがった。そこであれこれと考えめぐらすうちに、はっと思い当たったのだ。われわれ医者仲間には「患者の口にする病名にとらわれるな」という鉄則がある。君達もしきりにあの女という言葉を使っていたが、女とはどうやって確認したのだ？　そこで僕は、もしや川崎は女ではなく、秘書というのは川崎房枝と称する男の情婦だと仮定してみた。そう考えてみると、水中で消え失せる事も決して不可能ではなくなってくるのだ。潜ったなりで水着、帽子、かつらを手早くむしり取り、胸や尻に当てていたパットと一と固めにして下水孔の鉄蓋を上げておし込む。下水孔は赤ん坊の頭が入るほどの大きさだからゆうにそれぐらいの物は入るだろう。それから顔、首すじなどをこまかしていたドローンを手拭いでこすり落し、禪一丁の男の姿で悠

悠と浮かび上るといふ段取りだ。見張っている刑事達は女の姿ばかり探しているものだから、さんばら髪その男など眼もくれなかったのだろう。とらえた男の指紋と事務所で採取した川崎房枝の指紋とを照合してみれば、それはすぐに決定されることだろうがね」

矢野警部は助手台の暗がりの中で眼をぱちぱちとしばたいた。

「へえ！　じゃ先生は、あそこで浴槽の中にいる犯人を知っていたんですか」

「とらえようとすればわけのない事だったさ。図々しくも水遁の極意などを見せびらかしたあの男だったんだからね。あれは奴も図に乗って少し芝居が過ぎた。あのお蔭で僕は犯人を突きとめられたんだ。君はあの男の耳の裏側に気がつかなかったのか！　誰でも洗い忘れやすい場所なのだが、奴の耳の裏側に、落し損ったドローンを少しこびりついて残っていたのだ」

「そ、それなのになぜすぐに逮捕させようとしなかったのです！」警部はせき込んで尋ねた。

「君達はそれですむかもしれない。だがもし奴がどうしても口を割らなかった場合、あの大きなスーツケースいっぱい千円札は情婦

と一緒に失われてしまいうだらうからね。――

それでは無知なおかみさん連中が少し可哀そうだ。それで僕はあの場合、見事に欺かれたふりをして何喰わぬ顔で外へ出て、車を近くの駐車場に隠しておいて奴の尾行をするのが一番賢明な方法だと考えたのだよ」

警部は思わず讃嘆の溜息をもらした。

「話は前後しますが、ではあ的情婦めはどうやってデパートの化粧室から脱け出したのでしょうかね」

操慎介は、予期していたらしく事もなげに答えた。

「水中消滅の種明しと同じ事で、わかってみればほんの他愛のない事さ。刑事達は彼女の変装が見破れなかっただけのことだよ。ただし彼女は、あの時外側からやってきた」

「やつ、ではあの――」

「そのとおりさ。――そうとしか考えられないじゃないか。あの女は、トイレの個室の中で薄汚い中年の掃除婦に化けたのだ。デパートの窓の外側には必ず危害防止用の鉄棒が取りつけてある。彼女は、掃除をするような何気ない態度で窓から出て、鉄棒伝いに隣の男子用洗面所へ入った。掃除婦姿ならば男子用の洗面所の中にも決して不自然ではない

ね。そこで彼女は風呂敷か何かに包んだスー

ツケースや衣類を男子用洗面所の物置に隠し、かわりに大バケツや箒などを持って外へ出て、いかにもこれから掃除を始めますといったかっこうで婦人用の方へ入って行こうとしたのだ。刑事達は彼女の姿を見て、中の人間を全部狩り出してくれと頼み込んだ。彼女は内心さぞ愉快だった事だろう。それから彼女は刑事二人を外に待たせておき、中のお客達に了解を求めながら、さっき自分が出た窓の錠をさりげなくかけてしまった。刑事は二人共紳士だったから、女性が全部身仕度をととのえないうちに中をのぞくような無しつけない事はしなかったに違いない。――だが、ねえ君。あのベテランの刑事諸君は、掃除道具のある物置が婦人用の方にもあるのに、その掃除婦がなぜ道具を持って行かねばならなかったかという事に、どうして疑問を抱かなかったのだろうかねえ」

それからしばらくの間、二人は黙ってそれぞれ別の事を考えていた。

操慎介はハンドルを握りながら、明日の日曜日がもし好天気だったら、どここの山へ岩魚を釣りに登ろうかと思案していた。魚釣こそは本日休診を完全に履行しうる最適の方法な

のだから。

また警部は、操医師に対するすでに幾回目かの表彰状の文面を一生懸命に考えた。

でもその文句を考えることは、結局月曜日の仕事に残しておく事にした。へたに名文が浮んだら、明日は出勤して詳しい功績調査を作らなくてはなるまい。

何しろ明日は週にたった一回の日曜日なのだから。――

●営業部よりお知らせ

○ハガキで目録送れとお申し込みくださいます。すぐお送りします。

○裏窓臨時増刊第三集・第四集△ムード▽の合本ができました。定価二〇〇円・送料十六円

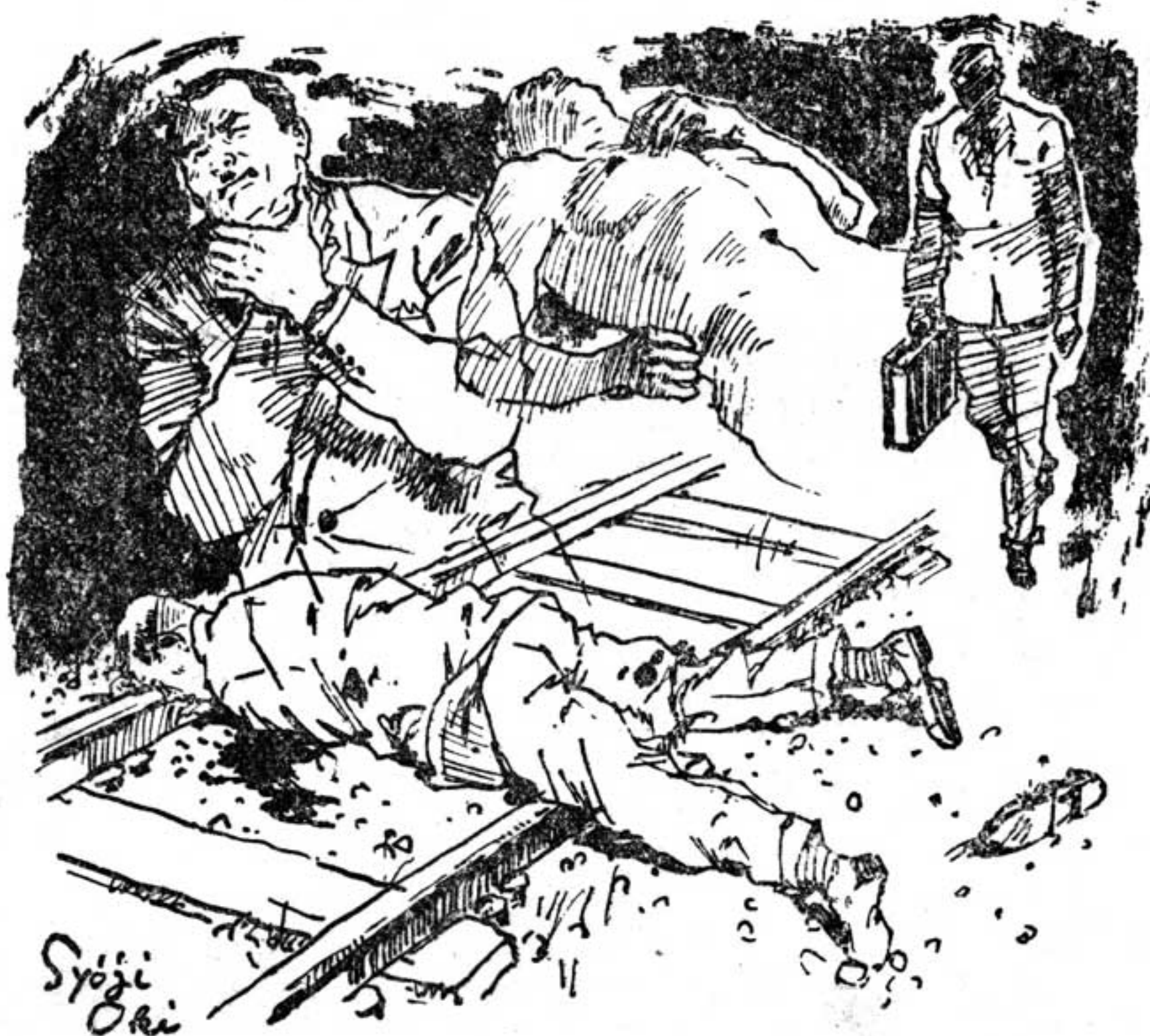
○第一集△よるもひるも▽と第二集△よるとひる▽の合本もございます。定価二〇〇円・送料十六円

○バックナンバーを三冊以上御注文の際は、送料は本社で負担いたします。

○三カ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方も、送料は当社で負担いたします。

○バックナンバーは一七一頁を御参照ください。

男歩く死を



★故意か？ 偶然か？ 彼の品物を★
★買った客が次々と死んで行くのだ★

尾島 新

沖 涉 二・画

謎の老人

（何もかもおしまいだ。ああ、明日の朝には冷い屍体となって、僕はこのベンチに横たわっているだろう。新聞の片隅に三行記事が出る。それで僕の一生はこの世から消える。あと数時間、いや数分の後には、この月に冴える日比谷公園の風景ともおさらばだ）

（マリちゃんよ、さようなら。君とは一度も愛の言葉を交したことはなかった。でも、僕の気持は充分知っていてくれたと思う。僕も君を心から愛していた。ふたりは強い強い目に見えぬ鎖で結びつけられていたのだ）

（化粧品セールスの職を追われたのも、その為だが、僕は後悔しない。女社長品川岐江の誘惑をしりぞけた胸の中には、マリちゃん、君の笑顔が金色の光を放って宿っていたんだ）
（生きて行くことに妥協すれば、僕は岐江の愛をも受入れ、優遇を受けて、君とも愛し合

い、おもしろおかしく人生を送ることができたかも知れない。嫌だ！人を偽ることはすなわち自分を汚すものなのだ。男にだって男の貞操と言うものがある。僕は生と袂別しても、心の清さを失いたくはなかった。そんな潔癖さが手伝ったのか、そうなってからは、なおさらに君を完全に自分のものにするのが憚られた。お互いに美しい夢を壊すような最後は望ましくない。僕の感傷癖だろうか！

左のポケットからウイスキーの小瓶、右手で睡眠剤の箱をさぐり、膝の上に両者を揃えて置こうとする。体全体がぐらぐら揺れて、どうしても置けないので、仕方なくウイスキーをベンチの板に置き、震える手で箱を開けにかかった。

ライラックの匂いがした。どこから匂ってくるか、風に乗って、優しく甘い香りだ。少し季節遅れのようなだが、三郎にはそれを詮索する気持はない。自分の最後を、その匂いが飾ってくれるだろう。それで満足なのだ。

睡眠剤がウイスキーの底に、キラキラ舞い下りながら沈んだ。二、三回軽く振って、飲む前に目の高さに持上げ、街澄にすかし、自分の行く先を教えてくれる液体の色を、確かめるように眺めた。

(よし！)心がぎまった。人間、幸福なうちに死ぬのが華だ。自分自身を、あまりみじめに汚さない前に、せめて誰か悲しんでくれる者のいるうちに死ぬ。生活に疲れ、痩せさらぼえても、まだ生に執着を持ち、人の爪はじきにあって虫けら同然の体をすばめ、ついには紙屑のように路傍に醜い姿を横たえる。やりきれない。三郎も、友人の同情を仰げば、まだ幾日かはどうやら生きて行ける。だが最後にはどうせ同じこと、ああいつも死んだか、吐き棄てるようにあざ笑う人をふやすだけのものだ。恋さえ、そのじぶんにはどう変わるかもわからない。衣食たりての恋だ。理想的にはどうあれ、生活の破綻が恋を破壊した例は、いやというほど見聞している。(マリちゃんよ。君だって人間である以上、いや、僕だってそうだ。耐えられないことだ。夢はどこまでも美しく、永遠でありたい。だから僕はこれで、僕の生活を中断させ、永遠化するのだ)そう心で呟くと、小瓶の中の琥珀色の液体が、それに答えるように揺れた。

「若いお方、そこで何をしたいなさる？」

不意にうしろから声がかかった。あわてて三郎は小瓶を口に近づけた。

「無謀なことはやめなさい。人生はもっと楽

しく、永く生きるものだよ」

細いステッキが、瓶をはね飛ばした。むっとした三郎の前に現われたのは、英国風の渋い身なりの老人だった。帽子の下から銀髪がやや長めにのぞいている。

「あんたはまだ若い。青春は得がたい人生の宝だ。もっと大切に、そして愉快に生きる歓びを謳歌すべきだよ」

人品のいい老人は、三郎の横に腰をおろすと、もの静かな調子でそう言った。

「君が死を選んだ原因は、おおかた想像がつく。もしでることなら、わしがその原因を取除いてやりたい。どうだね。老え直してみたら？」

自殺でも情死の場合でも、いったん氣勢を削がれるともう死ねないのが定石だ。老人は巧みな話術で三郎の心をしずめ、それまでのいきさつを物語らせ、軽いあいづちで聞き入った。

「ふん、ふん……。それでは、前の職業と同じぐらいに収入のある職がみつければ、あえて死に急ぎしくもないわけだね」

「ええ、そうなんです」

「よろしい。わしの仕事を手伝って貰おう。少し条件があるがね。それさえ守れば、それ

ぐらゐの収入はわしが保証しよう」

老人は同じ口調で、こともなげに言うと、詳しいことは明日、銀座裏のサン喫茶店で話すと言ひすて、静かに立去った。

呆然と見送る三郎は、夢見心地だった。

（何だか嘘のようだ。全然未知の老人が、どうして簡単に僕を雇ってくれるというのだらうか？ 第一、僕があゝの老人の素性を知らないと同じく、老人も僕の身元を知ってはいないのだ。とすると……何かまともな商売ではない、秘密を要する仕事……麻薬？ いや、それにしても老人の人品がそう悪いとも見えなかったし、どうも見当がつかない）

万事は明日、サンという喫茶店へ行ってみてからだ。公園を出ると、急に街の灯が、温みと潤いを増したような感じだった。

無性にマリの顔を見たくなつて来た。

異 変

三郎に与えられたのは、装身具のセールスマンだった。給料は五万円前渡し、仕事はのんきだった。前職よりは数等恵まれている。

一つ条件があった。老人は一枚の紙片を渡し、なるべく早いうちに、この紙に書いてある四名の者に、何でもいいから売るよう、そ

して売った場合は、その者のイニシアルと商品番号を書いた紙片を、このサン喫茶の植木鉢の下へ置くよう、特に指示した。そして他人に口外せぬことをつけ加えて言ったが、その時三郎は別に深い疑問も抱かなかった。

セールスは順調だった。ケースが空になると、西銀座の洋裁店二階にある、サン喫茶へ連絡する。マダムのリリーが、老人との仲介者だった。

「余り精出して売らなくても、いいそうよ」

老人の伝言だった。

「へえ？ そんなセールスってあるかな？」

そうだ。まだ老人の指示した者には、ひとりも売っていない。これが目的なんだな。

気がついた三郎は、翌日から方針を変え、電話帳で四名の住所を調べ、積極的な売込み戦術を、この者たちに向けて開始した。老人の目的は何であるか知らない。そうすることが、窮地から救いあげてくれた恩義に対し、自分のとるべき道だと考えたからだ。

国会議員のHと、熱海に旅館を持っている新宿の女親分S、大興証券の社長Gに、それぞれ品物売りつけたのは、僅か半月足らずの間だった。

(36 H) (64 S) (17 G)

サンの植木鉢に、その都度番号と頭文字を書いた紙片を挟み込む。一枚ごとに、肩の荷が下りた気持で、三郎の心は明るかった。

あとひとり、東都銀行の頭取、Kに何か売りつければ、それで役目は済む。

そうだったら、三郎はもう老人にとって無用の存在になつてしまふのではないか？

いいさ。青春は得がたい人生の宝だ。この言葉を教えて貰っただけでも、感謝しなければならぬ。今度失業したら、石に噛りついても生き抜く勇氣ができてゐる。

昼近くになつて起きた三郎は、下宿を出るとマリの食堂へ寄つてみた。今月は給料のほかに、三万円の特別手当が入った。さらに靴を買つてやる約束をしてあつたのだ。

「おいおいマリちゃん。彼氏がお迎えだよ」食堂のおやじに冷やかされ、テレテ梯子段を駆け上るマリの足音も、無邪気な可愛さがある。着がえでもしてくるつもりなのだろう。

「今日は何にしますか、安田さん」

「ビフテキがいいな」

テレビが国会の臨時予算審議を写し出していた。野球やプロレスならこの食堂も、そば一杯の客ながら満員になる。今日の客は三郎ひとりだ。

正面の各大臣に、代議士席から質問が発せられる。議長がうまく両者をさばいている。

カメラアングルが変った。ひとりの代議士が、社会保障費について、厚生大臣に食い下っている。大寫しで代議士の顔が出た。

どこかで見た顔？ そうだ。シガレットケースを売ったHの顔だ。

「マリちゃん御覧よ。——あのね、僕のお客なんだ。こないだ、金張りのシガレットケースを売ったんだ」

二階から下りて来たマリを呼んで、画面のHを指差した。こんな立派なお客様を持っているところを見せたかったのだ。まりは素直に感心して画面に見入る。

すると、しばらくして。

「あらー。あのね、どうしたのかしら？」

画面のH代議士が、突然、苦悶の表情に変わった。発言も途切れた。のどをかきむしる姿がそのまま写っている。三郎もアッけに取られた形で目を見張った。周囲の議員が集まって来てHを支え、画面外へ運び去った。

国会議員H氏議会で発言中急死、心臓弁膜症の発作から——。夕刊には五段抜きで記事が出た。

どうも、何か釈然としない、しこりが胸につかえた感じだった。

翌々日、三郎は東都銀行のK頭取に、提時計の鎖を売り、老人の指令した紙片の全部の仕事完了した。

帰りの電車の中で扱げた新聞には、大興証券のG社長が、東海道線の列車で下阪中、保士ヶ谷と戸塚の中間にあるトンネルで、轢死体となって発見された記事が載っていた。

これは果して偶然だろうか？ H代議士の死とG社長の死は、一見何の連絡もない。死因も、片方は病名までわかっているし、一方は列車上の過失。三十一年の六月には、箏曲界の巨星宮城道雄が、愛知県の刈谷で同様な事故で世を去っている。「転落死」は鉄道省の統計でも、かなり高率な発生件数を持つ事故なのだ。偶然三郎の関係した客が、相次いで不慮の死を遂げたに過ぎない。そう思い込もうとしても、自分自身の胸の中に、疑惑の影が濃く覆い被さって来るのを、押えられなかった。

偶然？ 必然？

一度は何気ない事故でも、二度と同様なことが起れば、単に偶然とばかり言い切れない

疑惑が生じる。それが、三度も重なれば、偶然とはや偶然ではない。

その三度が、三郎の目の前で起った。マリが休みなので、連れ立って井之頭へ遊びに出た。周囲には同じようなアベックが幾組もいて、それぞれの青春を謳歌していた。どの組も楽しそうで、同族の気やすさからすぐ他の組と合流し、大勢で合唱したり、ボートを漕いだりした。愉快な一日だった。

帰りにはまだ陽が高かったが、新宿で夕食をとることにした。保険の勧誘員と、店員の二組が一緒だった。店員が新宿の地理に詳しいので、すしの旨い家へ案内すると言う。

三越の前で、店員は向うから来た中年のマダムに挨拶をした。

「あら、丸新さん。今日はお楽しみね」

「いやあ！」店員は頭をかいてテレた。

「みんないいわね、若くって……。おや、あんなこないだのセールスさん！」

「あ、マダム。先日はありがとうございます」

女親分のSだった。

「あんたの腕輪、掘り出し物だって、家のもんにも褒められたわ。ほら。ほら。今日もつけているのよ。……で、今日は？ そう。そ

んならあたしもひまだから、お相伴するわ」

三丁目角。一同は横断歩道に立止まった。

信号は橙から赤に変わる。

「チェッ」勧誘員が舌打ちした。

その時、Sが、何かに誘われるように、フ

ラフラと車道へ泳ぎ出た。

「マダム、危ないッ！」

店員と三郎と一緒に叫ぶ。目の前をトラ

ックが通過した。

まるで嘘のように、女親分Sの生命

は、それで終焉を告げた。もう、す

しどころではなかった。マリ初め

ほかの娘ふたりも、蒼ざめた顔

で、卒倒しそうに見えた。

現場に人が蝟集する。警官

が駆けつけ、参考人として

六人とも呼ばれて、遅く

まで惨事前後の模様を聞

かれた。

「あゝあ、楽しい一

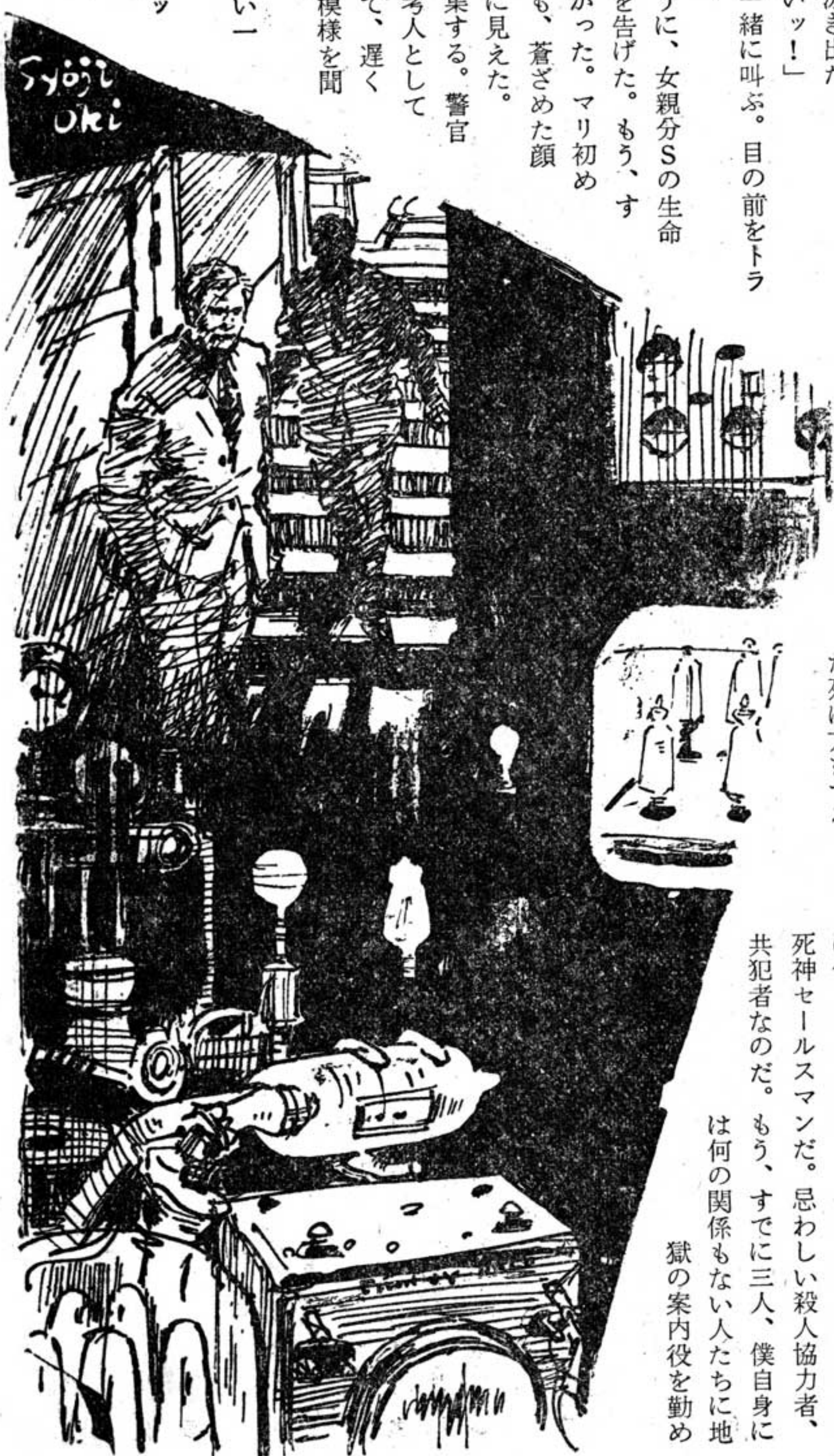
日が、散々ね」

すっかりグロッ

キーになったマ

リが、同情を

求めるように



言ったが、三郎は黙ったままだった。都電を

下りて下宿の露路までの道でも、三郎の頭の

中は、偶然と必然の二つが渦を巻いていた。

(僕が品物を売った客が、しかも老人に指示

された者だけ、相次いで奇怪

な死に方をする。

しかも、目の前で見たSの死は、どう見て

も、自己の不注意による過失死だ。偶然の出

来事なのだ。それにもかかわらず、僕の頭の

中には、不可解な謎が渦巻いている。もし、

老人が何らかの作意をもって、僕をその目的

に使ったとしたら——僕は、死を売り歩く男、

死神セールスマンだ。忌わしい殺人協力者、

共犯者なのだ。もう、すでに三人、僕自身に

は何の関係もない人たちに地

獄の案内役を勤め

てしまった。いや、それは思い過ごしかも知れない。偶然！偶然だ。本当か？わからない。どうしたらいいんだ！」

「さよなら——」

マリが小さい声で言つて、傍を離れて行つたのに、今夜の三郎はうなずきもしなかった。

諸橋老人

大森山王町——

通称八景坂を右に、この辺独得の石畳を登ると、小説家K氏邸の前で道は右曲し、また左折して馬込銀座へ通ずる。その屋敷町の一軒、元のR伯爵の別邸だった、かなり広い庭園をもった閑静な建物が、リリーを尾行して突き止めた諸橋老人の住居だった。

ベルを鳴らすと、しばらくして玄関の鍵をはずして現われたのは、老人自身だ。三郎を見る目が、驚愕と狼狽に細かく揺れた。

「君！ 君は、どうしてここを？」

「お話しがあるんです。どうか、聞いて下さい」

三郎は緊張に頬をこわばらせ、叫ぶように言つた。

「どんな話か、まあ、上りなさい」

応接間で三郎は、前の三人の怪死と自分と

の関連、ひいては老人への疑惑を、腹藏なく述べ、真相を確かめに来たことを話した。

「ですから、もし、かりに、これまでのことが僕の考え通りだったら——せめてあとひとり、残ったひとりだけでも、どうか手をくださないよう、お願いしたいのです」

老人は、苦渋に満ちた顔を上げた。

「いかにも僕は彼らに復讐をした。——君の言う最後のひとり、東都銀行のKも、たったいま、ある手段で復讐をしてやったばかりのところだよ」

「えッ、ではやっぱり……」

「僕は直接的に彼らを殺すまでのことは意図しておらなかった——が、結果としては殺人犯といわれても、仕方がない。最後のKもどいう偶然の合致で、生か死のいずれの道を取るか、僕にもわからない。神の摂理がそれを裁いてくれるだろう。僕がどうしてこうした復讐を企てるに至ったか、こうなったらすべてを話そう——。僕はな、四十年前からマニラで貿易商を営んでいた。何不足のない暮らし、妻と、ひとりの娘とで、幸福な生活を送っていたのだ。その頃は日本も、第一次大戦の余勢で、日の出の勢いでな、外地へ出稼ぎの商人もどんどんふえる。数多い商人の中

には、ずいぶんとタチの悪い者も混つておつて……」

その中にGとKがいたのだ。Gは諸橋夫人に邪恋を抱き、さまざまに言い寄る。Kは同業者の諸橋を何とか蹴落そうとしていた。当時、内地で貿易庁輸出局の長官秘書だったHを抱き込み、諸橋商店行の積荷を密輸嫌疑で押収、調査を永引かせて店を不振に導いたのだ。弱味につけ込み、Gは夫人に言い寄る。ついに悪辣な手段——薬品を混入した飯物で夫人の自由を奪い、野望を遂げたのだ。

「犯された妻は発狂、彼等の奸策はまだまだ執拗に続いたのだよ。——土地の者に悪宣伝をする。諸橋商店は悪魔にとり憑かれた、あの店の品を買うと、妻のように気が狂うぞと言いつらした。まだそんな愚かな迷信が、充分に通用していた時代だ。ついに店は破産してしまった。不幸は、いや奸策は、あくまで僕たちを滅ぼすために襲い続けた。マニラの店を畳んで、シンガポールの知人を頼って行く船中で僕たち一家は、得体の知れない熱病に悩まされ、狂った妻と、娘は死に、僕だけ残った」

老人の目の中に、窓外の樹々の青さが、潤みを帯びて映っている。失意のどん底に最愛

の妻と娘を失った往時を、まざまざと想起しているかのような悲愁の色だ。

「病菌の感染経路は、あとになってわかったことだが、出航前の昼食からだった。港湾前の日本人食堂の女中が、彼らに買収されていたのだ。——それがSだったのだ。重なる魔手はついに儂を、復讐の鬼たらしめた。もちろん、当時は明確な手段は考えられなかったが——儂は強く生き抜いて、必ず彼等に怨みを報いてやる、と自分の心に、妻と娘に誓った。友人の援助で立ち直った後も、いつかいつかと機会を待つ内にまた戦争が起り、彼等は内地へ帰り、時期を逸してしまった。儂は終戦と共に英軍に収容され、それから米軍の収容所へ移された。そこで手伝わされた無電機械の修理が、六十を越した儂の、忘れかけていた復讐心を呼び醒ますいづくちになったのだった」

目に見えぬ電波が、人間の手によって人間以上の働きをする。ある場合には、人間が電波に使われる場合すら起る。老人の興味がそれに引きつけられ、復讐と結びついた時にはもう一とかどの電波技術者としての知識が自然に備わっていた。

「終戦後二年目に、儂は身よりのない日本へ

帰って来た。向うへ残して来た財産を、ひそかに取寄せるのに、それから五年かかり、ようやく復讐の準備は整った。調べてみると、四人は生き残って、世に時めく地位を得ている。儂は人知れず彼らに積年の怨みを返す手段を、電波に頼ったのだよ」

老人は静かに立上った。背後の大きな本棚に手をかけると、どんな仕掛があるのか、ぎつしり洋書の詰まっている本棚が、音もなく軽々と横に滑る。そのあとにぽっかりと口を開いた穴から、階段の下り口が見えた。

「儂がひそかにこしらえた機械が、地下室にある。君にそれを見せてやろう」

三郎は老人と共に、地下室へ下りる。

復讐は終わった

赤、青、黄、色とりどりのランプが点滅している。中央に、黒光りのする巨大な機械が据えられ、おびただしい計器や目盛板のついているキャビネットが幾つも周囲にあった。

「ごらん！これが儂の苦心になる研究の結晶——復讐の機械だ。もともとこれは、別に殺人道具ではないし、儂もあえて彼等を葬るためにこれを作り、使用したのではない。この機械の本来の用途は、超短波信号によるコ

ントローラーなのだ。特定の波長を受信する装置、すなわちアンテナに遠隔操作を行い、自動的に相手の機械を調節する——航空機や船舶などに取りつけければ、無人運転も可能な電波発振装置なのだ。この機械から出る特殊な電波の作用が、ふとした折に、動物の頭脳を軽い錯乱状態に導くことを発見した儂は、彼らに対する復讐心を、いやが上にも燃え上らせ、寝食を忘れて研究の末、ごく短期間ではあるけれども、人間の頭脳を麻痺させ、狂人に近い状態になし得ることに成功したのだ」

老人の永い年月をかけた復讐心と、この精巧複雑な超短波発振装置。——三郎にはそのどちらもが、まるで夢を見るような、錯覚を起させた。

言葉もなく見守る三郎に、沈鬱な顔で、老人はなおも語り続ける。

「この機械を完成した時、儂はいまこそ四十年前に受けた怨み、妻と娘を失い、自らの生命も危険に陥った時の苦悩を、彼らに思い知らせてやることのできる嬉しさに、小躍りして喜んだよ。——しかし一方、技術者としての良心が、罪悪を犯す儂を心の内で引止めた。あえてそれを退けたのは、妻と娘の、四十年

前の幻影が、強く甦えつて来たからだ。ついに僕は復讐の手を進めた」

三郎に売らせた装身具には、いずれも中に特殊鉱石でできた受信装置が、目につかぬほどの小さな容量で封じ込められてあった。商品番号はそれぞれ、隠しアンテナの受信波長を示すものだったのだ。

「君が報告した番号にもとずいて、僕は彼らに最も効果のある場面で精神を乱すべく、リリーに彼らの行動調査を命じ、その時間に電波を出した。まず、代議士のHに、国会内で一時的の狂人になって貰い、地位と名誉を冷笑と失意にすり替えようと、スイッチを入れた。Hに心臓疾患があるとは、予期していなかった。死亡記事を新聞で見た時、僕も愕然としたが、それでも（これも運命のいたずらだ）と、軽く考えることができた。だが続いてGが列車から転落死を遂げ、Sが自動車に轢かれる。偶然の重なり合いによって、手を下さずに彼らを死に導いたことは、僕の心を神が助けてくれたのかと喜ぶ反面に、罪の恐ろしさが、じわじわと胸の中に湧上って来るのを否むことはできなかった」

リリーの調査によれば、Gはその時間には東京会館で、友人のパーティに出席の予定だ

った。が、それは公式の名目で、実は大阪の商用を兼ね、愛人と一日早く東京を立ったことが、あとで判明したのだという。マダムSも、あそこで三郎たちに会わなければ、自分の家で電波を受けたわけだ。

「僕はSに電波をかける時から、もう自分でも思わしい死神の手伝いを勤める悪業は、止してしまおうかと、幾度も思い返した。結局復讐心と良心が妥協して、安全度の高い場所に相手のいる時、機械を作動させることになったが、それすら偶然の支配は彼女を死なせる結果を示した。僕は、ほとほと自分自身の意志通りに動かぬ世の中の運命と、悪効のからみ合いに奇責を感じた。それでもなお、妻と娘の怨みは残っている。今夜、すべてを精算する意味で、Kに電波を送り、僕も身の処置を考えていたのだよ」

言い知れぬ寂寥感を宿した諸橋老人は、この上もなく孤独に見えた。

「僕のたった一つの願いと言うのは、君の考えと同じ——Kが生命に別状なくいてくれることだ。復讐は次の復讐の種を生む。因縁因果のどうどうめぐりは、僕の執念だけでたくさんだ。僕の生きる目的も、これで終わったのだ。もう君の仕事も終わったのだよ。これまで

の協力の礼として、当分心配のないだけの金を差上げたい。リリーにも同様、小切手をすでに手渡した。残った財産は全部、慈善事業に寄付するよう、手続きをとる予定になっている。最後にこの室の機械だが——目的も果たした以上は、僕には不要なものになった。こんなものを残して置いて、あとで悪用する者が出て来るかも知れないと考え、取りこわそうとも思ったのだが、善用すれば大いに世の中の役に立つ機械を、むぎむぎ取りこわすに忍びなくなったのだよ。——どうだね、君、君の人柄を見込んでの僕の頼みだ。しかるべき学者か団体が、後日機械を引取りに来るまで、この家と共に管理してはくれまいか？」

「そして、あなたはどうかおつもり？」

「僕は、最後の犠牲者、Kの結果を見送った後に、司直の手に身柄をまかせようと思っているのだ。安心してくれ給え」

せめて最後のひとりだけでも、思わしい死の手を逃れて生残ることを念じて、諸橋老人は復讐を終えた安らぎからか、人間苦の彼岸に辿り着いた穏和な表情で、三郎に機械の管理を依頼するのだった。

三郎は考える余地もなく快諾した。それが老人の罪障消滅にもなり、ひいては

知らずに罪の手伝いをした。自分の行為を偽うことにもなるからだ。

「これが地下室のドアの鍵だ。まず今夜は、これを預けて置こう。明日、またここへ出向いてくれ給え。後始末を手伝って貰うことになるかも知れないから——」

非情の女

運命というものは、何と皮肉にでき上っているのだろう。あれほど生命に別条ないことを願っていた東都銀行のK頭取は、自宅で入浴中に精神に異常を呈し、浴槽の中へ頭を突込んで溺死してしまったのだ。

朝のニュースで三郎はそれを聞いた。

ふと、悪い予感がした。——諸橋老人もどんなに驚き、動転しているだろう。もしかすると……。不吉な想像がわき起る。

マリの店で朝食もそこそこに、三郎の心は大森へ急いでいた。

「あら安田さん、忘れものよ」

マリが電車道まで鞆を持って来たが、すでに都電は動き出すところだった。

「あッ！ そうだッ！ マリちゃん、鞆の中の鍵、大切なものだ。なくさないよう、特に気をつけて、しまっておいてくれよッ」

窓から首を出して、そういうのが精一杯だった。

諸橋邸へ着くと

予期した通りガランとしていた。老人は

自らの罪を精算すると

置手紙を残して、死の

家出をしたのだ。放心し

たように応接間に立つ三

郎の背後には、いつの間

かりリーが来ていた。

「とうとう老人は、自殺行

を決意したのね」

彼女も、大体の事情は知って

いたらしい。

「あなたは、地下室の機械の保管

を、老人から頼まれたでしょう。

あれを、暫く妾たちの手で、動かし

てみたいと思わない？」

「それは、どういう意味？」

「妾たちが有効に使うの。妾知ってい

るわ。あれは決して殺人電波じゃあない。

人間の精神状態を、少しばかり不安定に

するだけ。四人の被害者は、それぞれ場所



が悪かったために、ほかの条件作用で死んだのだわ。被害者が安全な場所——自宅でくつろいでいる時、寝ている時なぞだったら、一時的な発作と苦しみがあるだけ、命には別条ないわ」

「それで……あの機械を、どうしようというんです？」

「つまり、これと目印した人に、あの電波をかけるの。少し弱くね。そして、あとでその発作を癒してやるの。もちろん、お金が目的でなかったら、新興宗教を始めてもいいわ。どう？　もうかること確実だわ」

金銭に執着を持った女の顔が、にやりと歪んだ。何という非情な心の女！　いままでも充分世話になった老人の行方を突止めようとせず、恐るべき計画を胸に抱く、こういう女が本当の魔女だ！

強い復讐心に燃えた老人さえ、電波のスイッチを入れる時、良心の苛責に胸を痛めたというのに、この女は、理由もなく人を害し、利益と犠牲を貪ろうとしている。特定の少数限定殺人と不特定の多数無限定加害、どちらの罪がどれだけ重いか軽いか？

「あなたはこれまで通り、装身具のセールスを続ける。あとは妾がうまく取入ってお金を

せしめるの。どう？　一緒に新事業を始めましょうよ」

「いやです！　お断りします。僕は老人の命令通り、あの機械を悪用させない」

「ホホホホ、純情ねえ。——でも、妾は自分の思った通りに、どんなことをしてもやり通す女よ。安田さん、よく覚えていてね」

何という強情な女だ。三郎の怒りを表わした顔の前に、平然とうそぶく。黒い眸は、微動だもしないのだ。（何くそッ！）三郎はリリーを睨み返した。

数秒……数分……

リリーの顔が、ぼうッと霞んで来た。三郎の額には、玉のような汗が吹き出した。

「ううッ、畜生ッ！」

庭の樹々が、窓枠が、壁が、ぐらりと揺れて三郎に襲いかかる。渾身の力を奮い、体の中心を保とうとする努力も、限界に達した。

目の中に赤い星が飛び込んで、やがて真ッ暗な意識の闇へ、三郎は体ごと落ち込んだ。

「ほっほっほっ、どうです安田さん。強情を張らず妾に協力してちょうだいよ。そうすれば縄も解いてあげますよ。もう、催眠術なんか使いませんか。ねえ、欲しいものは何でもあげる。ほら、妾の体でも、首をタテに振っ

たらずぐあげる！」

両手をうしろで縛られ、床に転がされた三郎の目の前に、ヨカーンを誘惑するサロメのような、胸をはだけたりりーの妖艶な姿態があった。（よかった。鍵はマリに預けてあった。僕が気を失っている間に、鍵を奪うつもりだったんだ。探し出せなかったので、色仕掛で抱き込む寸法だな。その手に乗るもんか）

「僕も男だ。一度いやだと言ったら、こんりんざいいやなんだッ」

「駄目だと言うの。——ふん、駄目なら駄目でも結構、たとえ強張をお張り！　妾の強張と、あんたの強情と、こうなれば根比べだ。いま、おもしろいことをしてやるから！」

ねどこから探して来たか、リリーは電灯線のコードを取上げた。

「よくって！　このコードを、足首へつなぐのよ。一方のコードは、ほら、こうして頭へ接触させる。百ボルトの電流が、どんな作用を起すか、あんたも知っているはずね」

「ワァッ！」

脳髓がビビビッ、としびれて熱さと痛みが急激に体中を暴れ回る。

「どう？　お望みなら、もう一度！」

縛られたまま、激烈なショックを繰返し繰返し受けた三郎は、もう自分の意識でものを考える力を失っていた。衝撃を受けて反射的に飛上り、痙攣する。玩具に等しい物体になつてしまった体を、何か別のようなものに感ずる。意識の分裂作用が始まって来たのだ。

鍵のありかは……

「安田さん、こんなかわいい恋人があつたのねえ。これじゃあ、妾みたいなお婆さん、ストリップしても、魅力ゼロな訳ねえ」

三郎はわが目を疑つた。リリーの前におとなしく腰をおろしているのは、紛れもない、マリだ！ これはどうしたことだろう。マリならここにこうして縛られている三郎を見れば、何とか声をかけるか、驚くはずだ。三郎の方は見向きもしない。——正確な視線をもたない眼をしている。——リリーの催眠術にかかっているのだ。

「どう？ 安田さん。妾はこの娘を見事に連れ出したのよ。あんたの下宿には鍵がない。としたら、この娘に聞いてみるよりほか、仕方がないわ。——その前にもう一度、相談に乗る気持はない？ この娘に鍵のありかを聞き出せば、妾ひとりで機械を動かすことにな

る。受信アンテナのセールスは、誰でも雇つてやらせるし、あんたとこの娘は、お気の毒でもここで心中して貰うわ。——それより、お互いに仲よくやりましょうよ。ね……」
（猿ぐつわをどうにかはずして、大声でマリを呼び、危険な状態から脱出したい。なんでもこんな魔性の女の言うことが、同意できるもんか！）三郎の憎悪の目は、火を吹きそうに充血していた。

「どうやら交渉決裂ね。では、マリさんに聞くことにするわ。——マリさん、マリさん、返事をして下さい。返事をして下さい」

「はい……」

「あなたは、素直なよい方ですね。妾の聞くことには、何でも正直に、答えますね」

「はい……」

「あなたは、安田さんが持ち帰った、小さい鍵を知っていますか」

「はい……知っています……」

「その鍵は、いまも、安田さんが持っているのですか」

「いいえ……持っていないせん」

リリーの質問は進行して行く。雲の中をさまようようなおぼつかなさで、弱々しいマリの声が、しかし偽りのない答えを発する。

「では、鍵は、誰が持っているのでしょうか」

「……それは……言えません……」

「はい……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

「……それは……言えません……」

猿ぐつわが酸っぱくなるほど、口中に唾が溜った。歯ぎしりもできない無念さだ。ついにマリは催眠術にかかって、自らの意志を放れ、秘密を明かしてしまった。

「そうですか、ありがとう。あなたも疲れたでしょう。疲れています。おやすみなさい。おやすみなさい……」

暗示通りに、マリはソファに横たわった。「これで目的は達したわ。安田さん、しばらくこの娘と待っているといいわ」

マリの体にも縄がかけられた。まだこんなと、深い睡りに落ちているようだ。三郎のくくりつけられている柱に、睡ったままのマリをくくりつけ、猿ぐつわまですると、リリ―は外へ出て行った。

一時間ばかりして戻ったりリリ―の手には、電灯の光を吸って、小さな銀の鍵が輝いていた。

「安田さん、ついに妾は勝ったわ。あの地下室を支配できるのは、この鍵の持主、妾よ。もうこうなれば妾の思うまま。もう古いセールスマンはお払い箱、その娘と一緒に、この世の中からも消えて貰わなければならない」勝ち誇ったりリリ―の声、悪魔の凱歌だ。

こんな悪女に、大切な機械を汚されてなる

ものか。だが、体の自由が利かない。声を出すこともできない。ああ、リリ―が応接間へ行ったらしい。本棚を動かす音がする。静かになった。地下室へ下りる足音が途中から聞こえなくなる。もう鍵を差込んで、扉を開いたろう。野望の成就に小躍りするリリ―の姿が見えるようだ。

マリが睡眠から醒めた。胸に食い入る縄に驚いても、声もあげられない。共に縛られている三郎に気がついたが、どうにもならないのだ。リリ―にだまされて連れ出され、この家の門をくぐった時から、現在の状態までの意識のブランクは、全然時間的経過をマリの記憶から奪っている。突然、縛られている自分を発見し、意外な面持だったのだろう。身悶えて逃れようとしたが、それも無駄だった。――どうしてこうなったの――三郎に目で訴える。だが、その説明は、目で答えられない。ああ、せめて猿ぐつわがはずれ、口だけでも自由になったら……。

あッ、臭い！ ガスだ。マリも気づいたらしく、恐怖の眸を三郎に向けた。リリ―は本当に、邪魔者のふたりを葬り去る計画だ。どこまで惨忍で貪婪な女なのだろう。

ガスがだんだん濃くなって来るらしい。絶

望が鼻にキューンと突上げ、鈍痛が後頭部から前額部へ拡がり、体全体が鉛のように重く気倦くなって来る。

ふたりは顔を見合せた。今度こそ、目と目だけで話し合う、共通の感情が相互に空間を交流した、愛する者だけの暗黙の諒解だ。互いに相手の顔を網膜に焼付けて、せめては命の際の幸福感に満足したかったのだ。

罪業の末路

多勢の足音が入り乱れて聞こえた。

「おっ、ガス臭いぞッ」

「男と女が縛られている。どうしたのだ」

警官がふたりの姿に気がつき、窓を破ってガスを新しい空気と入れ替えた。ガスの元栓は閉められ、縄を解かれたふたりは、すぐに応急手当を受けた。

「早く、早く地下室へ行つて下さい。大事な機械が、悪い女に悪用されようとしているのです」

学者らしい人物も混っている警官隊に、三郎が第一に発した声だった。そして、手短かにリリ―の計画を説明すると、数名の警官は応接間へ走った。

あとで聞いた話だが、諸橋老人は、自らの

次号予告

二女体流転二

紅蓮の女

志摩不二



男の体臭におぼれて行く、美しい女
あんま！何が彼女をそうさせたか？

罪の清算を、太平洋の黒潮に求め、大島航路の巡航船から海中深く姿を没したということだった。四十年もの長期間、胸に燃やし続けていた復讐の火の消えたことは、生きる張合いをも失ったことだったろう。甲板に残された遺書によって、老人の行為と残された機械の詳細が判明し、警官とR大学の教授連が出向いて来たことが、三郎とマリにとっては饒幸だった。

「地下室には内側から鍵がかかっているぞ」「開けろッ！開けろッ！」

リリーは一行に踏み込まれ、逃げ口をふさがれた自分を、地下室に封じ込めてしまったのだ。

「いやだッ！絶対に開けない。この機械は妾のものだッ！妾はこの機械を、誰の手にも渡さない。一緒に地獄へ持って行くんだ！」

叶わぬ運命と見て取ったか、彼女は火薬瓶を機械の上に置き、可燃物をうず高く寄せ集めて点火すると、自分の体でそれを覆った。

「妾はもう覚悟を決めた。おまわりさん、扉の外でぐずぐずしていると、命が危ないわ。」

妾と心中してくれる気なら嬉しいけど、ホホ……。妾は機械と心中するの。喫茶店の雇われマダムには、過ぎた相手かしら。オッホッホ……アハハ……ハハハ……」

「危いッ、みんな退避だッ」

警官たちが階段を上り切ると同時に、ドドッ、と轟音が家を揺り動かし、本棚の裏の口から黄色い煙が溢れ出した。

狭い一方口なので、すぐに飛び込めば窒息のおそれがある。防毒マスクだ、消防を呼べと時を費しているうちに、煙は黒く色を変え、もうもうとその量を増して来た。本棚でびったり入口をふさぎ、消防士の出勤するまで、酸素の供給を絶った。

一同が地下室へ入るようになったのは、それから半時間程後だった。ホースでふんだんに水を注ぎ込んだので、床にはかなりの水が溜っていた。マダム・リリーも、電波機械も、燻製の鮭のように黒々と、醜い残骸となり果てていた。

三郎とマリは小さな汁粉屋を始めた。手馴れた化粧品店をやらなかったのは、当然一緒に扱う装身具が、客に不幸を売付けするような気がしてならなかったからだ。

江戸暗黒秘録

怪異変幻抄

★御存じ皿屋敷のお菊をはじめ鬼人鬼女の怪異、

★死期を知る人々、魅入られた女達等々の幻妖談！

鈴木和夫
東 桂 史・画

海老責めの恨み

江戸初期の人、火附盗賊改め中山勘解由という武士が、天和三年に海老責めという拷問法を創案したことは前にも書いたが、このような「拷問の巨匠」として名を残すような人は、どうも終りがよくない。

以下は、ある写本から採録する挿話で、勘解由の家に起った怪奇談を伝えたものである。

天和三癸亥年六月、江戸にて火附七人を捕らへ、盗賊奉行の中山勘解由殿、さまざま辛く責られしに、其中に鶉権兵衛といふ者白状せざりければ、己れ能く聞け、髭を抜居て、物を聴く様成る奉行とは違ふぞよ、



苦しき目に逢つて死なんより早く白状せよと、ありしかば権兵衛居丈高になり、いかに勘解由殿、髭を抜くとは誰の事ぞ、推するに甲斐庄喜右衛門殿（時の南町奉行）の事なるべし、彼御方は明白にして少しも邪なる事なし、某にかく辛き目を見する事、余り情なし、此恨み骨髓に徹せり、恐くは三年の内に、其驗（そのしるし）を見せんとて嘲りし。権兵衛を四谷に晒すとて引行しに勘解由が門外を通るとき、頓て思ひ知らせんぞと、高声に呼はりしが、其声奥まできこえ、人々身をちぢめ恐れけり。其月十二日、鈴ヶ森にて炮烙の刑に行はれしに、権兵衛口より火を吹いて、勘解由々々と三度呼はりし時、頭の鉢割れしとかや。其後勘解由殿の子息四才に成りしが、乳母俄かに暇を乞ひける。何故にかくは云ふぞやと尋ねられしに定かに得云はざりければ、扱は密通の事にやあらんと、厳しくし給ひしに、今は包むべきも侍らず。若殿の、人々寝入りし頃、懷よりひそかに出で給ひ、人々に鼻をあて、窺ひ、夫より行燈によらせ、土器をかたむけ、燈油を残りなくねぶり侍り、怖き事言ふ計りなし、と申

せば、殿も不審に思ひ、或夜ためせしに、さる事なかりければ、汝偽り申すなど、責め給へば、兎に角、御免しあれ、もし殿の威勢に怖れさせ、かく有るまじきも知れずと申せば実にさる事よとて、翌夜、次の間より伺ひ給ひしに、果して違はざりしかば、頓て捕へて刺殺されしといふ。又嫡子も乱心あつて死去、勘解由殿も全身に赤筋出で腰かがまり、苦みて、やれ権兵衛が来ると一向（ひたすら）に云ひ給ひ、終られしと。勘解由殿海老縛りといふこと始め給ひ、かく珍しき病は、此の報ひにてやありなんと人々云ひあへり。

というのである。

文中「炮烙の刑」というのは、火刑の一種で、中国から伝わった酷刑である。油を塗った銅柱を炭火の上に架け渡して、後ろ手に縛ったままの罪人を渡らせる。油で足が滑り、たちまち火中に落ちてしまうのが普通だが、かりに首尾よく渡り得たとしても、助命される訳ではなく、失敗するまでは何度でも渡らせるのである。当然、見物人が居る訳で、人権も何もあつたものではないが、まあ、昔の人の神経はそういうものだったのだろう、と

でも思うほかはない。

「四才の子が行燈の油をなめる」と乳母が云つたのは、苦しまぎれの云い逃れで、勘解由先生としてはお手のものの海老縛りでも応用して責めたものだろうと思う。

このあたりは、クイズを解くぐらいの気持で読まないと、正確な文意が掴めない。つまり文中の「兎に角、御ゆるしあれ、云々」と云つた者は、第三者、多分勘解由の女房あたりだと想像すると、正解が出てくる仕掛けである。要するに乳母は密通をしていたのだ。「翌夜、次の間より伺ひ給ひしに、果して違わざりしかば、云々」とは、密通を確認した、という意味である。

不義はお家の法度、という訳で、二人を捕え、成敗してしまった。

やがて、子供は本当に乱心し、勘解由も奇病で死んだ。

現代なら「精神分裂症の血統じゃないか？」ぐらいに片づけられてしまうのだが、昔はこの程度の話でも、怪談としての資格があつた訳である。

勘解由の話は「江戸真砂六十帖」にも書かれており、化物騒ぎで近所の屋敷まで迷惑し

た、とある。

以下はその抜書である。

その頃中山勘解由殿とて、強勢の人を撰びて盗賊奉行に被_レ仰付二町男伊達をきびしく捕へて殺されける。牛五郎は殊更意趣有りて屋敷にて首を刎ねられけり。首飛んで気味よしと呼はりけるよし。勘解由殿にも大勢を殺せども、牛五郎性根の恐ろしきものと仰せけるよし。また下りの巾着切り蠅の如く有りしを、一人もなく中山殿絶し被_レ申候よし。子供までも勘解由といふもおちろしよし。男伊達も相止みて静に成る。婚礼の水あびせも同御停止に成りて町人の腰の物はたけ一尺八寸迄、紗綾縮緬着用停止、此の勘解由殿は凡三万人余殺し被_レ申しよし。病氣前は屋敷に色々の化物出で、勘解由殿狂気して死去のよし。屋敷は小川町の由、近所屋敷迄迷惑により、本所へ屋敷替り有り。今は津軽屋敷の隣家なり。

番町皿屋敷

家宝の皿をこわしたため、井戸に縛られて吊し斬りのお手討ちになり、夜な夜な井戸の底から「一まあい、二まあい……」と皿の勘

定をする、と云えば、芝居や講談でお馴染みのミス幽霊、皿屋敷の腰元お菊である。

この皿屋敷なる伝説は、都合三つある。

江戸麹町と播州姫路と摂州尼ヶ崎で、各々ヒロインの名はお菊、殺された場所が井戸で職業は腰元、という共通点を持っている。

一番古いのが播州姫路のお菊さんで、これは永正元年、というから足利時代である。

明応二年、姫路の城主小寺伊勢守という人が、当時この地方に流行していた疫病にかかった。必死の看病をしたのが腰元のお菊で、これが実に山本富士子だしの美女であったというからショックではないか。もっとも写真があつた訳ではないから、果してはだしであるか地下足袋程度であるか、その辺の比較は不可能だが、ともかく伝説の女性というのも、醜女だという但し書がない限りは、たいがい美女であることになっている。

感動した伊勢守は全快後にお菊を妻とした。

翌年に男子出生して左京進と名づけたが、永正元年二月に伊勢守は没した。左京進は十才の幼君で、ここにお家騒動が起きた。

悪玉は青山鉄山という。未亡人お菊は青山

一派の陰謀を知つたために、井戸へ斬り落された。お菊は幽霊となつて井戸から現われ、鉄山を大いに悩ました。やがて花房長門介という善玉が鉄山一味を亡ぼし、お菊神社が建立された——という。お皿とは関係がない話である。

摂州尼ヶ崎のお菊殺しは元禄年間の事件でヒロインのお菊はエリザベス・テイラーはだしの美女。(そんな事はどうでもよいが、この話にも青山という名が間接的に出てくる点に御注目あれ) 以下は「石楠堂隨筆」よりの抜書きである。

元禄の頃、摂州尼ヶ崎城之青山氏老臣木田玄蕃と云ふ者の婢にて菊と云ふ女あり。或時玄蕃に食を進ぜけるに、其の飯中に針有り。玄蕃大いに怒り、予を害せん為なりとて、やがて縛りて其の家の井戸に投じ殺しぬ。菊が母聞き付けて、いそぎ来りて、わびせんとせしも、はや井に投じ殺しぬときき大いに恨みかこち悲みのあまり、又其井戸に投じ死したり。爾来木田が家様々の怪事あり、祟りをなしければ、自ら青山氏へも聞えて、其の無道の振舞言語道断なりとにくみ給ひける、其の後玄蕃が家断えたり

とぞ。

という話で、これも皿とは縁がない。縛られたお菊が投げ込まれてドンブリ、哀しんだ母親が同じ井戸へドンブリだから親子ドンブリだろう、などというのは拙い洒落だが、ともかくお皿は登場しないのである。

なお、引用した文章で一つ気がつく事がある。木田玄蕃がお菊をすぐには殺さなかったという事である。うっかり読むと、短気な主人がすぐに殺したように思えるが、母親が詫びに駈けつけた、という箇所はその印象に反するのである。

つまり、玄蕃という男は、年甲斐もなくお菊に懸想していたか何かで、女の給仕の手落を奇貨として、意に従わせようとネチネチ責めつけたような匂いがするが、これは想像過剰だろうか？

噂が母親の耳に届くまでの時間、それがどのくらいの長さかはわからぬが、とにかくその間は殺されずに責苦を受けていた訳である。やがて引っ込みがつかなくなった玄蕃は縛った女を井戸へ投げ込んだ。その後で母親が駈け込んで来た——という順序だろう。

大体が、手討ちにするなら刀で斬るのがマ

トモというもので、この男のやった事は振られ男の意趣晴らしみたいな感じである。

木田家断絶後、その屋敷跡には源正院という寺ができたが、この寺には、いくら菊を植えても絶対に花が咲かない、という植物学上の理論に反する怪現象が起ったそうだ。

また、寛政七年の夏には、問題の井戸の中から、裸の女が後ろ手に縛られたような形の得体の知れない虫が、ザワザワモソモソと這い出してくる、という動物学上の前例にない奇怪事が起ったそうである。

寛政七年というと、お菊の死から百年以上



も後の時代である。恨みは深し摂州井屋敷！という訳だが、それにしても百余年とはいふん長い恨みである。もともと、戦後の東京に八百屋お七の幽霊が出たの出ないのと、新聞社やNHKが駈け廻った事さえあるのだから、百年ぐらひは幽霊界の常識かも知れない。

江戸の方のお菊は、麴町番町の青山播摩守主膳の屋敷へ行儀見習奉公に行っていた娘だこの方は、一枚足りないのが恨めしいという、例の正統派の皿屋敷である。

享保十七年版の「江戸砂子」という書物にその念この井戸に残りて、夜ごとに彼女の声して、一つより九つまで、十をいわで泣きさけぶ。声のみありてかたちなしとなり、よって皿屋敷と呼びつたえたとあり、牛込御門内傍に社あり、傍に皿明神といふとぞ、彼女の霊を祀りたりといふ。それよりして、その事なしと也。この社は稲荷の社也。

と書かれている。巷説ほど劇的でなく、派手でもないが、皿屋敷事件というものが実際にあったことは確かのようなうだ。

このお菊さんの十三代目の子孫が、平塚市

本宿に住んでいるという。真壁氏という先祖ある。代々平塚宿の名主をつとめた名門だそうである。真壁家の過去帳には、番町の青山播摩守長治という武家の屋敷へ奉公に行っていたお菊が、元文五年二月十六日、二十四才を一期に井戸で惨殺された、と記されてあるという。

元文五年というと、前記の「江戸砂子」が出版された八年後である。つまり、皿明神が先にできて、事件が後から起った事になる。どうも妙な事になるではないか。

類似の事件が混合し、巷説がつけ加えられ劇作家が脚色し、何だかんだと種々錯綜した結果が、今日の皿屋敷怪談になったと見るべきで、どこまでが本場で、どこからが嘘か、見当もつかないことになるのだが、とにかくにも、お菊さんという美女が封建制度の犠牲として惨死したのである事は確かだ。

鬼女・人を啖う

次に、享保初年、三河国にあった鬼女の話を紹介する。鬼女と云っても妖怪変化ではなく、二十五才の人妻が夫に家出をされて、超ヒステリイとなり荒れ狂ったというお話で

ある。

以下は「諸国里人談」より。

享保のはじめ、三河国保飯郡舞木村新七といふものの女房（いわといふ、年二十五）京都より具して来りけるが、常に心尖にいて、唯狂人のごとくなるに、夫これを倦みて出奔しけり。其跡をしたひ、遠州新井まで追来りけれども、御関所を通る事あたはず。むなしく帰りしが、有し所に住で真々嗔恚の焰さかんにして、乱心のごとくなり折節隣家に死せるものあり。田舎の習にて、あたり近き我林の中にして火葬しける。彼女、此所に行きて、火焼たる死人を引出し、腹を裂き臓腑をつかみ出し、飯子やうの器に入て、素麺などを喰ごとくに喰ひ居る所へ、施主のもの、火のありさまを見に来り、此体を見て大きに驚き、村中棒藤木にてこれを追ふ。女大に怒、かほど味ひよきもの、汝等もくらふべしと躍り狂ひて、蝶鳥のごとく翺翔て行方なくなりぬ。その夜近き所の山寺に入て、例のごとく持たる器より肉を出して喰ふ。僧侶驚き騒ぎ、早鐘にて里へしらせければ、村民翺あつまる。彼女、此体を見て、また爰もさはがしとて

彼の山の道もなき所を、陸路を行ごとくかけ登て失せぬ。生ながら鬼女となりたる事目代へ訴ければ、件を事書にして村々へ触れけるなり。

木彬光氏もそういう意見を持っており、氏の知人が突然発狂して、大学の校内を実母の髪を掴んで引きずり廻したのを目撃した時が、最も怖かったと語っている。

という出来事である。オドロオドロとした化物囃よりも、生きている人間の怖い奴の方がずっとコワイのである。探偵小説作家の高

このおいわさんを見た村人たちは、さぞや戦慄したことだろうと思う。おいわはお岩と書くのかも知れないが、亭

主の新七という男は、名前の感じでは二枚目のようである。女房の方も京都で見染められたのだから不美人ではないように思える。はるばる三河まで連れて来て女房としたのに、あにはからんや途方もないヒステリイと判明して、新七氏は江戸方面へ逃走した。逃げなきやバラバラにされる可能性が濃厚だったのだろう。

新七というのはただの農夫とも思えない。すくなくとも行商人、あるいはそれ以上の自由の利く職業を持っていた男だろう。彼が正式に関所をパスしたか、必死の逃亡者として忍び通でもしたかは不明だが、女は通る事ができなかった。すごすごと帰った女は、ヒスが爆発して狂乱状態に入った訳である。

関所はなかなか厳しかったもので、珍談、奇話、残酷譚なども数多い。ことに女には厳しい制度になっていた。おいわさんが関所破りを敢行しなかったのは、自制能力がまだ残っていたからだろう。

ちなみに、関所破りの刑罰について「御定書百箇条」には、こうある。

関所破り刑罰定

一、関所難、通影山越等致し候者



於其所 磔

但、男に被誘引致山越候女は 奴

一、致案内者 右同断

一、忍び通候者 重追放

但、女は 奴

一、御留番所を女を連れ忍び通候者

中追放

但、女は領主へ可相渡

江戸青春怪談

この話は、いわゆる怪談ではないのだが、獅子文六流に云うと「青春怪談」となるのでM過剰やシスタアボーイやゲイバアが流行の折から、特に御紹介してみる。

「兎園小説余録」からの抜書きで、この書物は、滝沢馬琴の編纂により、馬琴他九名が執筆したものである。兎園小説と云っても、フィクションの、いわゆる小説ではなく、当時の珍談奇談を集めた耽奇的な随筆本である。

麴町十三丁目なる蕎麦屋の下男に、吉五郎といふものあり。此もの実は女子なり。人久しくこれを知らず。年二十七八許（ばかり）、月代を剃り、常に腹掛をかたくかけて乳を顕さず。背中に大きなほり物あり。

俗に金太郎小僧といふもののかたちを刺り

たり。この余（ほか）、手足の甲までも、ほ

り物をせぬところなし。そのほり物にとこ
ろどころ朱をさしたれば、青紅まじはりて
すさまじ。丸顔ふとり肉にて大がら也。そ

になりたるかその故詳ならず。
性の倒錯か？ 亭主殺しとしての追手を逃
れるための変装か？ それがわからぬという
訳だが、変装にしては手が混みすぎているよ
うだ。

のはたらき、男に異なることなし。はじめ
は四谷新宿なる引手茶屋にあり。そののち
件の蕎麦屋に来てつとめたりとぞ。誰いふ
となく、渠（かれ）は偽男子也といふ風聞
ありければや、四谷大宗寺横町なる博奕う
ち、これと通じて男子をうませけり。是に
より里の評判甚しかりしかば、蕎麦屋の主
人、吉五郎には身のいとまとらせ、出生の
男子は主人引とりて養育す。かくて吉五郎
は木挽町のほとりに赴きてありし程、今茲
天保三年壬辰秋九月、町奉行所へ召捕られ
て入牢したり。これが吟味の為、奉行所へ
招呼するると、牢屋敷より引出さるる所は
小伝馬町辺群集して、観るもの堵（かきね）

何しろ、夫殺しはともかくとして、新宿で
妓夫太郎をやったり、全身に刺青をしたり、
捕縛されたのも男なみの荒っぽい犯罪をやっ
たのではないかと思うのだが、とにかく男装
女性としては立派級の域に達していると云っ
てよい。そのままなら完ペキだったろうが、
博奕打ちによるめいたのがミスで、子を産ん
だ事から女であることがバレた。もっとも女
体であったことがバレなければ、評判にはな
らなかつたろう。また、もし妊娠をしなかつ
たならば、彼女は伝馬町の男牢に投げ込まれ
た訳だが、この仮定は少々サスペンスをはら
んでいると思うのでアル。

の如くなりしとぞ。或はいふ、此ものは他
郷にて良人を殺害して、逃て江戸に来つ。
よりて偽男子になりぬ。世をしのぶ為也な
ど聞えしかども、虚実定かならず。四谷の
里人に、此事をたづねしに、何の故に男子

曲亭馬琴は同じ「兎園小説余録」の中で、
京都祇園町の宇吉という、遊女上りのブラザ
アガールの事を書いている。宇吉嬢は祇園の
女の間夫におさまること二、三にとどまらな
かったという。

右両婦衾中の私語など、密かに聞候へば、

真に男女の様に候よし、をかし
くもいぶかしき事に御座候。右
宇宙の広き、様々の奇物もある
ものに御座候（下略）
と書いている。

こういう男性的女性や女性的男
性の話を昔の本から拾うならば、
一冊の著書ができるぐらいのもの
で、現代、新風俗のトップを切っ
たような顔つきでカッ歩、もしく
はクネクネ歩きをしている諸君の
顔色をなからしめるぐらいは容易
なのである。

要するに、歴史はある部分にお
いては、実際にくり返すものなの
である。

いずれにしても、一種の怪談に
は相違ない。

上方の怪談

「篠舎漫筆」という随筆書がある。
著者は西田浩蔵直養と云い、豊前
小倉の藩士で京阪の留守居役を勤
め、本居宣長の門下生でもあった。



勤皇家で学者にして歌人、七十三
才の時に自己の信念を貫くため、
絶食自殺をした。そんな人物だか
ら、ことさらに耽奇的な事柄を書
こうとした訳ではないが、中には
相当珍奇な話もおさめられてい
る。たとえば、「念仏講」という
見出しで、こんな事が書いてあ
る。

いま江戸にては、まはりをとる
といひ、浪花にては念仏講とい
ひて、一人の女を数人してもの
することをいへり。このわざふ
るくよりもありて、水鏡に、恵
美押勝のむすめを、鑒真和尚の
此人千人のをとこにあひたま
ふ。相おはすとのたまはせしを
ちちの大臣打とられし日、みか
たの軍千人、ことごとくにこの
ひとをおかしてき云々。いかに
あさましくおはしけむ。またう
らやましくもおもはるる。
という具合である。「あさまし
くおはしけむ」はいいとしても、

「また羨やましくも思はるる」というのが珍である。

「そういう本なら是非俺も読んでみたい！」などと早合点をしてはいけないのである。

「オヤオヤ？」と思うような項はホンの一パ―セントぐらいで、大部分は、歴史、言語、詩歌地誌、考古、故実、等に関する学術的随筆である。

その中から、怪談的なものを二、三拾ってみよう。「牛、女を見とめてあゆまず」と題する章に、こうある。

東の洞院とかやに、牛車やり出すところ、むかふより三十ばかりなる女の、きぬきよそひたるがゆきあひたり。牛、この女をきとみてうごかず。女もすぐみてあゆめず。いろは草の葉のやう也。牛飼かねて心得てかやうの時は、女のたふさぎはづして、牛の眼の上にかくれば、牛うごくといふことなれば、その女にこひ、禪をはづしてかけければ、あゆみ出したり。女もあしかなひてあゆめり。さて家に帰れば、やがてたえいりたりとぞ。むかし物語のやうなれど、これ現在此頃の事なり。

つまり、牛が女に恋をした訳である。女の

容色については「きぬき装いたる」とあって、まあ「様子のいい女」ぐらいの意味だろう。年増ながらも美人の部類と考えてよい。牛に見つめられて立ちすくんだ時に、湯もじをはずして牛の眼の前に掲げたのは、別に闘牛士の真似をした訳ではあるまいが、ともかく牛は歩き出した。家へ辿りついた女は、やがて絶命した――。

「一種のショック死でありましょう」などという解釈は、加えない方が面白いかも知れない。「烈女」という章には、不埒な男が、女を誘惑しようと志したが、その女の荷物が生首だったので、ついにノイローゼになったという話が書かれている。

浪花に巴女といふ妓、つみありてころされぬ。そのつれあひの男も、のがれがたくて刑せられぬるを、その男のめひなる女、官にこひてをちの首をもらひ、いたく孝養せむとせちに（切に）ねがひければゆるされつ。さて刑におこなはれて後、首もからだも芦島といふ所にすてらるる事なりけるをひるは人もまばゆしとて、暮過る頃より、そのくびあるところにゆき、ひろひ得てふろしきにつつみ、ひとり野みちを提て、お

のがすむ堺のかたへ帰りけるが、道にて若き男にあひぬ。男のいふやう、日もくれ道もとほし。独り女のたどりゆかむより、おのが家にこよひはやどりたまへと、下にはなまごころもありつらむ。せちにすすむれば、いなびがたくて、道のほとりなれば、やがてその家にいりぬ。かのをとこは妻もなく、やめめずみにて、さうさうしげなるを、みめよき女のわかやかなるが、ひとりとまることなれば、こころも空なるべし。しばしありて女はかはやにゆきぬ。そのまにかのつつみの入口にあれば、あしまとひなりとて、かたへに物せむとて、ひきあげみればいとおもし。何やらむといぶかしくほどきて見ればなまくびなり。あきれにあきて声たてたり。女は人もこそとて、とみにその首をつつみてはしりいりぬ。隣里のものども来てみれば、目はしら目にて、いろは青葉のごとし。物いひもあやしげにてすすろなり。ゆえをとへば、しかじかといふ。みなみないたはりけるを、日をへても心もこころならず。此頃は親類の山崎にありけるもとに、病をやしなひに来り居るとぞ。その女は、こころもまめにたましひ

もつよく、いといとめでつべきを、この男は女をあざむき、ただおかきむとするたはけこころあるのみか、くびみてかくこころをうしなひぬるなん、よにもいひがひなきわざなり。

「女を誘惑せんと志す時は注意して相手を選べ」という教訓でアル。女を欺き、ただ犯さむとするたわけ心のある紳士は、現代でもよく気をつけねばならのである。

この話の男は、奇怪事の真相を説明されても、「なあんだ、そうだったのか」という事にはならず、ノイローゼにかかりっぱなしだったのである。全く最低ではないか。

暴虐な男

鬼女の話の前に書いたが、女性ばかりを書くのは不公平だと思うので、今度は鬼男の話を紹介してみる。馬鹿者のくせに大金持だったという、妙な男のお話である、

阿波介は山城国伏見のものなり。その身愚鈍なるのみにあらず、また暴悪をおこなふこと、きはまりなし。ひとの左といふときかならず右へちがへ、右といふ時かならず左へちがふ。常に謀計をかまへて人をたぶ

らかし、又人の目をぬすめり。大仏の俊乗房の上人阿弥陀仏号の札をくばりけるとき欲ばりて七枚までたまはりしかども、みな笹の葉にみなしたる程の罪ふかき者也。しかれども福者にて万宝を所持し、妻をば七人ならべて具したり。毎日かれらが衣裳をはぎて、七本の柱に縛りつけて、片端より杖にてさいなみ通る。一人づつ啼くなるは僻事（ひがごと）ぞ、一同に声をあはせてなけとて、七人を打擲するあひだ、杖にたへずして同音にわわとなく時、えつぽにいて、これぞよきさかなとて、酒のみ物くふ僻者なりき。（鎮西禅師絵詞伝）

というのである。僻者とは、天邪鬼、イヤな奴、言語道断な野郎、というほどの意味である。ヒガ者ではあるが、愚鈍というほど馬鹿でもないようだ。常に謀り事をめぐらして人をたぶらかし、というからまんざらの低能でもなさそうである。

大金持の阿波介氏は、人生に倦怠を感じて阿波介無頼控を展開したのかも知れない。

七人の妻を毎日裸に剝いで七本の柱に縛りつけ、一斉に泣く事を強要し、泣き声のオーケストラを聞きながら悦に入つて、酒を飲み

物を喰つた、などは浮世ばなれのした悪徳である。現代の恐妻家などは、西田直養ばりに「浅間しくおはしけむ。またうらやましくもおもはるる」などとも云い兼ねない。

次に、一国一城の主が死者の恨みによって狂死した話を書いてみる。

稲葉淡路守紀通という、大阪の役には軍功のあつた大名だが、世の中が平和になると、粗暴さが目立ち、やる事がオダヤカでない人物だった。

丹州福智山の領主で、隣国丹後の領主は京極高広という大名だった。

淡路守はある時、丹後の鯨を所望して京極家に頼んだ。京極家では百匹の鯨を、すぐ食べられるように庖丁を入れて、送つてよこした。それを見て、突然怒つたのは、淡路守である。「おのれ！ 魚の頭を切つてよこしたな。予を呪詛した仕打ちであろう！」と云い以来、京極家の武士が自分の領内に一步でも足を踏み込むと、捕えてたちまち首を刎ねてしまった。さしずめ、淡路守ラインといううなもので、荒っぽいこと夥しいものがあつた。

京極高広もついにたまりかね、出兵の用意

をした。ところが、それから間もなく、淡路守は乱心の果てに奇怪な自書をとげた。

武士の逸話を書いた書物「明良洪範」は、淡路守乱心の顛末を、次のように書いてゐる。

稲葉淡路守紀通は丹州福智山の城主也。生得無道残忍にして悪行超過しける。或時代官を勤める家士、私曲有とて禁獄せしに、私曲の虚実も正さず其妻子を始め忌掛る者を皆召捕り、庭に穴を掘らせ首計出して其穴へ埋めさせ、其首へ小桶を冠せ置、毎日小桶を取て見て廻り、夫を慰みにせられ、追々死するに代官を勤し者のみ未だ死せず。淡路守其時云けるは、妻子初め類族共は皆死したるに、汝一人未だ死なざれば、能々因業深き奴哉と嘲哂せしかば、其者夫迄は目を閉て居たりしが、其詞を聞と両眼を開きて今迄は何卒して存命し、此恨みを報ぜんと思ひ居たりしが、妻子類族迄死したる上は最早是迄也。且仮令我に罪有とも刑罰の仕方は法も有る事なるに、斯る刑罰の仕方こそ恨みなれ、見よ見よ、今に思ひ知らせんと、はつたと白眼舌をかみ切てぞ死したりける。夫より淡路守乱心して狂ひ

廻りしが或日自ら吾身を鉄砲にて打貫きて死しける故、家断絶に及ぶ。家士は皆淡路守を疎み居し故、早速思ひ思ひに退散しける。(下略)

時に慶安元年の出来事であつた。どうも、兇暴な殿様もあつたものである。乱心と云うが、元々半狂人だつたに相違ない。

死期を知る人々

昔の書物を読むと、自分の死期を知つた人の話が大変多い。

「俺は、今から何年後の何月何日に死ぬぜ」などと云つていて、正確にその通りの死に方をするのである。



一國一城の主から、一介の乞食に至るまで
こういう話は沢山ある。

例えば、慶長十八年六月二十四日に、六十
才で死んだ可児才藏という武士の死に方は、
こうである。以下は「翁草」より。

可児才藏吉長は、隠れなき覚えの士なり。
笹を指物にする故、世に笹の才藏と云ふ。
広島に在りし時、若士ども集りて語る時、
何程剛士なりとも、年老ひては不可叶と
云ふを、才藏老年故耳に懸けて、年寄も人
に寄らんと罵りしが、寔に老年迄甲冑兵杖
を帶し、馬上の業若士に超えたりとなり。
若年より愛宕を信じ、我れは愛宕権現の縁
日に死なんと常に申ししが、果して六月二
十四日潔斎し、物具して薙刀を持ち、床几
に腰を掛けながら息絶えたり。人奇異の思
ひをなす。(下略)

可児才藏は、はじめ前田利家に仕え、後に
秀吉に仕え、更に福島正則に仕えた武士であ
る。関ヶ原の合戦に敵の首級十七を挙げて家
康から賞讃された豪傑だ。若い人は知らない
かも知れないが、軍記もの講談などに親しん
だ人には馴染みの深い人物である。
次は「新著聞集」よりの抜書――。

江戸通町中橋に宗樹といふ者、煩ふ事あり
しが、寛文七年二月七日に、一族の面々を
あつめて、我明日臨終す、靈巖島にゆきて
終んとて、念ごろにいとま乞して、駕にの
りて、かの寺中の清忍坊が庵に入り、珂山
和尚を招き、十念を授けられ、八日に至
り、今日しも彼岸なり。我又彼岸に至るぞ
と戯れながら、

かの岸にいたり安きはろく路かな
と吟じ、念仏のこえとともにおはりぬ。
という、余裕シャクシャク、まことにお見
事な往生を遂げた御仁のお話である。

同じ「新著聞集」に、十代の若者の不思議
な死が書かれている。

尾州相応寺の中、東月院の僕小三郎、十六
才の時、墓所の空地を見立て、是なん我葬
所なりとて、日々みづから行て掃除せしが
翌年貞享四年九月十五日に、念仏し死す。
いやにアッサリとした坊やではないか。念
仏族とでも云うべきだろうか。

次は、念仏族の魚屋の話――。

奥州牡鹿小竹浜の、魚売九兵衛は、律義第
一の者なれば、人々本手を与へ、松島に遣
しける道にて、日中のつとめの念仏申居て

その間に、余の売人ども、残らず前へ行
て、損をせし事、たびたびなれば、是を面
目なき事におもひ、江戸に來り、二三年し
て、大なる敵き鐘を、二面もちかへり、お
のおのに大分の損を掛しかど又來り、その
恩報に、鐘をまいらせん。さりとて、念仏
したまへとすすめけり。自は魚うりながら
行住臥、称名をおこたらず。ある時我明後
日往生せんまゝ、いとまごひに來りたりと
て、越方の友の家をまはり、それより程ち
かき、川にて水をあび、身を清め念仏申し
明し暮して、その日の午の刻ばかりに、も
はや死ちかつきけるにやとて、門に出、空
を詠め、内に入り、我往生せば西の方に倒
れなんとて、高声に念仏し、鐘たたきしに
次第にこえ衰へ、云しに違はず、西に倒れ
往生せしとぞ。(新著聞集)

念仏に生き、念仏に死した魚屋さんであり
念仏人生とでも云う他はない。午の刻とある
のは昼の十二時である。

次は、本格派の念仏狂人の話で、やはり
「新著聞集」からの抜書である。

阿州中郡黒土村に、手ぐり網曳利兵衛とい
ふ者は、平生狂人の様にて、単心無二の念

仏者なり。網を引にも口の隙なく称名しけり。かかる故にや。異人よりも、魚多くとりける程に、年をかさねて身体も能なり侍りし。寛文七年六月十五日に、親類をあるき、自は今日往生するなり。此世の名残りに、盃をせんとあれば、聞人、例の狂気とおもひながら、盃とりかはしけり。おのおのかならず念仏わすれたまふな、大事にて侍るぞ。さらばさらばとて帰り、それより沢に至り、腰限り水に浸り、西にむかひ合掌し念仏高らかに唱へて、立居けるに、時やうやく移りければ、人々あやしみ見るにいつか往生を遂はべりし。

次に御紹介するのは、死の前日に、幽霊となつて自分の棺桶を注文に行った武家の話である。しかも、坊さんが同伴者として棺桶屋へ現われたというから奇妙である。「宮川舎漫筆」より。

子日庵三我といえる者は、御旗本松田某の家来にして、俗称平野某といふ。若かりしより俳諧の道を嗜み、謂浜庵蛙水の門に入り、終に子日庵三我と雅名披露ありて、其門葉も栄つつ、齢も耳順の歳に至れども、

いと健にして、格別のいたつきもなく、時に嘉永四亥年八月十五日名月を眺めて、

夜の明けはしらでしまひぬけふの月

斯言捨て平臥せしかば、月に嘯き給ひての仮寝にやと思ひしかど、余りよくいねしかば、風にやあたり給わんと、伴なるもの小夜着など引かけ参らせんとせし処、こはいかに、いつか事切れ、骸は冷入しに驚き、種々手当などせしが、其甲斐もなしといへり。爰に不思議なるは、其前日十四日には社中を残らず相廻り、其中松崎某の奥方不快見舞として葡萄一籠手土産となし、暫く物語して帰りしなり。死後に聞しに、伴なる者の云へる、十四日には気分も宜敷、終日宅に居て門外へは出ず、扱々不測の事なりといへり。夫のみならず、爰に奇中の奇なるは、深川靈巖寺脇の棺桶屋へ出家一人同道して、棺槨の注文申談、いづれ規定の

処は、明日申越べしと約し帰しといふ。扱十六日の朝、右棺桶屋来り、一昨十四日御隠居様御詔の棺槨、昨日迄に御定被下候よしの処、いまだ御沙汰なく、いかがにやと云へるに、伴をはじめ皆々奇異の思ひをな

し、何は兎も角も此方唯今入用の品なればとて、直様調へしといふ。斯自分に棺槨まで求め置て臨終なせしは、実に日頃の覚悟まで思はれ、いと不思議にも尊とき終ならずや。

という、恨みだの呪いだのには無関係だが歴然たる怪談である。

現代でも、これに類する話は、時折、聞く事がある。

どうも、話が抹香くさくなつたので、長生きをした人のお話を、一つ御紹介して終る事にする。以下は「北窓瑣談」より。

近頃頃、京師に一老男子ありて、婦人の乳汁を飲む事を好み、初産の婦人は、皆此老人をまねきて乳を吸出さしむ。此老人、日夜諸方に招かれて、乳汁のみを飲て他の飲食をせずといふ。五雑俎に穰城の人、年二百四十才、他の飲食を断じて、唯乳汁のみ食用して壮健なりと。京師の老人も、長寿を得べきにや、奇事なり。

この老人の年令は書いてないのだが、相当にエロティックな奇事であつて、昔はいろいろとおもしろい事があつたものだ。

情果 艶双 因六 近世毒婦伝 西尾富岳

日蔭に咲いた色濃い悪の花々——凄艶なその仇姿の魅力に促えられて精血を吸いとられるまで惑溺する男たち。 130円

耽美派うき 痴 (ちだん) 談 神保朋世
よえ秘聞

あらゆる浮世絵師が追求した絢爛たる男女の秘められた痴態の美を門外不出の資料によつて懇切に考証する。 100円

情痴事件 狙われた女たち 荻原秀夫
真相集

官能に溺れ理性を喪失した愛欲にのたうつ性犯罪の実相秘められた題材によつて縦横に描き出した悪の構図。 100円

歴好 代色 徳川將軍風流行状記 加賀山直哉

後家サン漁りの家康・同性愛から転向した家光・荒淫症の家重等々千代田城大奥にくりひろげられたゴ乱行絵巻。 120円

聚秘 楽第 乱将関白秀次 岩堀 光

淫虐非道の殺生関白と取沙汰され肉欲に耽溺しつつ絶望に心嘔まれる秀次の暗い青春を通して愛欲の悲劇を描く。 120円

昭奇 和秘 獵録 愛慾怪盗伝 三谷祥介

上流邸宅街を襲つて夫人達の寝室に侵入する黒い影。何故か彼女等はそれを訴え出ない。強姦か和姦か? 130円

国体 際市 肉場 狂い咲く女群 戸山一彦

終戦時の混乱の中で外国兵に犯された女性たちの姿、その執拗な愛撫の前に、自らの肉体を提供した洋娼の生態。 120円

情艶伝奇 ところんやれ 佐山英太郎
時代小説

幕末の大江戸を舞台に活躍する美男浪士をめぐる美女、淫婦。獵奇・情痴入りみだれて波乱万丈をきわめる。 150円

送料・各冊 24円

株式会社 あまとりあ社

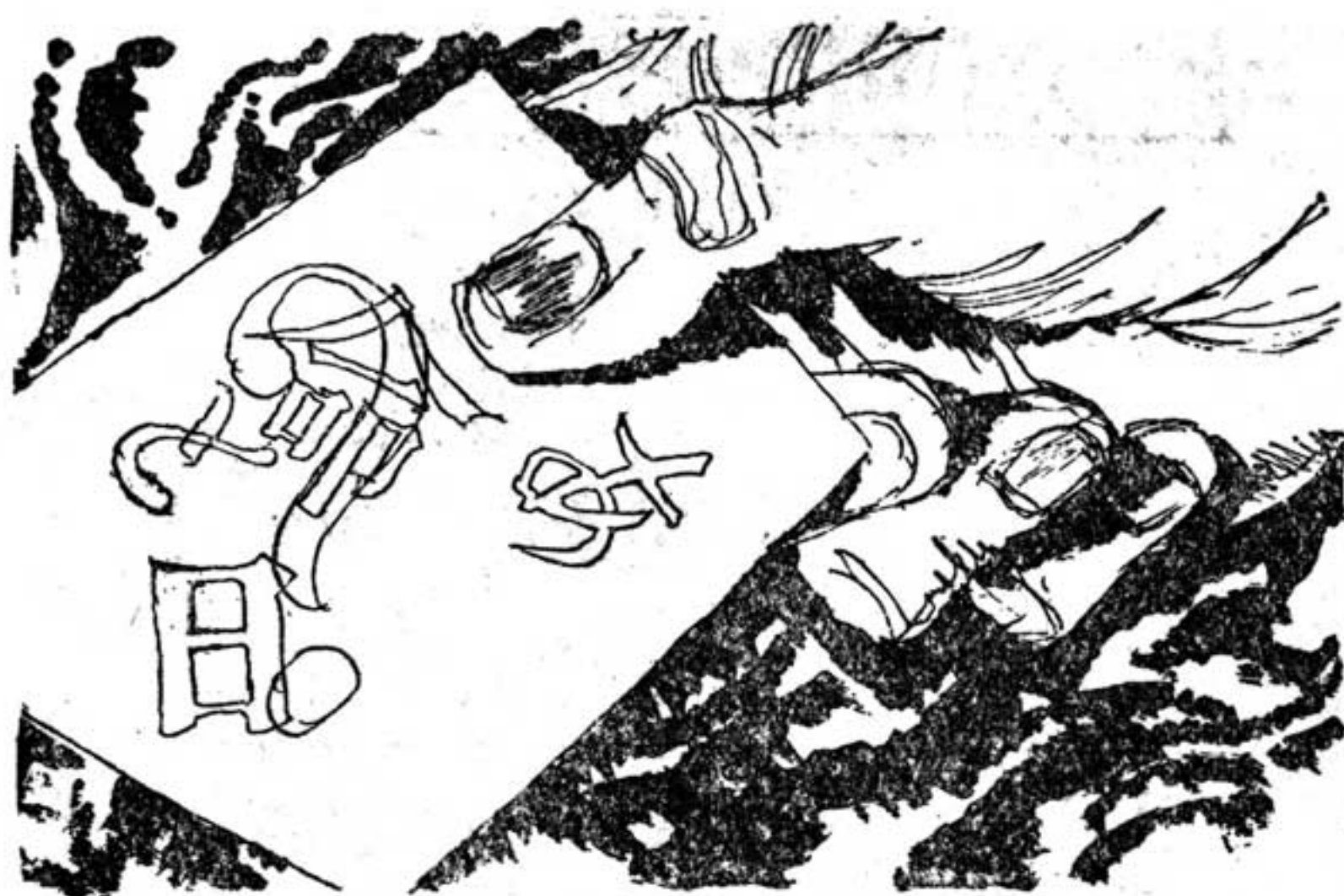
東京都中野区江古田1の2302 振替・東京10756 (久保書店宛)

狙われ
た一家

もうじき命日

宇治川 竜

南蠻寺祥吉・画



原因が結果に

ただでさえ古めかしい柏木の家の空気が、そのことから一層よどんでしまったように思えた。

祖母のうらにだけは、一同が申しあわせてそれをかくしていたから、七十六歳のうらは何も知っていない。仮りに知ったとしても、うらは気の強い女だから鼻でせせら笑うにちがいない。

だから、そのことを知っているのは、柏木信太郎と勇次郎の兄弟、そしてこの二人の母親であるしのをあわせて三人と、もう一人だけいた。もう一人というのは、正体の分らぬ挑戦者。

最初にそれが舞いこんだのは、十月の最終日曜の朝だった。

朝の郵便を門の脇にある郵便受まで取りに

行って戻ってきた女中のいそが、ちょうど玄関へ姿をみせた信太郎をみて、あの、これとは尋ねた。いそはそれが誰に宛てたものか分らなかったためだ。

ハترون紙の安物の封筒。切手も貼っていない、だからむろん消印も押していない。

しかも、そのハترون封筒の上に、活字体の文字が三つ貼りついていて、手にとってみると、新聞か雑誌の印刷文字を切りとって貼ったものとみえた。大きさもばらばら。柏木様とあった。

「子供のいたずらだろう……」

他の手紙と一緒に女中からそれを受けとった信太郎は、悪戯とは思いつながらも封を切った。中に白紙が一枚。白紙の上に、またもや切りぬいた印刷文字。

「あと一月。命日まで。」

これだけ。



「馬鹿々々

しい」

信太郎は封

筒と紙をくし

やくしやに丸め、

表へ投げすてた。

しかし、これが最初の

しらせだったのだ。

翌日、それを手にとったの

は、会社へ出がけの勇次郎だ

った。その日の文字は（あと三

十日）と貼ってあった。勇次郎は

黙ってそれを自分のポケットへねじ

こんでしまった。

そしてその翌日、それは始めて郵送され
てきた。兄弟の母、しの宛だった。

「何だい、これは？」

母が兄弟にみせた貼り文字は（あと二十九
日）と変っていた。

「いたずらにしちゃアしつこいな」

信太郎はちよつといつて封筒をしらべた。

差出人の名はない。消印は日本橋。これだけ
では手がかりにならない。

次の日も来た。その次の日もやってきた。

そして（あと二十八日）、（あと二十七日）

と区切りが一日ずつせばまるのが、一種のち
がいだった。

一番はじめに、この（あと何日）

という文句に、何の意味があるの

か気づいたのは、信太郎だった。

しかし、信太郎は、わざとそれを

口へのぼせなかった。彼は、いわ

なくてもその意味を、母も弟も知

っているにちがいないことを知っ

ていたからでもあった。

日付の結着は、十一月二十六日

この日は母のしのや兄弟ばかりで
なく、祖母のうらにすらある関係

姿なき復讐者は非情の一家を日増しに動揺させた！

怪異復讐譚特集

をもつ日だった。

一年前の十一月二十六日の未明、山手線に飛び込み自殺をした女がいた。柏木ふみ子、十九歳。しかし、柏木家では死体の引きとりを拒んだ。ふみ子は勇次郎の妻だったが、籍に入っていないかった。

新聞記者は好材料ととびついて、柏木家へ押しよせたが、柏木家では門を閉ざし、一切ノーマコメント。だから、自殺に間違いなかった。で、仕方なく（家庭の事情からか？）という曖昧な表現でジャーナリストはお茶をにごし、人々は十日もたつと忘れ去った。

ふみ子の死体は、父親の瀬川一作が頬を涙にぬらして引きとって行った。新聞記者は事情を瀬川の側から聞こうとした。

江東のドヤ街で自由労働者をしていた一作は蝙蝠のように口を閉じて語らなかつた。ただ一言「これでは娘が浮ばれません」といってポロリと大粒の涙をこぼした。

何か複雑な事情が介在していると勘を働らかした新聞記者の一人が、翌日、一作をまたたずねたが、遅かった。一作は姿を消してしまっていた。

この母、この兄

柏木家の者は、外部の者に対しては、一致するが、柏木家の内実には収拾が全くとれない。九州の石炭王と呼ばれていた父の生きているうちは、とにかく父の市右衛門の光りで、統一はとれていた。が、五年前、市右衛門が妾宅で死ぬと、それと同時に、今までの平衡が崩れた。

考えてみれば、残された四人は、市右衛門の亡きあと、みんな血が殆んどつながっていない形になったからだ。少くとも、ある点で信太郎と勇次郎の血はつながっているといつてよからう。

祖母のうらの眼からみれば、兄弟が母と呼んでいるしのは、よそから入った嫁である。母のしのの眼でみれば、二人の兄弟は女中の子でしかない。しのは嫁いですぐ婦人病にかかり、子をうめなくなってしまうた。

市右衛門はそれを口実に、堂々と女中に子をうませた。信太郎の母も女中だったし、勇次郎の母も女中だった。そして信太郎の母は病院で信太郎をうむと、すぐ柏木家から遠去けられた。充分な手当はあててやった。

勇次郎も同断。決して二度と柏木家のしきをまたがぬという誓約書を市右衛門は書かせた。兄弟の母はだから別々で、腹ちがいの

兄弟。兄が二十四で、弟が二十三なのもそういう理由からである。

赤ン坊のうちは何も知らないから、兄弟は中学へ入るまで、しのを自分の母と信じていた。

それを年端も行かぬ兄弟に暴露したのは、祖母のうらだった。うらがそれをいわなければ、しのとて自分からいい出さなかつたはずだ。

信太郎はそれでグレ、勇次郎は劣等感につままとわれた。

もともと二人の性質は正反対だった。蛙をつかまえ、思い切り足でふんづけて殺す信太郎。その蛙の死骸をみて、がたがた蒼くなつてふるえる勇次郎。

祖母のうらが、一体どういうつもりで秘密をさらけだしたか、誰にも分らなかつた。

市右衛門もさすがに肚をすえかねたとみえうらとかなりの言い争いをした。しかし、もはやいつてしまったことである。

市右衛門は万一を慮り、遺産を四分しておいた。会社の顧問弁護士がその管理に当たった。一家の者は、自分たちのとり分が、どの位なのか知らされていない。ただ月にはなになると、弁護士の紺野が柏木家へ金を届けにき

怪異復讐譚特集

た。兄弟にはそれぞれ三万円宛。しの中には五万円。祖母のうちは一万円もらった。この金額が毎月々々、父の死後届けられていたのだから、少くとも元である遺産は、何千万円であることは間違いない。

「三万円の月給か。馬鹿々々しくて月給とりになんかなれるものか」

信太郎は高言した。なるほど相違ない。住んで、食べて、小づかいが月に三万円。

勇次郎は信太郎とちがっていた。大学を出ると、すぐ小さいが、堅実な会社につとめた。そして、月々の三万円を有利に投資しはじめた。何しろ次男という存在であったし、彼はもうこの古い柏木家の空気が息苦しかった。何とかしてここから逃れ出ようと計画していたのだった。

そして、勇次郎は皮肉にも、十九の女中であるふみ子に恋してしまった。彼は後でよく自分で自分をあざ笑った。女中の子が、女中と結婚したものだ、と。

ふみ子は今どきにしては珍らしく女らしい娘だった。柔順で、清

潔で、控え目ではあるが利巧な娘だった。

しかし、まず第一に義母のしのが反対した。しのは、そばへよるだけで寒気を感じるくらい冷たい性質の女で、それだからねちねちくどい。黒い瞳は小さく、白い部分が人をにらむとき、白濁する。

「それはあなたの御勝手でしょう。ふみは好い娘です。しかし、女中ですよ、勇次郎さん。胸に手をあてて、よく考えてごらんさい。それに、あなたは柏木家の人です。柏木家の者なら、柏木家の体面を考えてはどうなのです」

大抵の場合なら、おとなしく引きさがる勇次郎が、この時だけは別だった。

「お父さんなら、きつと許してくれたでしょう」

「そうね、お父さまならお許しなさったかもしれないけど、仮にも私はあなたの方の母です。母の私は許しません」

一旦は、あきらめたように勇次郎はさからうのを止めた。目算を立てたからである。

ふみ子は尻込んだ。女中の分際私が、坊っちゃんなどの、と目を伏せた。心は通じてはいた。

だから勇次郎はふみ子を説き伏せ、ある晩

ふみ子を自分の妻にしてしまった。既成の事実を基に、あくまで戦う決心をしたのだった。

「勇公、お前にしちゃア、思い切ったことをやったじゃないか。どうだい、お祝いに一杯やろうか？」

信太郎が喜んでいるのか、おもしろがっているのか、勇次郎には分らなかった。が、とにかく、味方らしい人間が一人だけ身近かにいるような気がして心強く思った。

一階 二階

そうなった以上、勇次郎とふみ子の仲は、黙認という形になった。義母のしのも、生さぬ仲の勇次郎に、それ以上反対できなかった。表面はとりすましているが、しのは執念の強い女だから、他の手段を考えはじめた。

「ですけれど勇次郎さん。あの娘はこの家にいる以上、女中として私はあつかいます。それは承知しておいて下さい」

ふみ子は泣いて別に一家を構えてくれと勇次郎に頼んだ。勇次郎もそうしたかったが、経済的にそれが出来なかった。というのは、父の遺言がそれを拒んでいた。兄の信太郎が妻帯するまで、勇次郎はこの家をはなれては

いけない。もしこの家をはなれて行けば、それは月々三万円の権利を放棄することを意味する。市右衛門は、兄弟が争いをおこすのを防ぐつもりからこうしたらしかった。ところが反ってそれが勇次郎をしめつけることになった。

「勇公、僕は四五年、まだ女房はもらわないうぜ、そのつもりでいてくれな」

勇次郎とふみ子の焦燥を承知していながらわざと信太郎はこういいはなった。

結婚はしても、ふみ子は女中から解放されない。祖母は口やかましく人使いもあらう。

その上、祖母のうらは口にくそ出さないが、この二人をありありと軽蔑していた。

ふみ子は哀れだった。何しろ古い家で、おまけに広いから掃きそうじも並大抵でない。早くおきて食事の支度をしかけて掃除にかかると。掃除がおわるのは昼近くなる。昼の食事の支度。そのあとには立てつづけに洗濯と、すぐまた夜の食事の支度が待ちかまえている。

まるで勇次郎は別で、他の三人が、よってたかってふみ子をふみつけにしている形だった。

そういう家事から解放されるのが、夜の十

一時すぎ。女中部屋ではっと息を入れると、ふみ子はいつも涙ぐんだ。決して妻の座をこの家にいる以上あたえられない。あくまで表むきは夫を坊ちゃんまよばなければいけない。

女中部屋は台所と便所の中間にある四畳半。勇次郎はそこへ夜、まるで夜這いでもするようになつてくる。それは夫婦の語らいとはいえない。そのことだけを三十分ぐらいの間にすませてしまわなければいけないからだつた。

兄弟の部屋は二階で、しのと祖母のうらとふみ子が一階に起居していた。従って便所に近いふみ子の部屋は、まるで無防備地帯にも等しい。なるほど障子が廊下とをへだてている。しかし、毎晩あそんで遅く帰ってくる信太郎が、水をのみにそのとなりの台所へガタゴトやってくるし、しのやうらが、もう寝たと思っていると、便所にやってくる。祖母のうらは右足がよくないので、壁に伝わり伝わり便所へ行く。ゆっくりゆっくり歩いてきてゆっくりゆっくり用を足して戻って行く。そして、きまってふみ子の部屋の前を通るとき灯の消えている部屋に向って、オホンオホンと空咳をする。まるで、私はまだ起きていま

すよといっているように。

勇次郎はおのれを哀れに思いはじめた。一層のこと三万円の権利を放棄して、ふみ子とこの家をとび出そうと、何度思ったかしれない。ふみ子はふみ子で、食べるだけなら私も働いて何とかあなたの月給だけでやって行くようにしますともいった。勇次郎もその言葉に心を動かされたが、やはり月々三万円をむざとは棄て切れない。

二人がそこにいる限り、事態は好転しつこなかったし、かえって悪化の一途を辿るばかりだった。

一日中、まるで追いまわされるように働かせられる。何しろ勇次郎の出たあとだから、ふみ子はすべて一人での受け太刀。意識的によってたかって自分をつぶそうとしていることが目にみえて分った。

そして、それ以上のことがおこってしまった。

ある日の午後。しのは買物に出かけた。うらは午睡をしていた。そして、信太郎が二階から、ふみ子に水を一杯もってきてくれと声をかけた。

水を入れたフラスコとコップを盆にのせてふみ子は二階へ運んだ。信太郎は、ベッドに

腰をかけて、ウイスキーをのんでいた。直感で、ふみ子は入口のところの小机にフラスコとコップをおいて出て行こうとした。

すると、ここへおけというように、信太郎がベッドの脇のサイドテーブルを指さした。命じられると反射的に、いわれた通りしたのが間違いだった。

おいて行きかけるうしろから、両腕で抱きすくめられた。腕力ではかなう相手でない。声をあげようとする、いきなり頬を平手で打たれた。

そんな経験のないふみ子は、もうすくんでしまい、あとは信太郎の思いのままに弄ばれてしまった。

「黙ってる、勇公にはな。僕はいやしないと。黙ってりやア分りっこないのさ。女ってものは、そんな風に重宝にできている。これから可愛がつてやるよ、なアふみ」

階段をかけおり、自分の部屋へ戻ると、ふみ子は畳につつ伏し、声を殺して泣いた。ちよつとして、はっと廊下をみると、いつ来たのか祖母のうらが廊下に立ってふみ子をおおろしていた。くしゃくしゃに皺のよった顔で意地わるく黙ったままふみ子の顔をみつめると、右手で二階を指さして、ウフフフと気味

の悪い声で笑い、ゆっくりゆっくり便所へ入って行った。

不安の雲おこる

すべてが、ふみには不都合なめぐりあわせになってしまった。父の瀬川

一作は腕のよい

大工だった



のだが、賭

けことに凝って

みるみるどん底へお

ちてしまった。たまにく

れば、そつとふみ子と呼び

出して金の無心。たよりになる

はずの父親がこれである。

信太郎とのことは、死んでも口には言えられなかった。そんなことをいっただけで

恐ろしい自分の破滅だということは、十九のふみ子にも分っていた。そして、信太郎は安心して毒牙をみがいた。

何しろ一日中家でゴロゴロしていて、灯ともし頃になると遊びに行くだけの男である。しののいるときは遠慮をさすがはしてか手を出さないが、しのが出かけてしまうと、すぐである。

ふみ子は呼ばれても、それっきり二度と二階へ上って行こうとはしない。すると、信太郎の方から下へ遠征してくる。何度か、台所口から外へとび出そうとしたか分らない。だがそれも効を奏しなかった。逃げるものなら逃げてみると、さも面白そうにせせら笑うとふみ子を裸にしてしまう。

もう死にますと脅すと、生きていて楽しんで方がいぜと相手にもしない。

勇次郎にもいえず、思いあまって到頭ふみ子は鉄道自殺を遂げてしまった。

そして、ふみ子の一週忌の命日がやってくる一月前から（あと何日）と日を切った手紙が舞いこむようになったのである。

それが（あと十五日）になったとき、さすが無神経の信太郎も気にかけてはじめた。

「おい、勇次郎。どう思う？」

「どう思うって？」

「これさ、こいつさ」

腹立たしげに、ビシャビシャ手紙を手の平で信太郎は叩いた。

「兄さんは、いたずらだっていつてたじゃないか？」

「お前もそう思っているのか？」

「何ともいえないな。しかし、気になる」

「気になるとも。気にならない方がおかしいくらいだ。どうする？」

「どうするって？ 警察にでも？」

「馬鹿！ 警察がとりあげるとでも思っているのか」

「じゃア——」

「用心が第一。それから、相手の正体をさぐるんだ」

「見当がついてるのか？」

「ひょっとすると、あいつの父親だ。実をいうと、人に頼んで探してもらっているが、どこにいるか分らない。ルンペンみたいな奴で住所は不定だっていうからな。あいつの親爺にちがいない、くそ！ いまましい。めつ

けたら警察へつん出して——」

「何でだい？ 脅迫罪でかい？ そりゃア駄目だよ。脅迫した証拠は一つもありやしな

い。あんな貼りあわせの手紙が証拠にはならない」

「それじゃア勇次郎、どうしろっていうんだ？ べんべんと復讐されるのを待っているというのか？」

復讐されるという可能性は充分ある。狙われているのは、正しくいうと柏木の全員ということになる。

「ひょっとすると兄さん、女中のいそが何か——」

ふみ子が死んでから後でやとった女中のいそはもう三十近い女である。

「いそがどうだというんだ？」

「調べてみる必要があるかもしれないというのさ。あの女が手引きをする可能性はあるだろう。いや、こうも考えられるぜ。いそが親爺と何か関係があって、僕たちに一服もる——まさかそんなことはないと思うけど、とにかく他人だから油断できない」

「そうだ。用心にこしたことはない」

こういつてから信太郎はひやりとした。自分がふみ子にしたことを、それまでは絶対にふみ子が勇次郎に話してないと思っていたのだが、その自信が、このときぐらついたからだ。しかし、そのことを自分から勇次

郎にはなんぼなんでも聞き出せない。そこで手をかえた。

「なあ勇次郎。彼女はお前に書き置きでも残して行つたらうな？」

さり気なく聞くと、勇次郎は悲しそうな顔で首をふった。

「書き置きどころか、恨みの言葉一ついい残さなかったよ。それだけに、一番僕を恨んでいたんだらう、意気地のない男だってね」

そういうと、拳を固めて我と我が頭を勇次郎は叩きまくった。

鋒先転じて

相変わらず（あと何日）という手紙は、毎日のように柏木家を襲いつづけた。郵便受けのところでは信太郎がまだ夜のあけぬうちから張りこんでいると、貼り文字の手紙は台所へいつの間にか投げこまれていたりする。まるでこっちの裏をかくようなやり方なので、一日二日、投げこむ相手をつかまえようと意気込んでいた信太郎も、裏をかかれるとあきらめてしまった。問題は手紙を投げこむ人間よりいわば一種の脅迫をしつづけている相手が何者かということに、兄弟の焦点が絞られた。しかし、いくら考えてみても結論はでない。

死人のせいでないことくらい、現代に生きる青年たちは承知していた。

ところが、その姿をみせぬ相手は、兄弟や義母のしのが、祖母にひたかくしていることを知ったのか、その鋒先を祖母に転じた。

うらは明治生れの女だけに、気は強かったが何しろ七十六歳の老人である。足が不自由なことと、時々度忘れをするくらいで、他は至って元気。とはいえ、何もする仕事はない。だから一日中、自分の部屋で古行李をひっぱり出しては、小布の整理をしたり、古手紙をよんでは、もういらぬものを被りすてたりしているだけ。

食事も女中のいそに運ばせて、一人で自分の部屋ですます。用があると、小さな鈴をチリンチリンとふる。女中に来いというこれが合図の代りになっていた。

ふみ子の（命日）にあと五日という日の昼すぎ。女中のいそが風呂場で洗濯をしていると、老婆の部屋からチリンチリンという鈴の音。

老人の短気さで、すぐとんで行かないと機嫌がわるいことを承知しているいそは、エプロンで手をふきふきうらの部屋へ行った。「およびでございますか？」

怪異復讐譚特集

うらは例によって自分の前に行き先を二つあけひろげ、何か探しものでもしていたようだった。そして、いそが入って行くと、右手にもっていたものを、いその目の前でふってみせた。いやな声だった。

「お前かい、こんな縁起でもないものを、あたしの部屋へ放りこんだのは？」

いそは狐につままれたような顔をした。「何でございましょう？」

「これだよ、みるがいい。としよりのあたしに、どういう気でこんなものを送ってよこすんだい？」

ほいと目の前に放り出されたのは、黒枠の葉書だった。そして、その中央に大きな貼り文字で（命日が命日）と黒文字。よくみると黒枠は印刷したものではなく、マジックインキの黒で、黒枠のように塗ったもの。

いそはへどもどした。

「私は存じませんが、いつ？」

老婆は癪をたかぶらせた。

「いつだって構やしない。誰がこんなものをあたしの部屋へ放りこんだのだい？」

「私は一向に」

「じゃア、おしのさんと呼んでおいで。あの
人に聞けば分るだろう——」

昼間のことなので勇次郎は出勤していて留守。いその話を聞いたしのは、二階でごろごろしていた信太郎に相談した。

「どうしろといわれたって、僕だって困りますよ。誰の仕業かまだ見当さえついてないんです。子供のいたずらか何か、そんな風にごまかすんですね」

しのはいわれたとおり、その場かぎりの嘘を祖母にいった。しかし老婆の機嫌は仲々なおらなかった。どうせあたしはこの家の穀つぶしでございますよとか、お前たちはとしよりの死ぬのを待って、このあたしの財産を三人で分けようとしているんでしようと、一時間ほどしのを前にすわらせて愚痴を並べた。

これだけならよかったのだが、その次の朝もっと老婆のいみ嫌うことがおきてしまった。

としよりだから朝は早い。いつも六時前に目をさますと、うらはまずゆっくりゆっくり便所へ入って用を足す。その朝もそうだった。

時間にして、かれこれ六七分の間のできこ

とである。いそは眠っていて、うらが便所へ行ったのも知らないと後でいった。

うらが便所から戻ってきて、雨戸を自分であけ、もう一度、床の方へ戻りかけて、それを発見した。

ちょうど、うらの枕の上あたりの畳の上にそれがおいてあった。うらにいわせると、便所へ行くまでには確かにそんなものはなかったという。しかし、雨戸がそれまでは閉めてあったのだから、ひょっとすると、もっとそれより前からおいてあったのかもしれない。

とにかくそれをみて、滅多に物に動じないうらが、あつといつて、へたへたと腰をついてしまった。

それは、死人の枕元によくおいてある飯をうず高くもりあげ、その飯の上に箸を二本つけたてである供養の飯盛り茶碗だった。しかも、それが一目でみて、ふみ子の茶碗と箸であったのだから、老婆が顔色をかえたのも無理はなかった。

予告の実行

信太郎は、どうしても女中のいそが怪しいといひ張った。いそが外部の何者かと連絡し手紙が郵便受けから出てきたようにみせかけ

たり、質のわるい悪戯をして老婆をびくつかせていると主張した。

何しろ一同の神経がいら立っているところだから、衆議は一決し、すぐにいそに暇が出された。あとにのこったのは、いわば水いらずといえるかもしれない柏木一家の四人だけ。いそが怪しいといひ出した信太郎でさえ怪しんでいるのはいそばかりではないという口吻をもらした。

「怪しいといえば、誰だって怪しくみえるからな、勇次郎。疑えば、本当の親だって兄弟だって疑えるし——」

わざと（本当の）というところへ力をこめて、かんでほきすてるように信太郎はしのと勇次郎の顔をかわるがわる見た。

予告は予告通り実行され、鉄道自殺をとげたふみ子の祥月命日に、結局、柏木家から二つの柩が運びだされることになってしまった。

明日がその当日という、前の晩には、早く寝についたのは、祖母のうらだけ。

しのは顔にこそ動揺をあらわさなかったが兄弟におやすみといひつて、祖母のすぐとなりの部屋へ入ったが、眠られぬとみえ、十二時近くまでその部屋の灯は消えなかった。



十一月も
末近く、秋
の夜風が雨
戸を揺する。

信太郎はウイス
キーをなめなめ
やはり眠られない
ように、時々何かブ
ツブツ呟いていた。勇
次郎も同じだった。彼
も信太郎ほど酒がのめた
ら、酒をのんでいたにち
がいない。

一秒、一秒、何かが迫ってく
るという気持。何がおこるかわ
からない不安。ベッドの上で転々
と兄弟は同じ不安にかられているよ
うだった。

「おい、勇次郎」

大声でよばれて、勇次郎はおき上った。ド
アのところに兄が立っている。そして、窓か
ら暁の光がさしこんでいた。

「お前、よく寝てたのか？」

「さア、寝ていたようでもあるし、まるっき
り、寝てないような気もするし——」

すると、突然信太郎がどなった。

「くさいぞ、ガスくさいぞ！」

二人は反射的に階段を下へかけおりた。

正しくガスの臭い。

祖母の部屋へ入ってみると、ガスが充満し
ていて兄弟はむせた。

「窓をあけろ」

ガスストーブの栓があげ放しになってい
た。つけっ放しで寝たガス・ストーブの火が
途中で消えてしまったらしい。

被害者はうらばかりでなく、隣室のしのも
ガス中毒で、もう手おくれだった。

救急車が来たり、警察がしらべに来たりし
たが、結局、これはよくあるガス・ストーブ
によるガス中毒ということで覺がついてしま
った。兄弟は、例の予告について、何一つ語
らなかった。いったところでどうにもならな
いと思ったわけではなかったのだが……。

対決

「勇次郎、危なかったな。もう少しのところ
で、我々もガスでやられるとこだったんだぞ
いわば僕が命の恩人さ」

その晩のことである。新聞に記事が出て、
弔問客も来たが、まだ喪は発表していない。
二つの柩は階下の広間にすえてあった。

信太郎は二階の自分の部屋で、夕方からウ
イスキーをのみつづけていたが、もう客もこ
ないとみてとると、そこへ勇次郎をよんだ。

「二人っきりでお通夜さ。まアお前ものめ」
勇次郎は水でうすめてウイスキーをのんだ
信太郎は、半ばうつむいて、グラスを両手
ではさみ、何か考えこんでいる勇次郎に、し
きりと話しかける。

「警察って存在も、ちょろいもんだな？」

「え？」

「そうじゃないか。お前にだって分っている
はずさ。あの連中の目は節穴も同然だよ。と
ころで今朝、僕がお前を叩きおこしたとき、
お前は寝ていくような気もするし、寝ていな
かったような気もするといったな。一体、寝
ていたのか、それとも、寝ていなかったのか
？」

勇次郎が、きつとしたような顔付をした。

「それがどうしたんです？」

「どうもこうもありやしない。お前の返事一
つで、事態が急転するんだ」

「だからいったじゃありませんか。はっきり
いくら考えても分らないんだ。よくあること
ですよ、うつらうつらしていると、三十分ぐ
らいだと思っても、二三時間寝てしまったこ
ともある。そんな状態だったんです」

「本当か？」

「本当さ」

「じゃア、夜中に一度も下へおりなかったと
いうんだな」

「便所にも行きませんよ」

「おかしいな。とすると」

「どうしてです？」

ウイスキーを呷ると、信太郎が膝をのり出
した。

「いいか、聞け。台所のガスの元栓は開いて
いた。だからとしよりの部屋へ、一晚中ガス
が送られていたことになる。ところが、ここ
が問題さ。警察じゃア、あのガス・ストーブ
の火が自然に消えたのか、風にあおられて消
えたにちがいないといった。しかし、人為的
に操作して消すことだってできる」

「まさか」

「とほけるな。お前だってそのく
らいのことは分るはずだ。夜中に
みんなが寝しずまったところ便所へ
そつと行く。女中部屋はもう空で
誰もいない。便所のかえりに行
きに、台所へ行つて、ガスの元栓
をしめる。こうすりゃア、婆さん
の部屋のガス・ストーブの火は消
えてしまう。それから、また、元
栓をかけるだけのことさ。ガスは
どんどん送られる。火は消えてい
るから、ガスは次第に部屋にたま
る。この結果、どうなると思うん
だ！」

「それじゃア、殺人じゃありませ
んか」

「そうだ、殺人さ。ガスで人を殺したんだ。

これが間違いだともいうのか」

「だって、外から誰も忍びこんだ気配はない
し、家の中にいたのは——」

「四引く二は二だ。その二はお前と僕だ」

「冗談じゃない。なぜ、そんなことをするん
です。仮にも相手は祖母だし、義理でも母と
よぶ人に対してですよ」

集特譚讐復異怪

「恨みがあれば、人を殺すかもしれない。まして、あんな予告を送ってよこした奴なら、あれくらいのことをやりかねないとも」

二人の兄弟は睨みあった。眼光は、信太郎の方がすさまじかった。勇次郎は、コップを砕けんとばかり両手でしっかと握っていた。

「兄さん」

「よせ、兄さんなんて今更いうな。第一、お前は僕を兄と思っているわけがない」

「どうしてです？」

「とほけるな」

「何もとほけちゃいけませんよ。兄さんこそ、どうかしたんじゃないんですか？」

「ふん。そうかね。口ではそういつているが、お前の腹はにえくり返っているにちがいない。それでなきやア、あんな脅しをかけたりまするわけがないじゃないか、おい」

「脅し？ 脅しって、あの手紙のこと、ですか？」

「ほら見ろ、語るにおちるだ。小細工を使ってみんなをびくびくさせて、お前はこの家の財産を全部一人占めにしようと思ったんだろう……」

勇次郎は、返事をしなかった。その代り、兄の心持をよもうとするのか、まじまじと信

太郎の目を睨みつけていた。そして、すぐ、小さくうなずいた。

「やっぱり思った通りだ」

「やっぱりだと。ふふん、やっぱりなら、こっちでもいい科白さ。とすると、やっぱりお前は、ふみ子から聞いたんだな」

急に勇次郎が動揺した。

「ふみ子から聞いたって？」

「まだとほける気か。いくらでもとほけるがいいさ。お前は、ふみ子の仇を討とうとしたんだ。お前の女房のふみ子をいびったこの家の連中に対して、死んだ女の代りに、仇をうつ気だったんだろう？」

勇次郎は力なくうなずいた。

「しかし、その気はあったけど、やっぱり僕にはできなかったのだ」

「うそつけ、二人も殺したくせに」

「兄さん、待ってくれ。僕じゃないよ、僕は人を殺したりしない」

「そうかね？」

こういうと、信太郎は立ち上がり、ベッドの方へ行った。そして、ベッドの枕のあたりをゴソゴソまさぐっていたが、急に勇次郎の方をふりむいた。その右手には、拳銃が握られていた。

「勇次郎、さアお前、遺書を書け」

殺意

「どうして？」

「命令だ。文句はこっちでいう。そこに紙と万年筆がおいてある。早くしろ」

信太郎の眼に妖しい光が漂っていた。勇次郎は観念したのか、いわれた通り、紙と万年筆を手元においた。

「いいか、いう通りに書け。柏木勇次郎である私は昭和三十三年十一月二十六日の朝、個人的なうらみから、ガスを使って祖母と母を毒害しました。よってその責を感じ、この場で自決いたします。それだけだ」

勇次郎の手がゆっくりゆっくりその文句を紙の上に認めて行く。手は文字を書いているが、頭は別のことを考えているようにみえた。

「これでいいのかい？」

テーブルごしに紙をわたそうとして、勇次郎は、その手を急に引きこめてしまった。

「どうした？」

「一つだけ気になることがあるんだ。兄さん今、兄さんは、ふみ子から聞いたかといったね。あれは一体何のことなんだ？」

信太郎は大きく眼をむくと、次には大声で
「デラデラ笑いだした。」

「そうか、やっぱりあの女はいわなかったのか。知らぬは亭主ばかりなりか、アッハッハ」
「けだもの！」

信太郎の拳銃が、勇次郎の心臓を狙った。

「よこせ、その紙を」

勇次郎は仕方がないというように、テーブル越しに紙をさしだした。そして、兄の指がそれをつかむ前に紙をはなしてしまった。だから遺書は、風にのって部屋の隅にとんで行った。信太郎はあわてて紙のあとを追った。

この、ほんのわずかな隙を勇次郎はのがさなかった。

信太郎が紙をひろってよみかけると、勇次郎が声をかけた。

「兄さん、それだけじゃちょっと足りないところがあるよ」

「何故だ？」

「遺産のことさ。僕の遺産を兄さんに贈ることを但し書にしておかないと、後でゴタゴタがおきるぜ」

信太郎は拳銃をもっているの、すっかり

油断していた。

「じゃア、書き足せ」

紙をうけとった勇次郎は、わざと左手で文字をかくすようにして、その紙に何か書き足していた。それから、

「もう一つ、聞かせてもらいたいな。お婆さんたちを殺したのは、むろん僕じゃないから兄さんだろう？」

信太郎は唇をまげた。

「御想像に任せるさ。四引く三は一だ。その遺書で万事片はつく。いわばお前の悪戯にこっちが便乗させてもらったというわけだ」

勇次郎はうなずいた。

「目的は金だったんだな？」

「借金で首がまわらなくなったのさ。座して食らえば大山も空しの例文の通り」

「分ったよ。結局、僕は殺されて、自殺したことになされるんだろう？ もうどうしたばたしても駄目だ。この世の名残りに一杯のませてくれるね？」

「いいとも、乾杯してやるか？」

信太郎は勇次郎のコップにウイスキーをつぐと、自分のコップにもウイスキーをついだ。

「乾杯！」

「乾杯！」

杯は干された。すぐに勇次郎の手から、今度は間違いなく信太郎の手に遺書がわたされ

た。

「兄さん、声を出してよんでごらん」

「よし。柏木勇次郎である私は、昭和三十三年十一月二十三日の夜、個人的なうらみからガスを使って祖母と母を殺害した兄信太郎を毒殺し……」

勇次郎の笑が爆発した。

「その通りじゃないかい、兄さん。今、乾杯した兄さんのコップの中に毒を入れたんだ。今の今まで、僕は誰一人殺すつもりはなかった。だけど兄さんが、ふみ子を辱しめたといったから——」

紙のとんだわずかのすきに毒をと思ったとき、もう信太郎の胃は焼けはじめた。

「こ、こ、この——」

拳銃の引金を引こうとしたが、そのままガツと血を吐くと、床へ転げてしまった。

翌日柏木家は弔問客にも門を閉ざしていた。

前日に引き続きやってまた警官によって二階に二つの死体が発見された。いうまでもなく、それは信太郎と勇次郎の死体だった。一つだけ奇妙だったのは、こめかみを射ちぬいていた勇次郎の死顔に、満足気な微笑がうかんでいたことである。

★女体讃美★

傲れる女達

——舞台に表われた残虐な女性像——

一、千姫行状記

今や国際的に有名になった都心の某劇場に
これまた国際的に有名になりつつある女優が
いる。四十に近く、豊満な肉体を厚く重ねた
衣裳の間からチラリとのぞかせる魅力は、一
種独得の色気があり、浮世絵グラマーと異名
をとって外人のファンも多い。

この女優が、千姫を演じた一幕は、この劇
場でのセンセーションとなり、クライマックス



女に征服され虐げられる男の
喜びを、まざまざと繰り広げ
る名場面に私は陶醉するのだ

スに達すると、劇場の女事務員のほとんど全
部が持ち場を放棄して見物するという騒ぎを
起したものである。

舞台は四五人の御殿女中が手燭をかざしな
がら、何者かを探し回る（恐らくは千姫の無
聊を慰める相手を探すしぐさであろう）情景
によって始まる。

やがてその一人が、舞台の内幕の中をうか
がう所作をすると同時に幕が上る。

ここは千姫の私室である。



脇息にもたれて一人淋しくすわっている千姫の顔に、何かに飢えているもののような悶えがうかがえる。その悶えは表情に止まらずもたれていた脇息を抱きかかえるかと思うと脇息の端に頬を寄せて、物狂おしい様子になる。そこへ二人の女中に抱きかかえられるようにして、若い美しい小姓が登場してくる。いやがるそぶりで抵抗しながら、しきりに逃げ去ろうとするが、二人の女達はそれを許さない。

小姓役を演ずる男性は、ほれぼれするような美しさで、ちょっと見たところ女性が男に化けているとしか見えないが、プログラムを見てはじめて男性とわかるくらいである。

この美男が、あたかも、飢えきった虎の檻

に投げ込まれる餌のように、二人の女中によって千姫の部屋に投げ込まれるのだ。

待ち構えたようにじっと見据える千姫の、

渴ききったまなざしに表われたほのかなよろこび、恐怖におびえる男性のおろおろした中にも美女に対するはじらいの風情、そこに、一種異様な雰囲気がかもし出される。

やがて、こよなき獲物に歓喜した千姫が、にじり寄るようにして男をつかまえる。

男は逃れようとするが無駄である。

狂気のような千姫は男を抱き締め、おのが着物の袴をゆるめて男の手を胸に触れさせようとする。

男の目も異様に輝き出す。同時に、今までのおずおずした態度を一擲し、二人は手に手をとって踊り出す。その踊りにも千姫の方が万事男性をリードする。

二人はやがて舞台中央のセリの上に乗る、女が男の上にかぶさるように重なり合って、頬を触れ合せんばかりに、事後を暗示しつつセリは下って、二人は舞台から消えてしまう。数分間、音楽だけが真っ暗な中で奏せられ、やがてセリが照明を受け

つつ再び上ってくる、

千姫は立っている。小姓はその足もとにうずくまっている。

女の髪の毛のほつれ、片肌もあらわな帯の乱れそれにも増して、うつろな、ほうけたような女のまなざしが、はげしさのあとの満ち足りた気持を表わして余すところがない。

男は、女の足もとに願いを乞うように寄り添うが、女はこれに応ずる気配はない。男の願いは、いつまでもそばにおいてもらいたいというのであろう。しかし、いったん満足を得た女には、もうこの男に用はない。

この上はむしろ、この男をなぶり虐待することによって、最後の愉悦を得ようとする。

男は女の前にひざまずいて、幾度も哀願をするが、女はじゃけんにふり放す。

千姫が大きく手をたたいて合図すると、女中が酒瓶と盃をのせた盆を捧げ持って現れる。いわずと知れた毒酒である。大盃になみなみと毒酒が注がれる。

千姫は男に近づき、その首を抱きすくめるようにして最後の抱擁を与え、毒酒を飲めと命ずる。男は身をふるわして恐怖する。女中が盃をさし出すが受け取ろうとしない。



そこで千姫は女中に、盃を自分に渡すよう命じ、手ずから飲ませようとする。

千姫の手に毒酒が持たれるや否や今までおののいていた男がにわかに目を輝かし、千姫ににじり寄って、何のためらいもなく姫の手の酒盃に唇をつける。姫は残忍な微笑を浮かべながら、男の口の中に盃を傾け、一雫も余さじと吸わせる。

男は狂ったように千姫に抱きつこうと迫るが、千姫は身を引いて応じようとしなない。

今まさに死のうとする男を弄ぶのだ。

二度、三度、身をかかわされながら四たび千姫を求めて立ち上ろうとした男が、この時ガクンと後にのけぞり倒れる。

毒酒がまわって来たのである。男は空をつかんでもがく。女は微笑を深べて見下している。やがて男は苦しみ悶えながらセリの上どころがって行き、仰向けに寝たまま動かなくなる。

なる。

と、今まで微笑していた女の顔がキリリと引き締り、再び残忍な表情を宿すと、大腿に男に近づく。ひきずるような着物の裾から、目も鮮やかな真っ白い脚がこぼれる。ここでは脚を見せるための急ぎ足といってよい。

ここで、この劇は想像を絶する場面を展開して観衆のどきもを抜く。毒死した男の頭すれすれに立ち止った千姫は、そのあらわな脚を、仰向けに横たわった男の顔の上に上げて憎々しげに踏みつけるのである。

舞踊とはいいいながら、男の顔を女が踏みつけるような場面が、そうさらに見られるものではない。さすがに演出者も気がひけたか、同時にセリは下って行き、この珍しい場面はそう長くは目に止らない。

女の狂笑する声が下り行くセリの中から、高々と舞台一面に響き渡って幕となる。

男といわず女といわず、興奮しきった観衆のどよめきが客席からわき起るのだ。

二、お伝物語

新宿の、ある劇場。

高橋お伝的一幕である。

人物はお伝と巡査の二人。

泥棒の現場を押えられたお伝が、巡査に連行されて自宅に立ち寄っての一幕の舞踊劇。

お伝は、身支度をするまで待ってくれと乞う。巡査は仕方なく、これを許すが、これがお伝の術中に陥るものとなるのだ。

女はゆうゆうと肌を脱ぎ、念入りな化粧をして着物を着換える。男は見ぬふりをしながら盗み見る。

身支度を終ったお伝は、にわかに巡査の足もとに膝まずいて、見逃してくれと哀願する。巡査はにべもなくふりきって、すがる女を突き倒す。女はなお男に懇願する。これを幾度も繰り返す。

そのうち、巡査が烈しく女を突きのけたため、女は裾もあらわに押し倒される。太腿までさらしてお伝は舞台へ泣き崩れる。

男は、じっと白い女の脚を見つめているが急に気が変わったように女の脚を目がけて突進する。膝について本能の奔るままに女の脚を抱こうとするが、男が手を触れるや否や、女の態度は一変する。キッと身を起し、乱れた裾を直すのである。この時すでに女は勝ったのである。

支配者であった巡査が、今や女体を乞い求める被征服者となった。この変化がおもしろく演ぜられる。

驕慢な支配者となった女は、自己の手中に落ちた男を思うがままに料理し得るのだ。

女の魔力に魅せられた男は、かくも弱々しく女性の前に拝跪せねばならないのか。

女は、抱擁を求める男のきき腕をつかむや、キリリと逆をとってねじたから、苦痛にたえかねて床に四つばいになった男の上に、すばやく馬乗りになる。

男はもはや抵抗しようとしなない。女は気持ちよさそうにまたがったまま、武士の魂ともいふべき巡査の腰の剣を抜き取る。それを目の下に苦悶している巡査の顔に突きつけ、どうだ、わたしのいうことを聞くか！ というように迫る。

おそらくは、自分を縛って連行するのをやめればかわいがってやる、といった意味であろう。

馬にされた男は、黙ってうなづく。

お伝は満足げに馬を降り、おそらくは汗みずくであろう男の顔をいとしげに両手でかかえ、頬を寄せて行くとこで幕となる。

三、傲れる女

浅草の某劇場での舞踊劇。前の二つは時代ものであるが、これは現代ものである。

音楽とともに幕が開くと、一人の女が安楽椅子に腰かけ、雑誌に読みふけりながら、高々と組んだ足の爪先を、膝まづいた男に手入れさせている。

しばらくして女は雑誌を伏せると、のけぞるような大あくびをして、目の前にかしこまっている男の額を、思いきり足の先で蹴る。

男ははずみを食って尻餅をつく。

女は立ち上って仁王立ちとなる。男は女の前に膝まづく。

女は近寄って男の左頬に平手打を食わす。

男は右にころがる。なお女は男に迫り、今度は右頬を打つ。

男は左にころがる。

男は女の前に哀願するようにうずくまると女は、身をかがめて男に接吻するようなかっこうで近づく。

男は喜んで口をさし出した。

双方の唇がふれ合う寸前、女は男の顔に唾を吐きかける。男はびっくりして顔を手で

おう。ハンカチを出してふく。

すると、女は再びキスする真似をする。

今度はほんとうかと、これにこたえようと
する男に、またもや唾を吐きかける。

男は同じようにハンカチでふく。

こういう所作が舞踊の形で行われる。

男は立ち上り、女の手をとった。まさに踊
り出すかと思えて、女はやにわに男をふり放
し、四つばいにさせる。

見る間にその上へ馬乗りとなり、そのまま
男に命じて舞台の上を一周する。女が煙草を
とり出し、火を欲すると男はポケットからラ
イターを出して、膝まづきながら火をさし出
す。

女が一服したとき、電話がかかってくる。

女は右手に受話機をとり、右手に煙草を持
って、煙草の方の手で「こちらに来い」と合
図すると、男は行ってそこに四つばいとな
る。女は椅子代りにそれに腰かける。

女は電話を受けて話しながら、男に馬乗り
になる。煙草を持った手で男の髪をつまんで
いるから、煙草の灰が男の髪に散り、顔にふ
りかかる。

女はおそらく他の男と話しているのである

うが、馬にされた男はじっとこらえている。

電話が切れると、他の男が入って来る。

すぐ、女はその男に抱きついて接吻する。

二人はダンスしはじめる。もちろんチーク
ダンスである。

前の男はじっと見ている。しばらくして、
さすがに腹にすえかねたか、踊りつつある男
の前に近づき、胸倉をつかむ。

と、逆にその男に胸を突かれ、どうと倒れ
てしまう。

なおも立ち上って、向って行くが、今度は
決定的なノックアウト・パンチを喰って、床
に俯せに倒れたきり気を失う。

二人の男女はダンスを続け、接吻をかわし
合う。

やがて、二人は外へ出ようとする。

女は倒れている男に近づいて行く。

彼に同情するのかと思うとそうではないよ
うだ。立ったまま、靴先で男の頬を軽く蹴っ
て見る。

男は少し動く。目を開くと鼻先に女の靴が
ある。

男はぐったりした体をやっとふるい起して
左手をズボンのポケットに入れて、ハンカチ

を取り出すと、目の前に突きつけられた女の
靴をていねいにふき始める。

おそらく、女の外出する時の習慣なのであ
ろう。

易々として靴を掃除するのである。

女はいささかも傲然たる態度を失わない。
女王のように誇らかに、鷹揚な身のこなし
で男を見下しているのだ。

事実、男にとっては単なる奉仕ではなく、
心からの喜びなのであろう、氣力の抜けた表
情に、女に仕えることにのみ生気をとり戻し
た目の輝きで、せっせと靴をぬぐい続けるの
だった。

片方がすむともう片方の靴が、同様に男の
目の前に迫る。

それがすむと、女は、待っていた男と手を
携えて外に出て行く。

置き去りにされた男はぐったりとして、再
び地面に倒れ伏してしまうのであった。

筋らしい筋もない一幕ではあるが、私をと
らえて離さない印象を残して、しなやかな身
のこなしで男と女のある真実が繰りひろげら
れて消えたのである。

これは私一人の陶醉だったろうか……。

★ 罌駕籠によって地獄舟に運ばれたおたきの運命は？ ★

裏窓 地獄舟

紙草絵

中島 美 作 画

一、窓の顔

木の香も新しい据風呂の中で、おのれの統肌を、ほれほれと眺めている女がある。両国の水茶屋「萬屋」の看板娘で、国芳が一枚絵に画いたほどの美女だ。——名を、おたき……と言う。

好いて好かれて世帯を持った亭主の伊之助が、伊勢まいりに出かけて、今日は帰って来るはずという嬉しい宵であった。

伊勢へたつ前の晩、伊之助がしめした、しびれるような愛撫が思い出されて、それだけでなく、湯舟の中で上気しているおたきは、もう、うっとりとして、時刻の経つのも忘れていた。

——夕闇が迫っている……逢魔の刻である……。

おたきは艶然とした目で、湯殿の窓を見た。人の顔もさだかにできない刻限であり、しかし、湯気をおしてほんやりと人の顔が見えたのである。——人相のほどは、勿論判然としなかった。——ギクッとした。

「だ、だれだい？」

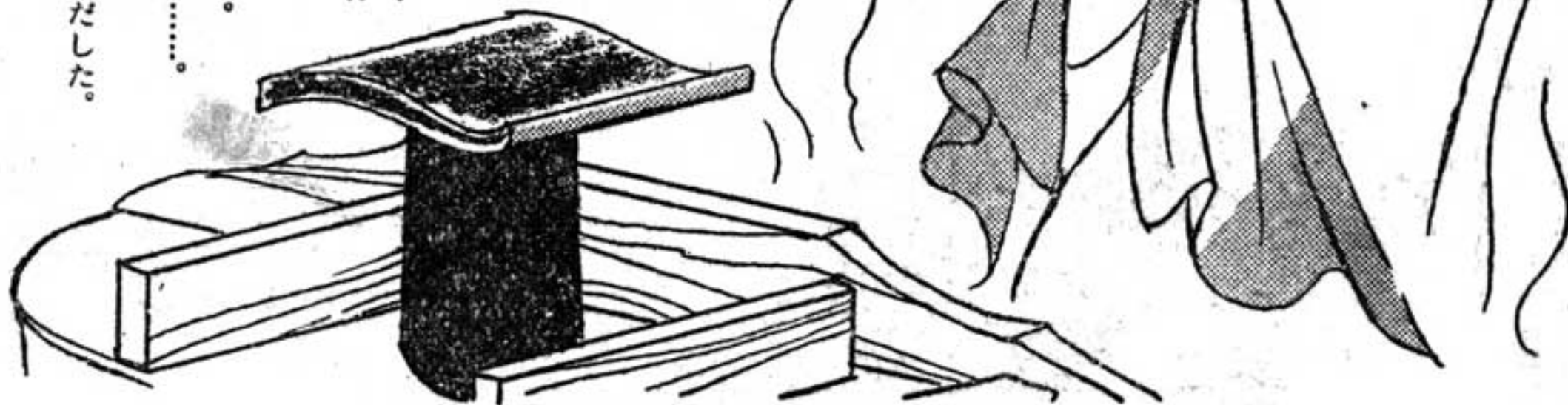
叫んで、おたきは胸を隠した。豊かに盛りあがった乳房が、恐怖と不安にふるえた。

黒い影のような顔は、しかし、微動もせず、おたきの裸身を見つめているようである……。

「ひ、人を、……人を呼ぶよっ」

鋭い声で、叩きつけるように言うと、ザブリ——湯をはねとばして、湯舟からとびだした。

湯殿の戸を開けて、濡れた裸身をそのまま、走り出す。——と、窓の人影が、つい——と離れたようである。





二、声

濡れた体を拭うまもなく、手早く着物をひっかけ、転がるように座敷まで来たおたきは、暗い庭の隅に立っている男を見つけた。

「お前さんは、誰だい?……」

坐ったまま、ふるえる声で呼びかける。

「ちよつくら聞きてえことがありやして。はア——、

玄関から声をかけやしたが、お声がねえもんで、はあ……

庭の方に廻らしてもらいましただ。」

相手は、どうやら田舎者らしい声音である。

おたきは、なんとなくホッとして、行灯に灯をつけた。

湯上りの顔が、まだホテっている。

三、使者

行灯の灯が、明るく庭先に流れた。その光に、くっきりと浮きあがった男は、三十余り、盲縞の着物をきて、見るからに田舎者然とした風貌である。

「えへへ……」

へっぴり腰で、おそろおそろ……そんな形で、縁先に近づいて来た。

「あのう……伊之助さん、ちう人のお宅は、

こちらさんで……?」

「あい。伊之助の家は、ここでごさんですが……そ

う言うお前さんは、どなたさんです……?」

「おたきは、しかし、警戒の顔であった。

男は、一歩前に進んで……もう一度ペコリと頭を

さげた。そして——

「はあ……これは、おかみさんでござえやすか。実

は伊之助さんに頼まれやしたので……へえ」

「エッ、うちの人……?」

おたきの顔がくもった。——何かよくないしらせ

……と思ったのである。

（——もしや旅先で、重病に……そして死……）

胸がドキ／＼しはじめる。思わす縁先に出る。

縁先は、ひんやりと冷気をつたえた。



四、良賭博

田舎者が、懷中から取り出した手紙を、行灯の灯をかきたてて、読み下すと、……品川の宿で、一行が解散の宴をやった揚句、よせばよいのに手なぐさみのはじまり、とう／＼いかさま師にひっかかって裸同然——その上、三両の金がなければ、帰るに帰られない始末だから、すまないが、この使の人に、金を渡してほしい……

——そういう文面であった。

たしかに手紙は、伊之助の手に間違いなかった。

品川まで来て、どうしてこんな馬鹿なマネをしてしまったのだろう——と、おたきは情なかった。使いの者の話を聞くと、伊之助が早く帰るといふのを、無理矢理ひきとめて、いかさまに引かかる結果をまねいたのだと言う。

（——うちの人が悪いんじゃない。他の奴が悪いんだ……）

おたきは、伊之助恋しさの一念で、疑いもせず、三両の金を、使いの男に渡してしまったのである。



五、雇い駕籠

「折角だけれど、おら一人で、この金を持って帰る途中に行つて、旦那と帰つて来たほうがよかつたべえ——」と、田舎者らしい正直さが、おたきの心を、まったく無警戒にさせてしまった。

（——そうだわ。知らない人に、お金を渡してしまふより、私が一緒に行つたほうが……）一刻も早く、恋しい伊之助の顔が見たかった。おたきは、早速着物を着替へると、隣家へ留守を頼んで、使いの男と一緒に外へ出た。

しかし、心がせくほど、かえつて女の足は、はかどらなかつた。それを見かねたように、はかの男は、「おかみさん、駕籠をやとうべえ」とどこからか駕籠を見つけて来た。ホイッ、ホイッと駕籠は走り出した。



六、疑惑

駕籠にゆられているうちに、おたきは次方に落付きをとりもどしていた。

伊之助恋しさの一念で、何も疑がわず、こうして出て来てしまったが、さて、考えてみると、どうも腑におちないものがある……。

風呂場の窓から見た顔——わずかな時間でありそれに影のような顔であったが……

(——でも、でも……たしかに、あの眼は……)

思い出した。

あれは、蛇のように、冷たい、いやらしい眼であった。

——それとも、思いすごしであろうか……？

むくむくと、不安な黒い雲が拡がりはじめた。

(——玄関から声をかけた……と言っていたけれど……)

思いかえしてみても、記憶がない。

そんな声は、たしかに聞えなかったはずである。

それに、物音一つさせず、風呂場の外から内庭に姿を現した男でもあった。

(——おかしい……)

田舎者らしく振舞ってはいるけれど、一つ一つ考えてみれば、あやしいことばかりだった。

(——いったい、なんのために……？)

ゾッと悪感が背筋を走った。——女の心の動きは微妙であり、怪しいと思えば、もう、その一念しかなかった。

ホイッ……ホイッ……ホイッ……ホイッ

そんなおたきの心を知ってか知らずか、駕籠は快調に走り続けている。

(ああ……どうしよう、はかられたんだ……まんまとままされてしまったんだ。——伊之さんは、一緒になったとき言ったっけ。おらア博打が一番嫌いだって……)

このままではいられない。おたきは腰を浮かせた。

(——逃げよう。逃げなけりゃ……そうだった……)



七、同じ穴の貉

「駕籠やさん、とめてちょうだい！」
おたきは、ついに大声をだした。——が、駕籠やは知らん顔の半兵衛で、ホイッ……ホイッ……と走り続けている。「駕籠やさん！」——もう一度叫んでみて、しかし、何の反応もないと知ると、これはもう、同じ穴の貉だと、おたきにも分った。わかれば、もうぐずぐずしてはいられなかった。垂れを片手ではねあげると、転がるようにして大地へ飛びおりた。「けっ……何をしやがる……」——後俵は、おたきにけつまづいて、駕籠をはうりだした。逃げだすおたき……けれども、その帯のはしを、田舎者が掴んでいたのだ。

八、蝮の権太

「誰か来て！」おたきは大声で叫んだが、場所は方角違いの大川端だった。「悪党！」「へっ。とうとうケツが割れたかい。いかにもおらゝ悪党だ。蝮の権太……これがおれさまの名前よ。——ふっ、両国の水茶屋にいた時から、おれゝお前に目をつけていたんだ。伊之助の野郎に横取りされ、おりがあつたらと狙っていたら、時と来き……へへっ、伊勢参りと来やがった。宇津の谷峠で待伏

せて、バツサリ……」

「えっ、うちの人を？」おたきは、目の前がくらぐらとした。——あの手紙……それじや

やっぱり偽手紙だったのか……。薄暗い行灯の灯……見間違えたのであろう。

「畜生ッ！」——さすが勝気なおたきも、伊之助の死を聞かされては、一度にドツと悲しみがこみあげて、その場に泣きぐずれてしまった。蝮の権太は、そんなおたきを見つめて、ニヤリとした。「おい、おたき。伊之助にかわって、今夜から、このおれが可愛がってやるぜ……ふふふ」ツツツ——と近寄って肩に手をかける。



九、半裸おたき

「たすけてっ！」肩に來た権太の手をはねのけて、おたきは必死に走りだした。——駕籠人足どもの姿は、もうそのあたりに見られない。——一つ穴の貉……鼻葉がじゅうぶん利いていたのである。

「おっと、逃げられてたまるものかい……」

男の足と女の足である。しかも、みずから蜷の権太と名乗るほどの悪党であり、身のこなしは常人でない。足もはやく、進退に敏捷であった。

「へっへへ」ぐいっと背後から抱きしめて、「ついさっき、風呂場で見たお前のからだ……ふっ、思いだしてもゾク／＼すっ／＼な」

力まかせに、するすると、おたきの身体を川端の方に引きずって行く。

おたきは、必死にもがいた。暴れた！髪がみだれ、胸もとが乱れ、おまけに、帯がとけて、すでもう半裸の姿である。

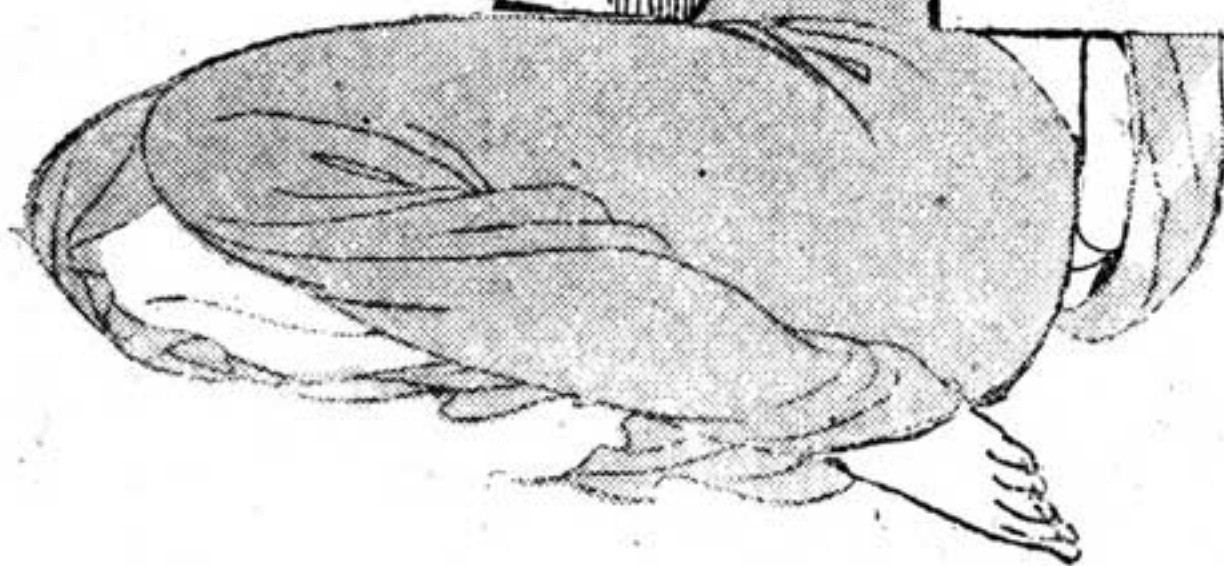
夜目にも白く、乳房が……太股が……くっきりと権太の目に映じ、激しくこの悪党を刺激した。（——へん、こんなところで邪魔が入ろうものなら、せっかくの楽しみが虻蜂とらずになっちゃいますぜ……）

なかば失神状態のおたきを抱いて、大川端のややい舟に乗り移る。舟の中なら大丈夫だ。だれにも邪魔をされず、ながい間の願望を、ゆっくり、たっぷり果そうという蜷の権太である。（——ふふふ……へへへ……）悪党の正体を現したこの男の顔は、みにくくきたなかった。



十、猿轡

フツとおたきは正気に返った。後手に縛られて、猿轡をかまされたまま、舟の中に放りだされていた。——舟がとまった。「それじゃア兄貴、しっほりと……エヘヘ……」下卑た声は、船頭らしく、こいつが舟をはなれると、鱧の障子がスーッと開いて、権太のやつが姿を現した。「へっへへ……気がつきアがったか。フン、そんなおっかねえ面アするな。い。これから、たっぷり可愛がってやるから……」ぬうっと、鼻先へ、その下司っぽいツラを持って来る。



十一、蛇の眼

権太は、おたきの両手を縛ったしこきを解きはじめた。……しかし、それは、おたきを自由にするためでなく、器用な手つきで、くるくると着物を剥ぎとると、ふたたび後手に縛りあげたのである。——むっちりとした二つの乳房が、もう権太の目から隠すすべもなく、おたきは怒りと羞恥で、涙がとめどもなく流れた。「へっへへ」いつの間に入れたのか、茶碗酒をグビグビやりながら、権太の目は、執拗に、おたきの剥きだし肌の上をはい廻っている。それは、蛇の目であった。——「ッ——と、男の手がのびる。」「——あッ——と身悶えすれば緋縮緬の腰のものが乱れて、白い脛が……太股……が、男の目に入る。」

——権太の喉欲が、このとき爆発点に達してしまった。

十二、絶望

フツと行灯が吹き消された。舟の中は月の光ではの明るく、おたきの裸身が、かえって妖しいまでに美しかった。「たまらねえやっ」

つぶやいて、権太の手が、最後の腰のもののへびた。……緋縮緬が、権太の手からすべり落ちた。……隠すべくもない、おたきの美しい全裸の肌が……白々と、この男の目の前に投げだされた。

おたきは、もう諦めて、観念の眼を閉じた。「——伊之さん……わ、わたし……わたし……死んで……死んでおわびします。……わ、わたしがバカだったんです、だから、だから、こんな奴に、——伊之さん、ゆ、ゆるしておくれ。バ、バカなこのあたしを……」権太の手が、近づいてくる……

「ううっ」

観念はしても、やっぱり、おたきは必死のオモだえをせずにおられなかった。

（——伊之さん……たすけてっ！）

叫ぶ声が、猿轡の奥で消えてしまうのだ。



十三、夢魔

「あッー——と、自分の声で、おたきは目が覚めた。

しかし……肩に、男の手が……びっくりして起き上った。行灯のあかりの中に、くっきりと見えたのは、恋しい伊之助の旅姿であった。

「あっ、伊之さん！」

叫ぶと、ワアッと抱きついた。

「どうしたんだ。いくら声をかけても出てこねえ。——変に思っ上ってみたら、うたた寝して、えらくウナされているじやアないか。え、どうしたと言うんだい」

「……よかったわ。夢だったのよ」

「夢……？ いったいどんな夢を見たんだ……？」

「……」——たずねて、しかし、伊之助の眼は、微笑を浮かべる眼であった。

「いいの。いいのよ……あんな怖い夢の話しなんかしたくないわ。——ほんと、ほんとに怖い夢だったのよ、ほ

ら、こんなに胸がドキ／＼して……」

おたきの白魚の手が、笑っている伊之助の手をとって、まだ動悸のしずまらぬ乳房の下へ、そっと誘った。

「ねっ。わかるでしょう……ねっ」

「ふふふ」と、伊之助が笑いだし、

おたきは、そんな伊之助の顔を、うつとりと見上げた。せつなくなってきた。

「伊之さん」叫んで、しがみついて、「死んじゃ嫌よっ！ し、死んじゃイヤ！」まるで駄々っ子のように泣きだしてしまった。「おい／＼、どうしたんだい？」伊之助は、あっけにとられた形である。おたきの肩を、力強く抱きしめて、ささやくように言う。「さびしかったんだな」「ええ」——フッと行灯の灯を消した。





愁風枯梗ヶ原

焼かれる女屋形から飛び出した
美少年に荒法師の眼が光った！

大門正人

木原三樹・画

遊び女成敗

秋の夜空を、紅い炎が舞い狂っていた。

月はない。漆黒の闇に、火は凄艶な地獄図絵を描きだしていた。

南都、興福寺に近い街道から、木立ひとつぬけたところに、軒をならべた遊女宿が燃えているのだ。

一軒、二軒だけではない。小高い丘を背に負って、十指に近い女屋がひとかたまりになっていた。屋形の全部が、一時に燃えはじめたのだ。つけ火であることは、疑るまでもない。

遊び女たちが、髪を乱し、衣紋のみだれもそのままに、つきつきと屋形から走りだしてくる。

だが——、秋草の繁るおもてにとびだしてきたとたん、女たちは、ハッ！と息をのんで足をとめた。

屋形のまわりを遠巻きにした黒い人の群れがいた。手には思い思いの武器を

構えているのだ。平鞘毛抜、革緒の野太刀。

長巻の太刀。根来塗、小反刃の薙刀。そう
かと思うと、鉈薙刀と通称される筑紫薙刀を
小脇にかいこんでいる者もいた。

いずれも頭から面へと、袈裟頭布をまきつ
けたくわ頭の姿。黒地紗の法衣の胴に、素掛
緘の腹当をしている僧兵の一団だった。

背に火を負いながら、行手を白刃のふすま
にさえぎられた女たちは、火の紛を袖ではら
いながら、燃えさかる屋形の周囲を逃げまど
うばかりだ。

右に走り、左に踵を返して、あかあかと照
らしたされた女たちの、必死な形相に、ただ
腕と脚とが白かった。

荒法師の数は三十人ちかくいたろうか。松
明をつぎつぎと投げこんでおいてから、ゆっ
くりと円陣をつくって、火に責めたてられた
女たちが演ずる、狂おしい乱舞のさまを、愉
しんでいる風ですらあった。

応仁から文明と改元された己丑歳の七月十
九日、秋色が濃くなりはじめた夜のことであ
った。

南都（奈良）の興福寺の周囲に、いつのま
にか遊女たちが集ってきて腰をすえはじめた
のは、応仁の乱がはじまる一年ほども前の頃

だったろうか。

はじめは各国の寺社から、浄財勧進の旅を
しながら男の相手をもする勧進比丘尼が、多
かった。そのうちに戦乱の洛中を逃がれて桂
女とか初瀬とか呼ばれる遊び女が加わって屋
形が造られるようになった。

女屋の主は、遊び女の周旋や世話をやきな
がら、彼女みずからも媚を売ることを惜しま
ない数間女であった。

殺戮を日常のこととしながら、女犯を戒め
られていた僧兵たちは、興福寺、春日社の寺
社領にまで、戦乱の舞台がひろがりはじめて
きたことに怒って、その示威の手はじめに、
山門に近い遊女宿に火を放ったのである。

「行達坊！ どこを見ておさる——」

一人が、どなった。

「なんと——？」

行達と呼ばれた僧が、振向くと、すぐ脇を
女の一人が走りぬけようとしている。

「うぬ！」

行達坊は手にした筑紫薙刀の柄で、女の足
をすくった。

転倒した女の打掛の裾がまくれて、白くふ
とい腿が、空を蹴っている。

「あ、あッ……」

女の唇が、炎をうけて玉虫色に輝き、かす
かにひらいた。うめき声が、命乞いの言葉に
なりきらないうちに、行達坊の振りおろした
薙刀の切尖が、女の面を走り、艶やかな唇を
ふたつに斬り裂いていた。

肩から崩れおちた打掛に、あらわとなった
女の首から胸へと、肌の白さを噴きあげる血
が、みるみるうちに染めていった。

「おうしッ。斬りまくられいッ！」

「いかにも——。一人あまさず女どもを地獄
に送るのじゃ！」

行達坊の一刃が、きっかけとなって、荒法
師が、女たちの間におどりこんでいった。

紅炎乱舞

炎は渦を巻き、中天めざして火の粉を金泥
のように散らしている。

杉の皮を葺き合せた屋形の屋根は崩れかか
って、柱のひとつひとつが、火の棒となっ
ていた。

「阿修羅とはこれか……」

白い肌を追い廻す、黒衣の一群からはなれ
て、うちながめている一人の僧があった。

頭を包む袈裟からのぞく眉は、まだ若い。
太刀は鞘に収めたまま、肩を越える棒

を、地につきたてるようにして、握りしめて
いる。

法衣の袖を、はたはたと揺すって、一陣の
風が吹きすぎていった。渦をなす火炎が、風
を募って、さらに火勢を増すのだ。

風が走りさるたびに、秋草が葉末を分け
て、地に匍いつくばる。

「ややッ？」

若い法師——了意坊は、地に伏した秋草の
間に、異様なものを見つけた。

木蘭地に薄紅の文様を配した被衣が、こん
もりとした山をつくって、風に抗しながら、
草の根株を分けて進んでくるのだ。

了意坊は、棒をとりなおすと、地に裾をひ
く被衣をはねのけた。

やわらかな手応えがした——、と、その瞬
間に、了意坊の眼前に一匹の獣がとびだして
きた。

小袖に奴袴をした童部^{わらべ}だった。しなやかな
身の処しかたが、生きのいい獣を思わせる。

「なんじゃ……。手負いをせぬうちに、はよ
う走ってうせろ！」

了意坊のすすめに、童部は、振分髪^{ぶんぱつ}の頭を
はげしく振った。

「いやだッ！」

童部は花びらのような唇を噛みしめた。手
には短かい刀をにぎりしめている。

「なに故に？ この屋形にかかわりのある者
か……」

「ちごうわッ。兄者の敵きを討とうとしてお
ったところをよ、ご坊らに邪魔だてされたわ
い！」

「なんと……。兄者への報復だど？」

「そうよ。京から流れてきおった辻君を——」

「ふうむ。して、その女ごは……」

「知らぬ！ 探しもとめて軒に身をよせてお
ったばかりよ。そこへ、おぬしらが火を放っ
てさえぎってきたものよ」

童部は口をつぐむと、眉をふるわせた。怒
りをこめた表情が、炎に紅く染って凄愴な美
しさを漂わしていた。

無言のまま、しばらくの間、向いあってい
た。その二人に、しわがれた声が投げつけら
れた。

「了意坊！ なにしておざるのじゃ——」

了意坊は、黙ってからだの向きをかえた。

自然と、童部を背にかばう恰好になった。

「おぬし、若僧に似ず、やることが素早い
……。あきれた奴よ」

濁った眼が、笑っていた。筑紫薙刀^{つくしなげ}を手に

した行達坊^{ぎょうだふく}だった。

「まあよいわ。了意坊よ。その小童^{こどう}を、わ僧
にゆずれ」

「それはなりませぬ」

了意坊は、心もち腕をひろげるようにして
とどめた。

「ふん！ まことをもって、さようにいわっ
しゃるか——」

「いかにも……。今宵の女屋毀滅の一举は、
この童部にかかわりのないこと故に……」

了意坊の制止を、しまいまでいわせなかつ
た。

行達坊のわずかにのぞく眼から、笑いの影
がすっと消えた。鉈薙刀^{なたなげ}の刀さきが、ぐいつ
と、了意坊の眼の前にのびてきた。

「えい！ 面倒な——。たかだか、年くらつ
た数間女^{すあめ}の慰みものであったろうに——。そ
こが、小童の細首を、すっ刎ねてくれるわ。
さばさばするだろうて！」

行達坊は、薙刀を構えなおすと、石突きで
了意坊の肩をこづいた。

「またれい！」

「うるさいわッ！」

行達坊は、薙刀の柄をひくと、からだごと
力まかせに了意坊をおしのけてきた。

さッ——。了意坊の足が草を摺って位置を
転じる。すばやい身のこなしが、無意識のう
ちに、手に携えた棒をもちかえさせていた。

「くそッ！ 手向いするとかッ！」

声と同時に、行達坊の薙刀が、大きな弧を
描いた。

炎を映した鉈刃が、了意坊の肩から胸へ、
柘榴割りに、喰いこむかとみえた瞬間——。

ガキッ！ という骨の碎けるような音が、は
げしくした。

宙に舞ったのは、了意坊が手に握っていた
棒だった。六角に削り鉄の籬をほどこした棒
が、ささらのように碎けてとんだのだ。

棒が地に落ちるよりさきに、行達坊のたく
ましいからだ、背を折って、秋草のなかに
つんのめった。

了意坊は、もといたところから四尺ほど離
れた位置に、すっとたっていた。左手で腰
の野太刀を握り、右の掌が刀の柄にのせられ
たまま、鞘をはらおうか、どうしようかと、
迷っている形だ。

行達坊は、地に伏せたまま、起きあがろ
う気配は、まったくない。

了意坊は、しばらく行達坊の黒地紗の肩の
あたりに眼を投げていたが、野太刀の柄にそ

えた掌をはなし、踏み
ひらいた脚を、ひとと
ころへともどしていっ
た。

秋草に埋った法衣の
からだから、つと、視
線を童部の方に移して
いったが、

「うッ！」

一瞬、狼狽したよう
に、大きく眼を見ひら
いた。

彼の足が、地を蹴る
と、呆然とたちつくし
ている童部のからだを
抱えこみ、暗い木立に
向って走った。

寄りそって建てられ
た屋形が、重なりあっ
て焼け崩れた。

炎が、秋草の葉末を
なめて地をはい、中天
に火の粉がきららのよ
うに散って消えた。



洛 中 午 下

地にふたつのながい影をひいて、西洞院にしのだういんの
大路を歩いていく者があった。

了意坊と女屋に忍び寄っていた童部の二人
である。

「戦いとは、むごたらしいものだ……」

「まことに、さようでござります。どれほど
の人たちが、ちりちりになって泣いておりま
すことやら……」

「菱丸、道を変えてゆくのでしょうか？」

「いえ、かまいません。ただ……」

童部の名は菱丸と呼ばれているらしい。

「ただ……」と、いつて言葉をにこらせる
と、眉に憂いのかげを宿した。

了意坊には、菱丸がなにを危惧している
か、察しがついていた。

未明に、山名、細川の両軍がこの辺で衝突
したものであったろう。焼け崩れた館、そし
て、甲冑をつけた屍骸が、そここにうち棄
てられたままになっている。

かたまりこびりついた血が、黒く変って、
西に傾いた秋の陽にさらされているのだ。

もっと不気味なことは、妙に静かなことだ
った。屍臭をもとめて、うろつきまわる犬の

姿すら見あたらない。

はるか彼方、有栖川の上にのぞめる樹木の
緑が、修羅のあとにいて、一抹の清涼さを感じ
させるのだ。

了意坊は、菱丸をとまって足をいそがせ
た。安居院あぐいんを過ぎて、賀茂にぬける。その辺
の樹林にはいれば、東西両軍の戦いにまきこ
まれることもないだろうと考えていた。

菱丸は了意坊におくれまいとして、足をこ
きさみに運んだ。だが、黙って戦場をつきぬ
けることは、不安に耐えられないのか、了意
坊を見あげた。

「御坊は、もう南都へもどられることがなり
ませぬのでしょうか？」

童部は、昨夜、自分を救うために行達坊に
さからい、そのまま共に南都を捨てた了意坊
の身を案じているのだ。

「いうな！ おぬしの知ったことではない。
いいのだ。その方がかえっていいのだ——」
了意坊の語気は思いのほか激しい。すでに
面を包んだ袈裟はとっている。

濃い眉のしたに、切れ長の眼が、若さをみ
なざらして鋭い。頬骨のたかいのが、精悍な
感じをあたえている。髪をのばして結い、武
具をつけたら、一人の武将ができあがるだろ

う。どこか毅然とした面影が、郷士の生れを
物語っていた。

だが、了意坊は自分の過去を忘れて、興福
寺の門をくぐり衆徒の群に身を投じたのだ。
家が没落していなければ、当然、学課に専念
する学侶となつたところだ。学侶には栄達の
道もひらかれている。それに対して、叡山の
堂衆、高野山の行人、南都興福寺の衆徒と呼
ばれる僧兵たちは、僧位を望むことはできな
かった。ただ乱世にあって寺を守るために、
武器を手にするこだけが勤めであった。

僧兵たちに宗教的な心はない。むしろ学侶
に対するひがみが、彼らをことさらに粗暴に
させた。殺生を好むのは当然前だ。僧兵とい
えば、野武士くずれの無頼の徒が、衣食の路
を求めて、その門をくぐつたものだ。

流離の果てに、了意坊が興福寺の衆徒とな
って、三年の月日がたつ。幼少の頃より、剣
の技を学んだ了意坊の腕は、同輩をぬきんで
ていた。だが、彼はおのれの技量をみせびら
かして、頭にたつ気がしなかった。粗放無頼
の僧兵の世界に、厭気がさしていたのだ。

了意坊は、唇を固くとぎすと、三歳にわた
る過去の暮しぶりを、苦い思いで想起してい
た。

菱丸は、急に不機嫌になった了意坊の横顔を、ただ、チラチラとふり仰ぐだけで、とりつくしまもない――。

了意坊の表情が、サッと一変した。自然と足がとまる。眉をよせて、耳をすましていたが、

「菱丸、騎馬がやってくるわ！」

と、低くささやいた。

「騎馬……、では、山名か細川の軍勢が？」

「軍勢というほどの数ではない。徒士をひきつれた小勢だ。物見のためか……、それにしても、一時、身をかくした方がよからう」

了意坊は、童部の肩をひきよせると、素早く、あたりに視線を走らせた。

「あの築地のかげに――」

了意坊は、菱丸の手首を握ると、崩れかけた塀へ向って走りだした。

塀の内は瓦礫の山であった。わずかに建物の跡をのこして、焼けただれた柱が粗炭のようにして、瓦礫の間に頭をのぞかしているばかりだ。

塀の崩れたところを、走りぬける。瓦礫に足をとられたのか、菱丸が転げた。

「うッ――」

菱丸は、かすかにうめいたが、唇を噛んで

声はださない。

了意坊が、掬いあげるように童部を抱くと築地の裏にしゃがみこんだ。

「痛むか？」

低くいたわりの声をかける了意坊に菱丸が、無言で首をふった。

「皮が破けずとも、肉や筋を損ねることもあるものだが……」

了意坊は、童部のからだをひきよせた。

「案ずるほどのことはありませぬ」

はにかむようにして菱丸は、笑みをつくつてみせた。まだ癒えやらぬ脛の痛みを、じいっとこらえている眼だった。

転んだ拍子に、浴びた埃が、まるで白粉のように童部の面を覆っていた。昨夜来、歩きつづけてきた疲れのかげを、土埃がかくしている。白い歯で噛みしめた唇だけが、濡れて、艶やかな輝きをのぞかせていた。

了意坊は、ついしらずと菱丸にかけた掌に力がこもった。秋の乾いた大気を透して、童部の汚れをしらないからだの匂いが、了意坊の鼻を襲ってくる。

「愛い童部よ――」

思わずでかかった言葉を、喉もとにとめると、了意坊はつき放すようにして、菱丸のか

らだにかけていた手を離した。

「おぬしの生家は、三条坊門にちかい土倉とかであったな……」

了意坊の話しかける声は、そらぞらしかった。

「もう、ふたとせも前のこと、いまは、あとかたも無うなっておざります。十ちかくも齡のへだたった兄者は、宵闇の辻にたつ遊び女とねんごろになり、その女この手引きにて、兵賊に襲われましてからは、すまいする屋形も失せました――」

「それが乱世というものよ。して兄者びとは、その折、兵賊の刃にかかったものかな……？」

「それが……」

と、菱丸はいいかけて、口をつぐんだ。蹄の音に混ってする、足軽の交す話声が築地の近くへと迫ってきていた。

馬上の女

轡くわの音から、馬は二騎と知れた。

徒士の従者は、十人とはいまい。

崩れた築地の塀に沿って、南へ下っていくらしい。

了意坊は、菱丸を塀の内側にうずくまらせ

たまま、からだをよじると、そつと塀の破れ目から小路の様子をうかがった。

了意坊は、ハッと息をのんだ。

一頭の馬の背に、女がのっている。いや、のせられていくのだ。腕を背に廻して、首から二の腕、さらに重ね合せた手首へと、女縄が、固く結ばれている。

女は腰を折って、胸を鞍にうつぶせていた。ながい髪の毛が、馬の進むのにつれて揺れた。髪の間からのぞく面は、厚い脂粉に装われている。瞼を閉じ、歯を喰いしばっているのか、紅の濃い口もとが、ひきつれたように痙攣している。あたりまえにたたせたら、見られる顔だ。だが、縄をかけられていても、からだ全体からにじみでた色気が、女の素性を物語っていた。辻に立つ女が、陣屋女郎としてひつくられていくのにちがいない。

騎馬にまたがった武家が一人、あとは五人ばかりの足軽が、埃だらけになりながら、女をのせた馬をとりかこみ、猥雑な無駄口をたたいていく。

了意坊が、興なげに身をひこうとしたときだった。

築地の崩れたかげから、菱丸が、脱兎のよ

うにとびだしていった。

「ややッ！」

了意坊には、菱丸がなにをしてくさそうとしているのか、瞬時、理解ができなかった。童部の手には、しっかりと、鞘をはらった短か刀がにぎられている。

「なんじゃ？」

徒士の一人が、叫んだ。

「小童のくせして、女を横どりしようという気かッ！」

「戦さつづきだと、童部までが、さかりのついた犬じみてくるわ……」

「えい！ 面倒な……。素ッ首を刎ねてくれようかい」

「待った。いっそ、この童部をも、引っ浚っていき、衆道好みの仲間に、売ってはどうかや……」

徒士たちは、すぐに横暴な振舞いにでるでもなく、いたぶり嘲笑っている。

「待て！ 放っておけ」騎馬にまたがった侍が、轡をもどしかけて、鋭く制した。「この女の方こそ、大事な獲物よ。急げ！」

采配ふる侍の一喝に、徒士のものたちは、踵をかえすと、菱丸を無視してかかろうとした。

が、その時——、一団の武者に挑みかかっていったのは菱丸の方であった。

徒士のあいだを小走りにつきぬけて、女がくぐられてある馬に迫った。

「なにをするッ！」

髭だらけの男が、菱丸の脚をはらった。

ころびながらも、菱丸は短か刀を横にはらった。切っ尖が、髭男の膝をかすめたのか、「あッちちッ！」

と、叫ぶと、大刀をぬいた。

大刀が、菱丸のあお向けになった、小さなからだに振りおろされようというとき——。

シューッ！ と、瓦の欠片が、その男の横面にとんだ。

「げッ！」

掌で、思わず顔をおさえた、その指の間から、タラタラと赤いものが溢れた。

了意坊は、築地の崩れ目に腰をかまえるとつづけて瓦を、ふたつ、みつつと投げた。

そのひとつが、鞍によった侍の、馬にあたったのか、一鳴きいなくなると、馬は棒だちになった。

馬の背から、侍の姿が宙にとんだ。

「童部にかわって、相手いたすぞッ！」

了意坊は、築地の破れ目を、とびだしてい



った。手には、しっかりと大刀が握りしめられている。

「なにをしやる。この、糞坊主め！」

「邪魔だてする気かッ！」

口に喚きながら、半円を描いて、了意坊をとりかこもうとする徒士の群を、馬を失った騎馬武者が、押しのけた。

馬の背を離れながら、その武士は、すつと地に足をついて、よろめきもしなかった。

了意坊も無言ならば、その武士も無言だった。殺気だけが、みなぎっていた。

突然、了意坊のからだ、横に走った。

「うッ！」

徒士の一人の手から

短柄の槍がこぼれた。

了意坊は、太刀を左にもちかえると、足もとにころがった槍を拾いあげた。

一人、二人と襲いかかってくるのに、槍をひと振りして、おしとどめると、足の向きを変えた。

「やッ！」

短い声が、了意坊の唇を洩れた。その手から槍が、徒士の頭を越えてとんだ。

女のうめき声が、かすかに聞えた。だが、了意坊の投げた槍は、女を傷つけたのではなかった。馬の尻につき刺ったのだ。

女縄縛りに、しっかりとくくりつけられた脂粉の女を背にしたまま、馬は、もうもうとした土埃りの渦をのこして、駆けだした。

北に向って、狂ったように走る馬を、菱丸が追っていく……。その姿を目にいれると、了意坊は、空いた右手を太刀の柄添えて、

「さあ、かかってこい！」

異形の者

秋の日あしは早い。

了意坊は、緊張のときやらないからだを北に向けて進めていった。

汗のにじんだ肌に、日暮の風が冷たくしみた。刃を受けて、衣のところどころが裂けていた。腕と手の甲とに、浅い傷が、チリチリと疼いた。

徒士の者二人を斬り伏せた。騎馬を棄てた武士と、二、三合斬り結ぶうちに、相手の方から延引を申しでてきた。

「坊主！ 無益だ——。わしたちは引揚げるが、よいか、無駄な追討ちをいたすなッ……」

その言葉に了意坊はうなずいた。彼としては、童部を救ってやるだけの意向でこそあれそれ以上に、殺生をする所存はなかった。

いきりたつ輩下に下知して、侍格の男が洛南へ去るのを見とどけると、太刀を鞘に収めた。

女をのせた馬の影も童部の姿も見当らない。

ただ、埃っぽい路上に、点々として、傷ついた馬が、のこした血の滴が、のこされていった。了意坊は、その跡をたどって、足を急がせていった。

陽は大文字の峯からつづく衣笠山のあたりに没しようとしている。

日の暮れきらないうちに、了意坊は、血が

印した道標を追った。戻橋の脇をすぎて、洛外に向う。河原に沿って、秋草のたけが高い。虫のすだく音が、了意坊の足につれて、止んでは、また、鳴きはじめる。

うち棄てられた廃寺の軒が、一群れの木立にかこまれて望めた。

つい——と、了意坊の足がとまった。血の匂いを嗅いだのだ。

草を分けて、堂の脇に廻ると、馬が脚を折る恰好で、こときれていた。太い頸を刀でえぐられて、流れだした血が、草を染めて、日没のしずかな大気に生ぐさい匂いをこもらせている。

馬の背に女の姿はない。女縄縛りからめてあった縄が切りほぐされて、棄ててある。

「何者の仕業だ……。それにしても、あの、童部は、この辺へまで追ってきたものか………?」

了意坊は、自らに問いかけながら、廃寺に寄っていった。

妻戸を押してみることもなかった。半蔭が朽ち落ちた隙間から、しのびやかに人の声が洩れてくる。

「……あれほどに、いうておるではないか。わしが死ぬまで、表にでてくれるな……」

うつろな声だった。

「でも、五条の医師に手当てをいただければ、癒ゆるかと思えまする」

「いうなッ！ たとえ、この傷が癒えたところで、ふた眼とみられぬ形相をのこして、なんの生計の途があるというのだ。わしは御武家ではない。土倉を業とする市井の商人だ」

「いえ、あなたさまに御苦労はかけませぬ。わたくしめが……」

女の言葉を、陰惨な男の声がさえぎった。

「やめてほしいわ。そなたが、からだをひさいでまで、生きながらえたいとは思わぬ」

「で、でも……一度、兵賊の手にかけられてなぶりものにされたからだ……」

「やめぬか……」男は、深く一息すると「運がなかったのだ。そなたは家を失い、末は二世と契ったわしとも、はなればなれになった末に、陣屋女郎を強いられた。このわしはわしで、兵賊に傷つけられて、ふたたび昼日中の大路をも歩けぬ身となった……」

「でも、こうしてめぐり逢うことができたのも、深い因縁があつてのことと思われまする」

「そこよ。だから、たつて頼むのじゃ。このまま、わしがみまかるときまで、せめて身近

かにいて欲しいと……」

了意坊は、馬道に足をかけてなかをのぞきこんだ。

「うッ……」あやうく驚愕の声を洩らすところであつた。

太刀を杖に片膝ついた男の顔——。左半顔を、額のきわから簷でこそぎ落したように、肉が削られているのだ。片眼が萎えていた。その下に、骨がむきだしになつてのぞいてさえいるのだ。

男の足もとに、背をまるめてうずくまつてゐる女の姿があつた。

破れた半蔀から射しこむ、あわい光に浮びあがつた一組の男女。了意坊は、つと顔をそむけると、馬道にかけた足を地面におろした。

砂を噛みしめるような思いだった。戦乱は、まだ他にも、市井の人々にこのような不幸な宿命を振りまいていく。索漠としたものを味いながら、彼は、そつと堂を離れようとした。

その時である。

切懸のかけに、身をこらしている菱丸の姿を見たのだ。童部のからだは、おこりにでもかかったように、小刻みにふるえていた。

「やはり、そうであつたか……。あの異形の容貌に変じた男は、菱丸の兄者人であつたのだな——」了意坊は直覚した。

童部は切懸に身をよせたまま、了意坊の近づくことに気づかずにいる。

童部の背後に迫ると、いきなり小さなからだをすくいあげた。了意坊の大きな掌が、菱丸の眼と口とを、しっかりと覆っていた。

陽は山稜にかくれたばかりだった。

一面に桔梗の原が、つづいていた。もう、廃寺の軒は遠い木立のなかに没して見えない。

濃紫の桔梗の花を踏みしだきながら、了意坊は、抱えこんできた童部のからだを、地におろした。

「忘れるのだ。忘れてしまえ！」

菱丸は、了意坊に背を向けて立つたまま、応えなかった。忘れるとも、忘れえないとも……。

その頑な背に向つて、了意坊は重ねて、声をかける気にならなかった。

煮えたぎった湯が、胸の底で渦をまいていくような思いにかられた。怒りともつかぬ、激情だった。

微かな風が、野の果てから渡ってきた。

その風に誘われたようにして、童部は一歩踏みだすと、桔梗の花むらを分けて走り出した。

了意坊は、唇を噛むと、いつか右の掌を太刀の柄にかけていた。

「斬ることが、慈悲か——」了意坊は、心の奥で呟いた。

木立にまもられた廃寺へ引返して、薄倖な男と女とを、斬ってしまったら……と、考えたのだ。それが、あの二人を結ばせることになり、菱丸から、うず黒い記憶を断ちきることになる。

太刀の柄に手をかけたまま、了意坊の足は動こうとしなかった。眼は、走りに走っていく菱丸の姿を追っていた。童部のからだは、突然、桔梗の花に埋まるようにしてとまつた。了意坊は、左手を太刀に添えた。右の掌を柄頭から離すと、立ちつくしている童部を目かけて、走りだした。

桔梗の蕾が、ちぎれてとんだ。

「そうよ。戦乱のない遠国へいくのだ。あの童部をともなつて……」

桔梗の蕾が、落ちたあたりには、もう、薄い闇がただよいはじめて、その濃い紫を音もなく吸いとっていった。



少年慕情

万年娘

笹本透

★小さな生人形は、こましゃくれた手つ★

★きで扇をつかいながら少年に笑いかけた★

「さあさあお入りお入り！ 信州丹波の山奥に、親は代々馬喰稼業、ピシリピシリと追い使う、畜生共のその怨み、親の因果が子に報い、あたらしい町の姉いもと、生れながらに角が生え、手足の指は節くれて、ひづめになるも身の因果、花のきりょうを持ちながら、二人ながらに牛娘、かわいそうなのはこの子でござい。かわいや哀れと思うなら、見ろが功德だお客さん、親代々の罪ほろぼしに、花はずかしい身をさらす、くだん娘だお入りお入り」

むしろを垂らした粗末な小屋掛けの前で、だみ声を張り上げる男の呼び立てるのを聞けば、幼な心によくはわからないがあわれな身の上の、美しいという娘達のおもかげが眼の奥にほの白く浮んで来る。

祭りにはぎやかだった。

七つの新吉は、小僧の竹さんの肩車に乗せられて、こつた返す神社の境内を歩き回っていた。

腰の巾着には銅貨が一ぱいつまっていたし、山吹鉄砲、

吹き矢、絵本と、何でもほしいものは買って兵児帯にはさんだり竹さんのふところへねじ込んだりしたが、新吉はきげんがよくない。

見世物小屋を竹さんが見せてくれないのだ。

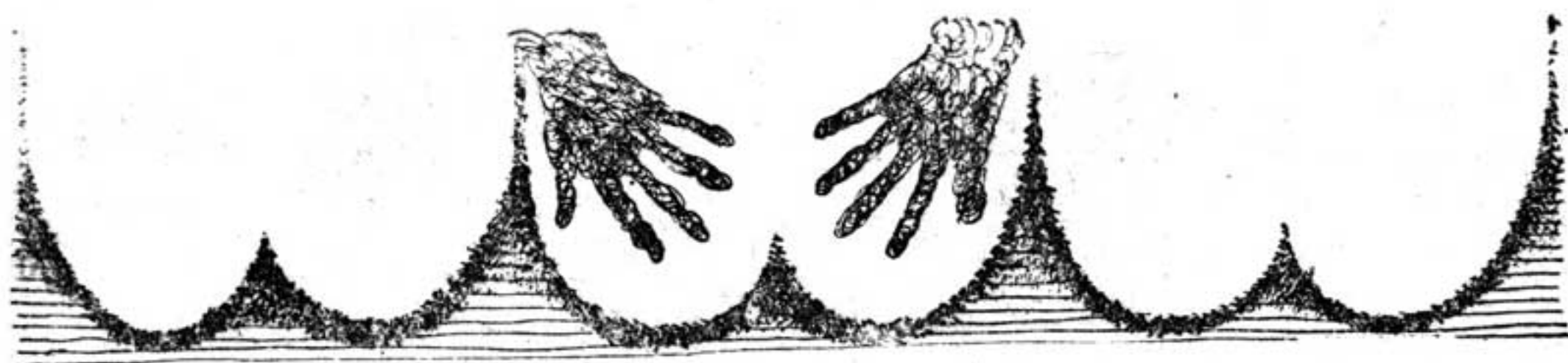
母にいい含められて来たのか、くだん娘も蛇使いも、しばらく立ち止って口上を聞くだけで、決して入ろうとしなかった。

因果ものの小屋は薄暗くしめっぽい日かげの感じだが、のぞき込みたいおもしろさがあった。後めたくはあるが、それだけに心をひきつけるのだ。

新吉がじれて、ぐずって、肩の上でバタバタするのを、竹さんは電気飴でこまかそうとする。

手にベタベタからむ電気飴を食べながら、忘れるともなくにぎやかな店々に興味を移しておとなしくなる新吉を、ゆすり上げながら竹さんは歩き回った。

神楽堂の裏手の人だかりに足を近づける。



真ン中に見えているのは、小屋がけでも露店でもなく、三尺ぐらいの高さの木の台を前に、何やら齒をむいてまくし立てている男である。

時々木の台をバシッバシッと扇子のようなものでたたきながら、ぶら下げた大きなバスケットを持ち上げて見せる。

早口でよく聞き取れないが、何でもその古ぼけたバスケットの中に、とつびょうしもない生物が入っているらしかった。

「さあお立ち合い！ 今見逃したら最後、コンリンザイお目にかかれねえシロモノだよ。見るは眼の法楽、あとから聞いて悔んでも遅いよ。子供が見たら夜泣きする、そんな化物とはものが違う」

早く開ければいいのに……竹さんの気の変らないうちに。新吉は、のどまで好奇心がつまって来た。息を詰めるようにして、バスケットを見守った。

「坊ちゃん、きつと猿ですよ」

竹さんは、わかったのが得意そうに、あたりに聞えよがしにいった。

「犬でもない猿でもない、正真正銘の生きた人間だよ。うそつきやあがれ、こんなちっぽけなものに人間が入ってたまるかっておっしゃいますがね。生きた人間が出て来たらどうします？ 開けてびっくり玉手箱、腰を抜かすはまだ早い、三国一の花嫁だ」

新吉はわくわくして、竹さんの首に回した手に力をこめ

た。

バスケットは大型ではあるが、人間一人入るだけの容積は、どう見てもなかった。

竹さんはフーンとうなる。

新吉は、絵本のかぐや姫を思い出ししていた。

竹の節の中にいる光り輝く美しい女の子。

大好きなお伽話だったが、ただ一つ物足りないのは、そのかぐや姫が竹の節から出るとだんだん大きくなって、しまいには普通の大きさの娘になったということだ。

いつまでも小さいまま、美しいお姫様でいたらいいのに……。そうすれば人形の着物はみんな着られるし、どこへでも連れて行ける。

「さあさあお花ちゃんや。お化粧はできたかね。皆さんお待ちかねだよ」

おやじはバスケットを下に置いてささやいた。

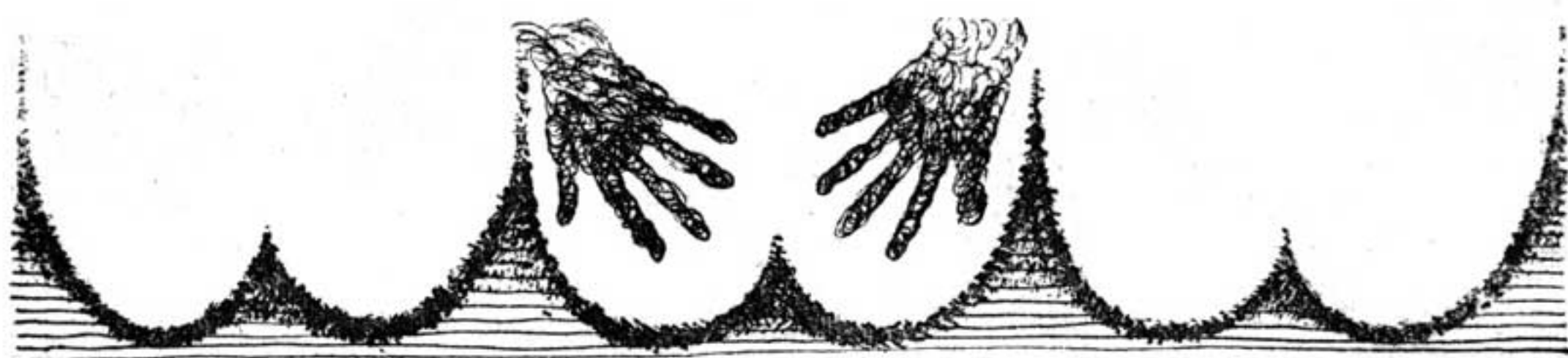
「猿だな、やっぱり」竹さんはつぶやく。

おやじはバスケットの止め金をきしませて蓋をあけると、すくい出すような手つきで中から取り出したのは、赤い着物を着た人形だった。いや、二尺に足りないほど小さい女の子だった。

白粉を鼻すじに棒のように塗って、見たところ七八つの幼い顔だったが、

「こんにちわ」

とおじぎをした時の声は、長屋のかみさんみたいにきんきんした年増声だった。



どよめく人々をけろりとした顔で眺めている。木の台に腰かけて、小さい足袋をはいた人形みたいな足を二本ぶら下げ、手に人形の扇を持ってこましゃくれた手つきであおいでいる。

「どうです皆さん。この娘は当年とって十八才、鬼も十八番茶も出ばな。この子は万年娘だよ。何年たっても十八だ。これつきり大きくならねえ代りには年もとらない。嫁にもらってごろうじろ。第一乗物がロハだよ。電車がただ、汽車がただ、乗合がただ。一切がっさいおあしがいらぬ。こんな徳用な嫁さんはいないよ」

「嫁にくれえ！」と誰か叫んだ。

新吉はどきんとした。どっと笑いが起る。

「どなたもほしいとおっしゃるが、娘一人に婿八人、引く手あまたでおやじは困る。娘嫁にはただではやれぬ。先立つものは嫁入り衣裳、たんす長持夜具ふとん、何から何まで揃えた上で、ハイ上げましょうまいしょう」

とどのつまりは投げ銭を集めに、花ちゃんを掌に立たせて持ち歩くのだ。

花ちゃんは、おやじの着物の端を片手でつかみ、片手にボール箱を持って突き出す。

一銭、二銭と銅貨が投げ込まれた。

新吉も巾着を探って一銭取り出したが、竹さんはおやじが金を集めにかかるころからそわそわして、こちらへ向って来ると素早く身をひるがえして人の輪の外へ出た。

「もっと見ようよ、おもしろいよ」

肩で足を突っ張ったけれど、竹さんは足をゆるめない。

家へ帰ると、にぎやかに叔母や従姉達が祭に招かれて来ていた。

新吉は小さい従妹の光子を認めて、うれしかった。一つ年下で、仲好しであった。

房々した髪を肩まで垂らして、大きなリボンをつけ、華やかな着物を着て京人形のようなのである。おとなしい性質で、暴君の新吉に素直に従う唯一人の従妹だった。

「光ちゃん、遊ぼうよ」

先に立って庭へ出ようとするが、光子はいつになく強情に、きれいな着物を汚しそうな遊びに賛成しない。

「ようし、それじゃあ見世物ごっこをしようよ」

万年娘を見て来た眼には、光子は大き過ぎたが、バスケットより大きいれものを探しさえすればいい。

ぐるぐる家中を回って、やっと納戸の押入に長持を見つけた。幸い、中にはいくらも入っていなかったのので、引き出してしまった。薄暗い納戸の隅にある長持の中へ、入れといわれて光子はおもしろがった。

入ってしまうと、新吉はふたをする。

急に暗くなったので光子はこわがった。

「兄ちゃん、いや！ あけて、あけて」

「何だ、すぐそんなこといって。入ったばかりじゃないか」

どなりつけたが、仕方ないから少しすき間を作って光り



を入れてやることにした。

それでも出たがって、頭でぐんぐんふたを突き上げるようにするのを、ふと新吉は、飛ぶ虫をつかまえて箱に入れた時を思い出した。

もう万年娘とは別の興がわいて来て、いきなりふたをしっかりしめて、その上に乗ってしまった。

「ばかア、兄ちゃんのばかア、こわいよう」と泣き叫ぶ声がくぐもって響く。

「光子はどこへ行ったの」

廊下で叔母達の声がする。

新吉は首をすくめたが、降りようとはしなかった。

閉じ込めている間は、光子は完全に彼の支配下にあるのだ。

「新吉、新吉！」

呼び立てるのは母だった。

（そうだ、おやつかな？）

そう思うと、飛んで行きたくなかったが、光子の状態に氣づいて、おとな達の前に出るのがためらわれた。

急に元気をなくして、長持から降りる。

そつとふたを持ち上げると、泣き声は高くなった。髪は乱れてリボンがとれてしまい、涙で顔はくしゃくしゃに汚れている。

「早く出ろよ」

まだおどし文句を並べながら、手を貸してやるのをふり向きもせず、光子は泣き続けていた。

やがてその泣き声を聞きつけて入って来た母や叔母に、当然新吉はきびしく叱られてすくみ上ったが、光子はますますはげしく泣いた。

乱れた着物を直そうとした叔母が、突然声を上げた。裾がぐつしより濡れていたのだ。

「まあまあ、いい着物をすっかりぬらしちまって」

驚いた母は手伝って光子の着物を脱がせた。

小さいじゅばんに薄紅いお腰だけにされた光子は、人形のようにおとなしく立っている。

着がえを探しに母が立ち去った後、叔母は、「寒くないわね？ぬれたものつけているとかえってかぜをひくから……」

つぶやきながら、光子のお腰をはずした。

じゅばんの下から白い二本の足が細々とびている。牛乳のような白さだった。

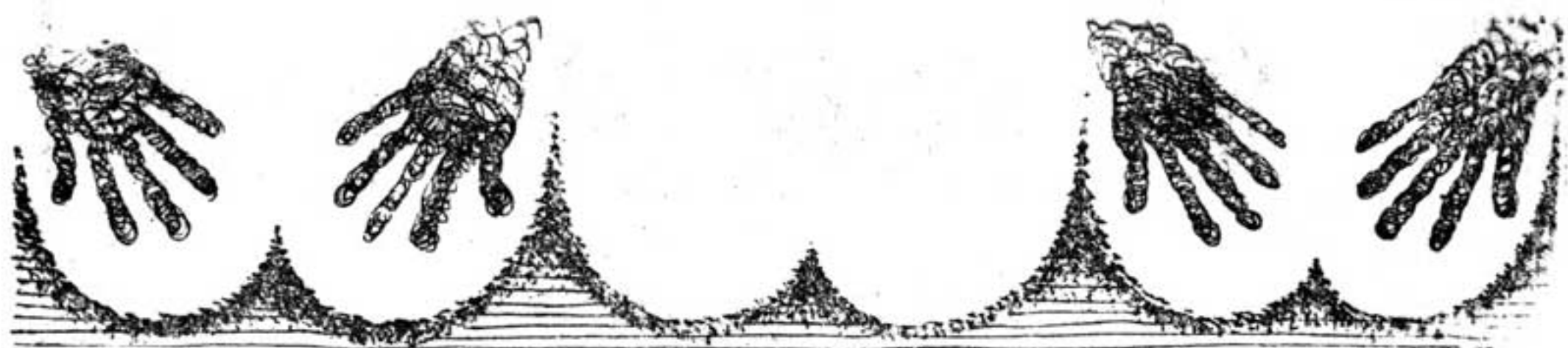
それから二三年後――

新吉は近くの野原にかかった小さなサーカス小屋で遊んでいた。

彼らの仲間は、日ごろ遊び場に行っているこの野原に、巡業して来た一座のテントをいい根城にして、雨の日になると興行のないのを幸い、もぐり込んで行ったのだ。

水かき娘の久子がすぐ友達になった。

彼女は足の指の間々にうす黄色い半透明なゴムのような水かきがあるだけで、他に異常はなかった代り、何の芸も



なかった。

新吉が万年娘花子の消息を聞いたのは、この水かきの久子からである。

久子と花子は、物心づくところから一緒に物置小屋のようなどころに、不思議な一家族をなして育てられた。

花子がどこから連れて来られたのか、誰も、知らなかった。

ただ、一家の者が花子の方を大事にして、小母さんが仕立屋の裁ち屑をもらって来ては美しい着物を作って着せていた。

幼い久子は妬ましくて、よく花子をいじめたが、小さい花子を家中でかばって、久子が折檻を受けることになるのだった。

その花子が、数年前によその小父さんに連れられて行く時には、二人とも悲しくて泣き叫んだという。

花子はバスケットに入れられるのをいやがって暴れたりもがいたりするのを、ぐいぐい押えつけてふたをしてしまい、小父さんに提げられて行ってしまった。

それから一度も会わないままに、去年の秋ごろ何かの病気で旅先で死んだのだと、仲間から聞かされた。

新吉は、あの小さな女の子が、何の意志も持たされず流浪のはてにそうして死んで行ったというみじめさに、暗い気持になった。

妙に沈んで、ろくにはしゃがないその日の新吉を、腕白仲間はあやしんだ。

祭でもない季節はずれに、こんな原っぱにひっそりとかかったテント小屋は、どうにも動きのとれない状態だったのだろう。

因果ものなども座員に入れるくらいの一座だから、大したメンバーでもなく、がやがやたむろする子供達のきまっただ顔ぶれだけを相手に、それでも半月ぐらい、居すわっていた。

新吉が、通いなれたテント小屋の前を通ると、木戸番の男や白粉を壁のように塗った女達が、けたたましく笑いこらげていた。

「どうせ久公のことだ、あてにやあならねえよ」

「千三ツの久公だからね」

大人達の注目を集めて、得意そうにニヤニヤ笑っている久子は、先日新吉に万年娘のことを話した時の、きまじめなもったいぶった態度は全然なかった。

大人達が何を久子にかつがれたのか知らないが、新吉は不愉快な気持だった。久子のいうことがすべてうそのように思えて来た。

テント小屋は、ある日突然なくなっていた。

何もないもとの野原で小屋のあったあたりに立ちながら、何もかも、あの流れ者の世界のことはわからない気がした。

万年娘はまだ、どこかの町をバスケットに入れられて流れ歩いているように思えるのだった。

事件 殺人 宿 温泉

前夜追い返した娘が死
んでいた／疑いは二人
の客にかかったが……

川野 京 輔

(一)

もうじき広島県と島根県の境にある赤名峠が近かった。

「昨日まではこの辺りは、大変だったんですよ。豪雨で山は崩れる土砂は流れる——この国道も今日、ようやく開通したんですよ」
運転手はけわしい蛇行した道を慎重なハンドルさばきで大型トラックを走らせていた。

このトラックは松江と広島を結ぶ特急貨物便だった。

中国山脈を横断して、八時間で飛ばすのである。

「じゃ次の部落で降ろしてもらいます、どうもお世話様でした」

松江から同乗していたラジオ日本海の新番組プロデューサーの茅野は隣にいるアナウンサーの藤田と目くばせをしながら言った。

「松江広島特急便トラックに同乗して」

という録音構成物をとるために、デンスケ（小型録音機）を運転席に持ち込んで、疾走中の運転手の話や、道路の不整備などを描写して、一般の関心と当局の反省をうながそうという狙いだった。

松江市を出て、やがて山にかかる、その道路のひどさは想像以上だった。

昨日まで一週間降りつづけた豪雨のせいばかりではなかった。

「この道は、いつ通っても必ず一度や二度は胆を冷やされますよ」

運転手が言う通りだった。

片側はそそり立った岩肌が様々な様相で道に切り込み、反対側は絶壁で、はるかに下を



急流が、すさまじい音をたてて流れていた。

大雨の後だけに濁った水が岩にぶつかって飛沫を高くとばしていた。

「こんな処へ落ち込んだら、一卷の終りですね」

まだ若い藤田アナウンサーが首を縮めた。

トラックは轟音と共に一気に峠を登り切ると、小さな部落に入った。

「じゃ、ここで降りられますね、帰りはどうされます」

運転手が聞いた。

「ゆっくり、この部落の温泉で汗でも流して明日の朝、バスで帰ります。どうもありがとうございます」

茅野は、記念品を運転手に渡した。

「済みません、じゃお元気で」

再び、エンジンの音を響かせながらトラックは細い道を彼方へと消えて行った。

「凄いですね、運転台にいたのに、顔も手もほこりで真っ黒」

おしゃれな藤田は両手で何んべんも顔をこすった。

「ほこり、高き男か、ちようどお似合いじゃないか」

「冗談じゃない、茅野さん、私をこんな処へ

引っぱって来て。第一、ここにや、宿があるんですか」

「ハッハッ、心配するな。ここにはね、風流な温泉があるのさ。あまり人には知られていないが、野天風呂でね」

二人はデンスケを担いで歩き出した。

野良帰りの人々が、じろじろと物珍しそうに二人を見ていた。

「さてと、弱ったな。温泉なんかなさそうだな」

「えっ、大丈夫ですか茅野さん。こんな処に温泉があるなんて誰に聞いたんです？」

「チーフアナウンサーの三谷さんさ」

「そりゃ駄目だ。あの人は平気で冗談を言うんだから。今頃、放送局で笑っているんじゃないですか。私達を迷子にする気ですよ」

藤田は不安そうに、たそがれ近くなった山村の、うらぶれた風景を眺め廻した。

「誰かに聞いて見よう」

茅野が言った時、

「茅野さん、私が聞いて来ますよ」

藤田は、ちようど横のあぜから出て来た一人の娘の方へ走って行った。

相変らず女には目が早かった。

「茅野さん、この人が案内してくれるそうで

すよ」

嬉しそうに叫んでいる。

茅野が近づくと娘はぺこりと頭を下げた。のびのびと何の遠慮もなく伸びたと云った大柄な体に、あどけない顔がちょこんとついていた。

茅野も藤田もあまり大きい方ではなかったので、並んで歩き出すと、余計に娘の体格が立派に見えた。

「放送局の人ね、私、あのドラマが大好き」

そう云って娘があげた題名のドラマは、茅野達の放送局ではなかった。

しかし娘はそんな事に頓着なく、

「いいな放送局は、あのドラマを実際にやる処が見られるんでしょう。私、アナウンサーになりたいんだ。アナウンサーになれるかしら。ねえ、なれる？」

全く無邪気な娘だった。

「なれるさ。しかし、そのためにはいろいろと勉強しなくちゃ駄目だよ」

藤田がもっともらしく言うと、

「そう、じゃ今晚、教えてもらいに行く。いいでしょう」

ぱっと顔色を明るくして言うのだった。

藤田と茅野は、思わず顔を見合せてしまっ

た。

「大丈夫かい。夜なんか温泉宿を尋ねて、お母さんがおこらない？」

「おこらないわ、だって、あんた達、私の家へ行くんだもん」

「えっ、じゃ君の家が温泉か」

またまた二人は顔を見合せてしまった。

(二)

そこは温泉などとは名ばかりの普通の民家に過ぎなかった。

ただ裏庭に露天の温泉があるだけだった。

しかし、たまには客もあると見えて、一応二階には、いくつかの部屋が用意してあった。

電燈もなく、昔ながらの行燈が、薄暗く部屋を照らしていた。

「風呂へどうぞ」

さっきの娘が案内に来た。

もうすっかりあたりは暗くなっていた。

露天の温泉からは湯気が立ちのぼり、側の松の木の枝には提燈がつるしてあった。

藤田が先に入り、後から続いて茅野が入ろうとすると、娘も、するすると着物を脱ぎ始めた。

二人がハッと息を殺して見つめるのもかま

わず、娘は、生まれた時そのままの姿となつて風呂の中へ入って来た。

「さあ、背中流しましょう」

柄になくテレている藤田の手をとって洗い場へ引き上げて、たんに洗い始めた。

ほんやりと茅野は娘の裸身を見ていた。

何んという、すばらしい曲線だろう。

抜けるように白い肌、豊かな胸の隆起、ぐっと張った腰、そして長い脚、茅野は提燈の明かりに、シルエットのように浮び上った美の化身に見とれていた。

それにしても、日頃、バーやキャバレーの女の子を相手にふざけ散らす藤田が、ここにちぎに堅くなつて身の置き処もないくらいに当惑しているのがおかしかった。

この娘のように、かえって大っぴらに裸になられたのでは藤田も手が出ないのだろう。

ほんやり見つめていると、急に娘がふり返つて、

「助平、人の体をそうじろじろ見るもんじゃないわ」

と一喝したので、茅野は真赤になってしまった。

「さあ、今度はあんたよ」

そう言われると、茅野は余計にどきまぎし

て風呂を飛び出してしまった。

「どうしたのお客さん」

娘の声がしたが、茅野はかまわずに部屋へ戻り、ごろりと畳に横になった。

まだ目の前に娘の裸がちらついている。

ふと家にいる妻と子供の姿を思い浮べた。

何か済まないような気がした。

「案外、茅野さんも純情なんですね」

上気した顔で藤田が帰って来た。

「しかし、驚きましたね、いきなり裸になつて、ずかずか入って来て、体を洗ってくれるんですからね。さすがの私も参りましたよ」

藤田は楽しそうに一人で喋り続けた。

「この辺りの風習らしいですよ。いい処へ案内してくれましたよ茅野さんは。チーフにも帰ったらお礼でも言わなくちゃあ」

「それでどうしたい」

茅野もむっくり起き上った。

「何がです」

「アナウンサーになる勉強って奴さ」

「ああ、あれですか、食事が済んだら部屋へ来るそうですよ」

「何を教えるんだい」

「からかってやればいいじゃないですか、可愛い子だし。今度は、へまはやりませんよ。」

さつきは、どきもを抜かれましたからね」

若者らしい冒険心を燃やしているのだろう

藤田は妙に力んで言った。

夕食は簡素だったが、それでも鮎などをあしらって結構うまく作ってあった。

酒は地の物と見えて口あたりはあまりよくなかったが相当に強いらしく、すぐ二人ともいい気持になってしまった。

「おい、疲れたから僕は先に寝るよ、後はよろしく。迷惑にならないように隣へ寝るぜ」

茅野はそう云って、まだ飲んでいる藤田にかまわず隣の部屋へ行って、勝手に布団を出してもぐり込んでしまった。

間もなく、くだんの娘が来たらしく、藤田と二人の笑声が聞えたが、いつの間にか茅野は眠ってしまった。

どのくらい眠ったろうか。

ふと喉が乾いたので茅野は目が覚めた。

藤田も寝てしまったのだろう。

行澄も消えていた。

窓から射し込む月の光が明るく、すぐ下の溪流の音と、微かな河鹿の鳴き声がいかにも鄙びて、かえって寂しさを増していた。

起き上ろうとして何気なく横を見て、茅野は危く声を出すところだった。

あの娘が肌もあらわに、すぐ横の布団に寝ているのだった。

むし暑くて寝苦しいのだろう。むっちりした手足をなげ出して無心に眠っていた。

茅野は起き上がりかけたまま息を殺した。

どうしてあの娘がこの部屋で寝ているのか不審だった。

と、突然、うーんとうなって、娘がぼんやりと目を開けた。そして茅野を見ると、ニコリ笑って、すうっと近よって来た。

「あまりよく眠っていたから、そっとしておいたの」

汗ばんだ体をすり寄せて来るのだった。

「藤田君にアナウンサーの勉強してもらったかい」

仕方なく茅野はそんな質問をした。

「え、とても筋がいいって。でも、アナウンサーになるには声や喋り方がいくらうまくても駄目だって——いろいろな学問を覚えなくてはいけないって。それで、あなたに教えてもらえって」

「えっ！ 藤田君がそんな事を言ったのか」「ハイ」素直過ぎるのである。

そして、ますます体をすり寄せて来るのだった。

突然、茅野は、力一杯、娘のはち切れんばかりの若さを抱きしめたい欲望にかられた。が、すんでのところでこらえた。

「それで、君は僕に教えてもらいにこんな時間に来たのかい」

「ええ、藤田アナウンサーが、あなたが喜ぶだろうからって言うから」

ひどい奴があったものだ。

茅野は、藤田が憎らしくなった。

「本当に、あなたは、私が来たら喜ぶ？」

「そりや嬉しいよ。しかし時間が悪いね、あした、教えてあげるから帰るんだよ」

「いや、いや、今すぐ教えてくれなきゃあ、ここから帰らない、それに、お母さんに叱られるわ」

娘は茅野の見幕が恐かったのか、しくしく泣き出した。

「お客さんの意地悪。知らない」

娘は、すつくと立ち上ると、部屋を出ていった。

そのすらりとした後姿を見て、茅野は、なんだか掌中の珠を逃がしたような、しかし反面ホッと救われたような妙な気持だった。

翌朝、顔を合わせた茅野と藤田はお互にニヤリと笑った。

「娘が行ったでしょう」

藤田は何もかも知っているように言った。

「お楽しみ様」

藤田の言葉に、茅野はむかっと来た。

自分こそ、その前にいい事をしたくせに。

だがこんな事はいくら弁解しても始まらないと思ったので、茅野はただ笑い返したただけだった。

朝食を済ませて、何気なく宿の者に娘の事を聞いて見ると、

「今朝からいないんです、大方一番のバスで町へ遊びに行ったのでしょう」

との事だった。

二人は顔を見合せた。

娘はおこっているのだろうと思った。

その日は別に急いで帰る必要もなかったの
で、二人はのんびり朝湯に入ったりして、昼頃、ぶらりと宿を出た。しばらく行った時、
「ちょっと待って下さい」

野太い声に止められてふりかえると、巡査だった。

「はあ」藤田は不審そうに巡査を見た。

「温泉宿にゆうべお泊りになった方ですね」

「そうですか」

「駐在まで来て下さい」

「何でしょうか。もうじきバスが来るんですがね」

藤田が面倒臭そうに言うのと、その若い巡査は色をなして噛みつくように言った。

「重大な事件ですぞ。バスなんかどうでもいい。一緒に来て下さい」

仕方なく二人はデンスケを担いだまま、駐在へついて行った。

「見覚えはありませんか」

巡査は私室の隅に敷いてあったコモをめくって見せた。

「アッ」

二人は仰天した。若い女の死体だった。

そしてその顔は、まぎれもなく、温泉宿の娘に違いなかった。

「どうしてこの人が」

茅野が聞くと巡査は、妙に威厳を作って答えた。

「今朝、この川の上流の者が、発見したんです。豪雨で水量の増していた川も、ようやく元に戻ったので、米をときに行ったところ、若い娘が流れの中にうつぶせになっていたの
で、本官のところへ知らせに来たのです。見

れば、着物はところどころ破れ、肩や首に傷ができています。明らかに自然死ではない。しかも、これは温泉宿の娘だ。早速行ってみると、今朝から姿が見えなかったと云う、そしてゆうべは、あなた達のところに娘は行っていたそうですな」

巡査はじろりと二人を睨んだ。

「じゃ、僕達がどうかしたとでも云うのですか？」

茅野も気色ばんで聞き返した。

「いや、そうだと断定はしないが——とにかく県警の本部にも連絡したので係官が来るまで、ここにいてもらいます」

駐在には、宿のお神や使用人などが、つめかけていた。一様に、二人をうさん臭そうに敵意ある眼で見ているのが厭だった。

どかつと椅子に腰かけた茅野が藤田を見ると、つと藤田は視線をそらせた。

藤田がやったのか——そう思って、茅野はギクリとした。それとも藤田は茅野を疑っているのだろうか。いずれにしても厭な気持ちだった。

「アナウンサーにしてやるからと甘言を弄して、娘を誘惑したそうですな」

巡査が藤田に鋭く質問した。

宿のお神が大きくうなずいていた。

「ええ、いや、しかしあれは冗談でした」

藤田があわてて、弁解しようとする、お神は、

「あの娘は少し頭が足りないんです。死んだ姉と違って、無邪気過ぎるので、学校も途中でよしたのに、そんな娘を、放送局の人ともあろう人が、だまして、だました拳句に殺すなんて……」

と泣き出すのだった。

「ゆうべ夜中に、私のところへ来て、お客さんに馬鹿にされたと云って泣いたんですよ」とも言った。

「とんでもない、僕はなんにもしないぜ」

茅野が叫んだ。

「それが悪いんじゃないか」

お神は今度は茅野に喰ってかかった。

「ああ、あの娘が可哀そうだ」

お神は汚い手拭で何べんも目をふいた。

「駐在の旦那、安ちゃん、安ちゃんは自殺じゃねえのか。放送局のもん、欺されて、身投げしたんじゃないのか」一人の男が口を出した。

「馬鹿を言いなさんな。二、三日前ならともかく、水の引いたあの川で溺れる訳がない。それに仏は水はのんでおらんのか」

巡査は問題にもしなかった。そして絶えず

茅野と藤田の方を注意しているらしかった。

頭から、二人のうちのどちらかが犯人だときめている態度が不愉快だった。

「とにかく、ゆうべの事情を隠さずに話して下さい」

巡査はメモを取り出して言った。

茅野はありのままを語った。

娘には手を出さずに帰したと言うと、巡査は疑わしうに首を二、三度横にふった。

続いて藤田はこう言った。

「茅野さんが寝てしまったので、娘と一緒に話していました。町の話や、放送局の話です。その内、娘は茅野さんが好きだと言いつたんです。ラジオドラマの俳優なんか選ぶのはプロデューサーだと言ったからかも知れません。あまり茅野さんの事ばかり言うので癪にさわり、ちょっといたずらしたんです。——いや大したいたずらじゃない、茅野さんも娘が好きなんだから、一緒に寝たら喜ぶよって言ったんです。有名な映画スターやラジオスターなど、皆んなプロデューサーと一緒に寝て勉強を教えてもらっていると言ったやつなんです、そしたら、いそいそと隣の部屋へ行くんです……」

茅野はあきれてしまった。

日頃からいたずら好きな藤田だったが、あまり度が過ぎると思った。

「それだけです。僕はそのまま朝まで眠っていました。あの娘を殺す理由なんかないし自殺させるほど悪い事はしていませんよ」

藤田は茅野の顔をうかがいながらそう結んだ。

(四)

茅野は警察電話で松江の放送局へ連絡をとった。

すると放送記者が県警の方へ頼んでくれた。とにかく二人は放送局へ帰っていい事になった。

駐在の巡査は、はり切って二人を拘留する事を主張したが、連絡を受けた警察本部の方では、ラジオ瀬戸内海の顔を立ててくれたのかも知れなかった。

茅野達はバスに乗って帰った。

「とんだ事だったね」

制作部長が慰めてくれた。

「ふだん精進の悪いのが行くから、そんな目に合うのさ、ハッハッハッ」

チーフアナウンサーの三谷が無遠慮に笑っ

た。

「あんたがあんな宿の事を言うからですよ」

茅野がなじると、

「そう、おこるな。美人の姉妹が背中中は流してくれる、食事の世話はしてくれる、そして夜のお伽までしてくれるって言うんで有名な宿だぜ。ハッハッハッ、大切なお客さんには娘をお伽に出すのが、あの辺りの風習さ。なんと美しい風習であるか」

三谷は経験があるらしく、一人で悦に入っている。

「あれが風習だったのか。じゃ、僕は、そのせつかくの好意を、無下に断った訳か」

「茅野君、本当か、そりゃ。でも、君が好きだって、わざわざ、妹の方が尋ねて来て、今応接室で待ってるぞ」

「なんですって」

茅野も藤田も仰天した。

「冗談じゃない、その娘は川にはまって……」

「死んだはずだって言うんだろう。じゃ待ってるよ」

三谷はそう言いながら応接室へ二人を連れて行った。

するとまさしくいたのだった。

チョコンと頭をさげてニコニコ笑っている

のは、確かにあの温泉宿の娘だった。

「ハッハッハッ、何を狐につままれたような顔をしているんだ。幽霊じゃないよ。この娘さんは今朝、早くから松江へ遊びに来て昼過ぎここへ来たんだ。もう君達が帰っていると思ったんだ。そんなところへ君達からの電話だろう。聞けば、宿の娘が死んだと云う。だが、その娘は局にいる——早速、放送記者が県警へ連絡とって諸君は放免で訳さ」

「なぜ、その事をあの時、電話で言ってくれなかったんです。人が心配しているって言うのに」

「夏向きのスリラーで、少しは涼しくなるかと思っただけ、わざと知らせなかったよ」

三谷はニタニタと笑っていた。

結局、茅野達がバスで帰った後、県警の係官達が現地へ到着して検屍したところ、それは、すでに死後三日もたった死体だとわかったのだった。

三日前に死んだのだと言うと、巡査も宿のお神もすぐ納得した。

温泉宿の娘の姉が三日前に肺炎で死に、川の上流の山に土葬したのである。

ところが、集中的な豪雨があって土砂を流し、山が崩れて、姉娘の死体が川へ流れ出た

と云う訳だ。

そして水が引いたので浅瀬にひっかかっていたのだった。

まさか、墓の中の姉の死体とは思わないの
でお神もてつきり、よく似ている事でもあり
妹の方だと、勘違いしたのだった。

おもしろがって一部始終を語った三谷は、
しかし、今度は娘から、是非アナウンサーに
してくれとねばられて往生しなければならな
かった。

「この人が、アナウンサーの中で一番偉い人
だから」

茅野と藤田は、可愛いやっかい者を三谷に
おしつけてしまったのだった。

「おい、ひどいじゃないか、あの娘は、アナ
ウンサーになるまで、帰らないって言うぜ。
おい助けてくれ」

三谷は悲鳴をあげて逃げ出してしまった。
結局仕方なく茅野は娘をつれて温泉宿へ引
返して行った。

今度は娘の好意を受けたかどうか、茅野は
ニタニタ笑うばかりで誰にも話そうとしな
かった。

×

×

×

隱密覺書
第十九話

死棺小町

島本春雄
画山田彬弘





★將軍寵女の臥床に

微かに夜気が揺れたし、ゆれたその夜気は、何かしら妖しい不気味なもの……殺気でもなく、邪気でもなく——もっと重苦しい、妖気……どす黒い妖気を、波のように伝えてきた。

夜がふけている。

濠端を離れて、人氣のまったくない暗い道を、その黒い影女は歩いている。

「——ふ、ふ……」

ずっと音もなく動きがとまり、くるりと振り返って、さて、この女は笑ったようだ。

陰にこもった声である。

頭巾の蔭の眼が、刺すような鋭さで、黒い松林の上を睨んでいる。

江戸城がそこにあった。

「——兇……」

と、女はまた呟やいた。

何が兇——だと言うのであろう。おのれの運命か、それとも、どす

黒い妖気を放って見つめている江戸城なのか……

女は暗く不気味であった。江戸城も不気味であった。

女の相貌は、頭巾にかくされて、いま知るすべもなく、江戸城はし

かし、星空のもとにある。

その城相はどうであろう。

鳴子善四郎が秘蔵する死棺長五郎覚書の一節によれば、江戸城の城相も不易にあらず、一度は死相を呈している。

慶安の昔であった。

島原の乱を去ること十三年……慶安四年四月の二十日である。暮六つの鐘が陰々と刻を告げる頃、やはり江戸城外濠ちかく、松並木の蔭

に立って、溶暗の鬼気に包まれながら、次第に暗く……どす黒く……闇の底に消えていった天守の相貌を凝視し続ける僧形の男があり、

「——兇！」

と、妖しく呟やいたのだ。

これが死棺流の僧形忍者死棺長五郎であり、城内では、三代將軍徳川家光が、まだ世を去るには早い四十八歳の命を、冥府へ送る寸前にあった。

——まもなく家光は死んだ。

こういう例もあることだし、いま星空のもと、暗く沈んでいる江戸城に、ふたたび死相が現れたとしても、いっこうに不思議ではないはずである。

「——ふ、ふ……」

ふくみ笑って、影女はまた歩きはじめた。そして今度は、振り返ること、足をとめることもなく、闇の中に溶けていった。

小半刻……

影女は深夜の墓地に姿を現わした。

妙厳寺——という寺であり、その堂宇の広さ、墓地の広さが寺格を物語っている。

古い寺である。

江戸開府以来といわれ、墓石の数も多かったし、苔むして、欠けて倒れて、まったくその墓相を変じている墓碑もすくなくなかった。——中に横長の墓石がある。

苔むし、欠けてはいても、これは倒れた墓石でなく、はじめから、そんな形のものであったろう。

影女はその前に立った。

眼を閉じて、しばらくは微動もせず、何かを念ずる形であった。

二 蛆虫寢所

大江戸の夜空を、西から東へ、妖しく流れた不吉な星を眼にとめたのは、あの影女一人のみではなかった。ここにもう一人いる。

「はて……？」

呟やいて、口尻を歪めたのは、鳴子善四郎である。

珍らしく甲賀屋敷に腰を据えて、何を調べるのか、文机の横には数

十の冊子があった。

れんじ窓がある。

それが半開きになって、かすかな夜風を送って来ていたし、調べものに疲れたのか、鳴子善四郎が、フト顔をあげたそのときに、半開きのれんじ窓が区切っている狭い夜空を横切って、あの不吉な星が流れたのであった。

はつきり眼に入った。

「はて……」

と呟やいたのはこのときであり、しばらくは口尻を歪めたまま、化石したように動かなかった。

小半刻……

突然、すっと立ちあがった。

「気になる……」

と言ったときは、もう身支度が出来ており、音もなく甲賀屋敷をあとにしていた。

走りだした。

（——異変があるとすれば、それは江戸城だ……）
予感がする。

星は、西から東へ、まるで地獄の石火のような不気味さで流れたし吸い込まれるように消えたのは、江戸城の上であった。

（——必ずある……何かあるぞ……）

善四郎の予感は的中した。

異変は、思いもよらぬ奇妙なかたちで発生したし、しかも、その場所が、江戸城大奥にある將軍の寢所であった。

ことのはじまりは、微音——である。

ポトリ……

そんな感じの、まるで雨洩りの水滴が、青畳を叩くときのような微音であり、しかし、夜空は晴れていたし、いや、たとえ豪雨の夜であったにしても、傾きかけた裏長屋とはわけが違う。將軍の寢所に雨洩りのあろうはずがなかったのだ。

（——いまの音は？）

寢所控えの老女浦風は、キツとなって顔をあげた。

かすかな寢息が洩れる。

それは、色好みの上様と、今宵の夜伽をつとめた中藤絵鶴の、激しい痴態のあとに來た深い睡りの寢息——交錯する寢息であった。

これ以外に夜気を乱す物はなかった。

（気の迷いか……）

浦風は眼を四方に配して、さて、なんの異常も発見出来なかった。襖も、壁も、枕屏風も、白紗の几帳も、すべて一点の汚れもなく、針で突いたような僅かな異常すら認められなかった。

が——

(たしかに……気の迷いではなかった……音が、奇妙な音が、この寝所で……上様の寝所で……)

浦風は耳をすました。

老女——といっても、それは老婆と同意語ではない。まだ三十前の女盛りであり、この若さで大奥女中の取締りに当る浦風は、むろん凡人であらうはずがなかった。

耳はたしかである。眼もたしかである。

寝ずの番には馴れていたし、寝所控えの老女として、あぶらぎった將軍家と、夜伽の女たちとの、あられもない痴態を見張りながら眉一筋動かさぬ石の心も備えていた。

こんな浦風に気の迷い、耳の迷いはないだろう。
ポトリ……

二度目の音——そして浦風は、この物音の正体を知った。

顔色が変わった。片頬が歪んだ。

その眼が、疑惑の色をたたえて、じつと見つめている。その視線をたどれば、青畳の一角であり、そこに奇妙な物があつた。

動いている。

いや、動く——というより、蠢めく——といったほうがよいのである。くねくね、くねくね……そいつは、青畳の上を蠢めく虫であつた。

(——蛆虫！)

浦風が眼を疑がったのも無理ではなかった。將軍の寝所に、あのいやらしい蛆虫が現れたのである。

(どこから?)

老女浦風は天井に眼をやった。

高く、広い組天井であり、しかし、蛆虫はそこから落下したのに違いなかった。

「あっ！」

叫んで、中臈絵鶴が撥ね起きた。それは突然であり、彼女の豊満な乳房に手を当てたまま眠っていた將軍家も、不意をくらって眼をさました。

「何じゃ？」

「う、蛆むし！」

「なにっ？」

「蛆虫がつ」

ポトリ——と、三度目に落ちたやつは、中臈絵鶴の顔の上を転がったのである。

三 死棺呪法

蛆！ おぞましい死臭の虫……

それが、こともあろうに將軍家の寝所を襲ったのであり、瞬後、異様な騒ぎが持ちあがったのも当然のことであつたろう。

「庭番を呼べっ」

甲賀急符が飛び、前後して鳴子善四郎の姿が、吹上御苑墓石の蔭に現れた。

(——蛆虫か……)

寝所の天井裏には、白木の棺があつた。小さな幼児の死棺である。しかし、その中には、腐れ崩れた男の首が入っていた。何やら啜えている。一枚の紙片である。

そして、この紙片には、ドス黒い文字が、ただ一字……妖気をこめて——呪……と、紙片一杯に書かれていた。
「死棺流呪法」

鳴子善四郎が、めずらしく、かわいた声で呟やいた。

慶安の昔、三代將軍家光の命を縮めたのも、この死棺流首板の呪法が、大きな蔭の力となって働いていたことを知る者はすくなかった。

——が、鳴子善四郎の手もとには、死棺流初代長五郎の覚書がある。

（——死棺流呪法は、張孔堂由比正雪の謀叛に加担した初代死棺長五郎が、謀叛に破れ慶安四年八月十八日、

摂州有馬の地においてその生涯を閉じた日から絶流となった

はず……）

善四郎の顔は暗かった。

「必ず捕えよ」

將軍家の嚴命を受けて、甲賀屋敷に戻ったものの、この男にしては稀有のことであつたろう。その夜は眠れなかったのである。

だれも知らずにいる。

死——の道から、法の極地に至った死棺流呪法の恐怖……その避け難く、さからい難い地獄の恐怖を、今はだれ一人知る者がなかったのだ。

YAMIA
BATES

善四郎一人が、その恐怖を知っている。

「——こいつア、ふんどしの紐をしめてかからねえと、えらい事になりそうだって……」

もう夜が明けていた。

しかし、鳴子善四郎は文机の前に端坐したまま微動もなかった。

「善さん」

甲賀のお蘭が、その滅法美しい朝の顔を、縁先からぬうっと突きだして呼びかけても、この男は返事もなかった。

「へん」

とたんにお蘭が、ふくれっツラになる。

「善さん！」

「……」

「善の字！」

「……」

「善公！ 善的！ 善侍！ 助善！」

何を言っても、とんと反応のない善四郎である。

「ふん」

お蘭は、つかつかあがって来た。そして、その柔かな膝っ小僧を突っかけるように、善四郎のかたわらへピタリと坐った。

「ねえエ」

と、今度は鼻声である。

抜群の美貌と、こぼれんばかりの色気、女盛りの名状しがたい肌のおいが、えもいわれぬ魅惑となって善四郎に迫るのだ。

「てへっ」

なみの男なら、骨の髄まで、トントんとろりとろけてしまうので

あろう。

が——

鳴子善四郎は不可解な男であった。——宙の一点に眼を据えたままやはり微動もなかったのである。

お蘭はじれったくなつて、この男の膝に思いっきり爪を立てた。ぐいっとねじった。

「石侍っ」

それでも、眉一筋動かさぬ善四郎である。

「もうやめた……面白い話を仕入れて来たのに、天邪鬼の石仏侍なんか話してみたってはじまらない。——ふん、犬首柩……なんだから、そう、ぞーっとなるような話なんだけどな……」

愚痴るように言つて腰をあげた。いや、あげようとした。——そのとたんである。

いまの今まで化石のように動かなかった善四郎の腕が、いきなり、ぐいっとのびて、着物の上からお蘭の乳房を掴んでいた。

「うっ」

一瞬、呼吸がとまった。

「い、痛いじゃないか」

痺れるような力だった。

「犬首柩……と言つたな。本当かっ？」

「ええ」

「よし。聞こう」

「へえんだ」

「話せっ」

「いやだね。おあいにくさま」

「これでもかつ」

乳房を掴んだ善四郎の手が、微妙に動いた。

「あっ……うっ」

お蘭の眼が吊りあがった。

「話すか？」

「え、ええ」

善四郎の手の動きが、急に変わった。

「うふ……ふふ」

こんどは、脳髓を切り裂かれるような激痛でなく、とろりとした甘美な夢を誘う手の動きであった。

お蘭ほどの女でも、善四郎の手にかかつては、ほんろうされる小娘にすぎないのであろう。

四 千春消失

結三輪違いの定紋提灯が先に立っている。

してみれば、後に続く旗本駕籠のあるじの顔など、あらためてのぞく必要もないだろう。

金田将監。

六千石の大身で、幕府山奉行の要職にある男だ。切れる——という噂である。

駕籠は暗い屋敷町に入り、音もなく進んで、上屋敷の門前にとまった。

「やっ？」

このとき、先導の提灯若衆が、いきなり奇声を発した。

「どうした、藤平？」

脇供の工藤弥八郎が、これは無意識のしぐさであったろう。左手を大刀の鯉口にあてながら、反射的にたずねている。

「犬が……」

「犬？ 犬がどうしたのだ？」

「死んでおります」

「たわけ。女子供ではあるまいし、それぐらいの事に奇声を発する奴があるかつ」

「しかし……」

と藤平は、犬の死骸に提灯のあかりをちかつけた。

「ううむ」

二三步前に出て、さて、こんどは弥八郎侍も息を呑んだようである。門前は血の海であった。

犬の死骸が横たわり、その死骸には首がなかった。当然これは自然死でなく、何者かが——かなり腕の立つ奴が、一刀のもとに首を撥ねたのであろう。

血がしぶいているし、飛散した血煙りは、金田家六千石の屋敷門を毒々しく汚していたのだ。

（——不吉な……）

弥八郎の背筋を、冷たいものがツーンと走った。

「何事じゃ」

駕籠の中から声があった。

鋭い、刺すような声であり、これが、美衣美食をかさねても、いっこうにふとらず、剃刀のような相貌風姿で知られた金田将監の声であった。

はっ。ご門前に犬が……」

「死んでおるのか」

「御意。——それも、ただの死様でなく、首を撥ねられ、ご門扉、ご門前を不浄の血で汚しておりますので……」

「ふむ。駕籠をおろせ。わしも見よう」

「はっ」

剃刀将監は門前に立った。

「これは、ただごとでないぞ」

かつて、北町奉行の職にあり、かくれ切支丹の詮議に鬼才を見せてその苛烈な裁きに江戸っ子の胆っ玉を縮みあがらせた経歴の持主である将監だったし、そこらに転がっているほんくら旗本の仲間でないことは確かであった。

（——何かある……）

ピンと感じたわけであろう。

「首は？」

「はあ……」

「見当らぬぞ」

「えっ？」

なるほど、血まみれの死骸はそこにあっても、撥ね飛んだであろう犬の首が、どこにも見当たらないのだ。

「そんなはずは……」

顔を歪めて突っ立っている藤平の手から、定紋提灯を引ったくるようにして、さて、小ぜわしく探して見たが、やはり、どこからも犬の首は現われなかった。
不気味であった。

「屋敷うちに、変事が……必ず……」

将監の口尻が歪んだ。

この時である。まるで符節をあわせたように、将監屋敷の奥——息女千春の寝所で、また一騒動もちあがったのであった。

犬の首はここにあった。

千春の夜具はもぬけの空であり、その枕元に小さな柩がある。侍女の雪乃が夜伽に入室して、まず千春の消失を知り、続いて枕元の小さな木箱に不審を感じて、その蓋をはねた。

「あっ」

悲鳴が夜気を裂いた。

小さな木箱は、ただの木箱でなく首柩であり、中には血まみれの犬の首が、不気味に虚空を睨んでいた。

紙片——一枚の紙片を啜えている。見れば紙面一杯に、ただ一字——呪……と、筆太に毒々しく書き残されていた。

——お蘭の仕入れて来た話はここまでである。

五 屍 衣

「死棺流だ……」

つぶやいた善四郎の声も顔も、暗く沈んでいた。

「死棺流……？」

しかし、お蘭の顔は不審の色をわずかに見せたのみである。

「死棺流犬首柩の呪法……すなわち、呪詛する相手を犬に見立てる痛烈な皮肉と侮蔑——底知れぬ執念の表現と考えていいだろう」
「すると相手は？」

「うむ……手強いぞ。——しかし、三代目は何とかのたとえもある。初代長五郎が、首魁の念力で大猷院（家光）様のお命を締め奉ったほどの力はあるまい……が、さて、そうなるとかえって、酷薄非道な事をやりたがるものだ」

お蘭の顔もしだいに緊張して来た。

死地にのぞんで、なお微笑と冗談を忘れない善四郎が、いつもの軽口を忘れてしまっている。——お蘭が口もとを引きしめたのも、この事実に気づいたからであつたろう。

「何かある。……慶安の死棺長五郎は、由比正雪回天の策謀に加担して、時の將軍家光公の命を狙った。しかし、いま謀叛の動きはどこにもなく、して見れば、私怨……私恨——復讐の呪詛かもしれぬ。その証拠に、山奉行金田将監の娘が拐われている。……山奉行……どうやら、この辺りが臭いな」

「甲賀探りを……？」

「やらざるまい。こっちは、後手の後手を掴まされている。将監の娘は、救いたくても、さて——もう手遅れかもしれぬぞ」

善四郎は腕を組んだ。

そして、庭越しに空の一角を睨んだが、この寧馨児にも千里を見通す眼力はなかった。

塀と屋根と空間を距てた江戸のはずれに、汚辱と羞恥と痛苦に身悶える千春の姿があり、善四郎の網膜には、しかしその片影すらもうつらないのだ。

一夜に出来た小屋である。

竹の柱、葎の壁、藁、草の屋根……武蔵野の森に、点々と奇妙な形で散在している。

千春は、その小屋にいた。

「剥げっ」

中に黒紗の几帳があり、声はその向うから来た。陰にこもった暗い声であり、それでも女の声だと知れる。

「へっ」

こたえた男は、まるで非人のように汚ないが、その眼にも顔にも精気があふれていた。

太い、たくましい腕である。

「女っ」

その手が、千春の右手をねじあげていた。

「あっ」

——と、千春が叫んだのは、右手の苦痛のためでなく、男の左手が彼女の腰紐に触れたからである。

ビリッ……

解く手間をはぶいて、男は千春の腰紐を引きちぎった。

「動くなっ」

腰紐を引きちぎったその手が、今度は緑の黒髪を掴んだ。ぐいっと吊りあげた。

「ひいッ」

横坐りになっていた千春が、眼を吊りあげて思わず中腰になると、腰紐を失なった下着は、ふわりと左右に割れて、旗本の息女らしく、緋の色を嫌った水色の湯文字がのぞいた。

それも一瞬であつた。

「脱げっ」

声と同時に、雪肌を守る最後の下着も男の手もとに剥ぎとられて、

この日まで、人目をあびた事のない二つの乳房が、几帳の黒紗と、対照的に、くつきりと浮き上った。

「かわりに着せる物がある」

黒髪を掴んだその手をはなさず、男は二三歩左へ寄った。

「こいつだ」

と、ねじり伏せる。

そこに、異臭を放つ帷子があった。土に汚れ、湿っている。何か書いてある。見れば、確かに経文の一節であり、あきらかに、これは経帷子……死者の晴着であった。

「うっ」

ねじふせられて、千春の鼻は死臭を感じた。

屍衣だ！

すでに一度、死者の肌を包んだのであろう。その死臭がのり移って



いる。

念珠も添えてあった。

「——これを、この屍衣を……」

思っただけで悪感が走った。

「——な、何故に……このような汚辱を……このような無態を……」

千春には理解の出来ぬ魔手であった。

「金田将監……そなたの父が、死棺流の呪詛を受けている。恨むなら父を恨め」

几帳の蔭から、あの声が来た。そして——

「——ふ、ふ……」

と、かすかに笑ったようである。

六、墓石

遠く読経の声が聞こえる。

耳をかたむけていると、気だるく……眠くなるような——そんな、ふんい気であった寂然としている。

「ふむ」

墓石の前に立って、軽くうなずいたのは、着流し姿の鳴子善四郎であり、この墓地は妙厳寺の裏にあった。広い墓地である。

しかし、その片隅に、今はもう訪れる縁者もなく、打捨てられた形の淋しい一群の墓石があった。



と、今度は呟いた。

呟やいて善四郎の視線が足もとを這う。そこに新しい足跡があり、幾つかのその足跡は、最近、二度や三度は、この墓石の前に立った者のあることを物語っている。

それは、横に長い奇妙な墓石であった。

横だおしになったのではなく、はじめからこんな形のものだったと思われる

苦むしている。欠けている。横だおしになっている——一つとして

まともな墓碑はなく、善四郎がいま立っている墓石も、そうした仲間の一つであった。

「やはり……」

し、碑面一杯に苦む

して、かなりこれは古い物だと分る。

黄昏が迫っていた。

(——死棺型墓石……本当に死棺長五郎は死んだのか? ——間違いなく、この墓下で永遠の眠りをむさぼっているのか……)

「ト浮んだ疑問に、善四郎は苦笑した。

(——馬鹿なっ)

横長の墓石は、死棺長五郎の墓石であつた。

今はだれ一人知る者がない。

しかし鳴子善四郎は、その手もとに死棺長五郎覚書を握っていた。

次のような一節がある。

わが祖は僧なり。予もまた僧たらんとして妙嚴寺に住む。しかれども仏法の説くところ、ことごとく我意に反す。すなわち一夜……女犯して寺を追われたり。仏師叫んでいわく——地獄に堕ちよ……と——よろこびて地獄に参らん。反骨鬱々、地獄の法をきわめて死棺呪法を修せり。うつし身の命はわずかなれば、やがては妙嚴寺の墓下に戻りて、永遠に仏道の法力を破るべし。

「長五郎の墓は妙嚴寺なり!」

善四郎は、覚書の一節を見て、妙嚴寺へ飛んだ。

死棺墓石を発見した。

二年前の話である。

そして、逢魔ヶ刻の幽気を感じつつ、いま再びその墓石の前に立っている。

(——死棺流を継ぐ者がある……)

「——?」

何かの気配を感じた。

同時に善四郎の眼は、墓地塀の下、林立する墓石の向うに、黒い影を認めた。

ヒュッ

空を裂いて何かが飛んだのも、これまたほとんど同時であつたろう。

(——くそっ)

あぶなく避けて、善四郎は走り出していた。

二十間ある。

いや、善四郎が走り出すと、その影もまた地を蹴って墓地塀を越え、そのままだ待っている訳もないとすれば、二十間が三十間の距離に開いているかもしれなかった。

何しろその転身は速かった。

「死棺流忍者か……?」

走りながら善四郎の頭は忙しく回転した。

地を蹴った。飛び上った。

第二の襲撃は、この時に来た。——相手は意外に近く、寺塀を越えて、その直下に身を沈めていたのであろう。

パッ——と扇形に散ったのは目潰しであつた。

「へっ」

これは予期したことであり、善四郎の左手は無意識に、その両眼を隠していたし、同時に右の手が懐の甲賀縄を握っていた。

飛び上った瞬間の動きである。

「墮っ」

呪声を発して、甲賀縄を飛ばしたのは、墓地外の地に足をつける前であつたろう。

久し振りに見せた縄術である。

その避けるに難く守るに法なき恐怖の縄を、塀下の影は、まこと影そのものように、柳に風と受け流した。

動きが善四郎よりも一步速い。

「けっ！」

甲賀縄の手ごたえは、生身の肉を打ったときの、あのねばりつくような感じでなく、墓地裏の土塀を叩いた崩れるような衝撃であった。縄を手もとに戻す余裕はないのだろう。

「投っ！」

今度は懐の十方手裏剣を放った。——相手の影は、縄術を避けて、すでに十間の先にあり、しかし善四郎の足は動かずにいる。

それには理由がある。

はじめの二十間の距離の差が、常に一步の先手を相手に許しているし、目潰しのあとには、第二、第三の用意があると考えるのが至当であった。

現に、足もとの裏道には、足の裏を襲う鉄菱——無数の鉄菱が散っていたのである。

(くそっ……)

善四郎は、片頬を歪めて断念した。

最初の十方手裏剣もはずされたし、鉄菱を避けるために、塀の上に移ってから後を追う……そんな悠長なことをしていたのでは、こちらに虚の隙も出来るだろう。——また、十間の距離を置けば、到底追い込める相手でない。これが善四郎の判断であった。

七、千春柩

(——墓地にいた。死棺長五郎の墓の前に立っていた。——と、人の気配だ。同時に、刺すような殺気だった。振り返った。黒い影が眼に入った。その時にはもう、あいつの手から手裏剣が飛んでいた。いやあれは手裏剣でなく、鉛つぶて……死棺流の鉛菱飛礫だったろう……) 善四郎が黙々と歩いている。

暗い夜道であり、この男の顔の色も、眼の色も、暗く沈んでいた。松前藩三万石の北の端から、島津七十七万石の鹿児島まで六十余州考えてみると天下は広く、どこにどんな怪異がひそんでいるのやら知れたものでなかった。

死棺流を継ぐ者があったとしても不思議はないのであろう。

「う——！」

善四郎の足が、音もなくフツと止った。

走ってくる気配がある。

気配——まさにそんな感じで、夜気を縫うというよりも、夜気そのものが動くような速さであった。これは常人であろうはずがない。

(——忍者か……?)

まず、ピンと来た。いかに速くとも、飛脚や駕籠人足には、独特の走法があり、善四郎の耳なら、一瞬にこれを判断し得たであろう。

飛脚や駕籠人足ではなかった。

(——違うな)

忍者の走法でもなかったようだ。

「はて？」

疑問が、呟きとなって現れた。

その走る気配——は、まもなく善四郎の眼前に出現し、そして、風のように通り過ぎて行った。

見た！

江戸の人間ではないのだろう。

男であり山刀を腰にしていた。

「ふむ！」

その速さは、鳴子善四郎の、甲賀流浮走法をもつてしても、到底太刀打ちできぬ、異妖な——といってよいほどの速さであった。

（何かある。……いや、あったのだろう。あいつの顔は、邪悪な悦びを秘めていた……）

一瞬に見抜いている。

（——そうか……）

善四郎の眼が光った。

方角を按ずれば巽の方であり、三丁の向うに金田将監の屋敷があった。

（あいつが……）

違う——と、首を横にふって歩きはじめる。

墓地で善四郎を襲った鉛菱つぶての影は、たしかに死棺流の忍者であり、しかし、いまの男にはそのにおいがなかった。

が、——やはり気になった。

善四郎の足が速くなった。

御山奉行金田将監の屋敷内で、一騒動もち上ったのは、ちょうどこのころである。

「何だい、これア？」

手なくさみに出て遅くなった将監屋敷の中間が、一天地六の賽の目に翻弄されて、すっからかんの空っ尻……お情け酒では千鳥足にもなれず、ぶつくさこぼしながら、さて、門前に一步足を踏み入れた。

何やら妙な物が置いてある。

（——忘れ物にしては、少々大きすぎる……）

近寄った。——見ると、方形の木箱であり、蓋がある。——とすれば、人間だれしも中をのぞいて見たくなるのが人情であろう。

「へっ」

なんとなく辺りを見廻した。静まりかえった暗い屋敷町であり、刻限も刻限である。人目のあろうはずはないのだが、こういう時に日頃の習性が出すわけだ。

中間半次郎、根が下司っぽく出来ている。

蓋を開いた。

「げっ！」

途端に飛びのいたのも無理はない。置き忘れたような白木の箱であり、どうせロクな物が入っちゃいないだろう……そんな予感があったけれど、半次郎がその中に見たものは、このやつの鈍感な想像力では遠く及ばぬ不気味なもの——死体……であった。

それも……

（——こ、こ、これは……千、千春さまの……）

金田将監の娘千春の死骸である。

ドンドン——ドンドン

泡をくらって、大門の門扉を叩きはじめた。

「た、大変だっ」

ドンドン……ドンドン

確かにこれは大変——である。たちまち屋敷中大騒ぎになったし、それもまた無理からぬ事であった。

「たわけっ。騒ぐなっ！ 野中の一軒家ならばともかく、他家に聞こ

えたら何とする」

将監の声は冷たかった。

「速刻、門内に入れるのじゃ……ええい、早うせぬかつ」

六千石の大身であり、山奉行の職にある。その娘が、奇異な死体となって門前に遺棄された。……こんなことが他家の耳に入っては結三輪違の家紋にキズがつく。

先夜の犬事件とは、まるっきり性質がちがうのである。

ギイツ……

死者を迎えるにふさわしく、将監屋敷の門扉は、断末魔の悲鳴に似た軌音を発した。

「灯っ」

死棺——の周囲に、提灯がならんだ。

「うむ」

と将監が唇を噛む。

千春の死体は、地獄の苦悶を歴然と残していたし、噛みしめた歯が一枚の紙片を啜えている。

——結三輪違——

その紙片には、金田家の家紋が墨黒々と描かれていた。まだある。

屍衣の胸は、左右に手荒く掻きあげられていて、いまはもう息づくこともない双つの乳房——盛りあがり引きしまった豊かな乳房の上にこれまたドス黒く墨の字が……呪……と読める、

（——死棺流呪法……）

呪法秘が門内に運び込まれた直後に来て、扉の上からこの光景を眺めた鳴子善四郎は、苦い顔ではあっても、その中に一鉢、いままでに

ない明るい色を見せながら、胸のうちに一言一言、区切るように呟やっていた。

何かさとする所があったのであろう。

八、兇女

月があった。

その光を浴びた黒い影は、黒衣の人間に違いなく、しかし、滑るように動いていた。

行手に森がある。

この森の中には、一夜づくりの草小屋が、巧みな配置で点在している。

動く影は森に入った。

——と、フツと消えたのは、樹林のために月光がさえぎられて闇の色に溶け込んだからでなく、手近の木立に身を寄せたとたん、ふわりと影……が宙に浮いて、音もなく梢ちかくの葉蔭にかくれたからである。

たとえ見ていた者があったとしても、常人の眼では、その片鱗すらも掴みえない巧みな動きであり、しかし、ここに常人でない奴が一人いた。

四五十間は離れていたろう。

「——兇……女……」

木立の下に立って、微動もせず、憎々しげに呟やいた奴である。

いや……その声は女であった。

背にした木の枝から一本の紐が——黒い紐が垂れていて、呟くと同

時に、この紐を激しく引いていた。

何かの合図にちがいがなかった。

「——ふ……」

と、今度は笑ったようである。

そして、この女も、影のように動きはじめた。森の中に入るのではなく、これは反対に出て行く影であった。

影——やはり黒の装束である。

森を出て、振り返って、

「——ふ」

と、また笑った声は、さいわい誰の耳にも入らなかったが、もしこの声を耳にした者があったとしたら、そいつは思わず身震いしたことであろう。

毒気があった。妖気があった。

いや、そんな形容では物足らぬ、すさまじい呪詛と執念……そして殺気の入りまじった地獄の含み笑い——であった。

小半刻……

突然。ヒュッ、ヒュッ、ヒュッ——夜気を切る三様の音が、同時に三方から発して、

「あっ！」

不意をうたれた驚愕の聲が、梢ちかく、鋭い悲鳴となって聞こえた。

三方から飛んだのは山刀である。

こいつが、同時に三本の枝を切り飛ばしてそれに身を托していた黒い影を夜気の中に抛り投げたのだ。

高い梢であった。

しかし、悲鳴のぬしは、一直線に落下してきて、さて、くるりと一

回転したようである。あとは、軽々と、まるで猫そのものであった。ふわりと樹下に立っている。

——が、第二の襲撃は、この瞬間にきた。

「うっ！」

と、影が呻いたのと、肉を叩く鞭音——ビシッ……と鳴るその音が聞こえたのは、ほとんど同時であり、呻いて、その影は、前に崩れた。足を襲ったのは、長い蔓——の鞭である。

「やった！」

人の気配はまったくなく、そのくせ、声と同時に、バラバラッと七八人は飛び出して来たはずである。

「それっ！」

一人が足を、一人が手を、強靱な革紐で縛りあげた。

何をやるにも黽のように俊敏な奴らである。

「どうだ？」

「死棺姫の眼は見透しよ」

「すると？」

「これこの通り」

まるで熊——のように、手の甲まで濃い密毛をたくわえた奴が、縛りあげた黒衣の虜囚を引きずり起して、その胸に手をあてた。

「——盛りあがっている」

「見せろ」

「よし！」

ピリッと引き裂いた。

——と、あらわになった胸の上に、丸い二つの隆起があり、さらにその雪白の肌には不気味な靨體の入墨があった。



YAMIA
DATT

甲賀のお蘭である。

「ほう？」

さすがに、こやつらも驚いたと見える。

「顔だっ」

丸太ン棒のような腕が、ぐいっとのびて、微塵の手加減もなく、黒い頭巾をひっぺがした。途端に虹の唖呵である。

「やいやいやいッ。あたしのこの顔が拝みたかったら、そこらの小川で眼ン玉清めてから出直して来な。でないと潰れちまうよっ！」

窮地に立つと、いよいよ冴えるお蘭の美貌であった。

「何をぬかす」

一人が、お蘭の右頬を拳で殴った。

「もう一つ」

今度は左から平手打ちがとんだ。

「へっ。同じやるなら、おれアこっちだ」

と、別の奴は、豊かなお蘭の乳房を狙った。

「吊れっ。死棺姫の戻るまで、勝手な処分は出来ねえんだ」

「よしッ」

いずれも、たくましい山男共である。まるで玩具をもてあそぶように、鼻唄まじりで巨木の枝にお蘭を吊った。

九、三国衆

（——必ず来る……）

善四郎もまた樹の上にいた。しかし、それは、武蔵野の森でなく、将監屋敷の庭樹であった。

待っている。

（はじめに犬首樞……続いて死棺呪法……最後は金田将監の首……あいつは、必ずやって来る……そのためにお蘭を物見に出したのだ）

死棺流の忍者を——いや、その影を見た。

疾風のように走る山男……三国山窩の姿を見た。

かれらは、將軍を、山奉行の金田将監を狙っている。何故か——？甲賀探りの手をのばし、お蘭が、武蔵野の森に出没する山窩——特異な形のその山刀から、三国衆と知れる……一群の山男たちを発見したし、善四郎は、将監居所の天井裏にひそんで、この酷吏の非道を知った。

山焼き——と称して、金田将監は、三国山窩の一群を焼殺している無惨なその焼跡に——

上意に依り、神奈谷を焼きて、以て山火事の備へとなす。天領なり、余人の出入を許さず。

——碎いて言えば、そんな意味の高札をたてたのも将監であった。底に私利私慾がある。

三国の神奈谷に砂金を発見した将監は、これをおのれの懐に納めんとして、事情を知る山窩の一群を抹殺したのである。

「山男どもの復讐でござりましょう」

「かも知れぬ。——が、何を恐れる。口実を構えて上様に言上し、山窩狩りの上意を賜って一人残らず抹殺するまでのことじゃ」

腹臣上草陣太夫との密談であり、善四郎は洩れなく聞いてしまった。そしていま、将監屋敷の樹上にいる。

(——將監は甘い。三国山窩の中に、死棺流忍者がいるのだ……やつは必ず来る……)

闇が動いた。

(来たなっ……)

善四郎は呼吸を止めた。——屋形を庭形をそして樹林の全貌を、まるで大工が絵図面をひくように、念入りに計算してある。

(——やつはまず、半刻は物見のかたちになるであろう……)

そのために選ぶ庭樹は、いま善四郎が、身をひそめる松の巨木——これ以外にない。

待った。

闇の中の影は、音もなく塀を越えて、予想通り、松の巨木の下に立ったようである。

(来るぞ……)

太い下枝に手がのびた。——物見に適した枝は、高く、二股になっている。善四郎はその右側に……影は、左右いずれの枝をえらぶのだろうか。

のぼりはじめた。

「うっ！」

善四郎の眼と、影の眼が、樹上高く絡みあった。

一切が無言、無音である。

善四郎の腕がサツとのびたのも、この一瞬であつたし、相手が身を引いたのも同時であつたろう。

しかし、先手の利は善四郎にあり、このやつの手は、目標をはずれはしたものの、相手の胸を激しく刺さっていた。

(——?)

善四郎が掴んだものは、ふくよかなふくらみである。

(——女か……)

意外であつた。

——死棺流の忍者を制するには、組討ち以外に法がなく、その組討ちを狙って樹上に待ち、偶然、急所を掴んだのである。

それも、相手が女なればこそその幸運であつた。

影女——は、乳房を掴まれて宙に浮いている。

「負けた」

と小さく言った。そして、みずからその頭巾を払った。敗者の礼である。

「うむ」

暗中に善四郎が見たものは、予期に反して形容の言葉もないほどの美貌……であつた。

(——死棺小町か……)

善四郎覚書死棺小町の項には、次の如くある……

死棺流は絶えず。長五郎の血を継ぐ者、三国山塊神奈谷に逃れて世を経たり。一子のみに秘伝を伝う。ついに山窩三国衆のおさとなり世に出ずる事なし。然るに、山奉行金田将監非道の事あり、死棺早百合の許婚者を含めて二十数人の三国衆を焼殺す。怨念ために死棺流呪法を呼び上様、將監を狙う。金田將監八丈島流罪なり。死棺早百合、お蘭の件を告白し、舌を噛み自決す。よって鉄砲組百人衆を放ちてお蘭を救出せり。

◆他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◆バックナンバーは新規の愛読者の為に小部数取り揃えてあります。(一七一頁―一七五頁を御覧下さい) 既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します
◆御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◆小社は本誌の他にも単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録をおのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって「裏窓で見た、目録送れ」とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛御申込になれば無料ですぐ送ります。

◆直接購読を御希望の方は、三ヶ月分・三百六十円、又は六ヶ月分・七百二十円を本社営業部宛にお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。(送料小社負担)
◆その場合は、御送金と同時に何月号より何月号までとハッキリ御指定下さい。
◆直接の御来社はお断り申し上げます。

集 募 稿 原

◎小説・読物 三十枚～四十枚程度

他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。
(小説は現代・時代、どちらでも結構です)

◎アブチック・スリラー 三十枚～四十枚程度

◎あぶちっく・みすてりい 三十枚～四十枚程度

他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。原則として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。

掲載の分には相応の原稿料を、掲載誌発行後約一カ月以内にお送りします。

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等が

ありました節は書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えます。

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。

裏 窓
十 月 号

第三卷・第十三号
毎月一回一日発行

定 価 百二十円・送料十二円
(地方売価百二十三円)

印 刷 所	昭和三三年九月二五日
編 集 人	須 磨 利 之
発 行 人	山 田 忠 雄
印 刷 所	向上印刷株式会社
発 行 所	株式会社 久保書店

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野・(38)六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番

—原 稿 送 り 先—

東京都中野区江古田1の2302
久保書店內 裏窓編集部